

# 巨人の村の娘は人間

UMI0123

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

巨人の村で育ったディアンヌは海賊になって世界を旅していきます。

# 目次

ロジャー海賊団・見習い	1
巨人と人間の娘	11
“ロジャーと白ひげ”	25
“海賊王”	39
覚悟	51
船長	62
私の名はディアンヌ!!	75
“中将”	88
“愛と金”	100
魚人島	112
新世界	124
“王下七武海”	137
ドレスローザ	147
戦士長	159
夜	171
女傑	184
創造海賊団・団長	194
師団長	212
十人の侍	223
煮えてなんぼのおでんに候	235
ディアンヌブートキャンプ	247
眠れる獅子	271
女王	284
朝日	297
六傑杯	311

六傑杯

西の海

鬼に竹竿

大海賊

動き始める時代

仲間割れ

三人の英雄

大災害

過去と空想

三大機関

世界の変化

同盟と襲撃

インペルダウン

“海軍大将”

“正義”

二人の大将

258

270

282

296

310

320

334

348

362

380

398

414

426

448

## ロジャー海賊団・見習い

### 巨人と人間の娘

とある山奥に巨人族が住む村がありました。その巨人族は人間に奴隷にされていた過去から排他的な種族でした。しかしとある人間の娘が森の中に捨てられているのを見つけた時から巨人族は変わり始めました。

「ディアンヌ今日もお願いなね」

「はいお母さん」

ディアンヌと呼ばれる少女は十年前に山の中腹に捨てられていた娘であった。彼女は育ての親となるマトローナに拾われて今まで育てられてきた。

彼女は一週間に一度、食料などを買うに行くため山の麓にある港町に降りていた。

その港町とはある海賊のナワバリなので無法地帯とまでは行かなくても危険なところであるのに変わりはないのだが、そこに毎週通える彼女の實力は言わなくても良いだろう。

そんな彼女には秘密があった。それは彼女が彼女ではなく彼であったことだろう。彼は地球という星で亡くなりこの世界に転生したのだ。転生した時に彼から彼女に

なったのだが、今になってはもうどうでもいいのだろう。彼女が今一番気にしているのはどんな世界に転生したのかだろう。最低でも巨人という種族がいるのは確定の世界なのは分かっているが、それ以外のことはあまり分かっていなかった。

「おじさーん!! 魚くださいな」

「おうディアンヌか、活きがいいのが沢山入ってるぜ」

「じゃあマグロで」

「はいよ! ディアンヌは毎週来てくれてるから少しまけとくよ」

「ありがとうおじさん!!」

いつもの日常だったが、変化とはいっても突然であった。

魚屋のおじさんだけではなく周りの店の人たちも慌て始めた。

「おいディアンヌ! 早く山に帰れ!!」

「どうしたのおじさん?」

「説明している暇はねえ! ただ言えることは海賊が来たんだ。だから帰るんだ!」

「私も戦えるよ!!」

「何言ってるやがる! 子供はお呼びじゃないんだ。それになオレらはガラの悪い客なんて

日常茶飯事だ。だから気にせず帰るんだ」

おじさんは笑いながらディアンヌを安心させるように言ったので、ディアンヌはおじ

さんの言葉を信じて山へと帰って行った。

しかし山へ帰ったディアンヌを待っていたのは、おかえりという言葉ではなくむせ返るような血の匂いだった。

「なんでみんな!!」

彼女の目に映ったのは村のみんなが血とともに倒れている姿と血を浴びた五人の人間だった。

「ん？なんで人間のガキがここに居るんだ？」

「上物だぜ！高く売れそうだ」

「そうだな巨人どもはデカくて捕縛は難しくて死なせちゃったが、人間のガキなら楽勝だろ」

巨人族は人間より遥かに力が強く負けるはずはなかったのだが、この村の巨人族は対人戦を一度もやったことがなく強いて言うなら山に住む野生のイノシシ等の獣だったのでなれない戦闘だったのに対し、相手は何度も対人戦をした事のある海賊だったため経験の差で殺されてしまったのだった。

「お前らがマトローナ達をやったのか？」

ディアンヌの声は冷静で冷淡であったが、圧倒的な威圧感だけは放っていた。

しかし威圧感を放っているのが目の前の少女だと思いたくなかったのか、五人はディ

アンヌに武器を向けて走り出した。

「それは肯定って事だよね」

そこからは一方的だった。武器を持たないディアンヌは自分の拳で相手の武器を破壊して、相手を痛めつけるように致命傷になる場所は狙わず腕などの破壊に専念していた。

そんな彼女の腕はたまに黒く染っていたが、まだ彼女は知らなかった。それが「武装色」の覇気と呼ばれる対能力者に必須の力だということ。

「はあはあ……ごめんなさいみんな。私が仇をとるから」

そう言つてディアンヌは巨人達の死体を埋めて麓の港町目指して走り出した。

更に彼女を地獄へとたたき落とす光景がそこにはあったのだ。港町の建物は血塗られており、そして入口には山へ向かったディアンヌを追いかけようとしていたのか背中を斬られた魚屋のおじさんが倒れていた。

「おじさん!!」

ディアンヌは急いで魚屋のおじさんの体を触ったが、もう冷えきっていたので、もう息を吹き返すことはないだろうと察した。彼女はおじさんの仇をとろうと町の中を見るところ一人の男が男の胸ぐらを掴んでいた。それを見たディアンヌは町の人の仇だと思いき走り出した。



「なんか来るな」

男がそう呟くと背中を向けていたのにも関わらず拳を振りかぶっているディアンヌに向かつて剣を振り抜いた。

「——っ!?女それもガキだと?」

ディアンヌの姿を見た男は急いで剣を引こうとしたが一足遅く剣と拳はぶつかってしまった。男はディアンヌがすぐに吹き飛んでしまうと思っただろうが、ディアンヌは数秒であつたが耐えていたのだ。そのため男が剣を引いたらディアンヌはそのまま倒れてしまった。

「お前いい拳だなく!!だがなぜおれを襲ったんだ?」

「お前だろ!!この町の人たちを殺したのは!!」

「それは誤解だな。おれはこの町に来たら海賊が暴れているのを見て止めただけだ」

「そ、そんなの嘘だ!!」

「嘘じゃねえ。お前も冷静になって分かてるんじゃないか?」

「——っ!?な、なにを言っている?」

「おれの周りにお前の知らない武装したやつが倒れているだろうが、それがおれの仲間じゃねえ」とぐらい赤ん坊でも分かる」

「でも海賊なんてみんな同じだ!!」

「そうか……ならおれの仲間になれ！仲間って言っても見習いだが……おれの仲間になれば海賊にもいろいろあるってことを知れるだろ」

「……でも貴方がいい人って証拠はない」

「証拠か……それはないな。だがお前はこれから生きる術はあるのか？今この町の生き残りはお前しか居ない。少し実力があつたとしてもお前みたいな幼いガキが生きていけるほどこの世は甘くないぞ」

そんな彼の言葉は冷たいながらも、ディアンヌのことを助けようとしているのはディアンヌでも分かっていたので、ディアンヌは彼を信じることに決めたのだった。

「分かった。私を貴方の仲間にして連れて行って」

「わっはっはっ!!最初からそう言え!!——お前の名は?」

「私はディアンヌ……貴方は?」

「おれか?おれの名前はゴール・D・ロジャーだ」

「ロジャー船長ね……分かった」

この時名前を聞いて思い出したが、彼女が前世で読んでいた『ONE PIECE』に出てきた海賊王の名前と男の名前が一致したので、この世界が『ONE PIECE』の世界であると気づいたのだった。

ロジャーはディアンヌと町の人の埋葬を終えてから自分の船へと帰還した。

幼女を船へと連れて来た船長への反応は人それぞれだった。

「ロジャー……お前はそういう趣味だったのか……だからって堅気の人間にお前が手を出すなんて……」

「レイリー……おれは堅気には手を出さねえ。こいつは身寄りが無くなったから見習いとして仲間に入れたただけだ」

「そうかそうか……自由な船長だな」

「シャンクス、バギーこいつに見習いの仕事を教えてやれ」

「分かったよロジャー船長」

「なんで勝手に了承してんだシャンクス!？」

「なんだバギーよ文句があるのか？」

そう言ったレイリーにバギーはすぐさま土下座した。

「すツいませんでした!!!」

それを見た船員たちはゲラゲラ笑っていた。

更にその光景を見たディアンヌは仲の良さそうな海賊だと思っていた。

仲の良さそうな海賊だけ……それは仲間内だけかもしれないし……まだ信用は出来ないかな。

——ロジャー海賊団の見習いとなったディアンヌはシャンクス、バギーと共に忙しい日々を過ごしていた。

朝は船の掃除から始まる。船の掃除はいつもバギーがサボって副船長に殴られているから、私はサボらないようにしようと思った。

そこからはほかの全員達とそう変わりのない一日を過ごしていた。でも今日はディアンヌがこの船に乗って初めてほかの海賊との抗争だった。

この日はいつも通り邪魔してくる海軍を倒したのだが、バギーが島の反対に「白ひげ」の船が居るのを見つけていた。

「白ひげか〜久しぶりだな」

「鳥が騒いでる、上陸したな」

「いつちよやるか生きててこそその『殺し合い』!!おれももう寿命おわりが近い!!お前と会うのも最後かもしれねエからな『白ひげ』!!!」

はア……初めての抗争がロジャー船長と同レベルの実力者が相手だなんて……『白ひげ』といえば海賊になったばかりの私でも知ってる有名人じゃん……

——白ひげはこの頃から世界に名を残す海賊であった。彼が有名になった理由としては、彼の悪魔の実によるものが大きいだろう。彼の悪魔の実は『グラグラの実』と呼ばれる地震を起こすことを可能とする最強クラスの能力を持つ。

更に彼を有名にするのは悪魔の実だけではない。選ばれし者しか持たない「霸王色の覇気を持つていたり、彼の持つ武器が最上大業物12工の薙刀「むら雲切」であることも彼を有名にする一つであった。

そして「白ひげ」の部下にも有名人が二人居る。まず1人目は見習いながらも動物系幻獣種モデル不死鳥フェニックスの能力者であるマルコ、そして「侍」サムライであり2番隊隊長を任せられた光月おでんである。

船長が「ワノ国」の「侍」サムライが新しく入ったって言うたけどそんなに珍しいのかな？そしたらいつか行ってみたいな。

「来るぞー！！」サムライ侍「だ〜〜！！」

ロジャー海賊団の一人が向かってくる着物を来た男を見つけて叫ぶと、着物の男は刀を抜いた。

「おでん二刀流…！！」ガン銃・擬鬼モドキ「!!!」

前線にいた仲間は簡単に吹き飛ばされてしまった。その侍の強さを見てロジャーは

「よう侍！！」サムライ「神避」かむさり「!!!」

ロジャーの飛ぶ斬撃は侍に技を出す隙を与えずに侍を吹き飛ばす程の威力を持つていた。そのロジャーの姿を見ていたデイアンヌは……

——やっぱりロジャー船長は強いんだ。出会った時もあったけど、実力は圧倒的すぎる。私もいつかこれほどの“力”を得ることは出来るのかな……

## 〃ロジャーと白ひげ〃

ロジャーが侍を吹き飛ばしたのを見た〃白ひげ〃が跳んできた。

「ウオオオオ!!」

「ぬん!!」

「触れてねエ!!」

おでんが言ったように〃白ひげ〃の「むら雲切」とロジャーの「エース」は触れることなくぶつかっていた。その衝撃波は雲をも割っていた。

「元気そうだなロジャー」

「何年振りだろうな!!ニューゲート!!」

「身ぐるみ置いてけ!!」

「グララララ!!」

「わはははは!!」

二人の笑い声を合図に二つ海賊は激突した。

時の「大海賊」の激突――

一日目

初日は私も含め「見習い三人組」は敵の攻撃に当たらないよう、味方の邪魔にもならないように逃げ続けていたけど、少しは攻撃してくる人もいたからその時は……

「ただのパーンチ!!」

で少しよろけさせてから逃げるのを続けてた……はアア

デイアンヌは自分の弱さにため息を漏らしていた。

二日目

はア……始まつちやつたよ。今の私じゃあ足でまといにしかならないから逃げ回らなきゃ……

「ぎやアア!!」

バギー……ほんとに何してのアイツは……手のかかる先輩だなア……

バギーはラクヨウが持つモーニングスターによって狙われていた。彼の持つモーニングスターは特殊で意思があるように動いており、バギーのことを狙い続けていた。

「ただのキーツク!!」

デイアンヌはモーニングスターでバギーを狙っているラクヨウ目掛けて蹴りを打ち込んだ。しかし急な攻撃に少しふらついたものの覇気も纏っていない少女の攻撃はダメージにならないのかすぐにモーニングスターを動かし始めた。

「逃げるよバギー!!」



「ディアンヌ!? よし逃げるぞ!!」

二人して走り始めた。

「あまりうちの見習いを虐めないでくれ」

バギー、ディアンヌとラクヨウの間に入ったのは金色の髪を持ち頼りになる副船長シルバース・レイリーだった。

レイリーは迫り来るモーニングスターを止めるために腰にある剣を抜くと勢いよく迫ってくるモーニングスターに軽くぶつけた。そしたら吹き飛んだのはレイリーではなくラクヨウのモーニングスターであった。

「覇気は私の方が上のようなだな」

覇気とは意志の力である。今レイリーが使ったのは「武装色」の覇気と呼ばれる目に見えない鎧を纏うものである。これは武器にも纏うことが出来る。「武装色」の覇気が強大であれば格下からの攻撃は一切通じなくなるためラクヨウの覇気がレイリーの足元にも及ばないことが分かった。

「ありがとう副船長」

「なに、仲間を守るのは当然のことだよ」

やっぱり副船長はカッコイイなア……いつか私も仲間をあんなふうにかッコよく守れる女になりたいな……ロジャー船長も副船長も悪魔の实の能力者じゃないのにあそ

「こまでの強さを持てるのかな？」

「おでん二刀流…!!」

「侍<sup>サムライ</sup>か…:さつきはロジャーに譲ったからな今度は私の相手をして貰おうか」

「桃源白滝<sup>ギンガ</sup>…!!」

「銀牙<sup>ギンガ</sup>…!!」

おでんは覇気を纏わせた「閻魔」と「天羽々斬」で横一文字に振り払い強力な斬撃を繰り出した。

それに対してレイリーは自分の剣に覇気を纏わせて一度おでんの刀を受け止めて横に威力を流してからおでんの二本の刀を吹き飛ばす程の威力で薙ぎ払った。

「いい威力だな」

副船長の剣はすごい威力だな…:あのおでんとかいう侍を一撃であんなに吹き飛ばすなんて…:それに「武装色」の覇気が強すぎる。私なんかとは比べるのもおこがましい程に…:

——ディアンヌはロジャー海賊団に入ってから「武装色」を含めて覇気をレイリーから学んでいたが、未だに発揮されたのは最初の山で海賊を惨殺した時だけであった。

その後レイリーは周りにいる白ひげの船員たち斬っていた。

「調子に乗るなよい!!」

そう言つて飛んで来たのは世にも珍しい青い炎を纏う翼を持つ男だった。その男は足も人間のものではなく鳥のものとなつていた。その男は“不死鳥”マルコという。

しかしレイリーは向かつてくるマルコの鳥足に武装色を纏つた指一本で止めていた。

「私は常に真剣なんだよ……少年」

すごい……!!あのスピードの攻撃を指一本で受け止めるなんて……本当に副船長は人間なのかな?疑問に思うくらいすごい。うんほんとにすごい。私の語彙力が皆無のせいで説明できないのが残念だけど……

船長もやっぱり強いんだよね……こんな化け物だらけの船に乗ってれば私もいつかあのくらい強くなれるかな……でも私は今のままだとどう足掻いても強くなれなそうだから“悪魔の実”を食べておきたいな……

「まだまだア!!」

あの侍すごいなあ……何度吹き飛ばされても諦めないで相手に挑んで……私あの事に憧れちゃうよ……でもまあそんなんで越えられる程のうちの副船長は弱くないんだけどね……

「おでん二刀流……!! 『桃源十拳』!!!」

「むッ……これは少々キツそうだな。『隼銀』!!!」

おでんは刀を十字にして持ちレイリーへとぶつけた。その刀は自分の腕と共に『武装色』の覇気によつて黒く染まっており、彼の覇気の強さが見えていた。

勢いよく突撃してくるおでんに対してレイリーも自分の剣を腕と共に覇気によつて黒く染め、おでん目掛けて突撃した。

レイリーの突撃はまるで『ハヤブサ』のように速かった。

「なかなかやるではないか侍」

「まだ終わっちゃあいねエエ」

しかしおでんは限界が来たのか倒れてしまった。そんなおでんは倒れていてもレイリーから目を離すことはしなかった。

倒れたおでんからは圧倒的な存在感が発せられていた。

「これは……君もだったか」

「副船長？」

「ああ彼は私やロジャー、白ひげと同じ——」

三日目

「ロジャー!!!」

「ニューゲート!!」

大海賊の激闘は三日目に入った。しかし船員たちは疲弊し、今戦っているのは口ジャールと白ひげ、ギャバンとおでんだけであった。

おでんとギャバンの戦闘は若干だがおでんが押ししていた。

「クソっ!!」

ギャバンは自分の得物である二本の斧を使っておでんに攻撃を何度も仕掛けているのだが、ことごとくおでんの刀に受け止められてしまった。

ギャバンさんが押されてる……それにおでんはこの戦いで成長してるし……ギャバンさんは不利かな？

「お前も強いなア!!」

「なんで上から目線なんだよ?!?!」

ギャバンさんはうちの船の中でも真面目な人だけど、少し口角が上がってる……やっぱ戦闘は楽しいのかな？今の私じゃあまだその境地にはたどり着けてないけど……

「ギャバン帰ってこい。ロジャールが最後にすると言っていた」

「おでん！帰ってくるんだよ。オヤジが終わりにするって言ってたよい」

レイリーとマルコは両船長が船長対決にてこの戦いは終わりにすると言ったのでレ

イリーはギャバンをマルコはおでんを戦いを止めるように言った。

——ロジャーと白ひげの戦いは激化していた。激化した戦闘は周りへの被害がすごかった。二人の攻撃は触れることなく周りへの衝撃波をもたらしていた。その衝撃波は簡単に雲を裂き、両端にある二つの船を大きく揺らしていた。

「能力は使わねエのかニューゲート!？」

「アホンダラア：：周りの被害を考えろオ！」

「それもそうか！わははははは」

二人は笑いながら会話しているが、その間もずっと自分の得物を触れずにぶつけ続けていた。

——三日続いた激闘は気付いたら終わっており、今は仲良くプレゼント交換になっていた。

「あいつら見習いか？」

「ああ：：つて一人知らない奴がいるな」

「新人か？」

「そうかもしれないよ」

マルコと帽子を被った男は最近になってロジャー海賊団の見習いとなったディアン

又について話していたが、でも見習いであることは見てわかったのですぐに会話は終わってしまっただ。

「ねえ君って『不死鳥』マルコでしょ」

たった今話していた女が目の前に気付いたらいたのでマルコは驚いてひっくり返ってしまっただ。

「な、なんだ？」

「どこで幻獣種なんて珍しい悪魔の実を手に入れたの？」

今自分の力のなさを感じているディアンヌは自分の力となる悪魔の実をどうやって手に入れるか知りたがっていた。

「そ、そんなの覚えてないよ。それに敵におしえるわけないよ!!」

「それもそっか……」

ディアンヌは自分の質問に答えてくれるわけないと知って、シュンとしてしまった。

「——っ！ただひとつ言えることは自分で求めに行っても手に入らないよ……」

マルコはシュンとしたディアンヌを見て、心が痛くなったのか独り言のようにディアンヌにアドバイスをしていた。

——マルコって優しかったんだ……まあ頂上戦争の時もルフィをしつかり体を張って守ってたし……

「ありがとう」

マルコに笑顔でお礼を言ったディアンヌにシャンクスとバギーはものすごく驚いていた。

「おいシャンクス」

「ああ」

「笑わないで有名なディアンヌが笑ったぞ」

「惚れたのかな？」

「そんなんじゃないやねえだろ！」

「何キレてんだよ！」

シャンクスとバギーはいつも通り喧嘩を始めてしまった。それを見たレイリーは二人の頭を叩いて止めるのがいつものテンプレであったのだが今日は近くにレイリーが居なかったのしようがなくディアンヌが……

「二人ともダメだよ」

そう言つて二人の頭をコツンと優しく拳骨を落とした。しかし二人を止める威力を持たなかったため、二人は喧嘩を止めなかった。

「どうしよう……もつと強く殴れば止めてくれるかな……でも私の拳が痛くなりそう。バギーの方だけ……」



「ダメって言うてるでしょ!!」

そう言うって二人の頭を殴ったディアンヌだったが、なんとディアンヌの拳は黒く染っていた、それもバギーの方だけ……きつとディアンヌが思ったバギーの頭を強く殴ったら痛いというディアンヌの強い意志が「意志の力」となって現れたのだろう。

「痛ってエエエエエ!!」

「どうしたバギー?」

「なんでシャンクスはそんなに平気そうなんだよ!!」

「逆になんでそんなに痛がってるんだよバギー」

シャンクスはからかうように笑って言った。

なんでバギーはあんなに痛がってるんだろう? 私はシャンクスとそんなに威力に差があったとは思えないし……バギーが痛がりなのかな? そういえば私は逆に痛くなかったなあ……

「赤ん坊なんて久しぶりだな!! モモの助に日和か!!」

「昔を思い出すな」

ロジャー船長と副船長はおでんを抱っこしながら昔を思い出して

驚いたんだけど白ひげの船に乗っていた「侍」……おでんがロジャー海賊団に入る

ことになった。まあ入るって訳じゃなくて “最後の島” に辿り着くまでなんだけどさ  
 ……

「船長がお前の “知識” を必要としたただけだおでん!! おれ達が簡単にお前らを認めると  
 思うなよ!!」

つてギヤバンさんを筆頭にシャンクスやバギーもおでんと一緒に来たトキさん、おで  
 んを追ってきたイヌアラシさん、ネコマムシさん達を絶対に認めない!! つてほんとに面  
 倒臭い人たち……

それがなぜ……

「「おーでーん♪おーでーん♪?」」

「あー煮えてなんぼのオーおでんに候!!!」

ほんとに男って生き物がよく分からない……前世の私も男だったはずなのに一切男  
 の気持ちとか分からなくなってるから、やっぱり前世の記憶が無くなってるのかな……  
 でも “ONE PIECE” の内容は若干だけ覚えてるんだよな……

「ディアンヌお前も食ってるか?」

「おでん……」

「なんでおれだけ呼び捨てなんだ?」

「え？だってさん付けとか好きじゃないでしょ」

「まあおれは呼び捨てに慣れてるからいいが、他の奴にはよくないぞ」

「気にしなくて大丈夫だよ。だって私が呼び捨てにしているのはおでんとシャンクス、バギーだけだから」

「そうかそうか!! わはははは!!」

おでんはディアマンヌの答えに笑っていた。

おでんとの仲を深めた宴会が終わってから私たちはロジャー船長の突拍子のない言葉で、ノックアアップストリーム“突き上げる海流”で船が浮いた時はもう死んだと思ったよね……でもまあ死んでないからこうやって話せてるけど……

「スゲー黄金!! 船長どうやって持って帰る!？」

「お前がいつか船長になったら取りに來いバギー。俺には時間がない」

「えくくくくく!! カケラだけでも!! 今!!」

ほんとにバギーはがめついなあ……まあそんな所がバギーのいい所なだけだし……あれ? これっていい所かな? まあいい所ってことでいいでしょ。

「この石は強い “声” がつまってて見つけ易い。大きな “力” の話だな?」

「ポセイドンって兵器の事が書いてある」

ポセイドン？しらはし姫の事かな？やつぱり海王類を操れるつてことが大きな力つてことかな？

おでんはなんでこんな難しいのが読めるんだろう……私が一人で自立した時に古代文字を読める人を探さないとなあ……でも読むのは政府が禁じてるから光月一族か、オハラの人しか居ないのか……あれ？そういえばオハラで何か大きなことがあつた気がするけど……思い出せない。

「おでんこの文字書くことも出来るんだよな」

「ああもちろん」

「こう彫つてくれ『我ここに至りこの文を最果てへと導く』!!!」

ロジャー船長はどうしてそんな事おでんに彫らせたんだろう……ほかの海賊に『最後の島』に行くには『ロード歴史の本文』が必要つてことを伝えたかつたのかな？でもこれはただの『歴史の本文』だしなあ……ロジャー船長の考えることは分からないな。

「これでいいか？」

「上出来だおでん!!!」

## 〃海賊王〃

空島を離れたロジャー海賊団は造船の町に向かっていた。

空島からは雲の上の〃神〃ガンフォールの助けで降りることが出来た。

「北極だ!!」

「いや南極だ!!」

「いい加減にしろ!!ケンカばかりしやがって、てめえらは!!」

またシャンクスとバギーがケンカして副船長に殴られてるよ……ほんとに懲りない二人だなあ。まあそんな所がシャンクスとバギーのいい所なんだけどね……あれ? やっぱいいい所じゃないかな?

まあいいやそろそろ副船長に修行を頼まなきやなあ……

「あるのか!?!お前らの国に!!!あの石が!!!」

「「赤いがな」」

「一番欲しいやつだ!!!早く言えお前ら!!!」

赤い石?……ああ〃ロード歴史の本文ポネグリップ〃の事かな?へえ〜ワノ国だけじゃなくてイヌアラシさんとネコマムシさんの国にあるんだ。私が自立した時にも行かなきやだか

らビブルカードを貰っておきたいけど……今はまだちよつと難しいかな……

イヌアラシさん、ネコマムシさんと言ったらおでんと一緒にロジャー海賊団に来たけど強いのかなあ？おでんはめっちゃ強かったから強いイメージが私の中にあるけど、実際戦う姿は見たことないんだよね。

「リンリンの奴から奪った『ロード歴史の本文』<sup>ホーネグリップ</sup>が一枚あり、もう一つも心当たりがある……!!」

「やったな船長!!」

「やった!!なんの導きだ!?!本当に4つ揃うぞ!!」

リンリン……ああー、ビッグマムのことか。本名だとほんとにピンと来ないよねビッグマムって……私がロジャー海賊団に乗る前に『万国』<sup>トットランド</sup>に行ったんだろぅけど……あれ?今のビッグマムってもう『万国』<sup>トットランド</sup>に居たんだけ?……うん分からない。

分からないことをいくら考えたって無駄だし、今は副船長に修行をどうやって頼むかを考えないと……

「どうしたディアンヌ?こちらばかり見て」

「あつ……あの私に修行をつけてくれないかなあ……とか思ってたたり?」

「修行か……別に構わないが」

「やっぱりダメだよね……っていいの!!?」

「ああ、若い芽を育てるのは大人の役目だからな」

「あ、ありがとうございます!!」

「だがやるからには厳しく行くぞ」

「お願いします!!」

こうしてロジャー海賊団「副船長」シルバース・レイリーによる厳しい修行が始まるのだった。

造船の町ウオーターセブンでロジャー船長は私たちが今乗ってる船「オーロ・ジャクソン号」の作成者であるトムさんに挨拶してた。

いつか私もこの船みたいな立派なものに乗りたいなあつて夢が出来ちゃったよ……あれ?でも私が読んでた時に全然トムさん見なかったなあ……確かウオーターセブン編はほとんどC P 9サイファーポールナインが何かの設計図を狙って潜入していた気がするけどトムさんはどうしてたんだっけ?……

ロジャー海賊団はウオーターセブンを後にして、激しい荒波、灼熱の島、極寒の島など多くの個性豊かな島を巡っていた。そして次に彼らが目指しているのは聖地マリージョアの真下海底1万mにある島「魚人島」であった。

「『魚人島』か〜〜!! 白吉しろぎつちやんと行った事があるぜ!!」

「油断するなよ!! 何度行こうと死の確率は変わらねえ!!」

白吉つちやんかあ……あの白ひげをそんな呼び方で呼ぶなんてやっぱりおでんはすごい人なんだな。あつ、でも『白ひげ海賊団』は白ひげのことをオヤジって呼んでるから親子の關係が兄弟になっただけだからそこまですごいことではない? ……いやでも白ひげと兄弟關係になった時点ですごいや……

でも私は白ひげとは相容れないかな? ……私の家族は私を育ててくれたマトローナだけだし、いくら信用出来る仲間だろうと家族になんてならないんだから……

「どうしたんだディアンヌ?」

「ごめんごめん……ちよつと嫌なこと考えてた」

「心配させんなよな」

いつもは頼りないけど何故か人の心に入り込んで来て、心を許してしまうんだよね……これは一種の才能なのかな?

「レイリー!! 聞こえたか!! 今の声」

「何言っている静かな深海じゃないか……」

「誰だア!! こんな海底で話をしてやがるのは!!」



「確かに聞こえる」

「お前もかおでん」

うっ……!?!頭に響くこの声はロジャー船長とおでんにしか聞こえてないの!?!聞こえる条件はなに? “霸王色の覇気”? いやそしたら副船長が聞こえなくて私が聞こえるのはおかしいはず……原作にこれについての描写はあつたかな……そういえば魚人島編とかそこら辺でロジャー船長が海王類の声を聞いている描写があつたけど今のことかな? 確か“全物の声”だつたかな?

そういえばシャンクスは“霸王色の覇気”を持っていたからシャンクスが聞こえてたら霸王色の覇気説が一步リードするかな?

「ねえシャンクス、おでんとロジャー船長が言ってる声って聞こえる?」

「はアア? 何言ってるんだディアンヌ。副船長が聞こえてないのにおれが聞こえるはずないだろ?」

「それもそうだね……」

やっぱり霸王色の覇気説は無くなつたね……そもそも私が持つてないから最初から有り得なかつただけだね……でも霸王色の覇気は持つていて損はない気がしたから私の中に眠つてたりしないかな……

副船長に覇気を鍛えてもらつてるけどなかなか上手く行かないんだよね……霸王色

の覇気なんかは王の資質を持つものが持てる覇気らしいし、私が持つてるわけないんだよね……

「何をしにきた地上の者!!」

「うわー——!!!」

「おい待て待て!!よく見ろ!!」

「おれだ!!ロジャーだ!!大騎士ネプチューン!!」

大騎士ネプチューンって魚人島の王だったよね……そんな人とも軽く話せる口ジャー船長の繋がりはほんとに謎過ぎる……

「ロジャー!!?成程わかったぞ!!お前らがやるのか!!」

あれ?なんかロジャー船長に比べてネプチューンの対応がなんか友好的じゃない?知り合いじゃなかったの?もし知り合いじゃなくてあの対応だったらロジャー船長なんか怖いんだけど!!?

ロジャー船長のことだからちよつと関わりが出来たからあのぐらい距離を詰めてるとかそんなんだと思うけど……でもやつぱり怖い!!

「何も悪さはしねえよ!!なんだよお前程の男が『予言』なんかにビクビクしやがって」

私たちはネプチューンたち人魚に魚人島まで連れて行ってもらったけど、魚人島って

大きなシャボンに覆われてるけどどうやって作ったんだろう……

「ネプチューン様やられました!!」

「え〜〜!!」

「海王類に門を噛み砕れ……」

「大人しい海王類が!?!あり得ん……!!」

ほんとに「予言」が当たってる……この世界の「予言」は元の世界のノストラダムスとかとは比にならない成功率だね……私の運命も聞きたいなあ……でもすぐ死ぬとか言われたら萎えるし、聞きたくないかも……

「かい王るいがあばれるのは、にんぎよひめが生まれるのを待つてるからよ」

「人魚姫!?!また新しい予知だな」

「では国王にお子様が!?!」

「待て待ておれはまだ結婚もしてないんじゃないもん」

この時のネプチューンはまだ結婚してなかったんだ……相手は誰だったっけ? 人魚姫の方はしらほし姫だった気がするけどその母親がどんな名前か忘れちゃった……ハトヒメだっけ? いやホトヒメ?

「それに先日の色っぽい……いやいや忌まわしき人魚オトヒメ率いる政治デモも見事的中!!」

ああアアアア!! そうオトヒメだ!!? でも後の国王の嫁さんになる人が政治デモをやつてたなんて……なんてまるでロミジュリみたい……あれ? ロミジュリは敵対してた貴族だったかな? まあいいやそんなことよりやっぱこの世界の予言は当たるとか……悪魔の実際に出会えるかは聞いてもいいかな? でもマルコは自分で求めに行つても手に入らないとか言つてたけど……これは自分で探したことになるのかな?

「あつ、その女の子が巨人の女王になるよ」

「こいつが『巨人の女王』だつて? こいつは人間だ……お前は巨人だったのかディアン又?」

「何言つてるのロジャー船長? 私はどう見ても人間でしょ!!? 見てよこの低い身長を! どう見ても人間に決まつてるじゃん」

「そ、そうだな」

ディアンヌが怒りながら言ったのは自分は巨人の村で育つたのに平均以下の身長が彼女のコンプレックスであつたためであつた。

もう失礼しちゃうなあ……私の身長で巨人だったら私はどんだけ身長が低いことになるのよ!! ただでさえ平均より低いのに……でも巨人だったら村のみんなを守れたのかなあ?

「ジョイボーイって奴からの謝罪文だ。何と本当にこの文字が読めるとは!!」

「それより海王類を動かす『兵器』がここにないか!？」

「空島の石にはここにあると書いてあった」

「——さつきシャーリーが言っていた『予言』に少し寒気がしたんじやもん」

寒気? シャーリーが言っていた「海王類が暴れる理由が人魚姫が生まれるのを待てるから」の方だよね…流石に私の『巨人の女王』の方なわけないよね…

「この国には数百年に一度海王類達と対話できる『人魚』が生まれる…!!もしかしたら…」

良かったよ。やっぱり人魚姫が生まれるの方だったよ…

そういえばしらほし姫は海王類に命令してたような…もしその能力を完璧に操れたら人魚島を人魚と人魚を売ろうとする海賊から守れるんじゃないやね?でも私が読んでいたところは普通に人魚捕まっていたような…まあ私には関係ないか。

「——じゃあお前の娘はいつか世界を滅ぼす『兵器』に!？」

「ただの予言じやもん!!それに『力』は使い方次第!!」

「力」は使い方次第? そんな訳ないじゃん力を持つものは迫害される運命なんだよ。もしくは利用されるだけ…私のいやおれの家族だってそうだった…人を守るために存在していたヤクザだったのにその武力を警戒した警察と政府に潰された…組長であった父親とその妻の母親は殺人どころか犯罪にだって手を染めてないのに死刑だ

とか……ああー、だから政府は嫌いなんだよ。

でもおれはいや私は生まれ変わったからこの世界を恨むのは間違ってると思ってるし、今世は政府を潰そうとかは思っけてないけど……

「ネプチューンおれ達が欲しいのはそれを「兵器」と名付けた奴らがこの世に残した莫大な「お宝」だ」

ロジャー船長達が「お宝」だけを求めるのは海賊として当然だけ……ほかの海賊はなんで海賊をやってるんだろう……白ひげは何を目的にしてるか分からないし……ビッグマムはどうせ食べ物系の為に海賊やってるだろうし……私はなんのために海賊やってるんだろう……村を壊滅させた海賊への復讐？でも襲った海賊はロジャー船長によって全滅させられたし……ならなんだろう海賊は楽しいから？……うんそれが一番最もな理由だね。

魚人島を後にして私たちは赤い石「ロード歴史の本文」があるらしいワノ国を目指してたけど、その途中でトキさんが熱を出してこの船を降りることになった。

でもおでんは降りなかった……ワノ国が見るからに変化していたのに……ほんとに酷いやつだよおでんは……でもこれはトキさんに船を降りたら離縁するって言われたから降りなかつたらしい。トキさんはすごいよね国が傾いていても、自分が熱にうなされ

とても夫の「夢」を応援するなんて……私には絶対に出来ないよ。

おでんのワノ国への帰郷は数時間で終わって、すぐに最後の「ロード歴史の本文<sup>ホーネグリップ</sup>」がある「ゾウ」を目指した。

「『ゾウ』にはこのビブルカードでしか辿り着けん様だ!!」

「たしかに……!!」島<sup>ウ</sup>「じゃねエ!!」

私たちは「ゾウ」の背中にあるモコモ公国に入国したけど何かに見られてる様な気がするんだよね。

そんな些細なこと気にしてたら禿げるよね……よし細かいことは気にしないー!!

「何だか心が落ちつかねエ……!!」

「大丈夫かよおでんお前らしくねエな」

「わかるぞおでん……」

「ロジャー船長も!?!」

「何だかよ……巨大な何かにずっと見られてる様な……」

今回もロジャー船長とおでんだけだ……なんでその中に私も入ってるの!?! 悩めば悩むほど分かんなくなってくる……よし私が特別だと思えばいいや、一応私は一度死んで転生してきた人間だし……

ロジャー船長とおでんの言葉はあまり気にせず副船長が仲間たちを引っ張って……

ロード歴史の本文<sup>ホーネグリップ</sup>が置いてある場所目指して歩いていた。

「おいおいおれらを置いてくよ」

「おい待てエエ!!」

「シャンクス、バギー!!置いてくよア!!」

「げっ! デイアンヌが怒った」

「バギーお前がデイアンヌの怒りを抑えてこいよ」

「無理に決まつてるだろ! あいつ怖えんだよ」

「おれだつて怖いよ」

二人して酷くない? 私はいたいけな女の子なのに……よし殴ろう。私を置いていつたから一発は必ず殴るつて決めてたけどあいつら酷いこと言つたからもう一発決めよう……

「あつた!!最後の〃ロード歴史の本文<sup>ホーネグリップ</sup>」

「光月の家紋!!!ミンク族と兄弟分つてのは本当なんだな!!」

兄弟分つてことはほぼ同盟つて事だよね……いいなやつぱり横の繋がりは結んでおいて損はないのかな…

私たちは最後の〃ロード歴史の本文<sup>ホーネグリップ</sup>の写しを手に入れてから最後の島へ向かうた



めの航路を見つけるため、とある港町へ寄っていたけど航路が分かった日にバギーが熱出して私たち見習いは港町で待つことになったんだよね……

「なあバギーはなんでこんなにも運が悪いんだろうね」

「さあ……ただそういう運命なんだろうな」

「運命ねえ……」

「そうだよ。おれ達が最後の島に行かなかったのだから運命だ。バギーが熱を出したのはおれ達に自分たちの船で最後の島に行けつてことかもしれない……」

「最後の島かあ……シャンクスは行ってみたいの？」

「おれか？そりゃあ行ってみたいよ。だっておれたちは海賊だぞ!!世界一周なんてみんなの夢だよ!!」

「そっか……」

——海賊ロジャーが前人未到の“世界一周”を果たした!!!ついにこの海の覇者が誕生した奴こそ海の王!!「海賊王」だ!!!

最後の島から帰ってきたロジャー船長にシャンクスは何か質問して——その後泣いていた——内容は聞けなかったけどシャンクスが泣くつてことはそれほどのことだったのだろうか……その後ロジャー船長は私の近くに寄ってきた。

「ディアンヌお前に話しておかなければならないことがある」

「なんですかロジャー船長？」

「お前と出会った日のことだ…あの日おれはお前に暴れてた海賊を止めたと言ったがそれは違う」

「えっ!？」

「実は……」

## 覚悟

「実はあの村で暴れていたのは海賊ではなくC サイファーポール Pだつた」

「えっ!？」

「あいつらは巨人族の人權がある程度認められつつある今、あまり巨人族の奴隷が市場に出回らなくなつたから天竜人の命令で世界政府加盟国ではないあの村を襲つたんだ……だが巨人族の抵抗が思ったより激しかったんだろう。だからお前の村は全力で戦つたC サイファーポール Pによつて皆殺しにされた。そして港町の方は口止めとしてだろうな……」

「一つ聞いていい?」

「ああ」

「なんで今になつて話したの?」

「元々は話すつもりなんてなかつたが、お前の精神が思った以上に成長してたからな……ただ一つ忠告しておく世界政府への復讐なんて考えるんじゃないぞ」

「分かつてるよ。私だつてバカじゃないこんな力のない少女が政府なんかと戦つたらすぐに死んじゃうもん」

「そうか力のない少女ならか……まあいいおれもお前に死なれたら悲しいからな」

「私もロジャー船長に死なれたら悲しいから！」

「すまんな」

そう言つてロジャー船長は私の前からほかのみんなの所へ言つてしまった。

きつとロジャー船長は死ぬんだろう……原作通りならローグタウンで処刑されるはず……その経緯は曖昧な原作知識しかない私には分からないけどロジャー船長が海軍なんかに負けるはずないから自首したと思う……

「わははは!!」

ロジャー船長は仲間と楽しそうに宴会してる……今の私はそのような気分にはなれないよ……せつかくこの世界では政府を恨まずに生きていけそうだったのに「夢」が出来ちやつたじゃん「世界政府を潰す」っていう。

これも運命だったのかな? ロジャー船長が私を助けて、私に政府を恨むようにさせたのは……ロジャー船長私はそんなに強くないんだよ? マトローナ達が復讐なんて望んでいなかったとしても私は政府に復讐したいと思つちやうよ……

「どうしたディアンヌ」

「バギー……ねえバギーはさ、自分の家族を殺した組織は許せる?」

「自分の家族を殺した組織だア? そんなの許せる訳ないだろオ!」

「復讐したいとは思う?」

「復讐だア？する訳ないだろ!?復讐なんてしても何も帰ってこないんだぞ！バカなのか  
ディアンヌ」

「——っ!?うるさい!!」

「理不尽!!」

ほんとにバギーはいいこと言つて……こんなこと言われたら復讐なんて出来なくなるじゃん……でもバギーありがとう私をとどまらせてくれて……

「ねえバギー」

「なんだ？」

「ありがとう」

「急になんだよ怖いなア？」

「バギーはそれでいいよ」

「はアア!?どういう意味だそれ!!」

「そのまんまだよ」

バギーのおかげで夢が変わったよ。世界政府を潰すんじゃないやなくてロジャー船長と同じように“海賊王”を目指すことに決めたよ。それにプラスして誰もが笑って過ごせる国を作るよ。天竜人なんか支配されない豊かな国を!!

——その後ロジャー海賊団は海賊王として多くの海賊に狙われることになるのだが、ロジャー海賊団に勝てるどころか会える者も一人も居らずにロジャー海賊団の最後が迎えられる。

「ロジャー海賊団を!!解散する!!!」

分かつてはいたけど改めて言われるとなんか辛くなるなあ……まだロジャー船長について行って旅を続けたいよ……でもそれは許してくれないよね。だってロジャー船長の命はもう長くないんだから……だって最後の島に行く日だって普通とは思えない咳が聴こえてたし、そもそもクロッカスさんが余命が僅かだから急いで最後の島を目指してたって聞いたし……ほんとにこれで終わりなんだなあ……。

ロジャー船長は「夢」を叶えたんだよね……ほんとにすごい人だよ。私の夢はロジャー船長同じ「海賊王」になることだけけど今の私じゃあ全くなってる未来が見えないよ……「豊かな国を作る」だって私にはカリスマ性だってないし、政府に抵抗出来るだけの実力も持ってないし……。

「どうしたんだディアンヌ?」

「シャンクス……私って弱いよね」

「……今は弱いかな……でもそれはおれだって同じだよ。きつと船長や副船長、ほかの人達だって最初は弱かったんだよ。ならおれ達だって努力すれば強くなれるよ」

きっとシャンクスは私の様子を見てああ言ってくれたんだろうね。でもバギーの言葉と同じで心に染みたよ……それに未来の「四皇」となるシャンクスに言われたから説得力があつたよ。これがバギーだったら全然説得力なかつたけど……

「なんか元気そうになつたから良かった」

その後とある港町まで航海をしていた。その間は毎日のように宴会を続けていた。

そして宴会の終わりと共に海賊王ゴール・D・ロジャー率いるロジャー海賊団も終わりを迎えたのだった。

「レイリー……」

「……………」

ロジャー船長は副船長に何かを言って私に近付いてきた。その顔は悲しそうだった。

「ロジャー船長、かな……」

「悲しそうな顔って、お前の方が悲しそうだよ」

「流石ロジャー船長、体の限界が近くても『見聞色の覇気』は衰えてないね」

ロジャー船長は私が言おうとしたことを見聞色の覇気で未来を見てわざと言わせなかつたんだろう……ロジャー船長はなんだかんだ優しいから……

「ディアンヌ……シャーリーの『予言』について分かつたことはあるか？」

「予言……特に考えてはなかったけど」

「おれは『予言』について少し考えたんだが……お前が『巨人の女王』になる方法は二つだと思う。まず一つはお前が『巨人の国』の王家の血を引いている事だがお前の身長を見るにそれはないだろう。そしてもう一つが『悪魔の実』の力だ!!」

「悪魔の実……」

「そうだ。悪魔の実の力ならディアンヌが巨人になることも可能かもしれない」

「でもそんな悪魔の実を手に入れる伝手なんてないよ」

「そんなの分かっている。だからこれはおれからの餞別だ」

「これは悪魔の実……」

「そうだ。これは『ヒトヒトの実』の幻獣種だ」

「そ、そんなの貰えないよ!!それに私は一番の新人だよ!?!バギーはもう悪魔の実を食べるから食べれないけど、シャンクスなら食べれるでしょ!!」

「バギーへの餞別は前に食われたバラバラの実でいいとして、シャンクスにはある物あげたからいいんだ。それにこれはディアンヌへの謝罪を含んでる」

「謝罪ってなんの?」

「あの港町を守りきれなかったことだ」

「そんなの!私が感謝することはあっても謝罪されることなんてありえないよ!!!」



もしあの時ロジャー船長があいつらを倒してなければ私は捕まってるか殺されてるはずだもん。ロジャー船長に悪魔の実を貰うなんて恩を返しきれないよ。

「恩なんて考えてんなら、それは必要ねえ。これはおれの夢をお前に預けるだけだ」

「夢は叶えたんじやあ？」

「いやおれ達は……早すぎたんだだからお前には、<sup>ッ</sup>ひとつなぎの大秘宝<sup>ビー</sup>”を見つけて欲

し」

「<sup>ッ</sup>ひとつなぎの大秘宝<sup>ビー</sup>”を……」

「ああ、だからお前にこの世界の荒波に耐えられる力はない。だからこれはおれの夢を叶えてくれるお前へのお礼も含むから……貰ってくれるな」

「……うん」

私はロジャー船長の手にある変な柄を持つ果実を貰い受けて口にした。それはもうクソ不味い!! って感想しか出てこないよね……あの不味さって言ったらもう表現出来ないよね……

——っ!!? 体が熱い……それに骨が伸びるような……それに私にあるはずのない重みを感ずる!!?

「おいおい……」

「……りやあ傑作だなあ」

そうギャバンさんと副船長が私に向かって言ってきた。だけどなんかめっちゃ下じゃね？あれ？副船長達ってこんなに小さかったかな？あれよく見るとロジャー船長やシャンクス、バギーも下に見える……これは巨人のサイズ!？」

「おー!でかくなつたなあ!!:ディアンヌ」

私は巨人だつたつけ?……これが「悪魔の実」の力なのかな?それとも副作用?

……副作用なわけないか、体が大きくなつて損することはあんまりないし。

「やつぱりこれって、「悪魔の実」の力?」

「そうだぞ……:それを使いこなして強くなつてみる!!:ディアンヌ!!」

「うん!」

きつと私はまだまだ弱いままだろう……でもいつか、10年先になるかもしれないけど、いつかはロジャー船長をも超える海賊になるよ!!

——海賊王ゴール・D・ロジャーは自らの海賊団を解散し、船を降りた。見送る仲間たちは大粒の涙を流していたが、ロジャーは振り返ることをせずに去つていった。その姿は海賊王の呼び名に相応しい風格だった。

短い間だけドクツソお世話になりました!!:ってこれはサンジのセリフだったよね

……あれサンジは長い間だつたつけ?どっちでもいいや。

サンジといえば、私の存在つて麦わらの一味に何かに影響を及ぼしたりするのかな?

まあ今はまだ関係ないか……でも私の『夢』の邪魔をしてきたら容赦なく潰すけど。

「今まではこの『鎖国』に意味があつた……!!——だがいつか『ジョイボーイ』が現れる日までに『開国』せねば……!!」

今私たちはおでんをワノ国へと送つてるけど、おでんに剣術習つておけば良かったかな? けどまた会つた時にでも教えて貰えばいいか、おでんだつてまだ四十前でしょ? ならまだ先は長いからいつか会えるでしょ……

曖昧な原作知識しかないデリアン又はそう思っているが、これを最後にもう会えることは無いだろう。原作通りならこの船を降りてから約五年後におでんは『赤鞘九人男』と共に討ち入りをして、『百獣海賊団』に敗北を果たす。その後の処刑で命は散るのだが……: デリアン又は知らなかった。

「みな世話になつたな」

そう言つて船を降りたおでんは苦虫を噛み潰したような顔であつた。

もうみんな笑いながら泣いて……またいつか会えるんだから泣かないでよ。あれ? 目から汗が止まらないよ!!ほんとにワノ国は暑いなあ……

そしてワノ国におでんを降ろした私たちはとある島で解散した。これからはみんなバラバラの道を歩むのだろう。私は仲間を探しながら航海を続けるだろう。きつとそれは見習い仲間であるシャンクスとバギーも同じだろう。

「おれと一緒に来いよ!!バギーにディアンヌ!!」

「おめエの部下なんざまっぴらだバーク!!」

「私も人の下にはつきたくないかな?海賊になるからには船長でしょ!!」

「それもそうだな……おれらはもう海賊だもんな」

「そうだよ。海賊なら上を目指さなきゃ」

「何言ってるんだ、おめエらバカになったのか?」

「はあ……シャンクスは私たちはもう見習いじゃなくなるってことを言いたいんだよ

……これだからバカは」

「誰がバカだアア!!」

「バギーは馬鹿だろ」

「なんだとオオ!」

「はいはい喧嘩しない!」

はあ……最後の日もシャンクスとバギーは喧嘩してるのかあ。なんか別れとは思えないなあ……まあいつも通りの最後にして別れるかな?

「喧嘩しないって言ってるでしょ!!」

「痛つてエエ!!」

私は喧嘩する二人の頭を殴つてあげた。ここ注意ね。殴つてあげただから、二人の喧嘩を止めるっていう私なりの優しさだから!!

まあ最後くらいは喧嘩を辞めたら殴るのは辞めとこうと思つてたけど……言葉で止めたぐらいじゃあ二人の喧嘩は止まらないよね。最後だから笑顔で殴つてあげたよ。

「痛つてえなあディアン又つて泣いてんのか?」

「何言つてんの!? 私が二人と離れるつてだけで泣いてるわけないじゃん」

「おれらと離れるのが寂しかったのかディアン又は!! おれらも悲しいよ。なあバギー」

「そりやあまあ……短くねエ付き合いだからな」

「照れんなよバギー」

「照れてねエよ!!」

二人も同じ気持ちだったんだ……なんか嬉しいなあ。

「ねえ」

「なんだ?」

「んだよディアン又」

「二人とも『夢』を叶えてね」

「……もちろんだ」

「……当たり前だろ!!」

そしてロジャー海賊団元見習い三人組は拳を突き合わせてそれぞれ違う道を歩いて行った。それを近くの酒屋で見っていたレイリーは「成長したなお前ら」と涙を浮かべていた。

なんかカッコつけてみんなと別れたけどこの後どうしよう、お金は多少あるから小さい小舟は買えるだろうけど私能力者だし……この島でお金を稼ぎながら仲間を探すのが一番かな？

よし!!何か仕事を探して働こう!!!そして可愛い仲間を探すぞ!!!あれ?今私って女だよね……前世と好みは変わってないってこと?でもロジャー船長や副船長はカッコイイって思ってたけど……カッコイイ人をカッコイイって思ってたのは前世でも同じか……?好みが女性のままだったら私は百合を咲かしてしまうのかな?

## 船長

## 私の名はデリアンヌ!!

——ロジャー海賊団の解散は世界に驚愕をもたらした。新世界にいる海賊達はロジャーが手に入れたであろう「お宝」を手に入れるためロジャー海賊団元船員達を襲っていたが、海賊王の仲間たちは精鋭揃いでロジャー海賊団で敗北した者は一人もいなかった。

それは元見習い達も例外ではなかった。……バギーだけは敗北はしてないものの勝利もしてなかった。バラバラの実の能力を使って目眩しをして逃げているだけだった。

「ロジャー海賊団が解散したらしいぞ」

「海賊王が手に入れた「お宝」は何処にあるんだろうな」

「そりゃあ誰も知らないところだろ」

「船長なら取りに行けるんじゃないやねえか？」

「そうだな！海軍に取られるぐれエならおれが貰っちゃおう!!」

「そのセリフ君みたいな雑魚には似合わないよ」

ロジャーの宝について話していた海賊が多くいる酒場に似合わない透き通ったソプ

ラノボイスが響き渡った。

「誰だおめエは」

「誰だ? うーん……海賊かな?」

「……ガハハハ!! 海賊だつてよこりやあ傑作だ!! おめエみたいなチビが海賊なんて世も末だなあ!! そうだろおめエら!!」

そう言ったのは数箇所歯が掛けて、ガタイのいいオッサンだった。オッサンの見た目はまるで「中〇産」の黒ひげのようだ。

「じゃあ私が海賊かどうか確かめてみる?」

「おいおい辞めときなア!! おれは今機嫌がいいんだ。今なら見逃しておいてやるからどっか行け」

「うーん……喋り方まで黒ひげに似てるよ。ほんとに嫌いだなあ」

「どっか行かねェんだな……やっちまえおめエら!!」

「顔はいいから捕まえて売っちまうぞ」

「痛くしねえから大人しく捕まれエ!!」

「性根が腐ってるよ。まあ私を売り飛ばすなんて無理だけどね」

そう言った少女は「武装色」の覇気によつて黒くなつた右腕で迫ってくる「中〇産」黒ひげの部下と思われるチンピラを殴り飛ばした。



「ほう、おめエみたいなチビが覇氣を使えるとはなア!!おもしろえ」

「中〇産」黒ひげは少女に殴りかかった。その拳は「武装色」の覇氣によつて黒く染つていた。しかしその覇氣は少女に少し劣つているように見えた。

「はあはあ……おれがおめエみたいなチビに負けるはずねエ!!」

「はあ、そう人を見た目で判断してゐる時点で君は三流なんだよ」

「おれが三流だと!!」

「自分が三流じゃないと思うなら私を倒して訂正させればいいじゃん」

そう、この世界は気に食わないことがあれば力でねじ伏せればいいんだから……中〇産「黒ひげの悪かったところは私を見た目で判断した事と、三流つて言われた時に怒つたことかな？」

人は誰しも怒つた時は多少なりとも正氣を失うからね。人によつては怒つた時の方が強くなる人もいるかもしれないけど、それはほんのひと握りの人だけだから「中〇産」黒ひげにはまだ早かつたよ。

「クソがアア!!!」

はあ……そうやつて怒りに任せて殴りかかつてきたら、勝てる相手にも勝てないでしょ……でもまあ素質は感じるね。怒りに任せてるせいかな覇氣が少し強くなつたような気がする。伸び代があるなら仲間になりたいなあ。

「死ねエエクソガキイイ!!」

「少し本気を見せてあげる。『ディアンヌのグーパン巨人の石段』」

少女は本気を見せると言ったと同時に右腕が『巨人族』の腕のサイズまで大きくなって、『中〇産』黒ひげを殴り飛ばした。

ちなみに『武装色』の覇気は纏っていなかった。武装色の覇気を纏っていたら『中〇産』黒ひげは死んでいたので、少女は手加減したと思われる。

「おめエ……『悪魔の実』の能力者か!」

「そうだよ。私は『動物系』ゾオンの能力者だからこれ以上戦うとなると能力を全力で使うことになるからもう諦めることを進めるよ。代わりと言つちやなんだけど提案があるよ」

「提案だと?」

「そう提案。私の仲間にならない? 私に着いてくれば君の『夢』を叶えさせてあげる。君の『夢』は何かな?」

「おめエみてエなのに叶えられる夢じゃねえよ!!」

「最低でも君よりは強い自信があるんだけどなあ……」

今倒れてる状況が分かかってないのかな? もしそうだったら相当な馬鹿だなあ……ちよつと要らなく思えてきたかも……。

「クソがッ!……だよ」

「なんだって？よく聞こえないなあ」

「だから……故郷を大国にすることだよ!!」

「故郷を大国……私の『夢』と似てるね!!私の夢は天竜人なんか支配されない豊かな国を作ることだよ!!」

「中〇産」黒ひげは意外と良い奴なのかも？故郷を大国ってどんなところなんだろう。貧しい国とか？それとも周りの国の戦争に巻き込まれてる小国？まあどんな国だったとしても愛国者に根が悪いやつはいないよね。

「天竜人に支配されないか……ほんとに出来ると思ってるんのか」

「当たり前じゃん。『夢』は叶えるつもりがあるからこそ持てるものでしょ？」

「叶えるつもりがあるから持てるものか……いい言葉だな。そんなことが言えるおめエに惚れたぜ!!だからおれの『夢』を賭けてやるよ!!」

「ありがとう!!でも私オツサンはちよつとタイプじゃないなあ」

「そういう意味じゃねエ!!」

もうロリコンは怖いなあ……でも初めての部下ゲットだぜ!!これ一回は言ってみたかったんだよね。あれ？人が増えたつてことは船を大きくしなければいけないのでは？したらまた必要なお金が増える!?はあまた皿洗い地獄だよ……。いや『中〇産』黒ひげなら持つてる可能性も……。

「ねえいきなりだけど舟持ってる?」

「ほんといきなりだな。船ならあるぞ」

「ほんとに!?!見せて!!」

私は出来るだけ大きな船であることを願いながら船着場まで行つただけど……まあ何となくこうなると思つてたよ。

——二人の前にある船はどうやつても新世界の荒波には耐えられない小舟だった。ここが大事である小船ではなく小舟なのだ。そう帆がなくあるのは手で漕ぐタイプのオールだけだった。

「ねえ、君はどうやつてこの島に来たの?この舟じゃあ海を渡れないと思うんだ私は」

彼女は動揺していた普段は使わない倒置法を使うほどに。それもそうだろう。新世界においてはほかの海とは比べ物にならない海流なので現地の人ですら舟には乗らないのだから。

「そんなの普通に漕いでに決まってるだろ」

「普通じゃないよ!?!だつてここは『新世界』だよ?!?!こんな小さな舟だと『新世界』の荒波にすぐ呑み込まれるよ!?!」

東西南北の海や前半の海ならいざ知らず、新世界に入つてこんなに小さい舟なんて自殺行為だよ!?!この人は自殺志願者かなんかかな?……あれ?この人の名前はなんだろ

う。仲間にしようとしてるのに名前すら聞いてない……私無計画すぎる!!

「荒波だと?そんなんおれの航海スキルがあれば簡単に乗り越えられる!!」

すごい才能!!ただの「中〇産」黒ひげかと思っただけなら才能の塊だった。

い、いや、まあ航海士は欲しいと思っただけからわ、私のけ、計画通りなんだけど!!

「すごい航海術じゃん!!君が居ればちゃんとした船なら新世界でも楽チンだね」

「でもそのちゃんとした船がないだろ」

「大丈夫!私が働いて稼ぐから」

「おめエ海賊なのに働いて稼いでんのか?適当に海賊を潰して奪えば良いじゃねえか」

それは考えもしなかったなあ……それが一番効率的なのかな?でも私の実力で海賊を狩れるのか……まあこの中〇産黒ひげを倒すことは出来たからある程度は出来るかも……。

「そういうえば名前聞いてなかったから教えてくれない?」

「おれの名前か?おれの名前は「キャンドラ」だ!!おめエの名前は?」

へえー、キャンドラって言うのか、でも良かったよ名前まで黒ひげに似てなくて。

これで名前がディーチとかだったら仲間になるの少し躊躇ってたからね……。

「私?私の名はディアンヌ!!「海賊王」になる者だよ!!」

「「海賊王」、だと……「海賊王」はあのゴールド・ロジャーの称号だぞ!?アイツはそこ

らの海賊とはレベルが違い!!海賊団を解散したからってアイツが「海賊王」なのは変わりねえ!!」

「ねえさつきからアイツアイツってちよつと辞めてくれないかな?少しイラつくから」「す、すまねえ」

「中〇産」黒ひげ改めキャンドラーが直ぐに謝った理由はディアンヌの威圧にビビっていたからだ。謝りはしたもののキャンドラーには理解出来なかった。世界に名を残す大海賊であるロジャーをディアンヌがいくら尊敬していたとしてもアイツ呼びだけでここまでキレるのだろうか……。

「うん!謝ってくれたら別にいいよ。でも酒場に居た時はロジャー船長のお宝を取れるみたいなこと言っただけでなかったっけ?」

「(ロジャー船長?)あれは酔っていたからノリで言っただけで、取りに行くつもりなんて、はなから無かったさ」

「酔ってたからロジャー船長が残したお宝を取りに行くなんて妄言吐いたんだ……まあ酔ってたなら仕方ないか」

「お、おめエは「海賊王」とどんな関係なんだ!？」

若干だが機嫌が悪くなり始めたディアンヌにビビったキャンドラーはわざとらしく話を逸らした。

「私は元ロジャー海賊団の見習いだったよ」

「ロジャー海賊団の見習い?!?おめエが強い理由は『海賊王』の仲間だったからか!!!」

「まあね。でも強い理由はそれだけじゃないけどね」

「それだけじゃないだろ?」

「そう。私はとある人に修行をつけてもらってたからね」

あの『冥王』シルバース・レイリーに修行をつけてもらってたからね。あの修行はほんとに死ぬよりキツかったけど……今では強くなれたからいい経験だと思えるよね。

「ある人とは誰のことだ?」

「ロジャー海賊団副船長『冥王』シルバース・レイリーだよ」

「冥王だどっ?!?……だったらその強さも理解出来るな」

キャンディーが言う通り副船長の实力は相当だった。副船長の实力はロジャー船長に一步劣る、もしくは同レベルの实力を持つてる。そんな強い人に修行をつけてもらった私は……強い!!!

このセリフは確か、何とかの巨人に出てくる巨人科学の副産物の一族で主人公L.O.V.eの女性のセリフだったよね?これも言ってみたかったんだよねえ……。

——某巨人漫画は『ディアンヌが読んでいた漫画の一つである。そのためディアンヌが食したとある巨人になる『悪魔の実』の能力に某巨人漫画に出てくる『九つの巨人

“の能力が付与される……かも? しれない。

まあこの漫画に關しても曖昧な知識しかないので “九つの巨人” を知っているのかすら危ういので付与されることは無いだろう。

「よし! もう私の強さの秘密の話はもういいでしょ。 お金のためにそこら辺の海賊を襲いに行くよ! キャンドラー!!」

「ならちやちやつとかつさらつちまおうぜ!!」

「口悪いなあ……まあ良いんだけどさあ。 口が悪過ぎると無駄な敵を産むよ」

「す、すまねえ」

「謝ったからよし!! 直ぐに行くよ!」

「おうよ!!」

そうして私達は近くに泊まつてる海賊船を襲いに行った。そこに居たのは数十人の海賊たちだった。

「結構人多いね〜! まあ雑魚が何人居ても変わりないんだけどさ」

「そうだな」

「誰だおまえら」

「私の名はディアンヌ!! “海賊王” になる者!! そんな私から君たちを選択肢をあげるよ。 ひとつ私たちに従属する。 ふたつ私達に潰される。 どっちがいいかな?」



「そんなの第3の選択肢に決まってるだろ。おれらがお前らを潰すだけだ。お前ら行けー!!」

「敵の実力も分からないのが新世界に居るなよ!」

「何言ってるんのキャンドラ、君だって私に挑んで来たじゃん」

「あ、あれはまだ酔いが覚めてなかったから……」

「ははは… 揶揄っただけだよ」

「何ゴチャゴチャ話してやがる!! お前ら!! アイツらを今すぐ潰しにいけ!!!」

## “中将”

——近くにいた海賊に喧嘩を売ったデイアンヌとキャンドラーであったが、思っていた以上に人が多かったので時間が掛かってしまった。

海賊同士の争いだと思つた市民が海軍に通報したためすぐそばに海軍の船が来ていた。

「おいおい、近くまで海軍の船が来ちまつてるぞ!!」

「うーん……喧嘩売ろっか」

いつかは海軍に喧嘩売ろうと思つてたし、それが今になつただけだよね……海軍の船1隻だけだから勝てるよね? まあ捕まってもどうにかして逃げれるよ。私の能力は海軍に知られてない筈だし……

あー、でも強い海軍が乗つてたら逃げることもすら難しいかも……ガープとかいう海軍の中将とかが来たらどうやっても逃げれない……。

「ねえキャンドラー。ガープって海兵知ってる?」

「当たり前エだろ!? アイツは最凶最悪の海賊“ロックス”を“海賊王”と共闘して打ち倒した“英雄”だぞ!!? 知ってるに決まつてるじゃねえか!!」

「ロックス……今名を挙げ始めてる個性的な海賊たちを一つの海賊団としてまとめあげてた海賊界のカリスマ『ロックス・D・ジーベック』ってことを解散少し前にロジャー船長から聞いたことがあるけど、当事者でもないキャンドラーがなんでそんなこと知ってるの?」

「……まあ色々あつたんだよ」

「そう……」

「この反応はきつと過去に何かあつたんだね……。今は聞かないでおくけど、いつかきつと自分から話せるように信頼を築いていかなきゃね。」

「まあまず近付いてくる海軍をどうにかしてからなんだけど……。よし!! 覚悟を決めよう!!」

「数で負けてるんだから先手必勝で海軍船に乗り込むよ!!」

「おいおい、そりゃあ流石に無謀だぜ!! 海軍はそこそこ強えのが多数居るし、強え奴は相当だぞ?! さつき話したガープクラスが数人居るんだぞ!! もしガープクラスの奴が乗つてたら速攻でお縄だ!」

「大丈夫だよきつと。だつてここは『前半の海』だよ? そんなところに海軍本部の最高戦力があるわけないじゃん」

「だが……」

「ゴチャゴチャ言っていないで早く行くよ!!海軍はクソだから私たちのことを確認せずに攻撃してくるよ」

「あー……分かったよ。行けばいいんだろ行けば」

「よろしい!じゃあ行くよ!!!」

私はキャンドラーを何とか説得して海軍船向かって跳んで行った。跳んでる途中にキャンドラーつて六式の「月歩<sup>げっぽう</sup>」を使えるのか心配になったけど、心配は要らなかつたみたい。

キャンドラーは「月歩」を使って私のことを追ってきた。彼の使う「月歩」は一步が私より跳んでいた。

酒場の時も思ったけどキャンドラーの行動から私より弱いって思えないんだよね……なんか力を使うのに躊躇してるって言うか、力を無意識にセーブしちゃってるみたいなの……。

「なんだお前ら!!」

「か、囲んで潰すんだ!!」

「私相手に囲んで攻撃なんて通用しないよ!!」

そう言つてディアンヌは右腕を「悪魔の実」の能力で巨大化させて振り回した。

その攻撃は海軍船に乗り込んだディアンヌ達を捕まえようとしていた海兵をいとも簡単に吹き飛ばしてしまった。

しかし海軍大佐などの実力者はそこまで吹き飛ばされず踏みとどまっていた。

「なんて力だ!?!しかしこれほどの実力者が賞金首ではないなんて……二元賞金稼ぎか何かなのか?」

「ガハハハ……!!船長は賞金稼ぎなんかやつて無かつたぜ!!」

ディアンヌの正体について考察していた「大佐」を後頭部を右腕で殴り飛ばした。その右腕は「武装色」の覇気によって黒く染っていた。

「お、お前は——お前みたいなの奴なぜこんな所に……」

大佐が気絶寸前に呟いた言葉はディアンヌの耳に届いてはいたのだが、いちばん重要なところは聞こえていなかった。

大佐の気絶と共に船の奥から他の海兵とは一線を画す実力を感じ取れた二人は緩み始めていた気を引き締めた。

「あらら……いい女だな。だが海兵に攻撃するつてことは敵つてことでもいいよな。……連行させてもらうぞ。」

「こりゃあヤバそうな相手だが、どうすんだ船長」

「逃げられなさそうだし迎え撃つよ！」

『海軍本部 “少将” クザン』

「敵なら容赦せずいくぞ。

“アイス塊” “『両棘矛』!!!”

クザンは自分の周りを冷気で冷やして氷の矛を生み出した。その槍は三本あり、その矛全てがディアンヌの方へと矛先を向けていた。

「お前も能力者か!!? “ディアンヌのグーパン巨人の石段”!!!”

ディアンヌはまた右腕だけを巨大化させて、迫り来る三本の矛を殴った。前回と違ったのは今回は“武装色”の覇気を纏っている事だった。

そんなディアンヌの強力な攻撃を打つもクザンの矛を一瞬で壊すことは出来ずに数秒の隙がディアンヌに生まれてしまった。

「横がガラ空きだぜ、 “アイスタイム”!!!”

「やっぱー！」

右腕を振り抜いてしまったので右の横腹をクザンに触れられてしまった。クザンが触れたところからディアンヌの体が凍り始めていった。

「いや、少し舐めすぎてたよ。海軍本部の“少将”がここまで強いとは思ってもなかった」

遺言とも思える言葉を残してディアンヌは全身を凍りつかせてしまった。

「で、船長が目の前で凍ったのに動かなかったお前はどうすんだ？」

「……」

「あくまで無言を貫き通すのか。なら大人しく捕まってくれ!!」

「大人しくするのはお前だ!!」

「——ツ!!危なかったな。だがどうやって抜け出した」

「敵に教えると思ってる？」

「普通は……言わねえよな」

「まあ私は普通じゃないから言うだけだね。その理由は私が“動物系”<sup>ゾオン</sup>の能力者だからだよ!!」

「やっぱりそうだったか」

「でも私“武装色”の覇気を纏ってたはずなのにダメージ負ってなくない?」

ディアンヌは“武装色”の覇気を纏った右腕を大きくしてクザンの上半身を全体的に殴ったはずなのだが、ディアンヌは全くもって手応えを感じていなかった。

それもそのはず。クザンは“見聞色”の覇気によってディアンヌが“武装色”の覇

気を纏って攻撃してることが見えたので体を流動させて避けたのだった。

「『自然系』<sup>ロキア</sup>はそんなもんだ」

「へえ……知らなかったよ!!」

ディアンヌは話すと同時に右腕を振りかぶった。その攻撃は巨大化した腕ではなく普通の状態の腕だったため、今までとは違う腕のサイズの攻撃に距離を見誤ったクザンは攻撃をモロに受けてしまった。その攻撃でクザンは吹き飛んで行った。

「おい船長!!そろそろ引き時だぜ。向こう岸に海軍船が見える。騒ぎを聴きつけたらすぐに向かってくる!!この船を破壊してから逃げるぞ。この船を破壊したらアイツもすぐには追ってこれねえだろ」

「はあ……決着はまたの機会だからそれまでに『大将』にでもなっておいて。それに勝った私に箔が付くから。あつ!私の名前はディアンヌだから!!」

「お、おい待て!!」

すぐに立つてこちらに来ようとするクザンだったが、ディアンヌが海軍船を破壊するのが一足早かった。

「ガハハハ……!!この船を何とかしねエとおめエの仲間が海に落ちちまうぞ!!」

この船に乗っていた海兵たちはクザンを除き全員気絶しているので、真つ二つに割れた海軍船から落ちようとしていた。



クザンが仲間を助けようとしている間にディアンヌ達は先程潰した海賊が乗っていた船に乗り込んで逃げて行った。

「あらら…逃がしちまった。体力をかなり使うが仕方ねえか。　アイスエイジ 氷河時代」

海兵が船から落ち始めていたので、海に手を漬ける時間がなかったので手のひらで空気を凍らせて海まで氷を伸ばし、そして海を広範囲で凍らせた。

その行動のお陰でディアンヌ達を逃がしてしまつたが仲間を一人たりとも失うことがなかつたので、クザンの判断は世間的には良かったと言える。

「逃げることは出来たがおれも船長も賞金首になつちまうぞ?」

「そんなの分かりきつてる事だよ。私は『ロジャー海賊団』の見習いだったからその事実がバレた時点で懸賞金は付けられるんだから、自分の功績で付いた方が気持ち的に嬉しいでしょ」

「いやまあそうだが……」

「ちっちゃいことは気にするなそれ○○○○○○○○」

「ん?なんて言つたんだ」

「あらら…伏字になつちやつた。これは若い人には分からないのネタだよ」

「おめエも充分若エじゃねえか」

そっか今の私は充分若いか……ネタ古臭いかな？今は○○○○ゴレイとかかな？でも私が死んでから結構経つてるはずだからこれも古臭いのか……。

「急に黙り込んでどうしたんだ？」

「ごめんごめん。自分のネタの古さを改めて理解してただけだから」

「ネタ？なんでもいいが次の島は何処を目指せばいいんだ？とりあえず海軍船から離れるように進んできたが……」

「とりあえずはシャボンディ諸島を目指して、そこで色々考えよ」

「分かったぜ船長!!」

一応「新世界」入りはするとして仲間が一人しか居ないからもう少しぐらい欲しいんだけど……奴隷でも買えば即戦力の仲間が手に入るのかなあ……でもなあ奴隷売買に手を出したら天竜人のクソども同じになっちゃうしなあ……。

まあ奴隷どころか食糧を買えるほどのお金がないから行くまでの道中で海賊を襲ってお金を奪うことは決定してるんだけどね。

「なあ船長」

「なに？」

「あの海兵の能力って……」

「『悪魔の実』の中でも珍しいとされる『自然系』の『ヒエヒエの実』だろうね」  
 「『自然系』か……強えな」

改めて思えば海軍つて凄いいね。『自然系』より珍しいとされてる『幻獣種』が一人とその『自然系』が四人も居るなんて……珍しい『悪魔の実』を強い奴に与えてるのか、それとも珍しい『悪魔の実』を食してるから海兵になったのか……考えるだけ無駄か。

でもこれだけは言えるか強い奴の周りには強いのが集まるって。それが人だろうと『悪魔の実』だろうと……ね。

「船長！前方から海賊船が来るぞ。迎え撃つか？」

「……私が乗り込んでくるよ！すぐ終わらせてくるけど船番よろしく!!」

「お、おい待ってって、もう行っちゃまった。」

「ふう……やつぱり前半の海だからそこまで骨のあるやつは居ないね」

「ガハハハ……!!船長が強エだけだろ!!船長とクザンとかいう海兵みたいな実力者が前半の海に居るのがおかしいんだよ!!」

「うーん、早くクザンみたいな奴と戦わないと体が鈍っちゃうよ」

海軍本部 “少将” クザンとの戦いから一月が経ったが、あれ以来ディアンヌは自分と互角レベルの実力者とは出会えてなかったので体が鈍り始めていた。

しかし仮の目的地としていたシャボンディ諸島が見えてきたので、きつとディアンヌの体の鈍りは解消されるだろう。

そこにはディアンヌが最も嫌う天竜人がたまに居ることがある。もし “天竜人” が偉そうに練り歩いていたら殴り飛ばして、海軍本部 “大将” が来ることは確実なのだから……。

「おー!! 見えてきたね。 “前半の海” で名を上げた海賊達が “新世界” 入りを目指して集まる島……シャボンディ諸島!!」

「船長金は十分あるんだ。仲間を増やそうぜ!! 流石に新世界じゃあ二人だけだと心許ねえ!」

「そうだね……面白そうな人が居たら誘ってみるよ」

——二人が入港を始めた時、海軍本部では会議が行われていた。その会議の議題とは海軍内でも上位の実力者であるクザンから逃げ切ったディアンヌのことであった。

「——そのディアンヌとやらは全く情報がないのはホントか？」

「ええ。全く見覚えがない実力者だったんで、手配書やら警戒人物書やらいろいろ調べたんですが、ディアンヌのデの字も出てきませんでしたよ」

「もしや……なあクザン、そいつの髪はツインテールじゃなかったか？」

「あれ？ ガープさんの知り合いかなにかですか？」

「ああ、ワシが追っていたとある海賊の見習いだったぞ」

「おいおい!! ガープ！ お前が追っていた海賊なんて一人しかいないじゃないか!!」

「そうだ、そのディアンヌという奴は『ロジャー海賊団』の見習いだった」

「はあ……クザンを退ける実力があって『ロジャー海賊団』の『元見習い』となったら賞金をかけるほかあるまい」

——元見習いのディアンヌは今この時を持って政府に海賊として認められたのだった。

この時入室が許されていたもう一人の中将が少し顔を顰めていたのだが誰も気づかなかった。

「体が巨人みたいになる『悪魔の実』の能力を持つディアンヌか……」

「何か言ったか？——」

「……いえ何も」

「そうか」

そう言った男は普通の巨人族より少し大きい巨体を持っていた。

## “愛と金”

—— “シャボンディ諸島” に辿り着いたディアンヌとキャンドラであつたが、そこで見したのは “前半の海” を制覇した海賊達がひしめき合つてゐる姿だつた。

“前半の海” を制覇してきた海賊たちは懸賞金5000万ベリーを優に超え、億超えの海賊もざらにゐるため “シャボンディ諸島” にゐる海賊たちは猛者揃いであつた。

「いやー、強そうな海賊がいっぱい居るね」

「そうだな。だけど喧嘩売つたりするなよ。絶対に面倒くさくなりそうだからな」

「分かつてるよ。それにそこまで喧嘩つ早い訳じゃないんだけどなく。キャンドラ勘違いしてゐない？ 私は降りかかる火の粉を払つてるだけなんだから」

あー、でもあの時の海賊は私から襲つてたような気がするけど……うんきつと向こうが悪かつたに違ひない。それに相手は海賊だつたわけだから襲われても仕方ないよね？

海軍の方は自分たちから行かないと私たちが捕まっちゃうから正当防衛だよな？  
えつ、違う？ 公務執行妨害？ 大丈夫だよ。あの時の私は特に手配書がまわつてたりしてたわけじゃないから善良な市民だつたのに向こうが仕掛けようとしてきたから……あ

れ? やっぱり私から仕掛けたから公務執行妨害かな? でもまあこの世界にそんな法律ないでしょ。

「降りかかる火の粉を払う? 襲うの間違いだろ」

「なんか言った?」

「い、いやなんでもねエ」

はあ、キャンドライに言われちゃったよ。私襲つてのか……まあそんなの気にしないんだけどね!! だつてそんな細かいこと気にしてたら海賊なんてやってらんないし、ストレスで禿げるからね。

「あんまり細かいこと気にしていると禿げるよ」

「んなツ!!? は、禿げるのか!?! もう気にするの辞めようかな……」

なんかキャンドライがブツブツ言ってるけど、それが禿げるって言うてるのに……うん。キャンドライが禿げてても私は見捨てないよ。………多分。

「あれが ヒューマンシヨツプ “人間屋” か」

「……人の “欲” が具現化したみてえな物だな。自分の利益のために人を攫つて奴隷にしちまってるんだからな!! ……まあおれら海賊も自分の “欲” に忠実に動いてるだけだからそう変わるねけどな」

「そうだね。でも人の原動力なんてもんはほとんどが “欲” から来るものだし、仕方な



いよね」

そう。人間なんてものは“欲”を満たすためだけに動いてる。だから人は海軍にだつて海賊にだつてなつてしまう。海賊は単純に自分の欲を満たすために、海軍は自分の“正義”に従つてなんて傍から見たら善人みたいなことを言つてるけど、そんなのはクソみたいな偽善であつて自己満足するためだけに動いてるだけであつて、アイツらは市民のためだなんて考えちゃいない。もし考へてるなら天竜人みたいなクソ野郎どもを世界のトップになんか置いておくわけが無いからね。

そもそも世界に絶対的な権利なんてものは存在してはいけないと思う。もし存在していたとしてもそれは自分の実力で掴み取つてこそその物だと私は思つてる。自分の“欲”しか考えない自分の血筋しか取り柄がないゴミ共が持つてるから腐敗していく。だから私は天竜人から人々を守るような力を持ちたい……。

「……長、……ん長、船長!!」

「な、何?!」

「急に黙り込んでどうしたんだよ」

「ご、ごめんね。ちよつと天竜人への怨みが再燃しちゃつてた」

「再燃?よく分かんねえが“人間屋”<sup>ヒューマンシップ</sup>の中に入るのか?」

どうしようかな……別に入つたとしても買わなきゃいいだけなんだけど、もし天竜人

が居たりしたら速攻で手を出しちゃうだろうし、人が堂々と売られてるのを見るのは気分が悪いしなあ……。

「今はやめておこうかな？」

「そうか、ならどうする？」

「賞金首の海賊でも狩ってお金を稼ごうかな？ 今ならまだ私たちの手配書はまわってないでしょ」

そう考えているディアンヌだったが、手配書は配られていた。なぜなら「シャボンディ諸島」は海軍本部のすぐ側にあるため手配書が配られるまでの時間にタイムロスはほぼ無いに近かった。そのためディアンヌの手配書は、「シャボンディ諸島」にいる賞金首を討ち取って稼いでいる賞金稼ぎの手に渡っていた。

「ねえ、キャンドラー」

「なんだディアンヌ？」

「なんで私たちこんな大勢に追われてるの!!!」

「そりやあ手配書が出回ってるんだろいな」

「なんでよ!! 早過ぎない!?! 私たちが海軍船を襲ったのは、ほんの数日前だよ!!!」

「そりやあ船長が戦った相手は海軍本部“少将”だったからな。そんなやつから逃げ切ったのが無名だったらすぐに懸賞金をかけるだろうからな。仕方ねえだろ」

「キャンドライーはなんでそんなに冷静なの!!?」

『〃巨腕のディアンヌ 〃懸賞金3500万ベリー』

「おれには懸賞金がついてねえからな。賞金稼ぎが捕まえるとしたら船長だけだろ」  
「ずるいなあ……そろそろ暴れてもいいかな?街から離れて来たし」

「そうだな。市民は見当たらねえからいいんじゃないやねえか?」

そう私たちは闇雲に逃げていたわけでないのだ!!……まあ最初は思った以上に多くの賞金稼ぎに追われてたからビビって逃げてたけど……そんなことどうでもいいんだよ!!市民がいるところで暴れてもしたら海軍が来てただろうし、それに市民に顔バレしたら買い物とかがやりにくくなるからね。

「やるのか?」

「うん!これまで私は巨大化の能力しか使ってなかったから、〃幻獣種〃と呼ばれる理由を見せつけてあげるよ」

「やっぱり〃幻獣種〃だったのか……」

「——〃砂の渦〃!!」

私が地面を触ると賞金稼ぎが居る地面がまるで流砂のように変化して、地面が賞金稼

ぎを動けないように拘束した。

そう私の能力の一つがこの大地を自由自在に操る力。私は「クリエイション創造」って呼んでい  
る。

よし！相手を拘束出来たから……

「逃げるよ!!」

「逃げんのかよ!!」

「だって今賞金稼ぎを倒したとしても旨みがほとんどないでしょ？あるとしたらコイツ  
らの持ち金だけど、見るからに持ってないでしょ……」

私たちを追っていた賞金稼ぎたちはポロポロの服を着て、武器と言えるものを持って  
る奴も居るけどサビだらけの剣だし……きつとこの島に来る賞金首たちを倒す実力が  
ないのに「金」が無いから賞金稼ぎをやってる貧乏人たちってところですよ。

「貧乏人から取れるものなんてないんだから早く街に戻って買い物するよ」  
「分かった」

——私たちは地面に足をとられて動けない賞金稼ぎたちを放っておいて街へと帰っ  
てきた。

私たちは特に欲しいものとかはないのでブラブラと街を歩いていると街からとある

声が聞こえてきた。

「なあ知ってるか？ “海賊王” がついに海軍に捕まったらしいぞ」

「ああ、それに不満を持ったらしい “金獅子” が単騎でマリルフォードを襲撃してマリルフォードの町を半壊させて捕まったらしいぞ」

「新世界の “四強” のうち二人がインペルダウンに沈むなんて誰も予想出来ねえよな……絶対に新世界は荒れるな」

「えっ——!？」

いくらロジャー船長が処刑される未来を知っていたとしても、驚きが隠せなかった。あんなに強かったロジャー船長が……誰よりも自由を愛したロジャー船長が……自首をするなんて。

私は “金獅子” と同じようにマリルフォードを襲撃しようと思った。けど

「おい船長。マリルフォードを襲撃しようなんて思うなよ。あの “金獅子” でさえガーブ、センゴクだけで止められたんだ。 “金獅子” 襲撃で守りが固くなったマリルフォードなんて落とせるもんじゃねえ!!」

というキャンドラーの言葉で踏みとどまることが出来た。せめて船長の最期を見届けてあげようと思っただけど、処刑が “東の海”<sup>イーストブルー</sup>で執行されることを知って私は諦めた。けど映像伝虫によって放送されるらしいから見ることにした。

——あれから五日が過ぎ、*“海賊王”*、ゴールド・ロジャーの死刑執行が行われる時を迎えた。

彼の死に際に放った一言は全ての海賊に夢を与え、海軍は頭を悩ませる原因を作った一言だった。

『おれの財宝か？欲しけりやくれてやるぜ…探してみろこの世の全てをそこに置いてきた』

「ロジャー船長……私は貴方みたいに立派でカッコイイ海賊になります。この貰った悪魔の実」に誓って」

こうして一人の海賊が改めて決意した。自分の初恋の相手に負けないほどの立派でカッコイイ海賊になることを……。

彼の死をもって世は大海賊時代を迎えた!!

——ロジャー船長の処刑から1ヶ月が経った。ディアンヌは1ヶ月間船の中で泣いて寝込んでいた。その間キヤンドラーは*“海賊王”*の死亡をもって始まった*“大海賊時代”*で台頭してきた海賊の情報収集していた。

「船長……もう大丈夫なのか？」

「うん!!この世界を生きていく覚悟は出来たから」

「そうか……頑張ろうな」

「一緒にね」

「そうだな」

キャンドラー少し頬を赤らめているけど……君みたいなオッサンが頬を赤らめた姿なんて誰得なの!?!知らないよ!?!オッサンの照れてるシーンなんてどの客層にも嫌がられるだけなんだけど!!

「“人間屋”に行くよ」

「どうしたんだ?急に考えを変えて」

「天竜人に買われるより私たちが救ってあげる方がいいと思っただんだよ」

「なら救いに行くか」

「うん」

——私たちは人間屋の多くがある1番から29番を目指した。そこは荒くれ者が集まる無法地帯だった。

「悪そうなのがいっぱい居るねえ」

「そりゃあ“人間屋”の近くだからな。海軍がわざと見逃してる“人間屋”の近くなら

捕まることはねエからチンピラ共が集まってんだろ」

「なんか良さそうな人は居ないかな〜?」

「チンピラを仲間にすんのか?」

「キャンドライもみたいな面白そうな人が居たらね。」

キャンドライも出会った時はチンピラみたいだったけど、話してみれば過去に何かありそうだし、きつと私には面白い人を見分けられる力が備わつてると思うんだよね……。

「あの檻にいる子滅茶苦茶可愛いんだけど!!?」

「ありやあ、〃人間屋〃の商品だな」

「あんな可愛い子も奴隷にされるなんて……私が買ってあげようかな?あの見た目なら天竜人が来たら買っていくはずだし……」

「だが、見た目はいいが戦力にはならないんじゃないか?」

「別にいいんだよ。実力なんて私が修行をつけてあげればある程度は身に付くだろうけど、見た目はどうにもならないからね!」

「じゃあ話しかけてくるね」

あの子ホントに可愛い子だなあ……食べちゃいたいぐらい。まあ今の体だと難しいけど……。



「ねえ君はなんて名前なの？」

「——誰？」

「うーん、海賊？」

「——っ!?!私を買うの？」

「買ってあげるよ」

「そう、ですか……」

「じゃあお金払ってくるね」

「……」

私は中に入ってお金を支払ってきた。向こうは少し吹っ掛けて来たけど少し腕を大きくして話したら値引きもしてくれた。優しい人だね!!

その後可愛い人を受け取ったけど、無言を貫いていたんだよね。名前だけは教えてくれたけど

「……ねえ名前はなんて言うの？」

「——ステラ」

「へえ〜可愛い名前だね」

「おい!!ステラを離せ!!!」

「どうした急に殴りかかってきて青年」

「ステラを離せつつてんだろ!!」

「へえ……この子に惚れてんだ」

急に殴ってきた1個上ぐらい青年だったが、ただのチンピラにしては拳が鋭かったけど海賊にしては弱かったので、簡単に受け止めることが出来た。

「この男磨けば光るね!なら仲間にするしかないでしょ!!」

「君に提案があるんだ」

「興味ねえよ!!」

「君も私の仲間にならない?そしてステラを解放しない?」

「お前を倒してステラを取り戻す!!」

「はあ……まだ実力差が分からないのかな? ディアンズのグーパン 巨人の石段!」

ディアンズが巨大化させた腕によつて殴られた男は「人間屋」の向かいにある家屋まで飛んで行った。

「私は親切で提案してるわけではないんだよ?だって海賊だもの。君が戦力になりそうだから見返りを提案してあげてる内に仲間になっておいた方がいいよ?」

「はあはあ……お前が守る保証なんてねえだろ」

「そうだね。でも今の君に選択肢なんて一つしかないんじゃない？」  
「……ひとつ聞いておきたいことがある」

聞いておきたいことってなんだろう？自分が置かれる待遇とかかな？それなら普通にキャンドライーと同じくらいにするつもりだけど……。

「お前は『金』<sup>カネ</sup>を持つてるか？」

「金？えっ？待遇とかじゃなくて金？」

「ああ金だ」

「そりゃあそこそこは持つてるけど……大富豪ってほどは持つてないけど……」  
「そうかなら大丈夫か……」

「なにが大丈夫か分からないけど、仲間になるの？ならないの？」

「仲間になる」

「そう……よろしくね！えーと」

「おれの名前は……テゾー口だ」

## 魚人島

——「魚人島」それは魚人と人魚が住む「リュウグウ王国」がある島。島と言っても海面にある訳では無い。マリージョアの下1万メートルの深海にシヤボンに包まれて存在している。

「次に目指すは魚人島!!その後は新世界入りする訳だけど、実力が足りません!!なので戦闘員のテゾーロには覇気を戦闘員ではないけど一応ステラにも自分の身を守るくらいには強くなつてもらおう予定だから」

「おれは何をすればいい?」

「……じゃあテゾーロの組手相手でもしてもらおうかな?」

「組手か……おれは厳しいからな!気を引き締めおけよ!!ガハハハ」

「こんなのろそうな奴になら勝てそうだな」

「ガハハハ……!!雑魚がなんか喚いてやがる!!」

「テゾーロはキャンドラーのことを舐めない方がいいと思うよ……まあやれば分かるか」

キャンドラーの実力は相当あるからね……まあ全力を出してるところは見たことな

いんだけど。

「よし！ステラは私と一緒に格闘術を学んで貰うから」

「……分かったわ」

——その後新たに仲間になったテゾーロとステラの修行が始まった。

太った見た目からキャンドラーを舐めていたテゾーロだったが全くもってキャンドラーに攻撃を当てる事が出来ていなかった。

「おいおい！おれはのろそうじゃなかったのか!？」

「クソっ!」

キャンドラーの挑発に簡単に乗ったテゾーロはキャンドラーに殴りかかった。その拳をその見た目からは考えられない軽やかな動きで避けて軽く蹴り飛ばした。

「相手の挑発に乗ってたら負けちまうぞ!!」

キャンドラー……そのセリフブーメランだよ。私と初めて会った時に少し煽っただけで殴りかかってきたでしょ。

「おい船長!!その呆れ顔はなんだよ!!？」

「さっきのセリフブーメランだなあっと思ってる」

「あん時は酔ってたから仕方ねえだろ」

「隙あり!!」

「隙なんてねえよ!!」

私と話してたキャンドラだったけど不意を付いてテゾーロが殴りかかって来たのに即座に反応して軽く受け流してた。……うんやっぱり体型からは想像できないくらい素早いね。どのくらいの実力を隠してるんだろう? 流石に「海軍大将」レベルは無いとして一部の「海軍少将」以外の「海軍少将」になら勝てるのかな? あのクザンとかいう能力者には勝てないと思うけど……勝てないよね? もし勝つたりしたら船長としての面目が丸潰れだよ!!

「よしステラ! 早く組手やるよ!!」

「……ええ」

「いくよー」

私はステラへと襲いかかった。襲いかかったと言ってもゆっくりと拳を振るっただけだけど……。

「痛あ……」

「この速さの拳も避けられないか……」

「ごめんなさい……でも仕方ないでしょ動くのは久しぶりなのだから」

「別に怒ってないよ。だけでもうちよつとだけ動けるかな……って思ってただけだから」

「……期待に添えなくてごめんなさい」

「まあ最初はみんな同じようなものだから、そこからどれだけ成長出来るかが一番大切だから頑張つてね」

「……はい」

「じゃあ今度はステラから来てみて。戦闘つてのは先手必勝だから」

「じゃあ行きます！」

うーん、やっぱり拳に迷いがあるなあ。まあ戦闘奴隷つて訳でもないし、最初はそんなものなのかな？ 私の場合は恨みに任せて体が動いてたから迷いなんてものは無かったけど……。

でもこの世界に遠慮なんてもんは一切必要ないからね。遠慮なんてしてたら自分が喰われる弱肉強食の世界なんだから。そう私の家族たちみたいに……。

「どうしたの？ 顔怖いよ」

「……ごめんごめん。ちよつと考え事してた」

「そう。早く続きをやりましょ」

「別に殴つても大丈夫だったのに。だつて貴女ぐらいの拳だつたら目を瞑つても避けられるし、当たつても全く痛くないからね」

あの程度の速さだったら、見聞色の覇気で反応しきれるし、そもそも覇気が無くても

今まで培って来たこの体が勝手に反応すると思う。

キャンンドラーレベルの相手だと避けられないかもしれないけど、そんなレベルの相手に油断なんてしないかもだけど。

「じゃあもう一回私に攻撃してみて」

「行きますよ」

ステラは右腕で殴りかかってきた。それはさつきまでと違って迷いがなかった。

私の言葉に安心したのかな？それとも挑発だと思っただのかな？まあどちらにしてもこれは一つ成長だね。まあ精神面の成長だけで拳が当たったりする訳じゃないんですけどね。

「ほらほら〜！そんな拳じゃあ当たらないよお!!」

「——ツ！そんなの分かってるわよ」

息が上がり始めてるなあ……まあ今日はこんなものかな？元々がただの女の子だったから一日二日で成長はしないかな？って思ってたけど精神面の成長は早かったなあ。これは結構化けるかもな。

——そこから1ヶ月程二人の修行を行っていた。元々不良でそこその実力は有していたテゾーロは『前半の海』で、ある程度は戦える程まで成長した。



しかし一番成長したのはステラであった。ステラは私の四分の一程度の速さの拳を捌けるほどに成長していた。

「ステラもテゾーロも随分成長したね」

「あら褒めてくれるの？ありがと」

本当にステラは成長したよ。特に精神面が……なんか上から目線な気もするけど、まあ海賊はそんなくらいがちょうどいいのか。

「おれは全然だ。キャンドライーに一撃も入れられなかった」

「だってキャンドライーは強いもん」

「船長の方が強いだろうが」

「……そうだね」

キャンドライーは実力を隠してるのは確実なんだけど、その理由がよく分からないんだよね。この世界は実力至上主義で力のない者は淘汰される。特に海賊なんてもんは力があればなんでも出来るから誰だろうと力を求めている。なのにキャンドライーは力を隠してるのって……出生とかに何かあるとか？まあ考えたって分からないもんは分からないよね。

「まあキャンドライーが強いかどうかなんてどうでもいいんだよ!!船のコーティングは終わってるから行くよ!!」  
「魚人島」へ!!!」

ふう……私たちの実力があれば流石に魚人島を乗り越えて「新世界」入りすることが出来るでしょ多分。

そう楽観的に考えていたデイアンヌだったが魚人島にて強大な敵と出逢うことになるのだが、それをまだ彼女らは知るはずが無かったのだ。

「やっぱり何度やっても海の中を進むのは変な感じだな」

「あれ？ キャンドラーは新世界に行ったことあるの？」

「……ああ、何度か」

「何度か、ね……まあいいや」

そして私達は「魚人島」の入口へと辿り着いた。今回は前回と違ってネプチューン王が率いた騎士のお出迎えはなかった。しかし魚人島から強大な何かがいることが感じ取れた。

それはロジャー船長に負けず劣らずの力の覇気を放っていた。今を生きる者でロジャー船長に近い実力を持つ者は数人しか居ない。

海軍からは「海軍大将」である「仏」のセンゴク、前線を引退したが元は大将であった「黒腕」ゼファー、そしてロジャー船長と共闘した「英雄」ガーブだが、海軍が表立って魚人島に行くことは無いだろうからこの三人ではないはず。

海賊からは「ビッグママ」や「金獅子」、一步劣るが「百獣」やバレットも居るが、「ビッグママ」は自国から出るなんて話は滅多に聞かないし、「金獅子」はインペルダウンに捕まっているはず。「百獣」は新世界から出ることは無いだろうし、バレットは海軍からバスターコールを受けて「金獅子」と同じでインペルダウンで捕まっているはず。

やっぱりこの先に居るのはロジャー船長とライバルであった「大海賊」白ひげ!!

「なあ急に『止まれ』ってなんで？このまま海に留まっているのは危ねえぞ？ここまで何も無かったからって、これからも何も起こらねえ保証にはならねえぞ」

「……もうここまで来てしまったのは仕方ない進むよ」

「進むぞー!」

私達は「魚人島」入りを果たした。中に入ったことで「白ひげ」から発せられる圧倒的な存在感が戦闘への経験がほとんどないステラでさえ感じ取っていた。

「へ、これはなに?」

「これは「魚人島」の奥に居!?!奥に居ない!?!」

「海賊ども「魚人島」に何の用だ!!」

これは相当ヤバい状態だね。最初から全力で戦わないと死にそうだね。でも獣型の

方があの巨体から繰り出される薙刀を受け止められそうだね。

「——『動物系』<sup>ゾオン</sup>の能力か、厄介な。だが厄介なだけで敵では無い!!」

「分かってるけど、いち船長として負ける訳にはいかなから抵抗させてもらうよ!!」

白ひげが持つ『むら雲切』と全身が巨人へと変化したディアンヌの拳がぶつかり合った。ディアンヌの覇気も相当なものであったが長い間海賊として最前線を生きてきた白ひげには全く歯が立たなかった。

「はあはあ…ほんとに嫌になっちゃう。でも強い奴を相手にするのは燃えてくる!!——」

『サンドワール  
砂の渦』

「——むッ!!ただの『動物系』<sup>ゾオン</sup>じゃねえのか。幻獣種だったとはな!!」

「やっば」

『砂の渦』で白ひげの足止めは出来たけど、明らかに能力使ってきそうだよね!!? だって腕の筋肉が一気に太くなってるとし、腰を捻って薙刀を後ろに引いてるとし、このままだと撃ってくるよね!! 世界を滅ぼせる力を持つ『超人系』<sup>パラミシア</sup>最強の悪魔の実『グラグラの実』の力を!!?

「待ってくれオヤジ!!」

「なんだア、マルコ!」

「そいつはロジャーの所に乗っていた見習いだよ! だからそれを撃つのは少し待って

くれ」

「ロジャーの見習いだとオ!? ロジャーの見習いは赤髪と赤っ鼻だけじゃねえのか!」

「ロジャーのところと最後に戦った日に話したんだ。その時は能力者じゃなかったが、確かに居たんだよ!」

「ほんとかア小娘エ!!」

「う、うんホントだけど」

ホントだけど声と威圧感がデカすぎて腰が抜けそうだよ。でもありがとう!! マルコ!! これが終わったらほっぺにチューしてあげるよ!!

「——ツ!? なんか寒気がするよ!」

どうしてかなマルコくん? 寒気なんてしてるのかな? お仕置して上げないと。あー、でもお仕置なんてしたら白ひげにボコボコにされちゃうなあ。どうしよう。本当にチューをしてやろうかな?

「ロジャーのところのガキなら話だけは聞いてやる! どうして “魚人島” に来た!」

「“新世界” 入りを目指して」

「新世界入りだアア!? そんな少数で何言ってるんだ!! バカなのかアテメエらはア!!!」

「……バカじゃないよ。だって私強いもん。白ひげには劣るけど」

「お前みてえな小娘が強いだと? グラララララ!! 笑わせる。だが試してやろう。おい

マルコー・コイツの相手をしてやれ」

「えー、そいつなんか怖いんだよい」

「小娘相手にビビってんのかア!! そんなんで白ひげ海賊団の1番隊隊長を任せられるのか!？」

「えっ!?! でも1番隊はベイがやってるよい?」

「あいつは独立して自分の海賊団を創るらしいからな。1番隊隊長の席は空く。そこをマルコかジョズに任せるつもりだア。ここでマルコが勝てばマルコに任せてやる。逆に負ければジョズが1番隊の隊長だ」

「そんなのやるしかないよい。おれが1番隊隊長になるために倒れてくれディアンヌ」  
「ちよつと勝手に私を1番隊を決める道具にしないでくれないかな?」

それに私次第で白ひげ海賊団の1番隊を決まるなんて、どんだけこの世界に影響を与えると思ってるの!？」

私がマルコに絶対負ける実力差とかならないんだけど、実力はトントンだよ!?! だから私が勝って白ひげの1番隊隊長と3番隊隊長が入れ替わっても文句言わないでね。

「私がマルコに勝って1番隊の隊長になれなくても文句を言わないですよ」

「大丈夫だよ! おれがディアンヌに負けることはないよい」

「これはロジャー海賊団と白ひげ海賊団の元見習い同士が行う。代理戦争に近いかも

ね。だからロジャー船長と同じで負けるつもりなんて一切ないから」

「それならおれだつて負けるつもりはないよい!!」

そう。これはもう戦うことが出来なくなつたロジャーとニューゲートの意志を継ぐ元見習い達による戦いだった。

そのため二人は船長の看板に「敗北」という名の泥を塗らないため白ひげが思つて  
いる以上に本気で戦おうとしていた。

「昔と違つて私はマルコと一緒に能力者だから舐めないでよね!!」

「分かつてるよい。動物系<sup>ゾオン</sup>、幻獣種<sup>フエニックス</sup>、つてところまで一緒なのも分かつてるよい」

——「不死鳥マルコ」トリトリの実（幻獣種）モデル「不死鳥」

——「巨腕のディアンヌ」ヒトヒトの実（幻獣種）モデル「嫉妬の巨人<sup>サーベント・シン</sup>」

「行くよマルコ!!」

「ディアンヌに教えてやるよい!!新世界に居る海賊の強さつてやつを!!」

——元は見習いだった、次世代を担うことになるであろう海賊が今魚人島入口でぶつかるのだった。

## 新世界

——魚人島。

二人の「ルーキー」がぶつかっていた。

一方はロジャーやシキが表舞台から消えた今「海賊最強」の名を背負う「白ひげ海賊団」。その中でも若手筆頭である「不死鳥マルコ」。

もう一方は今亡きロジャーが率いた少数精鋭のロジャー海賊団で見習いをやり、今では海賊の船長をやっている「巨腕のディアンヌ」。

双方共に見習いを卒業して間もないにも関わらず「前半の海」の船長クラスであり、新世界でも十分通用する実力者だった。

そんな二人が魚人島でぶつかろうとしているのだ。この国の王はきつと騎士たちを連れて様子を見に来るだろう。しかしそれでも二人は戦うことは辞めないだろう。それはマルコの1番隊隊長への昇格を掛けているから……いや違う。男？のプライドを掛けた勝負だからだ！

「クリエイション創造」！



ディアンヌが地面に触れて創り出したのは巨人化したディアンヌの身長を越すほど大きい大槌だった。ディアンヌはその大槌を持ち、振り上げた。

「そんな武器じゃ、おれは倒せないよい！」

「これで直接攻撃するわけじゃないよ。マザー・カタストロフ」  
「大地の怒号」!!」

ディアンヌは創り出した大槌で地面を叩き付けた。

それによって砕け散った地面は空へと巻き上げられて、空で巨大な一つの大岩となった。

「こりゃあ、少しやばそうだ……」

「行けえ!!」

上空に佇む大岩はディアンヌの合図とともにマルコへと落ちていった。空を飛べるマルコでも相当な速度で落ちてくる大岩から逃れることは出来ず、大岩の下敷きになってしまった。

今までディアンヌの本気で戦う姿を見たことがなかったテゾーロとステラは体を動かすことが出来なかった。テゾーロはディアンヌとの圧倒的な力の差を感じて、ステラは自分とそう歳の変わらない少女がここまで強くなれたことに……キャンドラーは少し考え事をしているのか俯いていた。

「危なかつ——ッ」

マルコは人獣型となって岩を突き破り空へと出てきた。しかしディアンヌはマルコの実力を認めていたので、岩から出てくることを読んでいた。

マルコの動きを読んでいたディアンヌは岩から出て来た瞬間に手を組んで叩き落とした。その攻撃はディアンヌの「武装色」の覇気によって「不死鳥」と名高いマルコにダメージを与えていた。

「はあはあ……今の威力は覇気だけじゃないだろ」

「あれ？よく分かったね。私の能力を使ってたからね」

「幻獣種つてのはホント便利だよ。……おれのみみたいに」

マルコの体の青い炎が燃え上がり、ボロボロだった体を元の状態へと戻していた。この能力こそが彼が「不死鳥」と呼ばれる理由である。トリトリの実幻獣種「不死鳥」フエニックスは青い炎による驚異的な回復力を持つ。

「不死鳥の相手は骨が折れるよ。でも強い相手は嫌いじゃないよー」

そこから二人の戦闘は熾烈を極めた。それもそうだろう。普通の動物系ゾオンは自分の肉体フィジカルが重要なのだ、そこを一番に鍛えるだろう。

それにもし二人が覚醒してるとしたら異常なタフネスさと回復力を持っている。そんな二人が全力で戦ったとしたら一日程度では終わらないだろう。

「はあはあ……そろそろ倒れたらどうだディアンヌ」

「なに言ってるの……戦いはこれからだよ」

二人が戦い始めて二日が経った。二人はボロボロだったがまだ戦いを辞めるつもりはなかったらしい。

「おいおいまだ戦闘を続けるのかよ」

「流石、動物系、だな!!」

テゾーロとキャンドラーはディアンヌの普通に見たら異常とも言える体力に驚いていた。

反対側に居る白ひげも驚いてはいたが、彼は違うところに驚いていた。それは同じ見習いだったジヨズを含めて同世代の中でもマルコは優秀だと思っていた。しかしここまで実力が拮抗する者がロジャーのところには新人見習いとして居たことが……何故若い少女がここまで力を得るに至ったのかを……。

「時間を掛けすぎたよい」

「終わらせよう。嫉妬の大槌!!」

「終わるのはそつちだよい。鳳凰印!!」

ディアンヌは創り出した大槌をマルコに向かって振りかぶった。大槌は「武装色」を纏っているのので、「不死鳥」と呼ばれるマルコでも体力を大きく削られた今では致命傷となりうる攻撃になるだろう。

それはマルコの攻撃も同じだった。人獣型となつてゐるマルコの蹴りは、ディアンヌの体を吹き飛ばす程の威力を持つ。その攻撃に「武装色」を纏つてゐるとすれば、まともに当たれば体力お化けのディアンヌですら行動不能にする攻撃となる。

「これは勝負着いたな……」

ふと誰かが呟いた。その言葉の後二人の攻撃の衝撃波が止んで煙も晴れた。そこで立つていたのは傷だらけで満身創痍のマルコだった。

「これで一番隊の隊長はおれだよい」

しかしマルコもそう言った後に倒れた。

白ひげは倒れたマルコを抱えてキャンドラーの方へと近付いてきた。

「キャンドラー」

「ニューゲート」

「――」

「――」

「――っ!?!」

二人は何か話していたが、近くに居たテゾーロやネプチューン王にさえ届かない程の声の大ききさで話していたので何を話していたのかは分からないが、二人が赤の他人であるようには見えなかった。

話し終えたキャンドライーは倒れているディアンヌを背負って船の方へ帰ってきた。

「テゾーロ。船長が起きるまで船で待機だ。一応白ひげと話を付けたからリュウグウ王国に入国は出来るがどうする？」

「……船で待つ」

「そうか」

キャンドライーはそう言って船に入って行った。テゾーロの頭には白ひげ相手に話を付けることの出来るキャンドライーのことしかなかった。

ディアンヌが起きるまでは一日を有した。気絶するまで戦闘していたのに一日で起きるなど普通の人間では不可能だろう。だが彼女は一日で起きたのだ、これで彼女が普通ではないことが証明されたのだ。

「私復活う!!」

「——っ！急に起き上がらないで」

「ゴ、ゴめんなさい」

ディアンヌの看病をしていたステラが急に立ち上がったディアンヌに対して怒るとディアンヌはすぐに謝った。この船の船長は誰なのだろうか……。

「ねえ私どれくらい寝てた？」

「一日くらいかしら？」

「一日かあ……キャンドラー達は居る？」

「船の外でテゾーロに修行をつけてると思うわよ」

「へえ、たのし」「貴女は安静にして下さい」でも治つ「ダメです」治「ダメです」な「ダメです」はい」

マルコと戦っていた格好良いディアンヌは何処へ行ってしまったのだろう。ここに居たのは看病の鬼と化したステラにビビりまくっている少女だけだった。

「はあ……久しぶりに負けたなあ。それにしてもマルコ強くなりすぎでしょ」

「あの面白あた……いえ鳥人間の人と知り合いだっただけ？」

『面白あた』まで言ったらほぼ言ってるようなものだから、それに鳥人間“”って言うのもどうかと思うよ……。マルコとは私が見習いやってる時に白ひげ海賊団との抗争があつたからその時にね」

あの時は私もまだ覇気すら使えなくて弱かつたなあ……まあ今でもマルコに負けちゃったし弱いままか……。なんか調子乗ってたかな？ロジャー海賊団の解散からマルコと戦うまで1度も負けたこと無かつたから、ちよつと自分の力を過信してたよ……。

でもまあこんな小さな戦いでへこたれてたら、この先、生きていけないよね!!ロジャー船長や副船長だって弱かつた時期はきつとあるんだから!!!

「起きたか船長」

「体の傷は癒えたからもう出発しよう！」

「えっ？」

「白ひげに挨拶しなくていいのか？」

「別に大丈夫でしょ。白ひげとはまたいつか会うだろうしね」

白ひげ海賊団は新世界を生きる人間なのでディアンヌ達が新世界入りを果たしたらまた出会うことは確実だった。

「傷が癒えたってまだ一日しか経ってないのに!？」

「まあ動物系だからね」

「動物系だしな」

「動物系、動物系ってなんのことですか!？」

ステラは父がギャンブル狂いだったのでろくな教育を受けていなかったもので、動物系どころか「悪魔の実」のことなど知るわけがなかった。

「そっか「悪魔の実」のことあんまり知らないんだっけ？なら私が教えてあげる。悪魔の実は大きく3種類に別れる。私と同じで特定の動物の力を得ることが出来る。動物系<sup>ゾオン</sup>、自身の体を自然物やエネルギーそのものに変化させたり、自在に操ることが出来る。自然系<sup>ロギア</sup>、それ以外は全て超人系<sup>パラミシア</sup>に分類される。それで動物系<sup>ゾオン</sup>は更

に別れる。今存在している動物に変化するのは普通の「動物系」、今では存在しない動物たちをモデルとした「古代種」、そして私やマルコが食した普通の動物とは違い特殊な力を持つ幻の動物に変化することを可能とさせる「幻獣種」があるよ」

「……いいな」

「あれ？ステラは能力者になりたいの？」

「いや能力者になりたい訳では無いけど、力が欲しいなと思って思っただけ」

「私が手に入れてあげようか？今は無理だけどいつかは買えるよ？」

「ただでさえ私は買われてるんだから、これ以上お金をかけてもらう訳にはいかないよ」

「そう思うなら私としてはいいんだけど」

「ガハハハ!!ステラは無欲すぎるな！海賊なんて強欲でいいんだぜ!!」

うーん、ステラはいらないって言うてるけど実力的には心配なんだよね。テゾーロにはあの悪魔の実を与えるとして、ステラはどうしよう……癖の強い物が多い「超人系」だとステラにはちよつと難しいかな……。でも「動物系」は大前提として肉体の強さが必要だからステラには向いて無さそうだし、でも「自然系」は珍しくて数も少ないから手に入るか分からないからなあ……まあ手に入れてから考えるか。

「出発するってどこに行くんだ？」

「目指す先はキャンドラーの地元でもある……ドレスローザ!!!」



私達は魚人島を後にして新世界入りを果たした。きっと私達みたいな戦力の少ない海賊は「新世界」の荒波には耐えられないからドレスローザをナワバリとしてキャンドライーの「夢」を叶えるついでに戦力増強を図ろうと思ってるけど、リク王が私達を認めてくれるとは限らないんだよなあ……まあ着いてから考えればいいか。

——海軍本部、会議室

「あの「ルーキー」が白ひげとぶつかっただど!!?その情報は確かなのかガープ!!」

「たまたま魚人島に居た海兵から聞いたが、白ひげと直接ぶつかった訳ではないぞ。不死鳥」マルコとぶつかっただけじゃわい」

「それでも大事だ!!はあ……決着はどうなった?」

「先に倒れたのはディアンヌらしいが、その後すぐにマルコも倒れたらしいぞ」

「相打ちか……やつの懸賞金を見直さなければならぬそうだ」

まだ若いにも関わらず既に億超えの海賊であるマルコとほぼ相打ちで終わったディアンヌを3500万程度でとどめて置く訳にはいかず、ディアンヌの懸賞金は大幅に上げられることになるのだった。

「それにしても何故ロジャーの元見習い達はこうも強いのか……やはり強いやつ周りには強い奴が集まるのか?」

そう話すセンゴクの手元には二枚の手配書があった。

『白ひげ海賊団戦闘員 “不死鳥マルコ” 懸賞金1億740万ベリー』

『赤髪海賊団船長 “赤髪のシャンクス” 懸賞金9400万ベリー』

シャンクスは大きく暴れていたためロジャー海賊団の元見習いということがバレているが、バギーは見習いの頃から目立つようなことはしてなかったので、海軍にはロジャー海賊団の見習いという事実はまだバレていなかった。そのため見習い3人組の中でバギーだけが唯一懸賞金が掛けられていなかった。

「はあ……ロジャーと “金獅子” を捕らえることが出来て残りはビッグマムとは白ひげだけだと思っていたが、なぜ急に “ルーキー” 共は台頭しだしたのだ。海賊共は私の胃に穴を開けたのか……」

「わっはっはっは!! まだ歳でもないのに胃に穴が空くのか」

「一番の原因はお前じゃわい」

「ぶわっはっはっは!! そうカリカリするなセンゴク。お前もおかき食うか?」

「食わぬわ!!」

—— 魚人島、リュウグウ王国

白ひげは竜宮城の会議室でネプチューン王と話していた。話の内容としては魚人島

のこれからについてだった。

「今この海は『大海賊時代』と呼ばれて多くの海賊が新世界入りを目指してこの島を通る。だからおれのナワバリとさせて貰えないか?」

「海賊が増えて何故ナワバリにならないといけないじゃもん?」

「ロジャーのような気のいい海賊は滅多に居ない。普通海賊つてのは自分の欲のために動いてるからな。高く売れる人魚や魚人は格好の的だ」

「……それは知ってるじゃもん」

「ナワバリになったからと言って何をしろと言うわけじゃない。おれはダチを助けてエダけだ」

「……よろしく頼む」

「ああ」

白ひげとネプチューン王は握手をした。こうして海賊たちに狙われ続けていた『魚人島』は白ひげのナワバリとなることで平和を手にすることが出来たのだ。

## “王下七武海”

——“創造海賊団”は最近新世界入りを果たした海賊だが、超大型ルーキーとして海賊の間で噂になっていた。それもそうだろう。“創造海賊団”の船長であるディアン又は新世界の“皇帝”と呼び声の高い白ひげ海賊団の1番隊隊長相手に相打ちになるほどの実力者だ。仲間の情報はほとんど表に出ないが、船長が実力者であることからその仲間も実力者であるだろうと予想されていた。

「うーん、そこそこ海賊を狩ってきたから七武海入り出来るかなあ〜」

「なんだ船長、七武海に入りてえのか？」

「いや、七武海に入っておけば“ドレスローザ”に着いた時好印象になるかなと思ってね」

“王下七武海”これは政府に略奪を認められた7人の海賊の総称である。“七武海”に名を揃える海賊たちはみな世界に名を轟かせる大海賊ばかりだ。そんな“七武海”になるには他の海賊への抑止力になる“知名度”と“実力”が必要なのだ。

現在の七武海には2名の欠員が出ている。政府としては早急に空席を埋める必要があるのだが、今波に乗っている海賊はルーキーばかりなため“七武海”入りをさせてい

いのか悩んでいた。

そのルーキーとはクロコダイルや「赤髪のシャンクス」、そして「巨腕のディアンヌ」だ。この海賊たちはまだ若い「ルーキー」にも関わらず、世界に名を轟かせている実力者たちであった。

「うーん、七武海に入ってる有名どころって誰か分かる？」

「有名なのは「鷹の目」とか「暴君」ね」

「「鷹の目」に「暴君」か、……そこと比べられると私は劣るなあ。でも私もそこそこ実力をつけたと思うし、新世界の海賊を何度も潰してるんだよ？向こうから来てもおかしくないと思ってるんだけどなあ」

「あらでも貴女も「七武海」の席空いてる2席を埋めるメンバーの候補に入ってるらしいわ」

「なんでそんな情報知ってるのかは聞いてもいいの？」

「あら女の子には秘密がいっぱいあるのよ？貴女も女の子なんだから分かるでしょ？」

ステラよ……女の子だからって政府の機密情報を得る秘密のコネがあるとか怖すぎでしょ!?!この世界での女の子はみんなそうなの?……前世はないよね?まあ今になつてはどうでもいいんだけど……でもちよつとは気になるよね。

「まあ私にも秘密はあるけど……そんな怖いのはないかな？」

「あら？私の秘密のどこが怖いのか分からないわ」

「もういいよ。……七武海には入れたとしてもまだ先っぽいからドレスローザを目指すよ」

「……やつと故郷に帰れるのか」

「創造海賊団副船長」の肩書きを持つキャンドラーは「ドレスローザ」の出身であり、故郷を大国にしたいという夢を持つ。最初は夢を叶えるためにディアンヌに同行していたが、旅をして行くうちにディアンヌの右腕として居るのもいいかと思っている。ディアンヌと出会った当初は中国産「黒ひげ」と呼ばれるほど体がだらしなく太っていたが、今では体が引き締まって「黒ひげ」と見間違えることはなくなった。

「そうだよ。まあそこそこの名が売れちゃったから入港を拒否される可能性もあるけどね」

「だからディアンヌは七武海に入りたかったのか……」

「正解だよテゾーロ君」

「創造海賊団戦闘員」のテゾーロは船長のディアンヌに拾われた元ゴロツキだった。彼は元がゴロツキだったため戦闘の勘をある程度培っていた。そのため戦闘員として成長するのに時間は要らなかった。

彼が急激な成長をしたのにはもう一つ理由があった。それはステラの存在だ。ステ

ラはディアンヌに買い取られた奴隷であり、テゾーロの愛すべき人であった。愛する人を自分の手で守るために強くなることに貪欲になっていたから彼は急激に成長したのだろう。

「あら、来るわよ」

「——ッ！私以上の『見聞色の覇気』だね。流石ステラ」

「おれに任せろ」

敵の襲撃を一番最初に気付いたのはステラだった。新世界に入ってからステラは『見聞色の覇気』だけ異常に発達したのだ。それは船長であるディアンヌを超える感知範囲だった。

襲撃してきた相手は懸賞金が1億ベリーの海賊『狂犬のワンコロフ』を筆頭とした中堅どころの海賊だった。

その海賊は砲撃をディアンヌの船に撃ち込んできた。それを受け止めるのはディアヌやキャンドライではなくテゾーロだった。

「この程度で突破出来ると思われるのは心外だな。——『笑帝』」

「流石テゾーロ。貴方はきつと大物になるわ」

「それは見聞色の覇気で見た未来かな？」

「いや違うわ。でも分かるのよ。……彼が新世界で名を轟かせることを」

それはディアンヌにも分かってた。テゾーロにの才能はディアンヌに迫るものがあり、現在の成長速度で言えばディアンヌを優に超える程だった。

そんなテゾーロは武装色の覇気を纏った右腕から放たれる掌底で船へと撃ち込まれた砲弾をいとも簡単に破壊した。

「おいおい砲弾破壊しやがった」

「船長どうしやすか？」

「そんなの一つだけだろ！野郎ども行くぞー!!」

狂犬のワンコロフは狂犬の名にふさわしく「創造海賊団」の船へと攻め込んできた。その人数は100人。それに対して「創造海賊団」は4人しかいない。普通ではディアンヌ達が勝利するビジョンは見えないだろう。

しかしこの世界は雑魚がいくら集まろうと1人の強者に負ける世界だ。少数精鋭を売りとする「創造海賊団」に雑魚どもでは意味が無いだろう。狂犬以外では歯が立たないのだ。

「弱いなア!!雑魚どもが何人集まろうが強者には勝てねえんだよ!!」

「あらステラさん。キャンドラーが自分のこと強者とか言ってますわよ」

「そうですわね。ディアンヌに勝てないのに強者とか笑ってしまいますわね」

「おいそこ聞こえてるぞ!!」



「お前らバカにしてんのか!!」

雑魚どもをあらかた片付けた。『創造海賊団』はあまり脅威だと思えない。『狂犬』を放置して内輪ノリを始めていた。それにキレたワンコロフは一番近くに居たキャンドライーへと襲いかかった。

しかしキャンドライーは狂犬の攻撃をもともしなかった。殴りかかってきた狂犬の拳をわざと顔面で受けて、カウンターとして狂犬の鳩尾へと蹴りを入れた。

「覇気も使ってねエ攻撃なんか痛くも痒くもねエなア」

「——久しぶりに本気を出してやる。おれが狂犬と呼ばれる理由はな！能力者なんだよ!!」

「それがどうした？新世界で能力者なんか珍しくもねえだろ」

偉大なる航路での能力者など珍しいものではない。それが新世界ともなれば能力者が1つの海賊団に複数いることも有り得る。そんなな能力者であることを自慢するワンコロフはただの脳筋なのか、それとも……

「おれの能力を見せてやるよ!!」

狂犬の体に変化して行つた。その姿はまるで闘犬であつたセントバーナードのようだった。

「あー、あいつただの脳筋だったぞ」

「ただの動物ソオンなんて怖くないわね。だってうちには『幻獣種』持ちがいるのだから」  
 「まあ普通でも使い手が強ければそこそこ強くなるけどね」

動物系は悪魔の実の中で単純で強化がしやすいとされている。その理由は自身の肉体に直結して悪魔の力の力が強化されるからだ。能力を使わないでキャンドライーへとダメージを全く与えることが出来なかった拳ではいくら能力を使つたとしてもキャンドライーに勝つことは不可能だろう。

「おれを怒らしたからな。お前らには苦しみながら死んでもらうぞ」  
 「——出来るものならやってみろ」

そこから一方的だった。能力を使って人獣型になっているワンコロフの攻撃をことごとく体で受けて、そこから相手の体にカウンターを打ち込んでを繰り返してた。

能力を使った攻撃はある程度威力が上がってるだろうけど、そんな攻撃じゃ、うちのキャンドライーにダメージは与えられないよ。

「この程度かア!?それならもう終わりにしてやるよ——  
 //硬化攻羅コカコーラ!!」

キャンドライーは今まで使つて来なかった武装色の覇気を使ってワンコロフのことを殴り飛ばした。今までの攻撃で一番単純にも関わらず一番威力が出ていた攻撃だった。

殴られたワンコロフは気絶してしまったため人獣型は解けて倒れていた。それをキャンドライーは回収するとディアンヌの近くに寄つてきた。

「こいつどうすんだ」

「うーん……海軍に引き渡すかな。その代わりに“七武海”の席を貰えたら万々歳なんだけど……一億程度の海賊じゃあ貰えないかなあ……まあ印象を良くするために海軍に引き渡すよ」

「……そうか」

「あら丁度いいところに海軍船が」

ステラの見聞色に引つかかったのは巡航していた海軍船だった。その船に乗船していたのは海軍中將でも実力者と名高いモモンガ中將だった。

「あれはモモンガ中將じゃん……ちよつと危ないかもね」

「中將一人になにビビってんだディアンヌ」

「モモンガは強いんだよ。今のテゾーロじゃあ相手にならないくらいね」

「創造海賊団の者ども!!」

「船長はモモンガ相手に勝てると思うか？」

「海の上じゃなきや勝てるけど、海の上となると私の能力は巨人化の能力しか使えないから勝てなきやそうだよ」

ディアンヌの能力は地上戦にてその力を発揮するタイプである。ディアンヌは大地を操る能力を持っているため船上では全く効果をなさない能力であった。

「お前らとやり合うつもりは無い!! 私は『海軍本部』中将モモンガ!! お前らを『七武海』に勧誘しに来た!!」

わーお、七武海のこと話してたら本当に来たよ。政府が嫌いだからって自分に利がある事を捨ててたらこの先、生きていけないからこの誘いに乗って、自分に都合がいい時にもでも裏切ればいいよね。

「いいよ! お礼にこいつあげるよ」

「こいつは……『狂犬』か。『七武海』になったとはいえお前が海賊であることには変わりない。賞金は払わぬぞ」

「別にお金には困ってないから」

「そうか……このことを報告しに帰るぞ!!」

ふう、これでドレスローザに着いた時にある程度は印象が良くなるでしょ。問題はリク王とキュロスなんだけど……てか今の王ってリク王なのかな? 原作は少ししか読んでないからいつリク王が王になったとか分からないからなあ……まあ誰だろうと大丈夫か。

「よし!! 晴れて七武海入りを果たしたのでドレスローザへと目指します!!! そこに着いてやることはただ一つ。……ドレスローザの『富国強兵』だよ!!!」

「富国強兵か……」

「なんだそれ？」

「テゾーロ富国強兵つてのはね、その国の軍事力の強化と経済力の発展を目指すことだよ。ですよねディアアンヌさん」

「その通りだよステラ!!」

ステラはホントに成長したよ。その知識はどこから得てるのか分からないけど……もしかして私の知識を読んだりした!?もしそうなら、ちよつと考えなきゃいけないけど……。

まあステラは賢いから外に漏らすようなことはしないとと思うけどね。

「ステラは本当に賢くなったよね。で、その知識はどこで得たのかな？」

「……キャンドライーさんからいろいろと」

「……へえ、キャンドライーが……」

キャンドライーが教えてたなんて意外過ぎるんだけど!?弟子みたいなテゾーロならまだしもステラ相手に知識を教えるなんて……まさか!?ステラを狙つてたりするんじゃない……師匠だからつてテゾーロは譲らないと思うよ。それにステラはどう見てもテゾーロのこと好きだし……ドンマイキャンドライー。

「船長……お前が思ってるみてえなことにはねエよ」

「あらま、気付いちやつた?でもキャンドライーが知識を出すなんて珍しいよね」

「それはおれが脳筋だつて言つてんのか？」

「それもあるけど……キャンドライーは何事も隠しがちだからね」

「——なんの事か分からねえな」

キャンドライーは少し言葉が詰まつてたけど、直ぐに返事をしていた。ホントにキャンドライーは何者なのかねえ……感情を隠すのが上手すぎるよ。初めて会つた時みたいにお酒を飲ませれば感情を表面に出してくれるのかな？

今のキャンドライーは体が引き締まつて、強い覇気も感じ取れる。今のキャンドライーは全盛期ではないと私は思うんだよね。

体は墮落してたから太つて、覇気はキャンドライー自身の「意志」が弱くなつていたからだと思うんだよね。そう思う理由としてはキャンドライーの身のこなしはそこら辺の海賊とは訳が違うし、ダメージにも慣れてるような感じがする。

「……まあいいや」

「そんなのどうでもいいだろ。ドレスローザに着いてからの動きを話そうぜ」

「そうだね。——」

その後、私たちはドレスローザに着くまでの間ドレスローザに着いてからの動きについて話し続けていた。

——“ドレスローザ”

“ドレスローザ”。この国は新世界にあるリク王が統治している国である。昔はドンキホーテ一族が統治する国だったが、ドンキホーテ一族が“世界政府”創設によるマリージョアへの移住の際にリク王一族へと国を譲渡された。そんな歴史のあるドレスローザは人々からこう呼ばれている

『愛と情熱の国』

## ドレスローザ

——ドレスローザ。

“新世界”に位置する愛と情熱の国“ドレスローザ”。

“ドレスローザ”という国は800年以上前にドンキホーテ一族によつて建国された国である。その後世界政府創設に伴い聖地マリージョアへとドンキホーテ一族が移住する際にリク王一族に王権を譲渡されてから現リク王朝が続いている国だ。

現在のドレスローザ国王は若くして名君と呼び声の高いリク・ドルド3世である。彼は国民を戦争に巻き込むようなことをしないため、国としては決して豊かではなかったが国民たちからは慕われる王だった。

そんなドレスローザを訪れた者達はいくつかの事に心を奪われるだろう。

一つは——かぐわしき花々と、この国自慢の料理の香り——また一つは……疲れを知らぬ女たちの情熱的な踊りである——。

「いい女だな」

「テゾーロさん？貴方はキャンドラーみたいなこと思つてませんよね」

「思うわけない。おれはステラ一筋だから」



うわあ……ステラの笑顔がものすごく怖く見える。だつて後ろに虎が見えるよ……。そしてテゾーロはすごいよ！恥ずかしげもなくそんなこと言えるなんて……本当にステラに恋してるんだね。私は応援してるよ。

キャンディー……君は何してるんだい？これはお仕置をしてあげなくちゃいけない事案だね。

「キャンディー……当分は夜間外出禁止ね」

「はア!?無理に決まってるんだろ」

「なにか文句でも?」

「……なんでもありません」

「創造海賊団」の力関係は圧倒的に女性が上のようだ。

その理由はディアンヌの強さによるものだろう。現状としてはディアンヌが一番の実力者なのでディアンヌと同じ性別の女性が力関係的に上なのだろう。

そもそもこの世界は実力至上主義なので性別はあまり関係ないのだ。その証拠に海軍将校にも女性は多数いるし、世界最強の女と名高い「ビッグママ」ことシャーロット・リンリンは「万国」の女王として君臨している。

だがそんな世界でもやはり上位に居るのは男性ばかりだ。それは元々の体の構造が男の方が強く出来るからなのだろう。「ビッグママ」という例外を抜いては女性が

この世界の同種の男性に力で勝てることはないのだ。

「おれが居た頃より笑顔が多いな……」

「それは今の王リク・ドルド3世のおかげじゃない？ 噂に聞いた程度だけど若くして名君として国民に慕われているらしいよ」

「リク・ドルド3世……先代はどうなったか知ってるか？」

「うーん……確か病死だったかな？」

「ディアン又は元々原作弱者なのでこの世界の情報を知るために新聞を読みふけていたため、原作には登場しない情報まで知識として得ることが出来ていたのだ。」

「病死か……」

「先代の死因なんてどうでもいいんだよ!! 今はどうやって国王に取り入るかが大事なんだから!! 潜伏する程度なら今のままでも出来るだろうけど、本格的に海賊として動くとなれば国王からの公認は重要になってくるんだからね!!」

「おいちよつと待て……海賊として動くって何をするつもりだ」

「あれ？ キャンドラーに言っただけじゃなかった？ 私が海賊をやってる理由は2つ！ まずは『海賊王』ロジャーと同じ偉業を成し遂げること……。そして2つ目は……世界政府と天竜人をこの世界の頂点から引きずり落とすこと!!」

「船長の夢は天竜人に支配されない国を作るんじゃないのか？」

「あの時は君の夢に似た夢を出すことで、親近感を生み出してキャンディーが仲間になるように誘導しただけだよ」

「……あん時嵌められたのか……」

「嵌めるつもりはなかったよ。だってあながち間違つてはいなし……。天竜人に支配されない国を強固な地盤として、世界政府を攻め落とすつもりだったもん」

世界政府を個人で攻め落とすことは出来ないなんてこと分かりきつてから、国という地盤が必要だったんだよね。ある程度勢力のある国なら周辺国家との貿易で武器や「悪魔の実」が手に入るだろうし、いちばん重要な兵が手に入るもんね。

私としてはワノ国がいちばん兵としては欲しかったけど、あそこはおでんの国だから迷惑かける訳には行かないんだよね。それに將軍か、大名にでもならなきゃ権力は持てないだろうから外から来た私が兵を使えなさそうなんだよね……。まあ私たちの勢力が大きくなったら頼みにでも行こうかな。

「でもキャンディーの夢は叶えてあげるからWin—Winだね。それとも私と戦って止める？それでも私はいいよ……。だって本気で戦ってくれたらいい勝負出来るでしょ」

「……何言ってるんだ。おれが船長に勝てるわけないだろ」

「え、最初は私勝ったけど今は分からないじゃん。私としては戦ってにおいて戦闘力を理解しておきたいんだけどなあ」

「……分かった。どこか広い場所へ行こう」

「うん！テゾーロとステラも着いてきてね」

「……ああ」

ディアンヌたちはドレスローザに来たばかりで地理が分からないので、キャンドラーを先頭に歩き始めた。そんなキャンドラーが目指す先はドレスローザより北にある無人島グリービットだった。

グリービットはドレスローザと繋ぐ橋の下を闘魚の群れが泳いでいるため無人島となっている。

「この先が人の目に付かなくて広い場所だ。だがここは闘魚が泳いでいる。どうやって進むんだ」

「うーん……私が守りながら進むよ」

ディアンヌがそう言うのと同時に体が巨人のサイズへと大きくなっていった。獣型になったディアンヌは地面から巨大な戦鎧を作り出した。

ディアンヌは巨大な戦鎧を手に持ち歩き始めた。ディアンヌに遅れないように慌てて三人も歩き出した。

橋を歩いている四人を襲おうと闘魚たちが一齐に水面から飛び跳ねて鉄橋にぶつかった。闘魚の巨体は鉄の橋を簡単に凹ませディアンヌたちへと迫った。

「思ってたより弱そうではなかったよ」

ディアンヌは戦鎧に武装色の覇気を纏わして闘魚たちへとぶつけた。巨人の巨体から放たれる戦鎧に覇気を纏わした攻撃の威力は計り知れず闘魚は吹き飛んで行った。

吹き飛んだ同種を見た闘魚たちは萎縮して水面へと帰って行った。

「やつぱり弱かったね」

「……普通は闘魚相手に一発で吹き飛ばす攻撃は打てないんだけどな」

「キャンドライーは前回戦った時より強くなってるかな？ 私は本気を出すからキャンドライーも出してね。……出してくれないと殺っちゃうかもしれないからさ」

「……程々に頼むぜ」

そこから二人の戦闘が始まった。二人は相手の動きを見ようとなかなか動き出さなかったが、先に痺れを切らしたのはキャンドライーだった。痺れを切らしたキャンドライーはリーチの長いディアンヌの懐へと入るため「剃<sup>ソル</sup>」を使って足元へ入った。

しかしディアンヌはただの巨人ではなく「悪魔の実」の能力から来る巨人なので普通の人のサイズへと変化した。

「私相手に足元へ来るのは悪手じゃないかな？」

元のサイズに戻ったディアンヌは目の前に居るキャンドライーを殴り飛ばした。ディアンヌの攻撃にキャンドライーは反応は出来たものの避けることは出来ないと分かって

いたため「武装色」を纏った腕でガードした。

ガードしたキャンドライだったけど、ディアンヌの攻撃はサイズが変わっても強力だったので吹き飛んでしまった。

キャンドライが吹き飛ぶのと同時にディアンヌはまた巨大化して新しい武器を創り出した。その形はまるでボウガンのようなだった。

「<sup>インドラ</sup>因土螺の矢!!」

「マジで船長は殺すつもりなんかよ……あまり使いたくねえが仕方ねえか」

ディアンヌが放った矢は鍔がドリルのように回転している形なので回転しながら飛んでいた。回転することで威力が数倍にも膨れ上がってるのだろう。

しかし巨大な矢がキャンドライに刺さることは無かった。キャンドライが何かしたのか拳とぶつかると同時に砕け散って行った。「武装色の覇気」を纏っていないにしろ相当な強度を持つ矢を破壊したのだ。

それはキャンドライが何かをしたというのがディアンヌにも伝わったのだ。

「思ってた通りだね」

「なんか言ったか？」

「いや何も言っていないよ……そんな事はいいから続きをやるよ!!」

そこから二人の戦闘は丸一日行われていた。<sup>ゾンオン</sup>動物系<sup>オン</sup>のディアンヌに対して、悪魔

の実も持たずに一日中戦い続けたキャンドライは賞賛に値するだろう。そんなキャンドライもディアンヌには勝てず最後は「覇氣」が切れて動けなくなってしまった。

「私の勝ちだね。でもキャンドライは本当に強いよね」

「何言ってるんだ。勝ったやつに言われても嫌味にしか聞こえねえぞ」

「今のキャンドライじゃ、あの攻撃を止められるとは思ってもいなかったよ」

「……なあテゾーロたちはどこ行った」

「あそこに……って居ない。……どこ行ったの!!!」

「おれらが戦闘始めた時には居たはずだぞ」

「誘拐されたのかな？でもあの二人を声も出させずに誘拐するなんて相当な実力者だよ」

「！」

この国でテゾーロとステラを捕まえられる住民は居なさそうだけど……あー、でも海兵とかC Pとかなら有り得るか……。ちよつと見聞色を使ってみただけど島の中央の地下から小さいけど強い力を感じるなあ。この島ってどんな島だったかな？うーん……確かロビンが言うには小人だったかな？

「多分だけこの島の地下に二人は居ると思うよ」

——ドレスローザ // 王宮 //

「グリーンビットに侵入した者共がいるだろ？」

「はい。周辺住民が言うには男3の女1の4人組だったそうです」

「謎の4人組か……しかし闘魚の居る鉄橋を超える実力者たちだ。その者たちが何者であれ警戒はしておいてくれ」

……謎の4人組か、もしそいつらが最近「王下七武海」入りを果たした「創造海賊団」だとしたら、私の軍だけでは対抗できぬやもしれぬ……。そうだとしたらキュロスを早めに迎え入れる必要があるかもしれぬ……。

「リク王よ。闘魚を倒せる者達だとしたら我々では対処出来ない可能性もありますが、どうなさいましょうか？ 私としては暗殺を仕掛けるのが1番だと思えますが……」

「それは駄目だ。私としては殺しは野生に堕ちるも同然だ。この国は「人間」でいるからこそ800年戦争がないのだ。そんな歴史を私たちの勝手な憶測で獣になれば先祖に顔向けできない!!」

私たちは獣ではない。人間として生きてるからには殺し合いなどさせる訳にはいかん。それに私たちに何か危害があった訳でもないんだ。……もし危害があったとしても殺さずに海兵に引き渡せばいいだけだ。



## ——グリーンビット地下

「——ん、……ここは」

「わーっ!!目を覚ましたぞっ!!!警戒態勢!!!」

「大人間が目覚めた!!!」

「ここはどこ?それにこの子達は……確かトンタツタ族だったかしら?でも私は何故ここに居るのかしら……私はディアンヌさんとキャンドラーの戦闘を見て……確か物音が聞こえたから森の中に入ったら眠くなって……そうだテゾーロは!!」

「ねえ貴方たち……私を縛ってる紐を解いてくれないかな」

「おまいは悪い大人間だから解く訳にはいかないれす!」

「私は悪意があつたわけじゃないの……ただ音が聞こえたから森の中に入っただけなの」

「うそをつけ!れそんな言い訳が通じるかっ!!」

「ホントよ」

「えっ!!?ホントならいいれすよ」

「悪い人じゃなくてよかつたれす」

「てつきり悪い人かと……」

えっ!?なんでこんなに信じやすいの!!?騙されやすいからこんな地下で住んでるのかしら……でもこれは使えるかもしれない。

「こら!! 一体何をしている!!!」

「トンタ長様っ!この人はいい人れした」

「そんなわけあるか!!」

「でも本人そう言ってます」

「えっ?!?!ならいいれすよ」

ええ……!!?あの子だけじゃなくてこの種族は全員信じやすいの!!?逆にこつちが騙されてるんじゃないかって心配になる程信じやすいよ!

「私と一緒に捕まった人知らないかしら?」

「緑っぽい髪の人ならまだ眠ってるれす」

そう言われて見に来てみれば……私より身ぐるみ剥がされてるわね。もうほぼ全裸よ……あらご立派ね。起こさなきゃいけないかったわ。

「ねえテゾー口起きて」

「……」

「起きて」

「……」

「起きて」

「……」

「起きろってんでしようが!!!」

「ぶへっ!」

なかなかテゾーロが起きないことに切れたステラは縛られているテゾーロの顔を殴り飛ばした。

「あの人殴ったれすよ」

「やっぱり悪い人なんじゃ……」

「あ、あれは……そう!愛の拳よ」

「……なんだ愛の拳れしたか」

「よかつたれす!」

あれ?そういうえばテゾーロの声が聞こえないけどどうしたのかしら?

「テゾーロ!!」

なかなか声の聞こえないテゾーロを心配してテゾーロが居るところを見ると、壁に頭をぶつけて気絶しているテゾーロの姿があった。テゾーロ程の実力者を意識は無いものの気絶へと追い込むパンチを打ったステラの拳は覇気でも纏っていたのか……。いや違う。これはテゾーロへの愛ゆえのものだ。“麻醉花”程度で非戦闘員のステラよ

り眠り続けるテゾーロを心配して殴り飛ばしてしまったのだ。

## 戦士長

——グリーンビット地下

トンタツタ族によつて地下に連れてこられたテゾーロとステラはトンタツタ族と打ち解け始めていた。それはテゾーロとステラの話術にあった。彼らの話術は相手を程よく持ち上げて自分を売り込むことで相手の懐に入り込んでいた。

テゾーロがトンタツタ族と打ち解けようとした理由はトンタツタ族の脅力が戦力になると思ったからだ。今の創造海賊団はディアンヌとキャンドラが実力者であるため戦えているが、大規模な抗争となると圧倒的に頭数が足りないそこでそこをとりあえずはトンタツタ族で埋めようとしているのだ。

「トンタツタ族のみなさまと取引をしたいと思ひまして……」

「どんな取引なんれすか？」

「少々の武器をあなたの方に提供しますので、もし私たちがピンチになった場合に戦力として手伝つて頂きたい」

テゾーロは腰を低くして交渉をしていた。トンタツタ族は騙そうと思えば簡単に騙せるのだが、もしバレた場合はドレスローザの王に伝わる可能性もあるので友好関係を

築く方が得と考えている。

「……武器とはどんなのれすか?」

「剣や刀、銃などの有名な武器からモーニングスターなどのマイナー武器までありますよー!」

「それは魅力的れすよトンタツタ族!!この国から手に入る武器は良くて剣までれす。それが手に入るなら戦力になるくらいならいいと思うれす!!」

「うむ……ならいいれすよ」

「……やっぱり信じやすいな。この一族を放つておいたら他の所に直ぐに取られてしまふな……おれらで保護しつつ働いてもらうか……」

「友好の証として1人か2人私たちと行動させて貰えないだろうか」

「友好れすか!!それなら自分に行かせてください!!」

「——ぬしは戦士長なのだ。兵をまとめる立場なのだぞ行かせるわけないだろう」

「外が好きなんれす!!」

「……ならいいれすよ」

『トンタツタ族〃戦士長〃レオグロウ』

トンタツタ族の戦士長であるレオグロウは地上で生きたいと思っており、地上で人から物を盗むこともしない唯一のトンタツタ族だった。

レオグロウはテゾーロたちとの友好が続けばいつかは地上で生きていけると考えて、テゾーロたちへと着いて行くことを決めたのだ。

「きつと船長も強い人なら認めてくれるでしょう」

「船長れすか？ 貴方が一番偉いんじゃないんれすか？」

「ええ、あの人は私の恩人であり、尊敬に値する人です……」

——グリーンビット地上

うーん、地下に居るのは分かっているのにどうやって行けばいいか分からないなあ……。能力で地面を割つてもいいけど、そしたら小人たちとの関係が崩れそうだな。うーん割つちやつていいよね。

「割つちやうけどいいよね」

「おいおい割るつて何をだよ」

「そりやあ地面をだよ」

「ダメに決まつてんだろ。近付いて来てんだからな」

ほんとだテゾーロとステラ、そして小さくて強い人が地上へと登つてきてる。小さい人が地下に住んでいる小人なのか？ ステラよりは強いように感じるけど、小さい体のどこから力を出してるんだらうか……。まあこの世界で体の大きさなんて当てになら

ないか。

「テゾーロ、その小さな人は誰かな？」

「この人はトンタツタ族の戦士長であったレオグロウです」

「うわっ！気持ち悪い喋り方やめてよね」

テゾーロみたいなのが敬語とか気持ち悪いよ。でもテゾーロの“夢”はエンターテインナーになる事だから敬語は必須なのか……でもまあ気持ち悪いことには変わらないけどね！

小人つてのはトンタツタ族の事だったかあ……博識なロビンでも知らないことはあるんだね。

「私はこれからこの喋り方で話しますのでよろしくお願いしますよ。船長」

「よ、よろしくね。交渉ごとはテゾーロに任せるから」

背筋がゾワゾワつてする！テゾーロの敬語は当分慣れなそうだなあ……。交渉はテゾーロに任せるのが一番だと思うけど、ステラには何をお願いしようかな……。うーん、取り敢えずは私の秘書つてことでお願いしとくかな……。

「お任せ下さい。それで彼は……」

「よし！レオグロウが仲間になるのは全然いいよ！今のステラより強そうだしね!!」

「——っ！見聞色ですか？」



「まあね。でも私は一瞬だけ先を読めるぐらいの力とある程度の範囲の感知しかないけど、それに比べてステラの見聞色の感知力は意識すればグリーンビット全域を感知できるくらいだから、私たちの中では一番極まってるよ」

ステラは覇王色と武装色の覇気を使えない代わりに見聞色だけを鍛えて来たおかげで、見聞色だけはディアンヌを超えるものを持っていた。

その見聞色は感知に特化している。感知に特化しているため戦闘に直接は役に立たないが、斥候としては優秀な人材となるだろう。

「まあ見聞色が強いって言っても戦闘向きではないから戦闘させることは今のところはないけどね。だからこれからはステラには私の秘書になってもらいます!!」

「分かったわ」

ステラの実力が今のテゾーロくらいまでに来たら秘書兼諜報員でも頼もうかな？ 私たちの勢力が大きくなったらスパイは来るだろうから不振な動きを感知できるステラが適任だよな。

「そろそろ街へ戻るよ」

——ディアンヌたちは街へと戻って、拠点となる場所を探した。お金はそこそこ持っているので立地と外見を重視して選んだ結果 “コリーダコロシウム” の近くの大きめの家を事務所として買い取った。

その狙いとしてはロシアムで行われる試合を見に来る客へと物を売るのが資金を集めるうえで一番効率がいいと考えたからだ。

この案を提案したのはディアンヌではなくテゾーロだった。テゾーロは今現在から資金稼ぎの才能の片鱗を見せつけていた。

「拠点の購入を記念して宴だアア!!」

「ウオオオオオ!! っってお前らもテンション上げろよ」

「私はあまり酒がすぎではないので……」

「私は付き合いますよ。でもテンション上げるのはキャラじゃないので」

「あの男は誰れすか?」

「知らなかったのかよ!!!」

レオグロウは地上に出てきてから一度もキャンドラーとは話さずにディアンヌとテゾーロとばかり話していたのでキャンドラーのことを知らなくても仕方がなかった。

「まあいい。で、酒はあるのか?」

「たーんまりと買い占めてるよ!」

まあ買い占めた理由はこの世界でお酒を飲んだことがなかったからどんなのがいいのか分からなかったから、あるもの全部買っただけなんだけどね。

昔の私はお酒に強かったけど今はどうなんだろう?……あーお酒おいしいなあ〜

♪あれ？目の前に大きなお肉だぁ♪

「おいおい、なんで腕を大きくしてんだ!? まあ待て船長つて酒臭ア!!」

酒に酔ったディアンヌは腕を大きくしてキャンドライのことを掴んだ。今のディアンヌにはキャンドライが大きなお肉にしか見えていないので仕方なかった。

「僕豚肉大好きなんだよね〜♡こんなに大きなお肉は・じ・め・て♡」

「誰が豚だ!! そしてなんで人のこと食おうとしてんのに色っぽいんだよ!!」

「あーむ」

「話聞けつて腕を食べるなア!!」

「ふふ…ディアンヌも弱点があつたみたいね」

「私の尊敬する船長の像が崩れていく……」

「お酒おいしいれす」

ディアンヌを中心に始まったどんちゃん騒ぎに目もくれずにお酒をチヨビチヨビ飲み続けているレオグロウはものすごくマイペースな人物であつた。

宴はディアンヌを放置することで続けることが出来た。そんな宴は次の日の昼まで続いていた。

「あつたま痛つてエ。昨日飲み過ぎたな……幸せそうに眠りやがつてお前のせいでどんだけおれが苦労したか分かつてんのか」

自分の部屋から広間へと出てきたキャンドラーの先に居るのはお酒の瓶を抱えて眠っているディアンヌ改めて呑んだくれがいた。その顔はヨダレを垂らしながら口角を上げていた。

テゾーロとステラは宴がある程度進んだら自分の部屋へと帰って行った。二人ともあまり酔ってはいなかったのか広間に来た時は普通に歩いて来ていた。

「船長はまだ眠っているのですか……はあ尊敬する人間違えたかもしれません」

「大丈夫よテゾーロ。ディアンヌは酒癖が悪いだけで他は尊敬出来るわよ」

「……そこが問題なんですよ」

ディアンヌに秘書を任命されたステラは職務を全うするためにディアンヌを起こそうとした。しかし酒によつて深く眠っているディアンヌは自分の安眠を邪魔する者を排除するために殴り飛ばそうとした。

「仲間を殴つちや駄目れす!!」

ディアンヌの巨大化した腕を止めたのはレオグロウだった。小さな体から考えられない力でディアンヌを腕をあつきり受け止めたのだ。

その力を見たテゾーロは自分の力が小さな体のレオグロウに負けているかもしれないと思ひ驚愕していた。

「まさか……(汗)(汗)までとは」

「ありがとうレオちゃん」

「自分はレオグロウれすよ」

「レオちゃんの方が可愛いからいいじゃない」

「じゃあ自分はレオちゃんれす」

レオグロウがレオちゃんとなることを決めていた頃、キヤンドラーはディアンヌの頭を引っぱっていた。

「酔ってたからって仲間を殴るな！」

「痛ったあ……ってアンタはシラフで殴ってるじゃない!!」

「屁理屈言うな!!」

「理不尽だ!!」

キヤンドラーは酷いなあ。麗しい乙女の頭を引っぱたくな……。まあ痛くは無かったけどさあ容赦なく殴るなんてアイツの頭ん中見てみたいわ。

「まあいいや……今日からシノギを始めるわけだけど、どんなのがいいか会議をするよ!!」

ディアンヌの一言によって始まった会議は終わりのない迷宮へと入ろうとしていた。「私としてはエンターテイメントを『コリーダコロシウム』で魅せつけるのがよいかと思います」

「私は普通に食品を売るのがいいと思うなあ」

「海賊ならみかじめ料を貰えばいいと思いますよ」

「お酒がいいれす!!」

「お前から自由に言い過ぎだ!!」

——すっかりツツコミ役にハマってしまったキャンドラーはこれからも個性豊かな仲間たちをツツコミ続けるのだが、彼はまだ知らなかった。

## 夜

——創造海賊団が“コリーダコロシウム” 近辺に拠点を構えてから数ヶ月が過ぎた。彼女たちはシノギ候補として出た、エンターテイメント、食品、みかじめ料、お酒を程よく行う事で莫大な資金を手に入れることに成功したのだった。

「船長、今日の予定ですが……」

「ちよつと今日の予定はバラしておいて」

「よろしいのですか？そこそこの名の知れた商人との会談がありますが」

「大丈夫そつちはテゾーロに行かせるから。今日は裏で私が求める金の成る実のオークションがあるから」

「……木ではなく？」

秘書となつて数ヶ月が経つたステラは仕事姿が板につき周辺住民からは美人秘書と少し有名になつていた。

彼女たちは資金稼ぎを行つている内に裏の者たちとのパイプがある程度繋がつているためシャボンディ諸島で行われるオークションではなく裏のオークションにも呼ばれるようになっていく。

「まあステラも着いてくれば分かるよ。私が欲しいのが金の成る実だつてことが」  
「そうですか……まあそっちの方がお金になるのならいいです」

ステラは自身の父がギャンブル狂いでギャンブルの資金のために人買いに売られた結果、この世はお金が全てだと思っていた。しかしテゾーロと出会ってからは、その考えが少しは緩和されたのだった。

「もう、ステラを現金な子に育てた親の顔が見てみたい」

「私が現金な子になったのは貴女を見て来たからです」

「そっかそっか、私のいい所を見て可愛い子に育つたんだね」

「……耳イかれてんのか」

「聞こえてるからね!!?」

聞こえる言葉が都合の良いことにしか聞こえないディアンヌを小さな声でディスプレイしたステラだったが、ディアンヌが持つ地獄耳には聞こえていて大きめの声でツッコまれた。

二人はある程度の掛け合えを終えるとオークションに向けて身支度を始めた。

「留守番はどうしますか?」

「うーん、キャンドラーは周辺の島を調査して貰ってるから無理だとして、手の空いてるのはレオちゃんだけだけど、レオちゃん一人に任せるのは少し心配になるからなあ



……。よしトントンタツタ族に数人派遣して貰って」  
「分かりました」

ステラは「六式」の中で覚えてる「月歩」<sup>ゲッポウ</sup>を使ってグリーンビットへと向かった。

ステラはこの数ヶ月間で「指銃」<sup>シガン</sup>、「鉄塊」<sup>テツカイ</sup>の才能がない事が分かったので他4つの六式だけを集めて練習した結果「月歩」だけ習得出来たのだ。

「ふう、このオークションは今後の資産運用のやり方を決める大事なことだから多少は荒事になったとしても奪わなきゃね」

ディアンヌはグリーンビットから帰って来たステラを連れてドレスローザを離れた。ディアンヌが向かう先は表向きは海賊で溢れかえっている無法地帯だが、その地下では裏社会の者たちによるオークションが行われていた。

「相変わらず面倒な所でオークションやってるよね」

「はい島自体は無法地帯なので、美人な私たちに発情した男どもが襲ってきますからね」  
「自分のこと美人とか言っちゃってるよこの子」

二人は穏やかに話しているが、何度も発情した男たちが襲って来ていた。しかしディアンヌの前にはチンピラたちも歯が立たなかった。襲って来る男どもをディアンヌは能力を使って土の檻で捕まえていた。

「やっとオークション会場に着いたけど何人襲ってきたかな？」

「えつと……23人ですね」

「まだいい方か」

何度かこのオークションに来ていた2人だが、過去には50人もの男に襲われたことがあるので20人程度では動じなくなっていた。

「ようこそ!!皆さんはこちらが目当てで来たのでしよう!!!<sup>パラミンア</sup>超人系の中でも金持ち向けの

悪魔の実その名は——!!!」

「まさかそんな実があるなんて……」

「そうこの実があれば私たちの戦力増加と資金調達が簡単になる一石二鳥な // 悪魔の実  
“なんだよ。だからこの実だけは力づくで奪いに行く必要があるんだよ”

裏社会の金持ちたちが集まるオークションにディアンヌとステラは挑むのであった。

——ドレスローザ近海の小島

ディアンヌがドレスローザを出発するころキャンドラータちはドレスローザ近海の自然溢れる小島に居た。

創造海賊団には数ヶ月の間に戦力を増強して下つ端が数百人入っていた。キャンドラータはその下つ端たちを連れてドレスローザ近海にある小島に来て居た。

その島は希少な植物がある可能性があったので、ディアンヌの命令によつてキャンド

ラーが派遣されたのだが、キャンドラーは植物にそこまで詳しくなかったので無駄足となっていました。

「この島は自然が多いのに何故船長はレオグロウではなくおれを派遣したのだ」

「キャンドラーさん、向こう岸に小船が!!」

「小船だと?」

「はい! 小船が1隻」

「『前半の海』ならまだしも新世界を小船で航海するバケモンが居んのかよ」

新世界の海は他の海に比べて波は高く凶暴な生物達が生息しているのだ。そんな海を小船で渡るなど自殺行為に等しい。そんな航海をするのはよつぼどの馬鹿か、そんな航海を可能とするバケモノしかないのだ。

「まあいい、海賊なら下に付けるか海軍に引き渡せばいい。もし難民だったら助ければいいだけだ」

「流石副船長だ!!」

「——っ?!? お前らおれの後ろに下がれ!!」

「……強い気配がすると思つて来てみたら、おれと同じ立場の者か」

キャンドラーの『見聞色』に引つかかった者はディアンヌと同レベルもしくはそれ以上の覇気を持つものだった。

感知して数秒後に森から出てきたのは背中に巨大な剣を背負い、羽根のついている帽子を被った男。新世界の強者の中でも有数の剣豪「鷹の目」ジユラキユール・ミホークだった。

「『鷹の目』何の用だ！ここはおれらの縄張りだぞ!!」

「おれは流れ着いただけだ。……だが貴様のような強者とやるのもまた一興だ」

そう言った鷹の目は背中に背負う黒刀『夜』を抜きキャンドラーと対峙した。

「おれ相手に背中のを抜いてくれるなんて光栄だぜ」

そう言うキャンドラーの額には汗が滲んでいた。

鷹の目は相手を強き者と認めない限り背中『夜』を抜かないと有名なのだ。そんな鷹の目がキャンドラー相手に『夜』を抜いたことからキャンドラーを強き者と認めているのだろうか。

### ——創造海賊団拠点

ディアンヌたちが出発したところテゾーロは商人との会談を行うための準備を始めていた。

「船長も人使いが荒い。私だって忙しいのだ」

「仕方ないですよ。最重要任務があるとかで」

「それは分かっている。だが私が忙しいことには変わりないのだよ」

そう言いながらも準備を進めるテゾーロは真面目だった。

真面目なテゾーロは資産運用を中心とした仕事を請け負っていて、創造海賊団の資金の八割は彼の手で動かすことが出来た。しかし今日の会談ではお金を使うことを極力控えるようにとの命令がディアンヌから伝えられていた。

「はあ……商人相手に金を使わずどう引き込めばいいんだか……」

「テゾーロさん程の手腕があれば簡単ですよ」

「買い被りすぎだ。私は船長に比べたら足元にも及ばん」

そう言うテゾーロだったが、テゾーロのお金に關してのことは天才と呼べる程の才能を持つていた。そんなテゾーロの手腕があつたからこそ創造海賊団はここまで大きくなれたのだ。

「まあ私なりに出来ることはやるさ」

「頑張つて下さい!!」

派手なスーツを着込んだテゾーロは商会の扉を開いた。そんな彼の前に居たのは白髪の初老と若いにも関わらず海賊相手に全く動じないで笑顔を崩さない女性の姿があつた。

「創造海賊団とやらの船長は私と同じく女性と聞いていたが？」

「船長は急な予定が入ったので代理として私が参りました」

「私との会談より重要な予定とは、さぞかし重要なのだろうか……例えばそうだな……裏で行われるオークションとかな」

「——何を仰っているか分かりませんね」

「君はまだ未熟な様だな。少し顔が引きつっているぞ」

海賊テゾーロ相手に全く引かず、引くどころか押ししている彼女は元々小さな商会だった。リオネス商会をたった半年でドレスローザの三番手の商会にまでの上げた手腕を持つ女傑だった。

「ふふ……冗談だ。これから会談なんだ楽しんでくれ」

そんなことを言う女傑だったが、そんな彼女の目はテゾーロが少しでも気を抜いたら全てを持って行ってしまうような獣の目をしていた。

——今それぞれの戦いが始まろうとしていた。

「創造海賊団」副船長でありディアンヌの右腕であるキャンドラーとディアンヌと同じ「王下七武海」であり若くして世界に名を轟かせる剣豪「鷹の目のミホーク」の戦いが今始まろうとしていた。

「おれは貴様を知っている。貴様は1世代前の……」

「おれのこととは別にいいだろ。お前が背中のを抜いたってことは本気で来るんだろ。鷹の目“!!”」

キャンドラーはミホークに先手を取られるのは悪手と考えたのか先に殴り掛かった。武装色の覇気によつて黒く染まった腕から放たれる相当な威力になる。

しかし新世界にて剣豪として名を馳せるミホークの武装色はキャンドラーの遙か上を行っていた。

「貴様はその程度の覇気なのか」

ミホークが『夜』を一振した衝撃だけでキャンドラーのことを吹き飛ばした。そしてその斬撃はキャンドラーの武装色をいとも簡単に突破して腕を傷つけた。

「貴様のことを見て武者ぶるいしたが……期待外れか」

「逃げんのか!!」

「おれも七武海だ。これ以上続けたらおれは貴様を殺めてしまう。そうなればおれの立場も危うくなる筈だ。だからこれ以上の戦闘はどちらにとつても利は無い筈だ」

「……おれのことを殺すだど？お前には無理だろ若造が」

まだ若いミホークの言葉にキレたキャンドラーは先程とは比べ物にならない程の覇気その身から溢れ出した。

「それが貴様の本気か……面白い」

キャンドライーから溢れ出る覇気にミホークは冷や汗を流したが、『夜』を強く握りその顔には笑みを浮かべていた。

今度はミホークが先に動きその場で『夜』を振り下ろした。『夜』から放たれた飛ぶ斬撃は山をも簡単に割る程の威力を誇るがキャンドライーが拳を前に突き出すと消えてしまった。

「見事！」

「油断するなよ」

「油断などしていない」

キャンドライーが『剃』で一気に距離を詰めて背後を取り殴りつけたが、ミホークには見えており『夜』で受け止められてしまった。更にミホークは受けた拳を吹き飛ばすと同時にキャンドライーの体を斬り裂いた。

傷は致命傷にはならなかったもののその傷は深くこれ以上の戦闘は危険な程の出血をしてしまった。

「体の鈍りが見える……貴様があの海賊団を降りてから何をしていたか知らないが、今のままじゃ船長に迷惑をかけるぞ」

「ま……て」

「……」



ミホークは声をかけるキャンドラーを無視して自身の船へと向かって森の中を進んで行った。

その堂々とした背中にキャンドラーと調査しに来ていた下つ端たちは10数秒その場から動けずキャンドラーの治療が遅くなってしまった。そのミスによつて下つ端たちの給与が減給されるのだが、今の彼らには知る余地がなかった。

拠点から誰も居なくなつたのを気に庭から侵入して盗み入ろうとする曲者がいたのだが、そいつらはもれなく庭にから生えている植物に絡め取られていた。

正面突破しようとした曲者もいたのだがトンタッタ族の攻撃に歯が立たず紐で縛られていた。

「自分の奇術があれば大人間なんて弱いれす!! あつても仲間たちは違うれす」

「流石 “戦士長” れす」

「もう自分は戦士長じゃないれすよ」

「そうれしたつけ? でも私たちからすればいつまでも戦士長は戦士長れす!!」

大人間が拠点に居ない今、拠点の守りはトンタッタ族 “元戦士長” レオグロウと数人のトンタッタ族だけだった。

しかしトンタッタ族は1人居るだけでもそこら辺のチンピラは退治出来るので数人

居て、更に「元戦士長」が居るとなれば拠点の防衛を突破するのは不可能に近いだろう。

「誰も……居ないんじゃないのかよ。話が違う……じゃねえか」

「誰の命令れすか」

「命令なんて受けてねえよ」

「あつそうなんれすね」

「信じるなよ!!!」

捕まった盗人は最後の力を振り絞ってレオグロウにツツコンで気絶してしまった。

「あれ？気絶しちやったれす……ああ眠ちやっただけれすか」

純粹なトンタツタ族は盗人がツツコミ魂に最後の気力を振り絞って気絶したことが理解出来ずに盗人は疲れて寝ているということで納得したのだった。

## 女傑

——「リオネス商会」は半月前までは小さないち商会でしか無かったが、とある女傑が代表に就任した瞬間から変わったのだ。彼女が持つ経営術とカリスマ性で周りの小さな商会を傘下に加えて行き今ではドレスローザ三番手の商会まで成り上がったのだ。

「私が海賊相手に動じないのが不思議か？」

「——いえ、そんな事ありませんよ」

「それは私が強いからだよ」

そう言った女傑はテゾーロの目の前から消えて、テゾーロの後ろへと移動していた。そんな彼女は自身の人差し指をテゾーロの首に突き付けていた。

「ね。私が君みたいな海賊に負けるわけないでしょ」

「(なんで商人が六式を使えるんだよ!) そうみたいですね。ですがこれは宣戦布告とも取れませんが？」

「流石に七武海相手に喧嘩は売らないさ。だがこれだけは覚えておいてくれ……君んところのトップが何を考えているか知らないが、もしこのドレスローザでふざけた真似をするなら潰すと」

「……今のところはそんな予定はないですね」

「今のところか……はくははは……面白いな君は。勝ち目のない相手に下手に出ることなく不利益になることは言わないか。そこだけは評価してやろう」

女傑はテゾーロの行動に笑うと、テゾーロの行動を褒めたたえた。顔は笑っているものの瞳だけは冷たく光っていた。

「……ドレスローザの“女傑”として有名なマーリンさんに褒められて光栄ですね」

『リオネス商会代表 “女傑マーリン”』

「そう褒めるな。私から見ても君の手腕は天才と呼べるものだ。だがまあ今は足りないがな」

「分かっております。ですが私たちは貴女ごときはただの踏み台としか思っておりませんので」

「——?!私に踏み台ですか……もし本気で言ってるなら貴方たちをドレスローザから追い出します」

「出来るものならやってみてください」

テゾーロからの宣戦布告ともとれる言葉にマーリンは青筋を立てていた。

マーリンは今まで自分に逆らうものは存在せず、それどころかマーリンの圧倒的なカリスマ性に自ら下に着く者しか居なかったためテゾーロのような対応を取る者は初め

てだった。

「アーサー！」

「お嬢、こちらからの武力行使は我々が裁かれてしまいます」

「構わないわ。隠蔽工作すればいい」

「……分かりました」

マーリンの後ろで何の反応も見せていなかった初老の執事が動いた。執事はマーリンと同じように六式の一つである「剃」でテゾーロの後ろへと一瞬で移動した。

しかしテゾーロは後ろにいるはずの執事を身体をひねりながら蹴り飛ばした。

蹴り飛ばされた執事は壁へとぶつかり意識を失ってしまった。

「はあ……お前は海賊を舐めすぎだぞ。最初はこちらからの交渉だったから下手に出たが、少しふざけすぎだ」

「——さつきはどうして動かなかった」

「お前から殺気を感じなかったからな。それにあの距離まで近付かれても防げる自信があるからだな」

テゾーロは足を組んで先程までとは真逆とも言える高圧的な態度を取っていた。

高圧的な態度を取りながらも周囲への警戒は忘れないテゾーロは注意深い人物だった。

「ふう……私は穩便にことを済ませたいので、あまり反抗的な態度を取らないでください。そうすれば悪いようにはしませんので」

「どつちが君の素だろうか？」

「私の素は……おれの方ですね。まあ滅多に出すつもりはありませんけどね」

「そうか……まあそっちの方が人と会う時はいいな」

「……なぜ態度が変わらないのですか？」

テゾーロの実力を見たら普通は萎縮してしまい下手に出るはずだがマーリンは下手に出ることはせず先程と変わらず上から目線だった。

「……君は何故私が『女傑』と呼ばれているか知っているか？」

「たった半月で周りの小規模商會を傘下にしていきドレスローザ三番手まで成り上がったその手腕を讃えてでは？」

「もちろんそれもあるが、一番は私自身の腕っ節だよ。先程も見せた通り私は『六式』をマスターしている。それに私は能力者だからな」

「能力者……だから女傑ですか。まあいいでしょう」

「そろそろ本題に入りましょうか」

この會談は創造海賊團からリオネス商會へと求めた會談であり、その内容としてはドレスローザでのリオネス商會が持つ商權を売ってもらうことだった。

今の創造海賊団はある程度の事業に手を広げているが、それはコリーダコロシム近辺でしか出来ることしかなく、これからもドレスローザで勢力を広げていくとなるといつかは頭打ちが来るので、ドレスローザーの成長株であるリオネス商会が持つ商権を買い取れば、リオネス商会の成長を止めて、創造海賊団の勢力拡大に繋がるのでディアン又はリオネス商会を狙ったのだ。

「私たちの商権を買い取る……私が商権を売るとでも？」

「思っておりません。ですので私が来ました」

「それは武力行使も辞さないということですか？」

「そんなことは一言も言っておりませんよ。ただ私のところは交渉が得意な人が少ないのでね」

「私としては武力行使の方が手っ取り早くていいと思うけどな。そちらが私に勝てないと思うならいいですけど」

「先程の動きを見ても萎縮せず武力行使を提案するってことは、相当な実力者なのでしょうね。私も海賊なので武力行使の方がいいと思つてたところですよ」

言葉を終えたテゾーロはマーリンへと殴りかかった。殴りかかると言っても普通に正面から殴りかかった訳では無い。テゾーロは「剃」でマーリンの後ろへと移動して上から殴りつけた。

「流石だ。パンチが重い……だが『六式』に関してはまだまだな！  
シガン指銃」

マーリンは六式の指を使った攻撃、『指銃』をテゾーロの体へと撃ち込んだ。テゾーロの体は常人を凌駕する耐久度を持っているが、マーリンの攻撃はテゾーロの筋肉を突き破っていた。

「チルドレン血子達！！」

「——なッ?!?特殊な能力だな」

テゾーロが見たのは、マーリンが自身の指先をナイフで切り裂くと地面へと血が落ちた。なんとその血が蠢き出し、やがて小さな人の形へと変化して行つた。小さいと言つてもドレスローザに居るトンタツタ族よりは大きくて、マーリンの腰辺りまでの大きさのあるマーリンの分身体が4体マーリンの血から産み出されたのだ。

「私を楽しませてみる。踊れ！」

「分身にしては速すぎだろ」

マーリンの血から産み出された分身たちはスピード、パワーは本体に比べて劣るものの戦闘技術自体は同じなので、4体の分身から放たれる剣からの指銃の攻撃にテゾーロは守ることで精一杯だった。

しかもこの分身たちを攻撃したとしても元は血なのでマーリン本体にダメージを与



えることが出来なくてすぐに元に戻るため、分身4体からの連携攻撃から抜け出して本体にダメージを与えるか、マーリンの体力が限界を迎えるかをしない限り分身たちは消えないのだ。

「殺しはしないから安心しろ。……だから存分に血闘けつどうをしようじゃないか」

（クソ……分身共の連携が突破出来ない。一体一体の攻撃は軽いが確実にダメージが蓄積してる……これは時間が過ぎるほど私の方が不利になるな）

マーリンの血から産み出された4体の分身たちが放つ指銃は1回1回のダメージは少ないものだが、それが4体から何度も撃ち込まれれば結構なダメージが蓄積してしまっているのだ。

「……これはギャンブルに出るしかないか——『笑帝』!!」

テゾーロは残り少ない覇気を使いマーリンと自分の間に居る分身体を破壊してマーリンへの突破口を開いた。その行動に少しは驚いたマーリンだが、直ぐにテゾーロの攻撃に備えた。

「私は船長に拾って貰えたのだ……だから失敗など許されぬ!!」

「そんなの私には関係ないな——『飛ぶ指銃・赫弾』」

残り少ない覇気を全て右腕に流したパンチは当たれば動物系の能力者であるマーリンでも相当なダメージになる攻撃だったが、当たる前にマーリンが能力を使って強化し

た飛ぶ指銃によってテゾーロは気絶させられてしまった。

「その攻撃は少し危なかったな。……アーサー起きているのだから」

「お気づきでしたか」

「当たり前でしょ貴方があの程度で気絶するわけないからな。その男を捕らえて、人質にするぞ」

アーサーは一度も気絶しておらず、もしマーリンが危険な状態になったら動こうと静観していたのだ。

アーサーはマーリンの命令に従いテゾーロのことを鎖で縛ろうとした。しかし何かを感じ取ってテゾーロから離れたのだ。

「あれ？避けられちゃった」

「……君がディアンヌか？」

「その通りだよ。私が創造海賊団『船長』のディアンヌだよ」

「オークシヨンはどうしたんだ」

「……あれ？知ってたんだ。まあお目当てのものは手に入れることが出来たからね。急いで帰ってきたよ」

——少し時間は戻りオークシヨン開始時刻

「本当にあの実を取れるんですか？ 私たちも昔では考えられない量の資金を用意して来ましたが、ここに来るのは裏社会の有名人たちや長い期間生き残ってきた海賊たちですよ？ 勝てるんですか？」

「普通は無理だね。でもその所は気にしないで大丈夫だよ。だって私は七武海だもの」

「早速始めて行きましょう!! まずは——」

オークションが始まってから売られるのは武器だったり、奴隷だったりとお目当ての悪魔の実どころか悪魔の実の一つも売りに出されていなかった。

「悪魔の実は出ませんね」

「そうだね……もし出なかったら……私としては口実ができるからいいんだけどね」

「口実ですか？」

「そう口実」

二人が話している間もオークションは進んでいるが、悪魔の実の一つも売り出されなかった。やはり悪魔の実は客引きのために用意されたもので売りに出されることはないだろう。

「次の商品ラストとなります!! 次は能力者の奴隷です!!」

司会の言葉に会場がざわつき始めたが、司会が次に放った言葉に客たちは黙ることに

なるのだ。

「私がお前らが言う言葉を言った証拠はあるのか!! それにここは政府の役人どもに容認されてるんだぞ!! 手を出すつもりか!!」

「やっぱり腐ってるな。……ステラ動くよ」

「了解です」

ディアンヌは地面に手のひらを付けると能力を発動した。ディアンヌの力は大地を操る力なので司会がいる舞台から司会を捕まえる檻を創り出した。

「なっ!?! これは能力者の仕業か!!?」

「そうだよ。私がやったんだよ」

「おいおいアイツは七武海の……」

「馬鹿だろ! 政府に容認されてるのに七武海が手を出すなんて」

ディアンヌはこのオークション来る時から目当ての悪魔の実が客引きに用意されて売りに出されないのではないかと疑っていた。そのためある作戦を事前に用意していたのだ。その作戦とは主催者を七武海の権限で捕らえて、その間にステラが悪魔の実を盗み出すという作戦だった。

主催は政府に容認されていると反論していたが、ディアンヌは裏オークションが政府に容認されるわけがないとの一点張りで海軍に関係者を渡したのだった。

「これですよね船長が求めていた悪魔の実は」

「そうそう。この悪魔の実だよ」

「いろいろ画策して手に入れましたが誰に食べさせるんですか？」

「……候補としてはキャンドライーか、テゾーロなんだけど……死なない武力を考えるとキャンドライーが良くて、資金の運用を考えるとテゾーロが良いんだよね」

この悪魔の実はいアンヌが述べていたように金の成る実であり、今後創造海賊団が大きくなるためには重要な実だから失くす訳にはいかなないので創造海賊団で二番目の実力者であるキャンドライーが候補に上がっているが、キャンドライーはその悪魔の実を使いこなせている絵が浮かばなくて、逆にテゾーロは絶対に悪魔の実を上手く使いこなせるのだが、実力はキャンドライーから数段下なのでいアンヌは悩んでいた。

「まあそれは後に考えればいいか」

「……あのテゾーロが心配なので早く帰りませんか？」

「悪魔の実は後でいいか……じゃあ急ぐよ」

二人はやって来た海軍に地上にいるチンピラ共を任せて“剃”を使い船へと戻って行った。船を飛ばして戻って来た結果テゾーロが人質になる寸前で助けることに成功したのだった。

「ウチの者が気絶しているけど何があつたのかな？」

「決闘することは承諾済みだ」

「うーん……証拠が無いよね。それにこの現場をこの国の人が見たらどうなるかな？」

「……この事態を想定でもしていたのか？」

「まあ貴女のことは調べさせてもらったからね」

「……はあ、君は私より一枚上手だったみたいだな。君たちの要求はリオネス商会の商権だったか？」

「そんなこと言つたかな？ 私の要求はリオネス商会が私の傘下に付くことだよ」

「……こりゃあ一枚どころじゃ済まないな……これを国の奴に見られたらこの商会は終わってしまうからな。要求を飲むさ」

——こうして創造海賊団はマーリンとアーサーという実力者とドレスローザ三番手の商会が持つ全権利を手に入れたため、本格的に勢力拡大へと動き出すのだった。

それに合わせて新世界の怪物共、そして見習いの頃に苦楽を共にした同期たちも動き始めるのだった。

## 創造海賊団・団長

## 師団長

——ドレスローザでの基盤を確実にした創造海賊団が次に見るのは侍たちによって守られる“ワノ国”。ディアンヌがワノ国を求める理由はただ一つ。それはワノ国が持つ海楼石の加工技術だ。創造海賊団の幹部以上の半分以上は能力者のため、ワノ国を他の海賊に取られたら創造海賊団は不利になるので、ワノ国の技術を守る必要があったのだ。

しかし大々的に動く訳にはいかなかった。それはとある二つの事件からだ。その一つが“金獅子”がインペルダウンからの初めて脱獄を成功させたのだ。大海賊時代前は勢力拡大に尽力していた金獅子だったが、脱獄後はまったく表舞台に出ることがなく息を潜めていることがディアンヌには恐ろしく思っていた。

「うーん……“金獅子”はなんで表舞台に出てこないんだろう……捕まる前よりは勢力が縮小したとはいえ、大海賊の名に恥じない勢力は持つてるはず……」

「団長……ドレスローザの経済を掌握することには成功しましたが、まだ敵は多いです。そんな中船長がこの国を離れるとなるとマーリンの努力が無駄になるかもしれません」

「分かつてる。……でも早いうちにワノ国を取っておかないと何か大変なことになりそうなんだよね。ステラはどう思う？」

「……私は団長が思うように動けばいいと思いますよ。だって貴女は私たちをまとめ上げる船長なんですから。そのくらいのことを決断出来なければこれから先生きて行けませんよ」

ステラが面倒くさいからと何も考えていないようにも感じ取れる言葉だが、ステラが言うことも一理あるのだ。ディアンヌは少なくない船員をまとめ上げる団長として『何かを捨てても何かを得る』ことを決断する力は必要なのだ。

ただ、ステラは面倒くさいから如何にもな理由を言っているだけなので勘違いしないで欲しい。

「はあステラに聞いたのが間違いだった」

「私は秘書なので、それ以上の仕事を押し付けないでください。面倒なので」

「あの頃の可愛いステラはどこにいつちやったのだから。今ではこんなに厚かましくなっちゃって……」

「キャンドラーが言っていましたよ。『海賊は強欲でいい』ってね」

強欲ねえ……キャンドラーの何処が強欲なんだか。まあいいやステラが強欲だろうと可愛いことには変わりないからね。



ワノ国の件は私一人で乗り込めば、ドレスローザの掌握は思うけど……問題はあの人を政府から隠し通せるかどうかかな？

「……ねえステラ……あの人の体調はどう？」

「一応起きはしましたが、混乱しているのか話そうとしません。……もし船長が彼女のことと悩んでいるのなら大丈夫ですよ。私たちを信じてください。仲間なんですから！」

「——そうだね！ 私は行くよワノ国に!!」

「……そういえばワノ国への行き方を知っているんですか？」

「大丈夫だよ！」

ステラはロジャーの船に乗っている時に2回ワノ国へと訪れているので、行き方は分かっている。それにおでんの「ビブルカード命の紙」を持っているので航路に迷うことも無かった。

「私は当分の間帰って来ないと思うから、私がいけない間はキャンドラーに創造海賊団を任せるから。……ステラはテゾーロのところに行く？」

「いや、マーリンの仕事を手伝います。テゾーロは今が頑張り時ですから……私が居たら邪魔になりますよ」

「一応マーリンに連絡しておくけど、自分でも許可取ってね」

「分かりました」

——その後ステラは無事マーリンの臨時秘書となり、マーリンの経営術を学んでいくのだった。

——ドレスローザ商業地区

ドレスローザのコーリダコロシウムから少しのところにある商業地区は元々歴史あるダナ商会とフォール商会が権力を握っていたが、リオネス商会と創造海賊団が手を組んだことからリオネス商会に商権や店舗をジリジリと奪われていき、今では小さな店舗を数店しかダナ商会とフォール商会は持っていないかった。

その店舗たちもリオネス商会の傘下に入ることで持つことを許された店舗のため、実質ドレスローザの商業はリオネス商会が握ったことになる。

「私は貴方たちがどうなろうと知ったこっちゃないが、このままの売り上げだと潰さざるを得ないな」

「し、しかしこの小さな店舗だと、どうにも客の入りが悪く……」

「そ、そうです。自分のところも客入りが悪くて、売り上げがなかなか伸びないんです！」

二つの商会が持つことを許された店舗は、全てにおいて小さくて汚い店ばかりでお客は滅多なことがない限り入ろうとしなかったのだ。

これはマーリンの作戦であり、小さくて汚い店でも切り盛り出来るほどの経営術を持つ者が二つの商會に居た場合は自身の商會に好待遇で招き入れるつもりでこの作戦を実行したので、これは二つの商會を振るいにかけるものだったのだ。

「(今のところ見所のあるやつは居ないようだが……まだその時ではないか)それは貴方たちの実力が足りないからだろ。そんなんだから私みたいな新興商會に負けるんだよ。……自分たちの実力が足りないのなら下の者にも聞くのが、人の上に立つ者として必須だぞ」

「クツ……分かりました。今日は會議をするので帰らせてもらいます」  
「私も同じ理由で帰らせてもらいます」

「構わんぞ」

「……失礼します」

ダナ商會とフォール商會の代表たちはリオネス商會の會議室から離れた。そいつらが商館から出たのを覇気で感じ取ったマーリンは溜め息を漏らした。

「はあ……帰ったか」

「商人つてのは本当に面倒くさいですね」

「それは私も含んでか？」

「いえいえ、あの豚どもですよ。自分の利益しか考えてない癖に変にプライドが高くて

他人の意見をまともに聞かないところとか面倒くさいですよ」

さっきの商人たちがマーリンの忠告を聞くつもりがないことはステラでも分かっていた。それはマーリンも分かっている筈なのに何故あの言葉を商人たちに放ったのかは、ステラにはまだ理解が出来なかった。

「そうだな。アイツらは私の忠告を聞くつもりは無いだろう。だがこのままでは自分が終わるつても分かっているはずだ。だから何かしらの動きを見せる。まあ、動きを見せなかったとしてもその時は経営不振で潰せばいいだけだ」

「……そうなんですね」

「そんなもんだよ商人ってのは」

一通り話を終えた二人は大きい店舗から順に売り上げ確認を始めるのだった。

商人として成功を果たしたマーリンだったが急速に拡大した商会だが人材が足りていなかった。その為ある程度実力のある者をほかの商会から集めたのだが、それが仇となり最初の頃はほぼ全ての店舗で横領が行われていたため、マーリンが直接出向くことになったのだ。

「はあ、横領する奴らの首を切ろうにも数が多すぎるからな。そつちの船員を借りれないか？」

「借りる分には大丈夫だと思えますが、店舗を任せるには不安ですよ？ 顔はイカついし、喧嘩っ早いし、人を動かすのにも向いてない下っ端ですからね」

「……いつその事ーから育てるか」

「ドレスローザの孤児でも引き取りますか？」

「……いや引き取るのではなく、孤児院を国から買い取ろう」

ドレスローザにある孤児院は国営なのだがそこに回される予算はあまり多くないので、マーリンは国より好待遇にすることを条件に買い取ろうと考えていた。

「リク王はそれを許しますか？ リク王は我々創造海賊団が拡大することを望んでませんからね」

「そこは今までに上げてきた市民の好感度でも使つて国に訴えればいいだけだ」

「王下七武海の名に相応しい動きをしてみました、そう簡単に私たちを信用してませんか？」

「人つてのは欲深いからな。その欲を満たしてくれる商会や守つてくれる海賊なら悪いようにしないからな」

そんな人が持つ欲をよく理解して人を意のままに操るマーリンはステラから「魔女」と呼ばれているのだが、マーリンはまだ気付いていなかった。

——ドレスローザ近海の小島

この島はキャンドラーによって調べられて、「鷹の目」とキャンドラーの戦闘にも耐える強度の植物たちが生えていることが分かった。

その植物たちから成る果物、野菜は普通の物に比べて固いというデメリットがある代わりに栄養が高いことが分かったので、植物の専門家であるレオグロウの手によって支配されることになったのだ。

「その木はもう長くないのれ、切っちゃってくらさい」

「了解れす!!」

レオグロウの部隊は外に出ることを望んだトンタッタ族が数十人が居るだけだが、その実力は人間の下っ端が数百人居ても敵わない実力なのでディアンヌからは信用されている部隊だった。

「やっぱり植物を見る力は戦士長が1番れす!!」

「自分は『創造海賊団』環境師団『師団長』のレオグロウれす!!間違えなれくらさい!!」

「それした」

環境師団とは大きくなり始めた創造海賊団の幹部たちがまとめ上げる師団の一つである。

師団長は団長、副団長の次に偉い位にあつて、そこにはレオグロウ、マーリン、テゾーロが位置する。団長秘書という立場のステラは組織図からは独立した存在であり、人を動かす権力は持ち合わせていないのだ。

「環境師団としてしつかり植物を育てるれす!!みんなも幹部になれるように頑張つてくらさい!!」

「頑張ります!!」

環境師団のトンタツタ族は切れ味のいい糸を持つて、鉄よりも硬い木を切り始めた。糸鋸の原理で擦り付けることで糸の切れ味とトンタツタ族の膂力によつて鉄より硬い木でも切り落とすことが出来るのだ。

「モサモサれす!!」

レオグロウのが放つた言葉は島に変化をもたらした。トンタツタ族によつて減つていた植物を補填するかのように同じような植物が生え始めたのだ。

レオグロウは植物の扱いのスペシャリストであるトンタツタ族に一番合うであろう悪魔の実を食べているのだ。

「流石師団長の奇術れす!!」

「植物を生やしたんれすから、水やつて育てるれすよ」

レオグロウ率いる環境師団はこの島の植物に一通り水をやり終えるとドレスローザ

へと帰還した。

「レオグロウさん。マーリンさんとテゾーロさんが待っています」

「分かったれす」

レオグロウが下っ端に案内された場所は創造海賊団の本拠地にある会議室だった。そこに居たのはレオグロウと同じ師団長のマーリンとテゾーロだった。

「遅かったな」

「思ってた以上に先が短い木が多かったれす」

「早く会議を始めよう」

この会議は月に1度行われそれぞれの師団の活動共有と財務師団師団長のテゾーロへの予算報告が目的だった。

テゾーロがディアンヌから悪魔の実を譲り受けて能力者になったのと同時に組織の編成が行われた。その目的としてはマーリンとテゾーロの役割を完璧に分けるためだった。マーリンとテゾーロはどちらもお金に関連する仕事だったため、テゾーロは財務師団の、マーリンは経済師団の師団長になったのだ。

「まずは自分かられす。環境師団は先月と変わりなくバイゼルの伐採と植林れす。全部自分らでやってるのれ、予算は要らないれす」



「あれは植林と言えるのか分からないが、まあ予算がないならいいでしょう。マージンはどうでしょうか？」

「私のところは特に横領などなく順調に進んでいる。予算は……前回と同じで商会の運営費のみで大丈夫だ」

創造海賊団に入る収入は全てテゾーロの元へと届けられて、その後にはアガリとして団長であるディアンヌへと収められる。そのためリオネス商会の運営費もテゾーロの所から支払われるためここで予算として話す必要があるのだ。

「そうですか……傘下として残した商会の件は大丈夫ですか？」

「特に問題はないな」

「なら私も報告を……集めた金額にある程度余裕が出来たので、団長が求めるあれを造ります」

「あれか……本格的に金を集めに行くのか」

「ええ。完成したら私はそちらの運営に回りますので、ドレスローザに居ることが少なくなります。完成してからはこの会議を2ヶ月に一度にするつもりですが、よろしいですか？」

「私は構わん」

「自分も大丈夫れす！」

「私の報告はこれで終わりです。他になにかありますか？」

これは毎回聞くことだが、手を挙げるものはいつも居なかったのだが今回は違ったのだ。

「私から一つ」

「なんででしょうか？」

「団長の件だ。団長はワノ国へと向かったそうさ。団長が不在の間は副団長に任せるそうさ」

テゾーロは顔を顰めていた。それもそうさ。副団長のキャンドラーは周辺国家への牽制をするために半年以上船に乗っているのだ。そんなキャンドラーがディアンヌから任せられたとしても何も出来ないだろう。しかしディアンヌがキャンドラーに任せるってことは何か考えがあるのだろうか、テゾーロには分からなかったため顔を顰めていたのだ。

「テゾーロ気にするな。私だって団長が何故副団長に任せたのかは分かっているからな」

「……流石団長です。私たちでは考えつかないことを考えていられる」

二人はディアンヌのことを褒めたたえていたが、その場に居たステラは違うことを考えていた。

(団長はそんなこと考えてないだろうな)

『なんでキャンドラーに任せるんですか？キャンドラーはドレスローザに居ることが少ないですよ？』

『えっ？あー、うん副団長だからかな？テヘペロ』

デアアンヌは何も考えてなくて、ステラに聞かれたことを誤魔化すため右手を頭にコツンとして舌をペロツと出して誤魔化したのだった。

## 十人の侍

——鎖国国家ワノ国……その国は世界政府非加盟国ながらも長年海賊の魔の手から守ってきた猛者<sup>つわもの</sup>たちが住む国である。そんな猛者達によつて守られるワノ国も内に秘めた憎悪と外からの悪意には叶わなかった。

元大名家であり、大名殺しの大罪を犯した黒炭の名を持ち周りの人間から憎悪を刷り込まれたオロチ。

そして元ロックス海賊団の見習いとして若い頃に驚異的な成長を遂げた海賊カイドウ。

オロチは権力で……カイドウは武力で……ワノ国は黒炭家と百獣海賊団に乗っ取られてしまった。

——残る希望は自由を愛し求める侍と九人の侍だった。

九里のバカ殿光月おでん♪  
へびににらまれ腰ぬかす♪

笑たら負けよ♪あつぷつぷ月？

おでんは週に一度都に現れ、城の前でおどけわずかな金を貰う。雨の日も風の日も雪の日も……都での奇行は九里にも伝わった。

「おでんがそんなことを……」

ある女はその奇行の裏を読もうとし……九里の民たちは……

「バカ殿だー!!」

「あんな男になるんじゃないよ……みつともない……!!」

「オロチの犬になるくらいなら武士として腹を切れ!!」

おでんをバカ殿と呼び、武士どもは切腹を求める。そんな日々に変化が訪れたのはおでんの帰還から5年目の時だった。

光月から將軍位を奪い取ったオロチが九里へと訪れたのだ。

「ここに新しい武器工場をいくつか建てたい。協力を頼むぞおでん」

「!?いや將軍。船の方は……!?カイドウと……」

「何の話だ?」

おでんがカイドウ、オロチと約束したことを無かったことのようにしたこと、おでんの怒りがフツフツと煮えたぎって来た。そこへ追い打ちをかけるように……

「……ああそれとヒョウ五郎だがおれの手には負えねェんで、カイドウに譲った……まア　じき殺されるだろうな!!それにすがりつくババーが撃ち殺された。ムハハハ

「刺客の妻がみつともねエ!!」

花の都にてワノ国の「裏の顔」花のヒヨウ五郎が捕らえられそれに反発した子分が16名死亡、ヒヨウ五郎の妻も射殺された。

自信が慕うヒヨウ五郎とその妻が殺されたことにおでんは動くことを決意した。

「カイドウを討つぞ!!!」

さて!!お立ち会い!!これよりご覧いただきますは、ワノ国中が涙した光月おでん一世一代の大騒動!!!

彼に拾われ武士となった九人の男が揃い踏み……時は夕刻、真紅に色づく太陽は戦い勇む男達を炎の様に赤く照らし、腰に差した刀も然り、燃ゆる命を映し込む。人々は後にその強さ忠義心を尊び彼らを「赤鞘九人男」と呼んだ。

敵はカイドウ……他に目もくれず、行く道は悲しくも過去の話。行きつく先はおでん光月おでんの公開処刑。

後世に語り継がれる「伝説の一時間」まで、まばたきなき様お願い奉り候!!!

その男たちを眺めるのは九里の市民たちと武士、そして妖しげな女だった。

「想定外だ……!!周到すぎやしねエか!?!なぜわかった。あの無人島で酒をのんで寝てるお前の首を斬りに行く所だった!兵力戦は想定してねエ」

「お前の城にスパイでもいるかもなウオロロロ……。新しく建ったばかりの俺の屋敷を

戦場にしたくねエンで……出向いてやったまでだ……」

「全て嘘だったんだなカイドウ!!」

おでんはオロチ、カイドウとある約束をしていたのだ。その内容は……

『おれが“將軍”の座についたのは!!この国を滅ぼす為だ!!復讐するためだ!!昔——おれのジジイが罪を犯し切腹させられた!!お家は転落そこまではいい!!だが残された親族まで見ず知らずの“正義の味方”に追い回され!!殴られ、あるいは川へ投げ込まれ殺された!!……だからワノ国の奴らは全員復讐されて然るべきなんだ。お前らの身から出たサジだ!!見ろ!!コイツらはカイドウへの“貢ぎ物”だ』

『——ツ!?させるわけないだろ!!“おでん二刀流”——“銃・擬鬼”!!』

『“雷鳴八卦”!!』

『……お前がカイドウか』

『人攫いを止めたいか、おれ達と戦争しても失うものはあまりにデケエぞ』

おでんは民を思いオロチ、カイドウとの戦争をすることを選ぶことをしなかった。オロチからの提案で毎週定時国に“黒炭家”への謝罪の裸踊りをすれば一回踊るたび100人の命を助けて、造ってる船が完成したら……5年後にこの国を出航するという約束だった。

「そうさ……ウオロ口全てウソだった。あの時おれ達は分が悪いと踏んだ。お前が帰還し、ヒョウ五郎と手を組めば……ウノ国中の侍と侠客がおれ達の敵に回る。まだ部下の少なかつたおれ達には苦しい勝負になっただろう……あの時お前が何の犠牲にも動じねエ……前評判通りのイカれた男だったなら……ウオロロロ!!」

おでん達の前に居るカイドウは空想上の生き物である龍の姿をしていた。その大きさは山を包む程大きく、その鱗は鉄を遥かに超える強度を持っていることは明らかだった。

「——だが、お前は誰も傷つかねエ方法を選んだ……!! ニューゲートやロジャーは確かにそんな海賊だった。強エがどこか甘い奴ら……!! お前も同類よ!! バカは踊り続けた!! 裸になって、笑われ、蔑まれながらウオロロロ!! お前にはもう『光月』の威厳も何もねエ!!」

「あの日の判断はアレでよかった。——話を未来へ勧めようぜ」  
おでんの言葉でおでんと赤鞘九人男が圧倒的に不利な戦いに火蓋が切られた。

「おでん様に続けエ!!」

「まてまてこれが侍!!? 強すぎじゃねエか!」

「怯むなこつちにや数がある!!」



今までおでんとその家臣はカイドウ相手に反抗することはなかったため、百獣海賊団は彼らの実力を見誤っていたのだ。

だが、見誤っていたのは侍たちの情報を知らない下っ端だけだったので百獣海賊団の2大看板は、彼らを侮らさず全力で潰そうとしていた。

「ムハハハ……!!お前らがカイドウ様の前に行けると思ってるのか!?お前らはここで死ぬんだよ!!」

「クイーン様!!おでんが包围を抜けてカイドウ様に攻撃を仕掛けました」

「おうそうか………えエエエエエエ!!?お前ら何やってんだ!!………だがしかし!無敵のカイドウ様には誰も勝てねエ。お前ら!目の前の侍に集中しろ!!」

「何やってんだ。しっかり仕事を全うしろクイーン」

おでんは一度の攻撃で百獣海賊団の下っ端たちを軽く吹き飛ばし、百獣海賊団の包围網を突破してカイドウへと攻撃を仕掛けた。

「〃熱息〃!!」

「うわ」

カイドウの口から放たれた超高温の炎は覇気が無ければ塵ひとつ残さない程強力な攻撃だが、おでんの覇気は相当な物なので吹き飛ばされるだけで済んでいた。

「アンドン  
炎皇」

「(燃えてるだど?) 下がれアシユラ!!」

「錦えもん今は任せるぞ」

「ほむらさき  
狐火流……焰裂き!!」

キングの炎を拳に纏った攻撃を錦えもんは拳に纏つてある炎を斬り裂き、覇気を流しているだけの拳へと刀をぶつけた。その攻撃は覇気を纏つていて内側への攻撃を可能とするので、防御力の高いキング相手にも少なくないダメージを負わせていた。

「——っ! 面倒な覇気だな」

「かりゆういっせん  
狐火流……火柳一閃!!!」

「一度ダメージを与えたからと言って調子に乗るなよ。きつふねんどん  
喫不燃皇!!」

炎と共に斬りかかってくる錦えもん向かってキングは、息を思いつきり吸い込み吐き出した。その空気は炎を使うキングから吐き出されたものだからなのか、錦えもんが纏う炎を消し去り、空気の内側にあったキングの炎だけが残つて炎を斬れるはずの錦えもんへと炎でダメージを与えたのだ。

「はあはあ……火傷か……久しぶりでござるな。だが不思議と痛みは感じない。火がダメなら拙者の剣技で勝つただけだ!!」

「面倒な野郎だ」

「はあはあ……斬りてエのはお前の首一つ!!」おでん二刀流」

「ウオロロロ」熱息ボロボレス!!」

「カイドウ!」桃源十拳とうげんとつか!!!」

今度のおでんは熱息に吹き飛ばされず、獣型のカイドウの首へと斬りかかった。その刃はカイドウの硬い鱗を斬り裂き、カイドウへとダメージを与えた。

ダメージを食らったカイドウは獣型を維持出来ずに人型に戻っていった。

「二度と来るなワノ国へ!!!」

「動くなおでん!!」

「助けて父上!!」

「モモ……」

ここに居るはずの無い自身の息子が叫んでいるのに父親として反応してしまった。そこにカイドウは無防備に晒された頭へと金棒をぶつけて気絶させた。その声の主は見た目と声はモモの助のものだが、悪魔の実を使って変化した黒炭ひぐらしだった

おでんの気絶に赤鞘九人男たちは反応してしまつて敵幹部にやられてしまつたのだ。

「嫉妬キデオンの大槌!!」

「えエエエエエ!!カイドウ様が吹き飛ばされた?!!」

「うん。カイドウでもおでんとの死闘は体に来るよね!!」

「何故ワノ国に巨人族が居る!!聞いたことないぞ!!」

「うーん。あれが敵の幹部かな? ねえ君たちのボスのカイドウやられちゃったよ?」

急に現れた女が無敵と信じるカイドウを吹き飛ばしたことに驚いているクイーンとキングの前に巨人族特有の巨体からは考えられない速度で移動してきたのでさらに驚いていた。

「お前は誰なんだ」

「そうだワノ国に巨人がいるなどの報告を受けてねエぞ!」

「そりゃあそうだろうね。私は巨人族じゃないし、ワノ国の人間でもないもん」

女がそう言うのと体が縮んでいき、やがて自分たちよりも小さくなってしまった。

「私は『王下七武海』が一人『創造海賊団団長』のディアンヌだよ。よろしくね♪」

「七武海だと? 何故世界政府に加盟していないワノ国に居る」

「私はおでんに会いに来ただけどね。来てみたら百獣海賊団がワノ国を乗っ取ってるって聞いたから……おでんの討ち入りに乗じて百獣海賊団を潰そうと思ったわけ」  
「この人数を潰せると思ってるのか!? 舐められたもんだな」

ディアンヌの言葉にクイーンはキレて、キングも口には出さないがキレていた。

キレてはいるが感情に任せて動かないところは二人が実力者である証拠だろう。

「カイドウが居ない百獣海賊団なんて雑魚の集まりでしょ」

「ウオロロロ誰が居ないって？ 降三世こうさんせ」

「いくらおでんとの戦いで消耗してたからってあの程度じゃあやられないか」

「引奈落ラグならく!!!」

「乱衝撃クレイジーラッシュ!!!」

吹き飛ばしたところから人獣型となったカイドウが金棒をディアンヌ目掛けて飛んで振り下ろそうとしていた。

ディアンヌはそんなカイドウを見ても冷静さを捨てずに能力を使って地面を幾つもの拳の形に隆起させて覇気を流した。

「ウオロロロ武装色じゃあ足りねエぞ!!」

カイドウの金棒はディアンヌの武装色の覇気が流れる土の拳たちを破壊し尽くしても勢いは止まらずディアンヌの脳天へと変わらぬ勢いで振り下ろされた。自身の武装色にある程度の自信があったディアンヌは拳を突破して来た金棒に対応出来ずにノーガードで受けて気絶してしまった。

## 煮えてなんぼのおでんに候

——カイドウ率いる百獸海賊団とおでん率いる赤鞘九人男の壮絶な戦いにより燃えた兎井の深い森の火の手は5日後の雨の日まで消えることは無かった……。

そんな戦いに敗北した九里の大名光月おでん以下十名は花の都にて投獄され、  
「將軍への謀反人」として処罰の決定を待っていた。理由も知れぬ事件に民衆からの目は冷たい。

「失望させておいて……更に外の海賊と組むなんて……オロチと同じじゃねエか」

「おい！聞こえたらどうすんだ！」

「す、済まねえ。でも毎週の裸踊りを見れないのは残念だな……」

「侍達の処罰が決まったぞ!!極悪なる十名の侍と海賊は3日後!!大衆の面前にて釜茹での刑に処す!!!」

——おでんの処刑が決まった頃、ディアンヌはおでんと過去の話で花を咲かせていた。ロジャー海賊団解散後におでんはどんなことをしていたのか、ディアンヌがどうしてここに来たのかなど話だったが、おでんの家臣達は海賊であるディアンヌを疑惑の

目で見ていた。

「いやー、おでんの裸踊りは面白かったよ」

「酷いもんだなア……まああの踊りはしつかりと足腰を意識して踊った傑作だからな」  
「おでん様!!何故海賊みたいな屑と話していられるのですか!!」

海賊が屑ねえ……まあ否定は出来ないんだけどさ……あんたら侍も屑なんじゃないのかな? 赤鞘九人男の筆頭と言える錦えもんは元々チンピラで都を崩壊寸前まで追い込んでおいて、大名の家臣になつてるし……アシユラ童子だつて無法地帯だつた九里で自由にしてたらしいし……。

「ねえ錦えもんだっけ? 君はさ人のことを屑つて言える程偉いのかな?」

「何を言うか!!拙者はおでん様の家臣としてワノ国を守るために戦つたのだぞ!!」

「はあ……私は昔の君を知つてるよ。山の神と呼ばれる巨大な白い猪の子供を盗んで花の都を崩壊寸前まで追い込んだ屑が何言つてんだよ」

「錦えもんはおいどん達を引つ張つていつてくれるんだど!!屑という言葉は撤回するんだど!!!」

「はあ……君もさ無法地帯だつた九里でチンピラやつてたんだよね? そんなん私たち海賊とそう変わりないじゃん。そんな人達に屑と呼ばれる筋合はないと思うけどな」

ディアンヌの言葉には赤鞘九人男を貶すものだったが、おでんは何も言わず静観して

いた。他の赤鞆九人男たちもディアンヌの言葉は棘はあるものの事実しか述べていないので擁護するようなことは言えなかった。

「済まんないディアンヌ。こいつらも悪気は無いんだ。カイドウがオロチと組んでワノ国を乗っ取りやがったからな」

「別に構わないよ。私は自分が屑じゃないとは思ってないもん。自分の復讐のために他の人を巻き込んでいる時点で私は屑なんだから……」

「……そうか」

ディアンヌの言葉に先程まで騒がしかった牢獄は一気に静まり返った。それはディアンヌの過去を考えてなのか、それともディアンヌから漏れ出た覇気が原因なのかは分からないが……。

ディアンヌとおでん以外が眠りについた頃二人は静かに話していた。

「ねえ、おでんはこれからどうするの？」

「おれはもう逃げねえ。これまで自由に生きてきたんだそのケジメは付けねえと……新聞で読んだがロジャーの死の様はカツコよかったんだろ？おれも最後までいいはカツコよく散ろうじゃねえか」

「そう……私は海楼石の錠を付けられてるけど錠は盗んでおいたからいつでも逃げられる。私の力があればこんな牢は簡単に破れるけど逃げないの？」



「ディアンヌはおでんは考えを変えることは無いことが分かっていながらもそれを聞いたのは大事な家族とも取れる仲間を失いたくなかったからだ。」

「もしおれが逃げたとしたら、カイドウはおれを追うだろう。そんなことになったら今度こそワノ国全域に火の手が上がるだろうな。カイドウに言われた通りおれは甘ったれちまつたからな……ワノ国の民を危険に追いやれねえよ」

「そっか……なら最後は私が見守るよ」

「ありがとなディアンヌ。……頼みたいことがあるんだが」

「何？」

「おれが死んだ後の事だが——」

二人の話は朝日が覗く頃まで続いていた。その話が終わったのは錦えもんが目を覚ましたからだった。

——三日という短い時間はあつという間に過ぎおでんと赤鞘九人男と海賊という將軍オロチに仇名した逆賊たちの釜茹での刑が行われる日となった。

しかし釜茹での刑が簡単に行われることは無かった。それは投獄されていた一人であり、その中で厄介度で言えば一番である海賊のディアンヌが脱獄していたのだ。その事件はカイドウによって直ぐに解決されるものだと思っていたが……。

「ウオロロロあの女を捕まえには行かねエぞ」

「なっ!? 何故だカイドウ!! お前の力があれば簡単だろ!!?」

「あの時のアイツは知らなかったから一撃で沈められたが、二度目はそう簡単じゃねエ。そうなつたらおれも無傷じゃすまねエ」

「な、ならどうするんだ!!」

「放つておけばいいだろ。あいつはこの国の人間じゃねえんだ」

これがもしおでんだとすればワノ国の大名たちはおでんへ味方し、カイドウにも勝てるかもしれないので捕まえに行つただろう。しかしディアンヌは外から来た海賊なのでディアンヌ一人逃げたところでこの国の人間は味方しないので戦力は変わらないのである。

それにカイドウの言う通りカイドウと戦つた日のディアンヌはカイドウとの覇気の差を甘く見積つていたため攻撃を受け止めるといふ選択をしたが、覇気の差が分かつたディアンヌは受け流すことに徹するだろう。そうなればカイドウとてディアンヌとの戦闘は体力を削ることとなる。体力を削つた後にもう一度おでんと戦えば負ける可能性もあるのだ。

「ウオロロロお前の目的はこの国への復讐なんだろ? ならあいつがどうなろうとどうでもいいだろ」

「——ああそうだな」

そんなことを言うカイドウからは有無を言わさない覇気が感じ取れた。

「これより光月おでん並びにその家臣九名の“公開処刑”を執り行おう!!」

「海賊が居るんじゃないか?」

「先に殺されたんじゃないか? 海賊なんてのはカイドウみたいなのだろうか!」

「前も聞こえねえようにしろって言ったろ!」

「す、済まねえ」

花の都の市民たちはカイドウという海賊を知っているので、処刑される予定だった海賊は危険だから先に殺されたと思っていた。

事實は違いディアンヌは海楼石の錠を盗んだ鍵を使って外し、大地を操る力で地面に穴を開けて外へと逃げ出たのだ。逃げた後に穴を元に戻すことで追っ手が来ないように対策をしていたのでディアンヌは簡単に逃げる事が出来たのだった。

「海賊と組んでまでしてまカイドウには勝てなかったんだな」

「強さだけは本物だと思っていたのに……なんだったんだ? あいつ……」

罪人であるおでん達は処刑される場である釜の前まで来たのだが、そんなところでおでんはとある一言を放った。

「チャンスが欲しい!!おれは生きねばならない」

「おいさつきと入れ!!命乞いなんて笑わせんな!!」

そう言ったオロチの家臣は誤って煮えたぎっている釜の中へと足を滑らせてしまった。そんな彼は一瞬で燃えて、焼け死んでいった。

それを見た観衆とカイドウ、オロチに向かつておでんはとある一言を放った。その言葉聞いた者は、そんなのは無理だと嘲笑う者……、今更何言つてると侮蔑する者……、反応は千差万別だったが、おでんの目は何かを覚悟する者の目だった。

「十人全員で釜に入る。もしお前達の決めた時間耐えきった者がいたら解放してくれ!!!」

「一瞬で死ぬ処刑だぞ?!ムツハツハツハツ!!」

おでんの言葉にオロチはバカにするように笑いおでんの要求を無視しようとしたが、この国の将軍であるオロチを差し置いてこの場を仕切っているカイドウは違ったのだ。

「時計をもつてこい!!」

「はっ」

「一時間だ!!ウオロロロ!!耐えてみる風呂でものぼせる時間だ!!」

「二言はないな?」

「勿論!!」

おでんはカイドウの言葉を聞いて安心したのか人を簡単に焼き殺す煮え滾る湯の中へと入って行った。

観衆は直ぐに死ぬと思っていたのだが、その考えは直ぐに違った思わせるのだった。おでんは自分に続こうとする家臣達を止めて赤鞘九人男が乗る橋板を持ち上げて自分一人で湯の中に入っている選択を取ったのだ。

「なんだありゃあ!? 家臣共が油に浸かってねエじゃねエか!!」

「ウオロロロロ!! 確かに10人釜に入ってるやがる!! くるしうねエぞ!! おでん!!」

場を取り仕切るカイドウが全員入っていると云ったので、おでんのやり方はセーフということになった。今からの一時間は後に伝説の一時間と呼ばれる物になるのだが、そんなことおでんにはどうでもよかった。おでんは家臣の皆に生き延びてこの先のワノ国を任せたいだけなのだ。

——観衆が思っている以上に地味な絵が続いていたので、愚痴を漏らし始めた。その愚痴の中に「バカ殿」という言葉があったのでくの一のしのぶの堪忍袋の緒が切れたのだ。

「誰がバカ殿だ!! もう一度言ったら殺してやる!! バカはお前達だ!!」

堪忍袋の緒が切れたしのぶはおでんが何故裸で踊っていたのか……、オロチはどんな思想の元將軍になったのか……、などのことを全て暴露したのだ。

急に自分たちがおでんに守られていたなどと言われても納得出来ない民衆は混乱していた。

オロチを批難する言葉を放っているしのぶを止めたのは元光月お庭番衆であり、現在はオロチお庭番衆の隊長である福ロクジユの手によって止められたのだ。

「『真実』など混乱を招くだけだしのぶ。『將軍に逆らった『バカ殿』が死ぬ』それで皆理解し刑はやがて終わる」

「福ロクジユ!!」

「お前も……覚悟の上で喋ったんだろいな」

「わたしはもう!!彼らと生死を共にした!おでん様の家臣だ!!お前には従わない!!彼らにもしもの事があれば『光月』と共に死ぬ覚悟!!……いいえ!!全員生きて……次こそあんた達を討つ!!」

「夢だ」

オロチにおでんの処刑を止めるように願う民が増えて来た。その言葉を嘲笑うかのようにオロチの兵は民衆に向けて矢を放った。それを見た民衆は皆口を噤んだ。

「復讐者」の怖さを民衆は瞬時に理解した。今まで見ていた『長引いている処刑』こそが今ワノ国で民衆が知る唯一の『希望』だったのだ。

そんなおでんは家臣だけに聞こえるように小さく呟いていた。

「お前達……!!もしこの釜茹でをしのいだら、おれはこの国を“開国”したいんだ……!!」

「それは前にも言っておられたこの国の“鎖国”に光月が関わっていると……」  
「一体海で何を知ったのです……!?!」

「大昔この国を海外から閉ざしたのは……『光月家』だった!!——それは……“巨大な力”からワノ国を守る為……!!『ワノ国』は、いや世界はある人物を待っている……!!その物が800年の時を超え現れた時、迎え入れ協力できる国でなきゃならぬ。——はつきり言うぞ……あいつらは今日……必ずおれを殺す」

「そんな……!!でも本当に釜茹でに耐えきれば!!もう三分の一経過してます!!」

「おれの代わりに『ワノ国』を“開国”して欲しい!!」

「それならおでん様と共に……」

「あなたの夢なら拙者達の夢でござる!!!」

「——よく言った!!」

『あと30分!!』

もはや熱気すら殺傷能力を得た地獄!!滾る油がおでんを燃やす!!

「なぜ生きている!?!もっと温度を上げろ!!!」

——しかしおでんは死ななかつた!!

『あと10分!!』

「熱じや殺せねエのか!? コイツは」

『あと5分!!』

『あと1分!!』

『10秒』

『3秒!!』

『1秒!!』

『やったア~~~~~!!!』

「おでん様の勝利ぜよ~~~~!!! 誤解も解けた!!! 再び国中が味方!! 覚悟せエよカイドウ



!!!

「銃殺の刑”に変えることを……一分前に思いついた。さらに一家皆殺し!!」

「ガキみてエなへ理屈を」

「頼んだぞ!!お前ら……!!『ワノ国』を開国せよ!!」

オロチのクソみたいな屁理屈のせいでおでん達は銃口を向けられてしまった。それを止めようとする民衆も殺したので、民衆には何も出来なかった。

しかし覚悟を決めていたおでんは仲間たちにワノ国の未来を任せることにしたのだった。

おでんは橋板を釜を囲う百獣海賊団の下っ端より外側に投げ飛ばした。赤鞘九人男達は直ぐに理解したのか涙を流しながら九里を目指して走り出した。

そして一人残されたおでんはカイドウと少し話していた。

「——どの道お前の体はもう死んでいる筈。せめてもの“情け”だ。おれが撃つてやる。『光月』の時代はここで終わりだな!!全員死ぬ……」

「……ウチの侍達をナメンじゃねエぞ!!!」

「見事な死に様とお前は語り継がれる」

「忘れてくれて構わねエ……俺の魂は生きて行く!!」

「ババアの件は悪かったな。殺しておいた」

「真面目だな……せいせい強くなれ。おれは……」  
「一献の」……「酒にお伽になればよし」……「煮えて」……「なんぼのオウ」

カイドウによつて撃たれてしまったおでんの最後の言葉を民衆は泣きながら叫んだ。

『「おでんに候」!!!!』

——おでんの処刑が執行される時間のおでん城では、おでんの妻であるトキと子供のモモの助と日和が食事をしていた。

モモの助はおでんの処刑を知っているのか泣いていた。日和は何故兄が泣いているのか分からないのか泣く兄を心配していた。

「あにうえ？」

「日和ちゃん。君のお兄ちゃんは父親の処刑を知っているから泣いているんだよ」

「誰!!」

突然した声に足を痛めていようと元々侍だったトキだけは反応した。二人の子供は声に反応はしたが、悪意を感じられない声だったため特に体を動かすことをしなかった。

「久しぶりだねトキさん」

「誰なの！」

トキが声のする方の襖を開けるとその先に居たのは昔海賊の船に乗っていた頃に見ていた可哀想な過去を持つ美少女が少し成長していた姿だった。

「ディアンヌ？」

「そうだよ。久しぶりの再会を喜びたいけど時間はそこまでないから単刀直入に言うね。貴女の子供を国外逃亡させたい」

「……それはおでんさんの願いなのか？」

「そうだよ。おでんは自分が死ぬことを分かった。だから自分の子供たちには生きて欲しいって思ってたみたい」

「あら私はいいかしら？」

二人の掛け合いは一見軽い話題のように見えるが、その内容はおでんの死を暗示するものであり、もうおでんに会うことが出来ないことが二人の幼い子供でも分かるものだった。

「だってトキさんはおでんを置いて生きようとしないでしょ？」

「まあそうね」

「せっしやは母上を置いて逃げたりなどしませぬ!!」

「モモの助君……君は国外逃亡が逃げだと思っっているの？それなら自分の力を知らない馬鹿としか言えないね」

「ねえ……貴女について行ったら私は強くなれますか？」

そう言う日和の目には兄にはない何かがあり、兄よりも強い意志を感じ取れた。それはディアンヌやおでんに近いものであったが、それが何かはまだ誰にも分からない。

「そうだね。私に着いてくれば日和ちゃんの才能次第だけどおでんやカイドウレベルまで強くなれるかもしれないよ」

「私は……ついて行きます」

「なら早く逃げるよ。カイドウの追っ手がもうすぐで着くから……つてもう遅かったか」

ディアンヌは日和を抱き上げておでん城から飛び降りた。その先に居たのはカイドウの追っ手と、それから逃げてきた錦えもん、カン十郎、菊の丞、雷ぞう、河松の五名だった。

赤鞆九人男の五名はもう満身創痍であり、逃げるのがやっとであった。しかしディアンヌが日和のことを抱き上げているのを見て刀を振り上げ攻撃をしてこようとしたのだ。その忠義は自身の命より重いものだとディアンヌも分かっていたので、少し手助けをしたのだ。

「サンドワール  
砂の渦」

赤鞘九人男を追っていたのは百獣海賊団の下っ端が多かったので地面を流砂のように柔らかくすることで追っ手の大多数の機動力を奪うことに成功したのだ。

最もある程度の強者には通用しないので、下っ端の中でも多少強い者は突破して来たのでそこは獣型になり拳を振るうことで解決したのだ。

「君たちは日和ちゃんのことよりトキさんのことを心配してあげれば？ さっきカイドウが飛んで来てたから危ないんじゃないの？」

「くっ……トキ様を助けに行くぞー！」

五人の侍たちはカイドウがおでん城へと攻撃を仕掛けているのを知ったので急いで城の中へと入って行った。

その間にディアンヌはある場所へと向かって行った。その場所とはカイドウという強固な守りが無くなったオロチ城へと向かったのだ。

「将軍オロチ……今君を殺せばワノ国をカイドウに完全に乗っ取られるから殺さないけどいつかは殺すから」

「おい!! 兵士共は何やってんだ!!」

「そんなの殺したに決まってるじゃん。スマシだったけ？ あれは親方タニシの念波をツノ電伝虫で妨害したから連絡は来ないよ」

「……何しに来た」

「宣戦布告だよ」

そう言ったディアンヌが見せたのは自身の着物に隠されていた日和の姿を見せたのだ。

それを見たオロチは直ぐに今朝脱獄した海賊がコイツだと気付き自分の能力を使って日和を始末しようとした。

「死ね!!」

オロチの能力はカイドウやディアンヌと同じ悪魔の実で最も希少とされる動物系幻獣種のヘビヘビの実モデル八岐大蛇やまたのおろちだったのだ。

オロチの能力が、幻獣種だと分かったディアンヌは幻獣種特有の特殊能力に警戒し、先程までしていた油断を無くしたのだ。油断しなくなったディアンヌはトキから預かったおでんの刀の片割れである天羽々斬でオロチの首を斬りとったのだ。

斬りとったと言っても八つある首のうち本物と思われる首以外を斬ったのでオロチが死ぬことは無いだろう。

「いつかこの子が君を殺すから」

そう言つてディアンヌは城を去ったのだ。

城を去ったディアンヌは入国した際に隠した船に乗り込み、創造海賊団の縄張りであ

るドレスローザへと帰って行った。

おでんが亡くなった今カイドウに対抗出来るのはディアンヌたった一人だったので、唯一の希望であつたディアンヌが出国したワノ国は長い夜を迎えるのだつた。

## ディアンヌブートキャンプ

——国王が戦争を好まないため決して豊かでは無かったドレスローザは大きく発展を遂げていた。

創造海賊団がドレスローザの経済網を掌握したことによってドレスローザの経済は大きく発展した。荒れた土地はディアンヌとレオグロウによって耕され、商業はテゾーロとマーリンの手によって発展した。工業も発展を遂げた。これはリク王の方針とは違う戦争に使う道具を造る産業だが、創造海賊団は「これは防衛に使う物だ」と民衆に公にすることでリク王を黙らせたのだ。しかし条件として国内での製造を禁止されたので近海の島々へキャンドライが出向き開拓して工場を完成させたのだ。

農業、商業、工業の全権を握る創造海賊団はドレスローザに取って無くてはならないものとなりつつあるだ。

そんなドレスローザの地下に造られた創造海賊団が占有する船着場にある1隻の船が入港したのだった。

「ふう……この国に帰ってくるのは何年ぶりかな？」

「何者だ!!」



「うーん？何者って……分からないのかな？あー、この二年間で増えた船員かな？分からないならマーリンでも呼んできてよ」

「なっ!!師団長を呼び捨てにだと?……不敬に値するぞ!」

「はあ……あんまり暴れたりしたくないんだけどなあ。まあ仕方ないか」

そう言っつてディアンヌは能力を使おうとした。しかしとある一声によつて能力が使われることはなくなったのだ。

その声の主はドレスローザの経済を握る創造海賊団の三人しかない師団長の一人  
“女傑”マーリンだった。

「団長!!」

「マーリンじゃん。なんで分かったのかな?」

「団長がドレスローザを空けてから二年の月日が経つたんだ。私も覇気は相当極めてきた」

「それもそっか!」

「それでその子は?」

マーリンが指摘したのはディアンヌの足にくつついてマーリンの視線から隠れるようにしている少女のことだった。

自分の仕える主が二年程居なくなつて、帰つてきたと思つたらどこから見ても二歳以

上の子供を連れてきたのだ、配下としては何事かと思うのは仕方ないことだろう。

「この子は……隠し子」

「隠し子か……えエエエ!!」

「うそうそ。マーリンでもそんな反応するんだね」

「当たり前だ。……それでその子は何者なんだ」

ディアンヌは日和のことを正直に話すかを迷っていた。その理由としては、創造海賊団で実力をつけていくうちにその名が広まってしまい、カイドウやオロチの耳に入つてドレスローザへと攻撃を仕掛けて来ることを案じていたのだ。

ディアンヌとてカイドウ相手に負けるつもりは無いのだが、勝てる保証もないのだ。それにプラスして百獣海賊団の幹部は実力者揃いなのだ。ディアンヌがカイドウに勝てたとしてもディアンヌも認める赤鞘九人男相手にたった二人で勝利した幹部には今の師団長では勝てないだろう。そして彼らが居るのがワノ国という点でもドレスローザでは勝てない。ワノ国は武器の生産に関してはトップクラスなのだ。ただの武器ですら量では勝てても質では負け、海楼石を加工する技術がワノ国にはあるため能力者の多い創造海賊団では勝てないのだ。

「この子は……小紫と言つてワノ国の孤児だよ」

「……そうか」

ディアンヌの言葉に嘘があることはマーリンの目には明らかだったが、それ以上マーリンが追究することはなかったのだ。

それにディアンヌが言った嘘は偽名だけであり、両親であるおでんとトキが亡くなったため日和は親が居ない孤児なのだ。

「こんな所で何していたんだ？」

「ああ……それはね。見てないうち船着場も大きくなつたなあ」って思ってただけ」  
「そうか。……団長が帰って来たのだ。コロシアムで顔見せでもするか」

二人の会話を聞いて船着場にて、自分が所属する創造海賊団を纏めあげるトップ相手に失礼な言葉を放った見張りの下っ端は顔を青くしていた。

それを見たディアンヌはドレスローザを二年空けていた自分も悪いと思ひ真実を話すことは無かった。マーリンは見張りの方を一瞬見たが、ディアンヌの言葉を嘘と言う理由もないのでその場を後にするのだった。

「それもそうだね。映像電伝虫で挨拶でもしよっか」

——「ドレスローザ」、  
「コリーダコロシアム」

この場所は所属する剣士や腕自慢の他国から来た戦士たちが戦い市民に魅せる「神聖な場所」だった。

そんなのは昔の話。今では所有権を創造海賊団によって買い取られ大規模な改修が行われた。その内容としては今までの無骨な見た目を綺麗に、そして戦いだけではなくエンターテインメント・ショーを魅せる場所へと変わったのだ。

「なあ今回の召集ってどういうことだろうな？」

「ああ、今までも何回か師団ごとに呼び出されたことはあるが、今回は全師団への召集命令だろ？ それも副団長じゃなくてマーリン様からの命令だろ」

「副団長からじゃなくて師団長からの全師団への召集命令ってのはどういう事態なんだ……」

『急に集まってもらい悪かったな。だがこれは緊急の事だから仕方ないと思ってくれ』

創造海賊団の全師団から下っ端がコリコロシアムへと集められていた。師団長が自分の師団の下っ端を召集命令で集めることは何度かあったが師団長から全師団への召集命令など初めての事態だったため下っ端達はザワついていった。

そこへマーリンの声が映像電伝虫から聴こえた途端ザワついていった会場から一切の音が消えて、残ったのは沈黙だけだった。

『まず初めに……この召集命令は私からではない』

沈黙していた会場がまたざわめきに包まれた。師団長以上が発することが出来る。召集命令を師団長でもなく副団長でもないとするが発することが出来るのは一人し

か居ないだろう。

しかしその人は長い間帰ってくることはなく古参の下っ端以外には顔すら知られてないため創造海賊団のトップはキャンドラードと言う人も少なくなかった。そんな人が帰って来たとなるとその人のことをどのような人かと推測する人がコロシアムの大半を占めたのだった。

『お前らも分かっているだろうが、これは団長からの召集命令だ。この二年で新しく入ってきた者共は顔を知らないだろうからな顔見せとして召集させて貰った』

『私が『創造海賊団・団長』のディアンヌだよ。私が可愛いからって襲っちゃダメだぞ！私はこんな見た目してるけど結構強いからね』

ディアンヌの姿を初めてみた創造海賊団の船員は動揺を隠せなかった。それはディアンヌの幼すぎる姿だ。ディアンヌは自分のことを可愛いと言ったが、可愛いらしいその姿は大人と呼べる程の身長ははなく、その童顔と相まって自分は大人だと背伸びをしている少女としか思えなかったのだ。

「おいおい可愛いは可愛いが……襲えるほどの歳じゃねエよな」

「ど、」

「ど、」

「どストライクだ!!」

「うわっ!? ロリコンだ」

創造海賊団の眠る性癖を目覚めさせたその姿は青い瞳に鮮やかな水色の髪……そして着物を着ていた。

『団長……小紫が可哀想だ』

『いや、ごめんね。小紫もごめんね』

『大丈夫です』

映像電伝虫に出ていた小紫が映像から消えるのと同時に横からその声の正体が出てきた。女性は茶色の髪をツインテールにすることで子供っぽさを見せるが、大人の女性を象徴するその豊かに育った体が全て打ち消していた。

『私が団長のディアンヌだよ。こんな可愛いのが団長だと認められないと思う人が居るなら真ん中の舞台に出ておいで相手してあげるから』

『マーリン様には勝てる気がしないがあれなら勝てるんじゃないか?』

『だけだよ。もし勝ってもマーリン様が出てくるんじゃないか?』

『私に勝てた人が居たら団長の席を譲ってあげるからマーリンを含めて副団長と師団長に命令できるよ』

ディアンヌのその言葉を合図に数十人程舞台へと降り立ったのだ。それらは全てディアンヌが不在にしてた二年間に創造海賊団の船員となった者たちであり、ディアン

又の実力を知るものたちは降り立った者たちへと合掌していたのだった。  
『それで全員かな？じゃあそっちに行くね』

ディアン又は映像電伝虫の画角から消えた数秒後に上空から小さな少女が降り立ったのだ。

映像越しだと分からなかった覇気を持たざる者でも分かるであろう圧倒的強者の放つ威圧感だった。それを見てある者は腰を抜き……、ある者は気絶し……、ある勇氣ある者は足を震わせながらも剣を構えた……。

「うーん、立ってるのは数人しか居なかったか。じゃあどつからでもかかっておいでよ」「行くぞ!!」

圧倒的強者の前にバラバラだったはずの部下の心は団結した。その攻撃はディアンも驚く驚異的なチームワークだった。

——それが強者だった場合だが。個々の実力はチンピラに少し技術が身に付いた程度の実力しかない者のチームワークでディアン又は勝とうなど蟻が十匹集まって象に勝とうとする程無謀だった。

「これは弱すぎるよ。カイドウの所の下っ端はもうちよつと強かったよ!!」

ディアン又は剣を抜いて後ろから斬りかかってくるのを無視して、正面に居る男へと寸止めで拳を振るった。拳は寸止めで止まったが拳を振るった時の風圧は男へとぶつ

かりコロシアムの壁へと吹き飛ばして行った。

ディアンヌがわざと無視してるとも知らずに後ろから斬りかかった男は剣が肌につかると同時に折れてしまった。男の物で折れてしまったのは剣と心だった。

「武器も弱いね。覇気を流して無いとはいえ私の素の肌で折れちゃうなんて……ワノ国の刀は覇気を流さなくても斬れ味は良かったのに……」

そんな惨状を見た舞台上に立っている数少ない船員も腰を抜かしてしまった。

ディアンヌはそんなのには興味がなく自分の兵と武器をワノ国の物と比べてしまい落ち込んでいた。

「見てるんでしょマーリン。どのくらい強くなったか知りたいから私とやらない？」

「流石団長だな。私も団長の強さを知りたい気持ちはあるが周りへの被害が心配だからやめておこう」

はあ……思った以上に兵が弱くて落胆しちゃったよ。これって私のところが弱いかな？……それともカイドウの所が強かったとか？でもカイドウの性格的に部下を強くするっていう方針より元々強いのを招き入れるって感じだから参考にならないな。こんなに弱いならトンタツタ族を部下にした方が圧倒的に効率がいい。でもトンタツタ族は数が人間に比べて少ないからレオちゃん的环境師団分の子しか入ってくれなかったんだよね。



……師団長に修行でもさせようかな……ワノ国の件が失敗した今暇なのは……私か。私が直接部下達に修行を付けるとしてどんなのがいいかな……“六式”は一通り教えるとして、覇気は才能だしな……覇気が使えるようになったら下つ端から昇進させるつてのもいいかも？

「ここに降りてこなかった人にも言えるけど君達は弱過ぎるよ。だからさ私が修行を付けてあげるよ。その名は……“ディアンヌブートキャンプ”だよ!!」

まるで黒人男性が考案したダイエツト法のような名前の修行だが、その中身は考えられないほどキツイものだった。

その内容としてはまず毎日一キロずつ重くなっていく重りをつけながらの筋トレ……そして一週間に一度行われる自分の所属する師団長からの攻撃を避ける……これを一年行うのことだった。

「これが無理だと言う人は辞めてもらっても構わない。けど外から来た人はドレスローザに住む場所はないから小舟一隻でどっかに行つてね」

(あー、辞めさせる気は無いのね)

小舟で新世界の海を渡れなど死刑宣告に等しい者だ。ディアンヌブートキャンプ程度をクリア出来ない弱者に新世界の海を渡ることなど不可能だった。

「あ、でもこの修行で覇気に目覚めた才能あるものにはご褒美があります」

「ご褒美だ?!」

「エツチなことを想像した君!残念でした!!ご褒美は新たに創る役職への昇格だよ!!昇格したら仕事も増えるけど給与と権限が副長程じゃないけど貰えるよ」

ディアンヌによって召集された下っ端達は昇格するために今まで以上に必死になっていくのだが、その才能に恵まれた物はひと握りも居ないだろう。

しかし修行に打ち込む理由が出来た船員たちの意欲は今までやってきた仕事以上のものだった。

「そう言えば他の師団長達は何処にいるのかな? キヤンドラーの姿も見えないけど」

「副団長は工場での監督をしている。私以外の師団長だが、テゾーロは自分の島での開発に力を入れていて、レオグロウは例の植物島で植物の研究をしている」

「……みんな仕事をしてるんだね」

幹部たちが仕事を全うしているのに自分はワノ国での仕事を失敗して帰って来たことに凹み、現状トップである自分がわざわざ出向いてやる仕事は特にないたため無能な無職という結果だけが残るのだった。

## 眠れる獅子

——ドレスローザを中心に勢力を拡大している創造海賊団だが、元々四強と呼ばれていたビッグママ海賊団、白ひげ海賊団、金獅子海賊団、ロジャー海賊団のうちビッグママ海賊団と白ひげ海賊団も縄張りを大きく広げていた。

その理由としては金獅子が表舞台から姿を消したことだった。金獅子がインペルダウンから脱獄したことは海賊や一般人からしても恐怖する出来事だったが、金獅子は脱獄後にナワバリの島を捨て置いてどこかへ消えてしまったのだ。結果そのシマを取り込もうとビッグママが動き、それを邪魔しようとして白ひげも動いたのだ。二つの大海賊が小競り合いを起こしているうちに二つの海賊も動き出したのだ。それはワノ国を乗っ取った百獣海賊団と若くして王下七武海に所属する創造海賊団だった。

「金獅子の縄張りはある程度取れたけど、量ではカイドウのところには負けちゃったな」「仕方ないだろ。おれたちは七武海だから入りたがる海賊が少ねえんだ。それに海賊団をやってきた年数も百獣の方が長エんだ」

「七武海ねえ……そろそろ潮時かな？」

「流石に早いんじゃないか？ドレスローザと海賊としての地盤は強固の物となったかも

しれねエが……辞めたら即海軍は攻めてくるだろ」

「そうなんだよねえ。私が七武海を辞めたら中將以上の海兵を送り込んでくるのは確かだろうし、因縁のあるアイツが来る可能性もあるからね……」

現在の海軍は黒腕が現役を引退したことにより唯一の大將となったセンゴクだったが、そのセンゴクもとある事件を切つ掛けに昇格した。センゴクが昇格したことにより大將の席が空白となったが、その事件の関係者だった中將が大將の席に座ることになったのだが、そのうちの一名がディアンヌとの因縁を持つているのだ。

「クザンか……それと同レベルの『自然系』<sup>ロギア</sup>が二人も居る。やつぱりまだ早いと思うぞ」

「そうだね。抜けるとしたら例えば……大きな戦いでもあつたら抜ければいいつか」

「七武海はそのままでもいいとして、これからどうするんだ？この国で出来ることはあまりないだろ……あるとすれば国家の乗っ取りくらいか？」

ドレスローザは天竜人となったドンキホーテ家からリク王家へと譲り渡された国である。

そんなリク王家は国民を思う気持ちと戦争を好まないことで国民から信頼されていたが、今では創造海賊団の方が国民に信頼されているだろう。

しかし性格は国民に好かれているが彼が持つ力ではドレスローザを豊かな国にする

ことは叶わなかっただろう。そこへ現れた救世主とも呼べる創造海賊団はドレスロージャを一気に発展させた。その実績により国民からの信頼を得て、彼女らを王へと考える国民も少なくなかったのだ。

「キャンドラーは国乗っ取っちゃってもいいの？」

「おれはこの国が強く豊かになりやあいだけだ……それに今の王には何の思い入れもないからな」

「まあ気分しだいかな？特にあの王族がムカつくとか気に触るとかはないから潰すつもりは無いけど……乗っ取りは考えておくよ」

「ディアンヌの気分次第で潰すされると知ったらリク王家はどんな気持ちだろうか……王族だろうと容易く潰せる力を持つのがディアンヌ達創造海賊団なのだ。

そんな力を持つディアンヌ達でも気合を入れて相手をしなければいけない相手が居るのだ。

「団長!!」

「ノックぐらいしろ!」

「別に気にしなくていいよ。で、どうしたのかな？」

「ドレスロージャ上空にき……金獅子」の船が!!」

自分が尊敬するロジャーと同じ時代を生きながらもロジャーの死に様を見ることが

叶わなかった大海賊「金獅子」のシキがドレスローザ上空に現れたのだ。

彼が持つ能力のフワフワの実により船を浮かしてドレスローザへと訪れたのだ。

船が一隻しかないことから金獅子はドレスローザを攻めに来た訳では無いとディアンは考えているが、金獅子一人居ればドレスローザを滅亡へと追い込むことは不可能ではないのでディアンは見聞色の覇気を最大限まで発動させていた。

「インペルダウンを脱獄してから表舞台から姿を消していた筈の金獅子がなんの用かな？」

「ジハハハおまえがロジャーの所に居たのは知ってるぞ！そんな野郎が世界政府の犬になってるのが許せねえんだよ!!」

「なに？それだけを言いに来たの？」

「いいや、おれはお前の実力を分かっているぞ。おれの下につけ」

「嫌だつて言ったら？」

「そんな時は潰すまでだ」

シキの言葉を最後に二人から言葉が放たれることはなかった。放たれたのは弱者は気絶へと追い込まれてしまう程の圧を持つ覇気だった。

二人の覇気はドレスローザ内まで届き、国民たちの一部は気絶してしまい……そして

副団長はいち早く覇気に気付き、その場所へと急いだ。

「お前も器だとは……器を持つ者がア!!政府の犬になるなどロジャーを侮辱してやがる!!!」

「私が船長を侮辱してるだつて?決めつけはやめて欲しいよ。私は船長を尊敬してるし……船長を侮辱してるのはアンタの方じゃん金獅子!!」

「なんだと?」

「船長に勝ち逃げされて……マリソフオードへ攻め込んだはいいもののセンゴク、ガープに敗北して……脱獄したと思つたら表舞台から消えるなんて……それでもロジャー船長と同じ時代を生きた大海賊かよ!!!」

ディアンヌの言葉はシキにロジャーや白ひげと争いながら勢力を拡大していた昔を思い出させた。

ロジャー亡き今、白ひげは海賊らしい動きを見せずナワバリを守りながら船旅が続いているような海賊になつてしまった。そんな自分と対等な実力を持つ海賊が居なくなつた海に金獅子は興味が無くなつてしまったのだろう。

しかしディアンヌの言葉がシキの金獅子海賊団の提督だつた頃の海賊としての熱量が再燃したのだ。

「言つてくれるじゃねエか小娘!!だがおめエみたいな海賊がまだいてくれて嬉しいぜ

!!!

「私はアンタの下につくつもりはないけど潰すのかな？」

「力でねじ伏せてやるよ!!——獅子威し“地巻き”!!」

シキが能力を発動した瞬間にドレスローザ町外れの大地が巨大な複数の獅子と化したのだ。その獅子はディアンヌを飲み込もうと動き出した。

「シキの能力は強いかもだけど……僕とは相性が悪いね!!」

ディアンヌの能力は大地に愛された特殊な巨人なのだ。大地に愛された彼女の力はシキのフワフワの実の力に勝る影響力を持ち、シキによって生み出された獅子は大地へ還った。

「——ッ！こりやあ分が悪リイな。今日のところは帰らせてもらうぜ」

「帰すと思う？」

「おれは海賊だア！無理矢理にでも帰る」

シキは能力を使って浮きながらディアンヌのことを殴り飛ばした。意表を突かれたディアンヌはノーガードで殴り飛ばされてしまった。その隙にシキは自身の船を飛ばし逃げ帰って行った。

逃げ帰ると言ってもシキには負けたつもりはなく、それどころか投獄以前のような寧ろ猛な笑みを浮かべていた。



「大丈夫かディアンヌ！」

「私は大丈夫だけど……」眠れる獅子」を起こしちやつたかもしれない」

「眠れる獅子だと？」

インペルダウン投獄以前のような金獅子に戻ったのなら長い時間を掛けて練ろうとしていた計画は捨てて海の皇帝として返り咲くだろう。

もしそうなつたら元々金獅子のナワバリだった島たちは金獅子海賊団に奪い返されるだろう。しかしディアンヌは不安そうな顔どころか、どこか嬉しそうな顔をしていた。

「そう！シキの奥に眠っていた尊敬できる大海賊としての血を起こしちやつたよ」

「なんで嬉しそうなんだ」

「そりゃあ嬉しいよ。シキは海の支配者になりたいらしいんだよ？支配者になるんだつたら世界政府主導のこの世界は邪魔だよ。だから彼は政府を潰す筈……そうなつたら私とは同志だよ」

「そうだったなディアンヌの夢は天竜人と世界政府を引きずり下ろすだったな」

二人はシキの襲来によって荒れた大地を直してからドレスローザにある創造海賊団の本拠地へと帰って行った。

——創造海賊団本拠地 “トンハット”

コリダコロシアムのすぐ近くにある創造海賊団によって買い取られた建物はトンハットと名付けられ創造海賊団の本拠地となった。その場所近辺は商業区として発展し、トンハットはドレスローザの経済の中心へとなったのだ。

「大丈夫でしたか？」

「別に気にしなくてもいいくらいの事だったよ」

「そうでしたか」

「ねえステラ。テゾーロの方の計画は順調かな？」

「私も一ヶ月に一度くらいしか会ってないので、詳しいことは分かりませんが、カジノの収益があまり良くないそうです。テゾーロ本人が勝負した場合は絶対に勝てるそうですが、それ以外は負けが多いそうです」

「まあ仕方ないか、テゾーロの部下達はただの海賊なわけでカジノは遊びでしかやったことの無いような人達だからね」

テゾーロはマーリンと共に集めた莫大な資産を使って巨大な船を造り、世界最大のエンターテインメントシティを創り出した。しかしその運営はいいものとは言えず……。

多少の黒字というのが現状だった。

「うーん……まあ黒字だけで良しとするかな」

「その代わりと言つては難ですが、マーリンさんの商会は順調に売り上げを上げてますよ」

「あれ？さん付けだったかな？」

「あー、これは臨時秘書だった頃の名残りですね。今でもさん付けが染み付いてしまってます」

「ディアンヌがワノ国で二年の月日を過ごしている間にステラは“女傑”マーリンの手によつて優秀な秘書へと強制的に変貌させられていたことをディアンヌへと説明した。

しかし自分が一番に仕えている筈のディアンヌの前では最低限の仕事しかせず、それ以外は面倒だからとやらないのは変わっていなかった。

「そんな事があつたのに私相手には仕事をちゃんとしないんだ……」

「いえ、最低限のことはやりますよ。残業、過重労働反対です」

「はあ、まあいいや。レオちゃんはどんなことしてる？」

「レオちゃんですか？……彼は色んな種類の植物を研究しながら成長させてますよ」

レオグロウは植物のことだけではなく環境全体を管理する環境師団の師団長なのだ

が、植物以外の物は師団員に任せて植物のことだけに没頭していたのだ。

その原因は創造海賊団によってもたらされたドレスローザには存在しなかった海外の植物だった。今までは特定の植物しか育てることが出来なかったため、海外からもたらされた植物たちはレオグロウからしたら新鮮なものばかりで楽しいのだ。

「面白い植物はあったかな？」

「そうですね……団長が持ってきた食人植物がありましたよね」

「そうだね」

ディアンヌが持ってきたのはボーイン列島に群生していた食人植物だった。これらは人を喰らう植物だ。しかし強度がそこまで無いので一定以上の強者には簡単に破られてしまう。

「その植物をあの島で育ててみた結果……鉄よりも硬い食人植物が産まりました」

「へえ、鉄より硬いのが産まれたんだ……ならその種子を繁殖させてレオちゃんに言うというて」

「分かりました」

ステラはその場から去って行った。部屋に残ったディアンヌは創造海賊団の兵の推移を調べていた。

かなり増えていた兵だったが、金獅子海賊団のナワバリ侵攻の際に百獣海賊団との小

競り合いが起きてかなりの数の兵が死んでしまったのだ。

「団長入るぞ」

「どうぞ」

「上納金だ」

「やっぱりマーリンのところだけだよ。テゾーロは黒字だけど少しだけだし、レオちやんは研究だから消費だけだからなあ」

「少なくともいいません。ですが私の事業はカジノなんで安定はしてないですよ」

「ディアンヌとマーリンが話しているところにテゾーロも上納金を持って入ってきた。その中身はマーリンに比べたら少ない。」

上納金は全て纏められてその半分を金きんへと換金される。その金はテゾーロが運営するカジノの最上階にて保管され、創造海賊団の資産となる。もう半分はディアンヌが直接所持することになる。

「まあそこそこ集まったから……頼んだよマーリン」

「とりあえずアガリの話はこれで終わりだから……お酒でも飲む？」

「わ、私は辞めておきます」

「え、マーリンはどう？」

「——っ!? 私も辞めておこう」

テゾーロはマーリンの酒癖の悪さを知っているため辞退した。しかしマーリンが入ってからデイアンヌがお酒を飲んだことは一度もなかった。それなのにマーリンが辞退した理由は彼女の見聞色の覇気によって見た未来だった。

二人が辞退したことでつまらないと思ったデイアンヌはお酒を地下へと戻した。

## 女王

——金獅子の襲来から数ヶ月が経ったある日。

ドレスローザには暗い空気が流れていた。その原因はリク王の娘であるスカーレットが急死してしまった。

スカーレットの死を切っ掛けにドレスローザは現王への信頼が落ちることになる。国民から人気のあつた王女スカーレットの死は国民から悲しまれ、リク王への批判的意見が強まった。

「王でありながら娘を何故病死させたんだ!!」

「ダイアンヌさんが王だったら……」

これが国民の声だった。少し理不尽なことかもしれないが人間たちの感情はそんなものだ。

そんな国民達の声はマーリンの手によって少し改竄された情報として国外へと広められた。

それを聞いたとある海賊は謀略を巡らし、とある国王はリク王を助けようと動き始めた。

「王女が死んだねえ……で、真相はどのようなのかな？ステラ」

「スカレット王女はとある者と婚姻するために病死を装ったようです。ですが王はこの婚姻を認められてるみたいなので国民へと病死が嘘という情報が漏れる可能性は無さそうです」

「……これなら私たちに大義はあるね」

「そうですね。……ただこの国で王に成れる資格を持つのはリク王家または天竜人のドフラミンゴ家だけです」

そう。私はこの国で王になる資格は持っていない。けど持っていないなら作ればいいよね。王になる資格を持つヴィオラに近付いて……リク・ドルド三世を隠居へ追い込めばこの国の実権は私が握れるね。

実権を握ったらこの国で本格的に海賊の育成を始めよう。今までは新世界に入ってきた海賊を潰して部下にしてたけど……それじゃあただの下っ端しか生まれないから……私が一から育てて強い子を部下にしよう。

「じゃあ計画通り頼んだよステラ」

「了解です」

マーリンとテゾーロによって練られた計画はスカレットの死を知る前から練られており、スカレットの死は切っ掛けでしか無かった。マーリンとテゾーロの手によつ



て練られた計画は団長のディアンヌと実行役のステラにしか知らされていなかった。

ドレスローザ商業区にはこの国を発展へと導いたディアンヌとマーリンが会談していた。その内容はワノ国である程度の地盤を固めた百獣海賊団が創造海賊団のナワバリ近くの島を攻め滅ぼしていることだ。

「マーリン。カイドウのこの船が私たちのナワバリ近くに來てるらしいから見てきてくれない?」

「構わないが、私が出向く理由は?」

「そりゃあ船を率いているのが幹部の二人のどちらかだった場合は師団長にしか倒せないしね」

「そうか。なら行ってくる」

マーリンの表の顔であるリオネス商会へとディアンヌが赴くことはあまりない。それはマーリンが海賊と繋がりがあるといふ事実を表に出さないためだ。

「二つ忠告しておくけど百獣海賊団の幹部は二人とも普通じゃないから」

「分かっている。能力者ってことだろう? 私は動物系<sup>ソオン</sup>程度に負けるほどやわな鍛え方をしてはいない」

「……まあいいけど……油断はどんな強者でも破滅へと導く道標になるから気をつけて」

「……話はもうないな。行ってくる」

マーリンはすぐにドレスローザの港を経ちナワバリの島へと向かった。その道中には襲ってくる海賊船もいたがマーリンの実力には遠く及ばない海賊ばかりだったので簡単に撃退していた。

そしてナワバリの島に着いた時にマーリンが見た光景は程よく発展した町は建物は崩れ落ち、炎が燃え盛っていた。

「これは……カタギ相手にここまでするものか……」

「ムハハハハ!! 解毒剤はおれしか持ってねエぞ!! 自分らで取ってみろ!!!」

町の中心から聞こえる声の方へマーリンが顔を向けると6 m近くある巨漢の男が噴水に腰掛け特殊な銃を町へと撃ち放っていた。

その男にフラフラなりながらも近付こうとする者は周りに居る百獣の構成員によって斬り殺されていた。

「——っ!! その女!! お前は可愛いから助けてやってもいい!! こっちへ来い」

(それは好都合だ。態々呼んでくれるなど百獣も優しいな)

巨漢の男はマーリンの他を寄せつけない程の美貌を持つマーリンに一目惚れして自

分の近くへと呼んだ。その行為が自分に害なすことだとはまだ知らない。

(あと10m)

「おい！てめエ素人じゃねエな!？」

「チツ……私はバレるような動きをしたつもりは無いが？」

「素人じゃ出来ねエ足取りってもんがあるだろが。で、てめエは何処のもんだ!!」

自分がただの市民じゃないことがバレたマーリンはクイーンの懐まで近付いたのを不意にしてもクイーンから離れた。

クイーンがどのような力を持つか分からない時点で攻撃を仕掛けるのは危ないと思っていたからだ。

「私はしない商人だ」

「……拷問でもすれば吐くだろ」

クイーンはマーリンの方へと銃を向けて撃ち放った。マーリンは銃弾程度で傷付くような体では無いので避けようとしなかったが自身の覇気が警笛をならしていたので大袈裟気味に避けた。

それが功を奏した。クイーンが持っていた銃から放たれたのはただの銃弾ではなく特殊な病原菌をばら撒く銃弾だった。

「良い見聞色だ。だがそんなに勝てるとは思ってねエよな」

「当たり前だ。見聞色だけで勝てるなら悪魔の実など要らなくなるからな」  
「てめエも能力者か」

クイーンは徐々に変化して行つた。首が不自然なほどまで伸び、体もそれに合わせるように巨体へと変化して行つた。その姿は大昔に陸地を支配していた恐竜の一種であるブラキオサウルスだった。

「恐竜つてのはデカいもんだな」

「デカいだけじゃねエぞ!!」

その巨体からは想像出来ないスピードでマーリンの後ろへと移動した。その速さは六式の「ソル剃」を使つたものだと分かる。

「速さは……そこそこだな。『風脚』……『けっせん血染』」

その脚から放たれた斬撃は普通の風脚では考えられない程の斬れ味を持っていたがクイーンの固い皮膚に阻まれて肉までは断ち切ることは出来なかった。

「固いな……私も武装色を使わざるを得ないか……」

マーリンは差していた傘を閉じると武装色の覇気を流した。マーリンが持っていた、ただの日傘は武装色の覇気を流すことで強力な武器へと変化したのだ。

「私の覇気は見聞色だけではないぞ」

「口だけじゃねエといいな」

傘での突きを三連撃をクイーンの体へと撃ち込んだ。その攻撃は強固なクイーンの体にも傷を付けるほどの威力を誇っていた。しかし「動物系古代種<sup>ゾン</sup>」の力を持つクイーンには全くと言ってもいいほど効いてはいなかった。

「いい攻撃だな……おれじゃなかったら結構効いてたぜ」

「傷を付けたなら御の字だ」

クイーンに攻撃した際に傘に着いた血を舐めとった。そうするとクイーンに変化が訪れた。クイーンの覇気が若干だが弱まったのだ。元々の覇気が相当の物なためあまり弱くなった実感は無かったが、クイーンが弱くなったのは確かな事実だった。

「——っ？覇気が弱くなったか？」

「覇気が弱くなった訳では無い」

「厄介な能力を持ってやがるなてめエ。……なら早々に決めておくか『ブラック』……」

クイーンはその能力では有り得ない力を口の中へと溜めていた。その力が何なのかはマーリンには分からなかったが警戒に値することは確かだ。

警戒したマーリンはこれまで使おうとしなかった能力を使うことにしたのだ。マーリンの姿は耳は長くとんがっていき、爪は鋭く伸びていた。まるで伝説上のバンパイアのような姿をしたマーリンは腕に覇気を流して防御の体制を取った。

「『コービ』  
光火」

「クソっ!! 古代種じゃないのか（団長が言っていたことはこれか……確かに普通じゃないな）」

「貫かれたつてのに随分余裕そうじゃねエか！」

クイーンの口から放たれたのはレーザー光線だった。その威力はマーリンの覇気を撃ち破り、更には致命傷にはならなかったものの光線は体を貫通していたのだ。

「あと一時間だな」

「何が一時間か知らないがそれまで生きてられると思うなよ」

「それもそうだな……だが私が一人だった場合な」

その言葉にクイーンは目の前のマーリンだけに見聞色を集中させるのを止め周りへと気を配った。そうすると後ろから斬りかかってくる老人が居たのだ。その老人は歳を思わせないほど軽やかに動いていたため避けることは出来ずに斬られてしまったのだ。

しかしその機敏さとは裏腹に力は衰えており、強固なクイーン相手には浅い傷しか与えられなかった。

「私は歳で覇気は衰えています……多少でもダメージが入るのなら私の攻撃は多少なりとも気になるでしょう」

「てめエら相手にまともに戦ってたら時間がかかっちゃうな……おれ相手じやなきやな!! “無頼男爆弾”!!!」

大層な名前の攻撃だったが、それは全体重を乗せたただの頭突きだった。しかし獣型になったクイーンの巨体から放たれる頭突きは相当な威力を誇っており、マーリンの右腕であるアーサーを一撃で気絶へと追い込んだ。

しかし一瞬の隙をマーリンが見逃すことは無かった。攻撃後の地面に着地する瞬間に自分の血をクイーンの足元へとばらまいた。

血は踏まれると同時にクイーンの脚を絡めとった。絡め取られたことによりクイーンはバランスを崩して倒れてしまった。

「その図体が倒れてるのは面白いな」

「面倒な小細工をしやがって! “ブラック”…… “<sup>コイビ</sup>光火”!!」

「私は同じ攻撃を受けるほど弱くないんだ」

クイーンが放つ “ブラック光火” はレーザー光線なので来ることが分かってなければ避けることが難しい。それはどんなに素早い者だとしてもだ……。

マーリンが最初に受けた “ブラック光火” はマーリンが少し油断していたため受けてしまった攻撃だが、今では目の前の相手の脅威を認めているので一切の油断をせず見聞色の覇気を発動して事前に避けることが出来た。

「そしてもう夜だ。私は夜を続ける女王となる」

クイーンは彼女の変化に驚いた。マーリンの体から感じられる覇気が倍とは言えないが相当上がっているのだ。覇気を極めるには相当な努力が必要だと言うのに時間が夜になっただけで覇気が上がるのだ。それはどんな人でも驚くだろう。

(えええー!!?! 覇気が上がってやがる!!?! ただでさえギリギリの戦闘だったのに倍近くまで上がったら無理だ!!!)

「クイーン様!! 奴の能力が分かりました!」 ゾオンけい 動物系 “げん……”

マーリンの情報をクイーンに話そうとした百獣海賊団の構成員は血の矢によつて腹に大穴を空けられて絶命した。それを見たクイーンは負けるつもりは無いが大きな傷を負うことは確かだと思つた。そこでとある提案をすることにした。

「『げん』まで来たら幻獣種しかねえだろうが!!) 幻獣種か……交渉しねエか」

「なんだ?」

「……百獣海賊団に入らねエか? これから先百獣海賊団は海を続ける皇帝になる筈だ。ため工程の実力者なら即幹部入り出来るぞ」

それは百獣海賊団への勧誘だった……。

——北の海ノースールのとある島では自分に深く関係がある新世界の国で起こった事件を読み



謀略を巡らしていた。

「これは本当か？」

「ああ確かだ。相手は商人だったが、所詮金で成り上がった奴だ、金をやったらすぐに教えて貰えたさ。」

「これは……計画を少し早めるか……」

「それは辞めておいた方がいいだろう」

一人はサングラスを掛けてピンクのコートを羽織り、中には黒色のスーツを着た男。そしてもう一人はおカツパ頭にこちらもサングラスを掛け、口元には食べかけのオムライスを付けたおかしな男だ。

「何故だ？」

「ドレスローザには『王下七武海』の創造海賊団が居るはずだ。その中でも師団長以上は実力者揃いで、我々でも勝てるかは分からない」

「……勝てるか分からねエか……ヴェルゴが言うならそうなんだろう。なら計画通りに頼んだぞ」

「ああ」

ヴェルゴと呼ばれた男は彼らのナワバリであった島から出て行った。彼が向かった先は海軍を北の海で海軍を募集する場であった。海賊である彼が海軍を募集する場へ

と向かった理由はたった一つしかないだろう……。

「んねーんねードフィ、ヴェルゴは行ったか？」

「ああ、おれ達の計画のためだ。例の物はあるか？」

「べへへ……持つてきてるぞ!!」

「同じ七武海なら手を出せねエだろ」

ドフィと呼ばれた男は例の物に目を通すと笑みを浮かべ、策略を巡らしていった。

その笑みを見た部下たちはこの男の資質を改めて理解し、崇めた。それは自分たちだけでは成し遂げることの出来ないことを叶えてくれると信じて……。

## 朝日

日が沈むことにより真の力を発揮したマーリン相手にクイーンは苦戦しながらも古代種の驚異的な持久力によつて戦い続けていた。

——夜明けまであと1時間。

「ゼー……ゼー…… ブラック光火!!」

「何度も言わせるな。同じ攻撃が通用すると思うな!」

「……その体制で避けられるか!!」

クイーンの口から放たれる光線はマーリンの覇気を突き破る力があるので大きく避けてしまった。

これまでに「ブラック光火」を三回撃ってきたクイーンはマーリンが大きく避けていることに気付いていたのだ。その隙を狙われて疫災弾を撃ち込まれてしまった。

「……これは毒か」

「ただの毒じゃねエ!!……それはおれの最高傑作の……『疫災弾』だ!!それに含まれる病原体はおれ様が……創り出した独自の病原体だ!!……病気の恐ろしさは分かるだろ!!!かの有名なロジャーだろうと病気で弱くなった!!!」

マーリンがくらった病原体はクイーンが自作した病原体なのでクイーンから抗体を奪い取らない限りどんなものでも死へと追い込まれる死の弾丸だった。

——マーリン以外がくらった場合だが……。

「病気か……私の能力を知らないようだな。私は血液を操れる」

「——っ?!?これは……おれは疫災のクイーンだ!! てめエみてエな女には負けねエ!!!」

『百獣海賊団幹部 〃疫災のクイーン〃 懸賞金4億2000万ベリ』

「今どき男女差別とは酷いものだ」

——マーリンがクイーンと戦闘を行っていると同時刻のドレスローザでは……。

「マーリンは厄介払い出来たから……これで出掛けられるね」

彼女が読んでいる新聞にはとある事件が書かれていた。『聖地マリージョアからの逃亡!!とある魚人の奴隷が聖地マリージョアから母国へと帰還』

聖地マリージョアからの逃亡という一大事件を政府が流出させるはずがない。そのためディアンヌは世界経済新聞社に定期的に少なくともお金を払い情報を買い取っていた。一人にしか渡さない情報を新聞にしているのは世界経済新聞社のプライドによるものだろう。

「マリージョアから脱獄するなんて凄いいことするなあ……どんな人なんだろう……目指すは魚人島だね」

「何が『目指すは魚人島だね』ですか。私の仕事を増やさないでくれませんか?」  
「げっ?! ステラには計画のメインを押し付けていた筈なのに……」

「ディアンヌの仕込みは完璧だったはずだ。キャンドラーにとある島の調査をお願いしたのも、マリーリンを百獣海賊団との戦闘が必ず起こる場所へと向かわせたのも……一番厄介だったステラをとある計画の一部に組み込むことでディアンヌから離れるように仕向けたのも、全ては仕事をほっぽり出して魚人島に行くためだった。」

「あの計画は長期的にみた計画なので一度帰って来てただけです」  
「ただ運が悪かっただけか……仕方ないね。堂々と行かせてもらおうよ!!」

「ディアンヌがステラへと命令した内容とはドレスローザの完全掌握に必要なことなので進めた内容を書類へとまとめようとステラは帰ってきてたのだ。」

「ディアンヌはステラとの基礎的な速度の差を使ってステラから逃げようとした。しかし初速はそこまで差が無かったので簡単に捕まってしまうた。」

「ステラは逃がさまいとディアンヌのことを羽交い締めにして拘束した。逃げようと思えば逃げられるが、無理に振りほどくとステラに怪我をさせてしまうので無理やり逃げることは出来なかった。」

「私たち創造海賊団は王下七武海という地位にあるんです!!その船の団長が白ひげのナワバリになんか行ったら戦争になります。そんな面倒くさいことにしないでください。私の仕事が増えます」

「あー、やっぱり自分の仕事が増えるのが嫌なだけなのね」

「当たり前です。私は必要最低限の仕事をやって生きていきたいんです。……たださえ面倒な計画に組み込まれているんですから」

「でもあの仕事はステラしか出来ないでしょ?」

「……全く表舞台に立たないのは私しか居ないですけど……私はテゾーロと一緒に仕事をしたかったので」

ステラはディアンヌに買い取られたので恩は感じていて、今のテゾーロが率いる財務師団はまだ不安定な状況にあるためテゾーロと仕事は出来ていなかった。

しかし本音を言うとテゾーロと共に仕事をしたかった。根が面倒くさがりなステラがディアンヌの秘書という忙しい役職に着いているのはテゾーロと対等な存在でありたいという想いからだった。

「テゾーロも言ってたでしょ。『ステラが居ると集中が出来ないから安定してから来てくれ』って言ってたでしょ」

「……………話をすり替えて行こうとしていませんか?テゾーロの話をして私も私は離しま

せんよ」

「チツ……そんなことしてないよオ〜♪だから離してね！」

「可愛くしても無駄です。それに小紫ちゃんはどうするんですか！あの子は団長にしか懐いてないんですから」

「ディアンヌがワノ国から連れてきた小紫は未だにディアンヌにしか心を開いていなくて、もしディアンヌがドレスローザから居なくなってしまうえば小紫は一人寂しい思いをしてしまうのだ。」

「……それもそうだね」

「ディアンヌは家族を失った後にロジャー海賊団の皆が居たことによって寂しい思いをしていなかったが、日和が今頼れるのはディアンヌしか居ないのだ。そんな日和をディアンヌが置いていけるはずがなかった。」

夜明けまで1時間を切ったマーリンは少しながら焦っていた。夜が明けてしまうとマーリンは弱体化してしまいこれまでの疲れが一気に襲ってくるだろう。

「マーリンは後のことを考えずに全力でクイーンのことを潰そうとしていた。」

「この病原体に汚染された血液を飲ませてやる」

「おれが創り出したんだ。抗体くらい持っているさ!!ムハハハ!!!」

マーリンの手にあるのは自身に感染していた病原体を血液を通して全身に巡る前に感染した血液を体の外へと出した。

その血液の血液の球をクイーンへと投げ付けた。クイーンは病原体の抗体を持っているので避けようとしなかった。もし避けてしまうとマーリンに大きい隙を晒してしまうからだ。

マーリンはクイーンが避けないことを分かっていた。そのためマーリンの仕込みは完璧に発動したのだ。投げ付けた血液の球はクイーンの口へと入り込んだ瞬間に棘の生えた球体へと変化して行った。棘の球体はクイーンの体の中から切り裂きながら降りて行き、やがて胃を傷だらけにして胃酸で能力が解除された。

「いくら古代の動物だろうと中は脆いだろ。外が固いなら中を攻めるのは戦闘において普通だ」

「ゼー……ゼー……体内に傷が付いた程度でおれを倒せると思うなよ。おれはカイドウさんを守る災害だぞ!!」

「お前が災害か……その程度で災害なら私はなんだ？ 厄災かなんかか？」

二人が話している間も夜明けが刻一刻と近付いてきている。これはクイーンの作戦なのだが、マーリンは分かっているながらも話をしてきた。それは何か理由があるのだろうか。



先に動いたのはマーリンだった。あと数分のところまで夜明けが迫っているのだ。マーリンから動かざるを得なかったのだろう。

「そろそろタイムリミットだ。私もそろそろ帰らなければいけないからな。 // 刺傘<sup>さかさ</sup>」  
「帰れると思ってるのか？ 無理に決まってるんだろ!!! // 無頼男爆弾<sup>ブルキオボムバ</sup>!!!」

マーリンは夜になることによつて高まつている覇気を傘だけに流すことで鉄をいとも簡単に貫く武器へと変化した。

それを全体重を乗せた頭突きをしてくるクイーンの頭へとぶつけた。二人の強力な武装色のぶつかり合いは周りへ衝撃波となつて彼女らの仲間たちへと降りかかった。

そして武装色勝負で勝つたのはマーリンだった。武装色を流していたので頭蓋骨を突き破られることはなかったが、クイーンは海へと向かつて吹き飛ばされてしまった。クイーンが受けたダメージは相当なもので気絶してしまった。それを見たクイーンの部下たちはクイーンの回収へと向かった。

これにてマーリンは百獣海賊団の撃退の仕事を完遂した。

「マーリン様、追いますか？」

「辞めておけ。君たちだけで百獣海賊団の下つ端は倒せない」

「マーリン様が居れば勝てるんじゃないですか？」

「私も限界なんだ眠らせてく……」

マーリンはそう言って気絶するように眠ってしまった。マーリンが眠ると同時に朝日が昇っていた。マーリンは夜明けが来たことにより今までの疲れが一気に襲ってきたことによつて眠ってしまった。

これはマーリンが食べた悪魔の実際の弱点である。日が落ちることによつて大幅に強化される代わりに夜が明けるとそれまで戦ってきた分の疲れが襲ってくるのだ。

とある島ではキャンドラが密かに調査へと来ていた。その場所は自然が生い茂っているのだが、島の中央付近にはその場には似つかない建物が建っていた。

そこはとある組織のマークが付いていることから、その組織に組みした者たちが使っている建物だろう。

「こんな島あつたんだな……新世界に入ったら直接ドレスローザへと向かったから知らなかったが……そして何故ここにいるんだクザン」

「あららく……めんどい相手が来ちまつた。だがここは政府管轄の島だ。……お前がここから先に入ってきたら七武海から除名される」

「そんなことを言つていいのか？ 今ではおれ達も四皇に迫る実力を持つぞ。そんなおれ達を七武海という枷から外してもいいのか？」

「お前らはいつか裏切るだろうに……」

チャンドラーと対峙するのは海軍大将となった青キジことクザンだった。クザンは軽い言葉を放っているが冷や汗を流していた。目の前に立つチャンドラーは前にあった時とは比べ物にならないほどの覇気を感じられていたからだ。

「そりゃあ、自由に生きるとてもんが海賊だ」

「……で、入ってくんのか？」

「……まで来て何も調べない訳にはいかないからな」

「……楽出来ない相手は面倒だな。『アイス塊・両棘矛』フロックバルチザン」

クザンが作り出したのは氷で出来た五つの矛だった。氷の矛をチャンドラーへと飛ばした。その矛は昔のチャンドラーの武装色と同レベルの硬度を持っていた。

しかし昔のチャンドラーと同レベルなので今のチャンドラー相手には一切通じなかった。チャンドラーの武装色を流した拳が『両棘矛』をいとも簡単に砕いた。

「……随分と成長したな……めんどくせえ相手だ」

「それはお互い様だと思いがな」

そう言つてチャンドラーが取り出したのは黒く染まっている三節棍さんせつこんだった。

三節棍とは三つの棒を鎖で繋いだ武器だ。チャンドラーは三節棍の扱いがとても得意で、彼が持つ武装色の覇気を流すことで刀などの武器では届かないリーチからの攻撃で自然系ロキアだろうとダメージを与えることが可能となっている。

「三節棍か……珍しい武器を持ってんな」

「自然系持ちには言われたくねエよ」

キャンンドラーは遠距離の攻撃手段を持っていないのでクザンへと走り出した。

クザンは近距離戦をするとなると本気でやらなければキャンンドラーには勝てないと分かっているのです、今までのクザンからは一切感じられなかった武装色の覇気を流し出しました。

クザンが発した覇気を感じ取ったキャンンドラーは早期に決着を付けようと更に速度を上げた。

「そんだけの覇気を持つてゐるなら自然系は要らねエだろ!!」

「おれは『だらけきつた正義』がモットーなんでね、覇気持ち以外の相手には防御が必要ねエ自然系は必要だぜ」

キャンンドラーが昔会った時のクザンは『燃え上がる正義』を掲げていたはずなので、キャンンドラーは少し疑問に思っていた。しかしとある事件にクザンが関与していたことを思い出すと直ぐにキャンンドラーは納得した。

「そりゃあクソみてエなバスターコールがあつたからか？」

「——なぜお前が知っている!?!」

「知りてエか? おれ達が……だからだ」

キャンドラーがある事実をクザンへと話すときクザンは少し安心したような顔をして戦うことを辞めて、施設の所へと帰っていった。

「いいのか？入っちゃまうぞ？」

「……おれは何も見えてねエ。ただ寝てただけだ」

クザンはアイマスクをして近くの木に腰掛けて眠りについた。キャンドラーは異じやないことが分かると中へと入っていった。

## 六傑杯

## 六傑杯

——マーリンがクイーンに勝ったことは創造海賊団内部への大きな刺激となった。役職を持たない下っ端たちは師団長を目指すよう一層に努力した。それに伴いディアンヌは軍編成を改めた。師団長という役職は変わらないが、まとめて呼ばれるようになった。

そしてその下に位置するのは前副長クラスの實力者が選ばれた者たちその名は六傑。しかし六傑という役職を作ったものの、それに値する實力者はマーリンの執事だったアーサーのみだった。しかし惜しい人材は数人程いるので、コリーダコロシウムにて六傑の座をかけての大会が行われようとしていた。

——そんな今大会を仕切るのは創造海賊団の金庫番。そしてエンターテインメントの神に恵まれた男。

『レディ~~~~スエ~~~~ンジェントルメン!!』

ステージへと上がって来た男はマイクを握りしめオーディエンスへと己の声を呼びかける。

『今宵始まるのは我々師団長……いや三英に次ぐ地位を決める。その名は六傑杯!!優勝者には六傑の席とこれを贈呈しよう!!』

その男は団長と副団長を支える三人の英雄が一人。その男は全身をピンクのスイツで固めているのだが、それに見合わず装飾品は左手の薬指にはめているシルバリングだけだった。

男が右手で掲げたのは変な模様のついた果物……悪魔の実だった。

「ウオオオオオオ!!」

「……師団長テゾーロか」

「……ただの成金か……それとも」

ステージに上がったテゾーロを見たオーディエンスの反応は人それぞれだった。

テゾーロの登場を盛り上げる財務師団の構成員達。ココ最近入ってきた新参者たちはテゾーロの実力を見極めようとしていた。しかしテゾーロは自分を見定めるような目には気付いていた。

『しかし今はただの原石でしかない君たちが戦ったところでたかが知れている。そのため超えるべき障害を用意した。』

テゾーロのその言葉と共にステージに上がったのは還暦を超えているような老人だったが、その身は筋肉で引き締まり燕尾服できつちりと決めていた。

その男は唯一六傑の席に内定している実力者であり、マーリンの執事であったアーサーだ。

『知っている者も居るだろう。彼は財務師団の副長を務めていたアーサーだ！彼はトーナメントのシードに組み込むことにした。彼を倒して優勝を掴み取った者にこの悪魔の実を贈呈しようじゃないか!!!』

「……ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

『始めようじゃないか六傑杯を!!!』

テゾーロの一言で六傑杯は始まった。しかし創造海賊団の構成員は相当な数居るので予選を行うことになった。

その予選の内容は参加する全ての構成員を五つのグループに分けて行われるバトルロワイヤルとなった。

七武海という地位に居ながら四皇に迫る勢力となった創造海賊団の実力を知れる機会となった今大会は各国要人や海兵はもちろん、サイファーホールC Pも隠れて観衆に紛れ込んでいた。

——コリーダコロシウム来賓室。

「どういいうつもりなんだ？ナワバリから全軍撤退させて幹部を決める大会を始めるなん



て正気じゃねエ」

「だから君たちに一旦頼んだんでしょ？これで私たちに借りを作っておけるんだよ。君たちからしたら数日間私たちのナワバリを守るだけで貸しを作れるんだから得でしょ」  
「……おれ達からしたら得になるが……お前は七武海だろうよい。その地位捨てることになるかもしれない」

その女は淡々と貸し借りの話をしているが、この内容は創造海賊団内部には一切知らされていらない内容だった。それはキャンドラを含め幹部たちには反対されるような内容だったからだ。

自分たち創造海賊団は王下七武海という政府の犬なのだ。それに対して交渉相手である男は四皇の幹部。七武海の船長が四皇幹部と繋がっているということが政府にバレたら七武海の地位どころか海賊として生き残っていける可能性も低い。そんな交渉を幹部たちが許すはずないだろう。

「まあそつちは政府に黙りを決め込んでおけばなんとかなるでしょ。それに君たちと繋がりを持つておきたいからね」

「……おれ達はこれ以上干渉はしないよい。これは魚人島でオヤジがルーキーだったお前を襲ったお詫びだよ」

「その事は仕方ないと思つてたけど……まあこうして頼みを聞いてくれるんだから襲わ

れてよかったよ」

襲われてよかったなどと常人が聞けば『お前はMなのか?』と問いかけたくなるようなとんちんかんな事を言ったディアンヌだが、本人は至って真面目だった。

ディアンヌは自分の体よりも創造海賊団の利を優先するので、自分が決して小さくない怪我をしたとしても四皇からの詫びが貰えるのなら、ディアンヌにとっては得なのだ。

「……自分の体は大切にするんだよい」

「私は目的の為なら自分の体程度なら何度でも傷付けるよ」

「……おれは帰るよい」

紫の服を羽織ったパイナップルヘアーの男はディアンヌに別れを告げて出て行った。

誰も居なくなった向かいのソファを見てディアンヌは言葉を漏らした。

「……もう家族が傷付くのは嫌だからね」

——六傑杯数日前。

「遂にディアンヌは動き始めたか。ドレスローザへ攻めてこいザイス」

「分かりました。しかし相手は四皇に迫ると言われている創造海賊団です。自分一人では厳しいと思いますが」

とある島ではその船のトップと思われる男と幹部と思われる男が創造海賊団について話をしていた。

「だから今だ!! 奴らは六傑杯とかいう下つ端共を戦わせて幹部を決める大会を行うらしいからな!! その大会後に力を残しているのは最高幹部の三人とトップに立つ二人だけだ!! それにだ、この情報はあいつらにもリークした」

「なら手を出しますね。奴らは四皇に近い力を持っているくせに政府の犬ですから相手は海賊だけですからね」

トップと思われる男は初老くらいの年齢だがその身から溢れ出す覇気とその肉体は老いを感じられない。その男は海賊らしく葉巻を吸いながら笑みを浮かべていた。

そしてザイスと呼ばれた男はまだ若かった。しかしその歳には見合わない程極まっている覇気に引き締まった肉体を持っていた。

「だが、たかが七武海だ!! あいつらも自ら出てくる筈がないからな。お前が適任だろう」「分かりました。では行ってまいります」

ザイスは部屋から出ていった。その後ろ姿を見て初老の男は真顔へと戻っていた。それは創造海賊団の力について考えているからだ。

自身の部下の中で随一の實力を持つザイスを信用しているが、ドレスローザへ訪れた時のディアンヌは弱かったもののディアンヌからロジャーに近い物を感じていた。

それが人を引き寄せる力なのか……はたまた驚異的な実力者となる器を持っているのかは分からないが、それでも警戒する相手で間違いないのだ。

「あいつがどれだけ成長しようとして最後に笑うのはこのおれだ!!ジハハハ!!」

——予選第一試合。

第一試合での出場者で目立つのは新入りの手長族の男だったり、裏社会でのデスマツチシヨールで対戦相手が居なくなつたことで売れなくなつた巨漢の格闘家やこの場には似合わない妖艶な雰囲気的女性などが参加していた。

そんな癖のある者たちによる第一試合が今始まろうとしていた。

『予選第一試合開始!!』

まず初めに動き出したのは手長族の男だ。その男は正面に居る者たちをその長い腕から放たれる拳で殴り飛ばした。その男の正面に居るものだけでなく周りに居た者の殆ども拳を振るつた時の衝撃で場外へと吹き飛ばされてしまった。

そして舞台上に残つたのはその手長族の男。そして手長族の男の拳によつて発した衝撃に少しはよろめきながらも立ちつづけていた巨漢の男。そして衝撃の外にたまたま立っていた妖艶な雰囲気を持つ女性だけだった。

「ほうおれの拳に耐えているとはなかなかやるじゃねエか!!だがおれの拳をくらつたら

立ってられねエだろ!!」

手長族の男は衝撃の外に居た女をただ運が良かっただけと思い巨漢の男だけに意識を向けた。

手長族の男はその長い腕からパンチを繰り出した。その拳は巨漢の男へと向かって行った。しかし男は避けようとも受けようともしなかった。ただただ額を拳に向けただけだった。

「頭の硬さに自信があるなら、その自信ごと砕いてやんよ!!!」

そして二人の拳と額はぶつかった。やはり手長族のパンチはかなりの威力を持っており、巨漢の男を場外ギリギリまで吹き飛ばした。しかしギリギリのところで巨漢の男は踏みとどまって一言、会場全体がドン引くセリフを言い放った。

「んく!!キモティく!!!」

「うわあく、あの人実力はそこそこあるけど六傑の席には置きたくないなあ」

「もし負けたら私のところにくれませんか?」

「まあテゾーロのところは側近クラスの人が居ないからね。まあマーリンもキャンドラーも欲しがらないと思うしいいよ」

特別席で試合を見ていたディアンヌも巨漢の男のセリフにはドン引きしていた。しかしテゾーロは万年人材不足なので痛みで喜ぶ変態だろうと欲しかったのだ。

「あとはあの女性ですが……」

「……やっぱりだよね」

二人は残っている者のなかで場違いな女性に注目していた。それは一部の観客達以外が思った『たまたま衝撃の外に居た』ということは二人の目には必然だと見えていた。

それは手長族の男がパンチを放つ際にその女はステージのギリギリに行く訳ではなくステージの中途半端なところで足を止めていたのだ。それは手長族のパンチの威力を完璧に理解し、その衝撃の範囲まで分かっていたのだ。そんな女がわざわざ創造海賊団の下っ端として入るだろうかという考えが二人の中にはあったのだ。

「もつと凄いのくれよオ!!」

「気持ち悪いこと言うんじゃないエ!!」

それから手長族の男は何度もパンチを放つが巨漢の男額に流した覇気によって殆どダメージを負っているようには見えなかった。それどころか気持ちよくなっているようにしか見えなかった。

ある程度ダメージを受けてから、それ以上の攻撃を見込めないと分かると今まで使つてこなかった斧を使って手長族の男男へと斬りかかった。その際に何故かYES、YESと言っているのが巨漢の男の変態度が更に増したのだ。

そして巨漢の男の猛攻に手長族の男は負けてしまったのだ。手長族の男は足を滑ら

せてしまつてその隙を突かれて体を斬られた。切り口は浅いもののその威力は凄く、場外まで吹き飛ばされた。

ステージに残つたのは変態巨漢男と妖艶な雰囲気的女性だった。そんなステージを見て観客達は心の中で『あの姉ちゃん危ない』と叫んだ。

そんな観客の心配とは裏腹に試合は一方的だった。女性の攻撃は巨漢の男の覇気を破つてダメージを与えていた。しかし巨漢の男の攻撃は女性には一切当たらなかつた。その避け方はまるで六式の一つである。『紙絵』<sup>カミエ</sup>のようだった。

「そんな攻撃じゃあ私は倒せないわよ」

「もつと強いのは打つて来いよ」

「——ッ!!本当に気持ち悪いわね。『飛ぶ指銃』!!」

女性は六式の一つである指銃を飛ばした。女性の飛ばした指銃は男の額へとぶつかった。

その攻撃はそこそこの威力があつたようで初めて男の額に流血が確認された。そこから女性は何度も執拗に額だけを狙つて攻撃した。

やがて男の覇気も底を尽きると気絶してしまつた。しかし男の顔は気絶しているというのに笑顔だった。

「——ッ!!気持ち悪い」

『勝者ステューシー!!!』

「やっぱりあの女性が勝ちましたか……それにステューシーという名は、歓楽街の女王  
“と同名”」

「多分本物だろうね。でも何でそんな有名な私たちがの下つ端なんかに入ったんだろう  
……単純にツテが無かったのか……それとも他の理由があったのか……」

「多分後者だろうな」

「ディアンヌとテゾーロがステューシーについて考えているとマーリンも部屋へと  
入ってきた。入ってきたステューシーとはあることが書いてある紙を持っていた。」

「これを見て欲しいが」

「へえ、彼女が入ってからマーリンのところの裏稼業がかなり他に奪われたと」

「ああ。単純に運が悪かったと思っていたが、気になって調べてみたら奴が入った時期  
と奪われ始めた時期が合致していた。十中八九奴は黒だろうな」

「まあ今は放置でいいかな？」

「ディアンヌたちはスパイであると分かっているながら放置することに決めた。それは  
本選に残ったのがスパイとバレれば創造海賊団の面子は潰れたも同然だ。現状、スパイ  
相手に構成員は負けたという事実が出回れば勢力を拡大するのに邪魔になってしまう。」



それなら今は彼女を実力者として六傑の席に座らせて、六傑に値する者が育ったら処分すればいいだけだ。

## 鬼に竹竿

——創造海賊団の幹部を決める六傑杯は予選から大盛り上がりであった。しかし大どんでん返しが第一試合で起こってしまったためそれ以降の試合は予選最終試合を残留してあまり見所のない試合になってしまった。

しかし最終試合では海賊船の船長だった者や短い期間で海軍将校まで登り詰めた軍人上がりの者だったりと強者が多く揃っていた。

『予選最終試合開始!!』

最初に動きを見せたのは軍人上がりの男だ。その男は自身の異名に相応しい武器に覇気を流し振り回す——しかしそんな単純なことだとしても、強い武装色の覇気を持つものが行ったとなれば弱い戦士達は場外まで吹き飛ばされた。

ある程度リーチを持つ武器を振り回しているの、遠距離では勝ち目がないと思った戦士達は距離を詰めて攻撃を仕掛けた。

しかし彼は体術も一流だった。全方位から迫ってくる戦士達を受け流しつつ、隙を見せたものから場外へと蹴り飛ばした。それでも手加減はしているようで、武装色の覇気を流してはいなかった。

「下つ端どもの質はだいぶ低いようだ。組織の上位陣が居なければ王下七武海の名に相応しくないな」

「酷い言い草だなア！でもその上位陣に勝てねエからためエもここに居るんだろ」

「……」

因縁を付けてくる男を無視して元海兵の男は生き残っているある程度強い者たちに意識を向けた。

男にとつて無視されたのは屈辱的なことだったようで怒りに任せて襲いかかった。ただでさえ技術で劣っている者が怒りに任せて襲いかかったら勝てるだろうか——否である。

「一流はどんな時でも冷静さを保つぞ」

元海兵の男は後ろから襲いかかって来た男の脇腹へとその手に持つ武器を叩き込んだ。彼の放った攻撃によって砕かれた骨は大きな音を響かせた。

その音は生々しく他の戦士達を萎縮させてしまった。しかしそこで一切恐れず彼の前に立つ者が居た。

それは新世界で一船長として海賊たちをまとめ上げていた元海賊船船長だった。

「ケツから言つて……死ね!!」

「断る」

武器を持たない元船長は自身の拳に覇気を流して殴りかかった。彼女が持つ覇気は元海兵の男に近いレベルまで極まっているので二人の勝負は彼らの戦闘技術で勝っている方に軍配は上がるだろう。

彼女は武器を持つ男にはリーチでは勝てないので一気に懐へと潜り込もうとした。

「さっきのを見ていなかったのか？おれは体術も一流だ」

「ケツから言つて……私は勝つ!!」

『ふむ……私はお前より体術が優れているからお前に私は勝つて事か』

『解説ありがとねモンピート』

元船長……デルエリの言葉をダイアンヌに伸びた髭を触りながら説明したのはデルエリ海賊団元副船長のモンピートだった。

そんな彼は第二試合の勝者である。六傑の席が確約されている彼は幹部以外入室が許されていない実況室に入室が許されていた。

『でもデルエリの喋り方って変だよね』

『あいつは昔からあの喋り方だ。……きつと頭が残念なんだろ』

『まあアホの子ばいもんね』

「聞こえてんぞ!!モンピート!!!」

デルエリは元海兵の男を翻弄するスピードで拳を打ち込んでいた。そのスピードに

防御しか出来ない元海兵の男だったが、デルエリが実況に反応したことで隙が生まれた。

その隙を元海兵だった男が見逃すはずがなく若干遅くなった拳を紙一重で避けるとデルエリの腹へと蹴りを入れ込んだ。デルエリはギリギリの所で覇気を流して防御したのでダメージはあまり受けなかったが、場外ギリギリまで吹き飛ばされた。

『やっぱりアホの子だったね』

『実力はあるんですが……まあ私が一応頭脳担当なんでアイツに頭を期待しちやダメだろうね』

二人がデルエリがアホの子という事実を改めて確認している頃、コリーダコロシウムから一番遠い港ではとある人物が不法入国していた。

しかしコリーダコロシウムに居る団長とテゾーロ以外の幹部だけでドレスローザ全土を監視するのは不可能に近いので気付かれていなかった。

「……マジで誰も居ないな」

「お前の目は節穴か？」

「お前はこつち側だろ。流星に因縁がない相手には将星は出してこないか」

「おれがこんなルーキー海賊団に負けると思われてるなら心外だな」

ザイスが不法入国した港には先客が居た。その男はカラフルな服に全身を包んで、キヤンディーのステッキを持っていた。

その男はビッグマム海賊団の長兄でありながら将星ではない無冠の実力者シャーロット・ペロスペローだ。

「それとおれは……いやビッグマム海賊団は金獅子の野郎とは組むつもりはない。ペロリン♪」

「おれたちだつてビッグマム海賊団とは組むつもりは端からねエよ。ただここは敵地のド真ん中だ。敵の敵は味方つてことで不干渉で行こうつて話だ」

「それはおれも賛成だ」

ペロスペローは地下にある港から地上へ向かつて歩き出した。ザイスはペロスペローが出た出口とは逆の出口へと向かつて出ていった。彼が歩いた後には少し泡が残つていた。

「……舐めてつと足元掬われるぞ」

その一言は静寂に包まれた港に消えていった。

——コリーダコロシアム

「だいぶ押されてるね」

「デルエリも頑張つてはいますが……まあ相手の方が上手でしたがね」

「思つてただけだよ。何でモンピートの方が強いのにデルエリが船長なの？」

「私は彼女を支えるのが生きがみたいなもので……それに船長なんて柄じゃないんです」

実況室ではディアンヌとモンピートは談笑していた。それは目の前で行われているデルエリ対ヴェルゴの試合だった。

素の力はデルエリが勝っているため実況に反応した際に食らったダメージ以外は特に大きなダメージを受けていない。しかしそれでもヴェルゴは冷静さを欠いていなかった。それは元軍人としていくつもの死線を越えてきたからなのか……それとも……。

「海賊つてのは誰かしらに恨まれているもんだろ？」

「何言つてやがるんだ!!——ッ!？」

ヴェルゴのその言葉を合図にステージに残っていた戦士達がデルエリに向かって走り出した。最初のうちは捌けていたが、ヴェルゴとは違い武器を持っていないので数名に懐へと潜られてしまった。懐へと潜り込んできた者たちはデルエリの動きを止めるため四肢を固定した。

「お前らどういふつもりだ!!」

「おれたちはお前のデルエリ海賊団に潰されたんだよ!!」

「お前らそれでも男か!!」

「海賊に卑怯とかないだろ? 勝者だけが正義だ」

デルエリが完全に動きを止めたのを見るとヴェルゴは竹竿に覇気を込めてデルエリのことを吹き飛ばした。自分のことを捕まえて離さなかった男たちごと吹き飛ばされたデルエリは空中で身動きが取れずに場外へと落ちてしまった。

——こうして最初と最後だけ盛り上がった予選は五名の実力者たちを他の勢力へと轟かせることとなった。

『勝者ヴェルゴ!!』

「……何故ヴェルゴは海軍を辞め、ここに入ったんだ……あいつは仲間や部下からの信頼は厚かったはずなのだが……」

「センゴクさん。それはヴェルゴとか言う海兵が政府の闇を見たから……もしくは」

「闇を見たのは有り得るが、後者の方は奴に限ってないだろう。奴の評判は良かったはずだ」

「まあ今となつちやおれたちには関係ないですけど」

コリーダコロシアムの観客達に紛れ込んでいたのは海軍の中でも上位の者たちであつた。



彼ら程の者が七武海の幹部を決める大会に来ていたのは、創造海賊団が七武海の中でも異端な勢力だったからだ。それは鷹の目にも言えるが、どちらとも海の皇帝と呼ばれる四皇に迫る実力者なのだ。そんな彼女の船が幹部を決める大会を開くともなると世界の均衡が崩れる可能性があるため海軍の中でも実力者である「元帥」センゴクと一度ディアンヌと戦ったことのある「大将」クザンが派遣されたのだ。

「ただでさえ革命軍とか吹聴する組織が世界政府加盟国でクーデターを起こして忙しい時期なのに……何故今やるんだ」

「そっちの方はたまたまでしょう。革命軍の情報はセンゴクさんと大将、そして一部の中将とゼファー先生だけなんですから」

「ああ分かっておる。だが四皇の方は示し合わせたかのように動きが無くなっている。……それは創造海賊団と組んだのか……または創造海賊団を潰すつもりなのか」

「あの個々の我が強すぎる四皇が他の海賊と組むことはないでしょうに。まあそんな奴らをまとめ上げるカリスマが現れない限りですがね」

彼らが話しているのはロジャー世代の一つ前に生きた伝説の海賊であり、現四皇を部下に持った最凶最悪の海賊ロックス・D・ジーベックのことだった。

ロックスはガープとロジャーによって討ち取られたが、その意志は受け継がれていた。ビッグマムには支配力が……白ひげには圧倒的力が……金獅子には謀略力が……

百獣には暴力が……そして全員にそのカリスマ力が受け継がれた。ロックスのような圧倒的強者でも負けることを知った彼らは各々の長所を伸ばしていった。そんな今の彼らはロックスでもまとめることは不可能だとセンゴク達は考えていたが、ディアンヌからはロックスに近いカリスマ性を秘めているように思えていた。

「……あの海賊の話は辞めろクザン。奴の存在は消されたのだ」

「……あいつは危険な存在でしたからね」

「あいつの話はもういいだろ。私たちは仕事をしに来たのだ」

「——ッ!? センゴクさんちよつと失礼させてもらいます」

クザン達がすれ違った人物にクザンは驚いていた。その人物にセンゴクは見覚えがないのでクザンが何故驚いているのか分からなかった。しかしクザンが驚くような人物なので、クザンにとつて重要な人物だろうと思いい仕事申中だが止めなかった。

「やあ、初めましてか?」

「——ッ!? 誰だ」

その人物が角を曲がったので追いかけると誰かに話しかけられた。その声は同じ女性だったものの強い者がもつ圧があったので別人であったことは明らかだった。

「私は三英が一人。経済師団“師団長”のマーリンだ」

「……おれが追っていた奴は何処に居る」

「なんの事だが分からないな」

「なんの能力を使ったか知らないが……おれを連れて来て何が目的だ？」

クザンは相手が三英だということを聞き、気を引き締め直した。その証拠に足下からは冷気が漏れ出し、若干だが地面が凍り始めていた。

「そうカリカリするな。私たちは海軍と事を構えるつもりはまだないんだ。君を呼んだのは、きつと起こるであろう襲撃に手を貸してもらいたいからだ」

「襲撃だと？並大抵の海賊じゃあディアンヌ……いやお前で充分だろ」

「それが四皇幹部が相手だとしてもか？」

「……コリヤセンゴクさんに相談しなきゃいけねエ案件じゃねエの」

ただの海賊が動くのと四皇が動くのでは天と地程の差がある。そんな四皇が動くとなると大將クラスが動かなければ行けない事案となるのだ。

「まあ君たち海兵は各国要人と市民の命を守ってくればいい。襲撃者は我々だけで対応させてもらう」

「そりゃあそつちにも面子つてのがあるもんな。……だけどそれはこつちも同じなんで、世界政府加盟国に大將と元帥が居るにも関わらず襲撃者を海賊に任せるなんてことは出来ねエのよ」

「……ならお帰り頂こう」

マーリンは交渉が上手くいかないと分かったら殺気を漏らし始めた。それに合わせてクザンも漏らしていた冷気の温度が一気に下がり始めた。

険悪な雰囲気になり始めて、殺気を漏らしている二人の間に仲裁へと入った勇氣ある者が居た。

「マーリンさん。団長は“大将”青キジとの戦闘は望んでいませんでしたよ」

「……出て来なくても戦闘するつもりは端からなかったんだが……まあありがとう」

「——ッ!!?何故生きている」

「貴方も分かっているでしょうが、創造海賊団に救われたんですよ。それと娘の件はありがとうございしました」

「それはおれの親友が自身の正義に基づいて動いて守り抜いた命だ。おれに礼を言うことじゃねエ。……だがあの島はバスターコールで完全に消滅した筈だ。そんな島から何隻も来た軍艦に知られずに救い出せるはずは……」

目の前に立つ人物は自分の親友が命を懸けて守り抜いた子供の顔にそっくりだった。強いて言うなら髪の色が真逆とも言えたが、血の繋がりがあることは確かだろう。

青キジの掲げる正義を変える原因となつたとある島へのバスターコールから逃げきつた人物が目の前に現れているので多少だが動揺していた。

しかし自分も子供を一人逃がしているので、不可能ではないと分かっているのだが、

どうやって逃がしたのかは分からなかった。

「やり方は教える訳にはいかないが……君の能力を利用して貰っただけだ」

「そうだったのか……まあここにも生き残りがいた事はおれの心に閉まっておこう」

「ありがとうございます。……では先程の話に戻りますが、マーリンさんが提案したことをそちらが呑まれないのなら……そうですね……元帥殿には帰って頂き、貴方一人で戦うというのであれば団長も承諾しますよ」

「……それはなら政府も納得するだろう」

「ではそういうことで」

マーリンとクザンの密談はこの世界では珍しい白色の髪色を持つ女性によってどちらも納得出来る結果となった。

## 動き始める時代

——戦士に全力で戦ってもらおう為に一日の休息期間が設けられた。その間各国要人たちはドレスローザで観光することになった。要人たちの護衛のために普段はグリーンビットに住む環境師団に入っていないトンタツタ族も駆り出された。

そんななか体から泡を出しながら独り言を喋っている変人が居た。変人は自分が仕える者が計画したことを始めるのだった。

「二日に分けるとは聞いてなかったんだがな……始めるか。 // 泡龍<sup>バブリユウ</sup>“!!”」

その男の体から無限とも言える量の泡が溢れ出した。溢れ出る泡はまるでカイドウのような龍の姿へと変化していった。

しかし要人たちやドレスローザの国民たちは龍の姿になっても所詮は泡なので、何かの催し物だと思ひ慌てて逃げるところか周りから人が集まり始めていた。

「王下七武海に護られて平和ボケした国民が……光に集まる虫どもみたく集まって来やがった……死ぬとも知らずによ」

「死なせると思ってたのか？」

「……少々想定外になったが、まあ多少は死ぬだろ。 // 石<sup>ソウ</sup><sup>フ</sup><sup>レス</sup><sup>ス</sup> 齧息<sup>ク</sup>」

龍の姿になった泡の口から放たれたのは泡が固形の石鹼に変化した物だった。しかしその形は小さな石鹼が数百個あり、その形は全て棘の生えた球体だった。しかもその石鹼一つ一つに武装色の覇気が流れていた。

そんな攻撃が民間人に当たったら一溜りもないためキャンドラーは動かざるを得なかった。

「クソみたいな攻撃をしゃがんで……だがそんだけの覇気を使えば直ぐに切れるだろう」  
「切れるまでに何人死ぬかな？」

「『狩琉飛刺』」

キャンドラーは三節棍を取り出した。広範囲に放たれた棘の石鹼に対抗するかのようには覇気を流した。ザイスの方が武装色の覇気は上なのだが、ザイスは大量の石鹼に覇気を流しているのに対してキャンドラーは三節棍だけに集中して流しているので、石鹼一個一個に流れる破棄の量とキャンドラーの三節棍に流れる覇気の量はキャンドラーの方が多いため破壊するのは可能だろうが、キャンドラーは国民を守らなければならぬので不利なことには変わりなかった。

しかしキャンドラーの三節棍を扱う技術は圧倒的な物だった。まるで手足かのように自由自在に操られた三節棍はキャンドラーが使った六式の『刺』の速さに合わせて神速の如く石鹼を砕いた。そしてキャンドラーは広範囲に放たれた石鹼をほぼ打ち砕

くことに成功した。砕かれなかった石鹼も見回りに来た環境師団に在籍しているトンタツタ族によって砕かれた。

「配下は六傑杯で疲れてるんじゃないかねエのか？」

「環境師団は別なんだよ」

「タイダルウェイブ龍雲・大津波」

「——ツ!?急だな」

ザイスから生み出された龍の姿をした泡は泡の波となつてキャンドライたちへと襲いかかった。小さいトンタツタ族は手も足も出ず波に飲まれた。体の大きいキャンドライも泡によつて力が削ぎ落とされてしまい流された。

(力が入らねエ……それに手のひらから摩擦が無くなつたからか建物も掴めやしねエ)  
「お前にはここで死んでもらうぞ」

ザイスは泡の波に飲まれて身動きの取れなくなったキャンドライの心臓へと剣を突き刺そうとした。

しかしそこへ待つたをかけるかのように攻撃が仕掛けられた。

「プロックアイス塊・バルチザン両棘矛!!!」

「……何故海軍大将のお前が居る」

「おれは一応海軍大将なんだよ。そしてここは世界政府加盟国の一つだ。この国を守



ろうとしている奴に加担するのも仕事の一つなんで」

クザンから放たれた「両棘矛」はドレスローザの街を流れる泡の波に刺さるとその場所から泡を全て凍らした。

キャンドラーたちを助けたみたい言い方をしているが、キャンドラーたちが飲まれた泡の波ごと凍らしたのであくまでクザンは加盟国のドレスローザの国民を守るという仕事をしただけだった。

「こつちからも質問させてもらうが「金獅子」の側近が何故居るんだ」

「これから勢力を拡大していくのに政府と手を組んだ創造海賊団が邪魔になるからな潰しに来ただけだ」

「いくらお前が強いからってそれは無理があるだろ」

「誰がおれ一人と言った？」

その言葉を境に爆発が多数の場所で起こった。そしてドレスローザから少しの沖にはとある海賊旗を掲げる艦隊が来ていた。

クザンもある程度は予測していたがここまで仕込みがされているとは思ってもみなかった。

「……これは「金獅子」の仕込みか面倒なこと。お前はあつちへ行けキャンドラー。分かってんだろ。あの沖にいる奴はお前とディアンヌが行っても勝てるか分からねエ

だろ」

「……誠に遺憾だが、その通りだな。任せるぞクザン」

いつの間にか氷から抜け出していたキャンドラーはドレスローザの沖に居る海賊の対処に当たるために港へと走り始めた。

それを邪魔しようとしてザイスは泡を発生させたが、尽くクザンの氷によって止められたためキャンドラーの邪魔を諦めて目の前に立つクザンだけに集中した。

「自分はこの戦いを報告しに行くれす」

「はい隊長！」

二人が戦いを始めるのを建物の影から見ているのはさっきまで氷に囚われていた環境師団の団員だった。キャンドラーが氷を破壊した際に抜け出すことが出来た。

隊長と呼ばれたトンタツタ族は背中から翅を生やしてコリーダコロシウムへと飛んで行った。

「逃がすか！ 〃泡バブルスネーク蛇〃」

体から生み出された泡は蛇の姿へと変わり、報告をするために空を飛ぶトンタツタ族を捕らえようとした。

「おれを無視するなんて酷いじゃねエの」

「……今お前に隙を晒すよりも奴らを逃して三英レベルが来たら絶対に勝てねエから

な」

「『アイス塊フロック・暴雉嘴フエザントベック』!!」

巨大な雉の姿を持った氷の塊がザイスへと向かっていった。その氷はザイスでもト  
ンタツタ族を捕まえる片手間で相手出来るほど柔くない。

それでもザイスはトンタツタ族を捕らえることを取った。その結果『暴雉嘴』をも  
ろに喰らったザイスは大きなダメージを負った代わりに援軍が来る心配が無くなった。  
「代償はデカいが……有利な戦いに持ってこれた」

「有利だと？ 舐められたもんだな」

「『覚醒』は知ってるだろ」

「……なるほど。覚醒があるなら納得だ」

彼がその言葉を放った後直ぐに周りの建物から泡が溢れ出し始めた。——否、建物が  
泡になり始めた。

——コリーダコロシウム

「意外だったなあ。元海軍の君が恨みを持つ奴にけしかけるなんてさ」

「……海軍だつて勝つためには何でもやるものです」

「まあ今は海賊だからね。卑怯なのは強さだから別にいいんだけどね——っ!？」

「ディアンヌと六傑となったヴェルゴが試合について話していると爆発音が多数の所から聴こえた。」

「……やっぱ襲撃があったか……ヴェルゴ六傑になって初めての仕事だよ。他の六傑を集めて爆発の現場に場所に向かって暴れている者が居たら鎮圧して」

「分かりました。ディアンヌさんは？」

「私は……海に行くから」

「ディアンヌが何故海に行くのかヴェルゴには分からなかったが、上司の命令に従うのが海軍時代から絶対だったので何も言わずに他の六傑が居る部屋まで走った。」

「六傑居る部屋はピリピリしていた。それは部屋の中心に居るアーサーからの主だが、他の六傑も先程の爆発音を聴いていたので警戒していたのだ。」

「仕事だそうだ。爆発音の現場に赴いて鎮圧しろのことだ」

「……そうか。なら六傑としての初仕事。……もし失敗したら除名されるかもしれないな」

「アーサーは一言残してその部屋から消えた。アーサーは力や覇気などは老いによって衰えているがスピードだけは全盛期のままなので消えたように見えただけだ。」

「アーサーの後に続くように他の六傑達も現場へと向かい始めた。そして一人部屋に残った者も一言残して部屋から去った。」

「…………この覇気は……海に居るのは百獣」

一番近くで起こった爆発の鎮圧に当たったモンピートが見たのはデルエリ海賊団の副船長をしていた頃に何度も争ってきたライバルとも言える白翼海賊団副船長マエルの姿だった。

しかしその姿は以前とは大きく変わり背中まであった髪の毛は短くなり、顔には不吉な刺青が入っていた。そして一番の変化は頭から生え伸びる角だった。

「…………その姿はマエルのようだが…………リユドシエル達は一緒では無いか?」

「リユドシエルなら死んだよ。…………いやおれが殺したって言った方があつてるな」

「…………ツ!?何故実兄であつたりユドシエルを殺す必要があつた!!」

「…………知らねエよ。そんなことどうでもいいだろ!!お前はここを守る義務があるんだろ。ならおれは敵だ。…………そんな二人が対峙してやることついたら一つしかねエだろ!!」

先に動いたのはマエルだった。腰にある短剣“リベリオン 反逆剣”を抜いてモンピートへと斬りかかった。

しかしその刃がモンピートに当たるとは無かった。デルエリがマエルを横から殴り飛ばしたからであった。

「やっぱり殴る威力はトップクラスに強いなア。覇気を流すのが遅かったらダメーじ喰らってたぜ」

「ノーダメーじか……ケツから言って危ない」

「そのレベルの覇気を使われるとこっちも本気で戦わないといけないから生け捕りするのが難しく、殺してしまいそうで危ないな——」

「ん」

デルエリが放った言葉の説明をモンピートが終えると二人は動き始めた。

前衛であるデルエリがマエルを正面から殴り飛ばした。マエルも覇気を流してダメーじはなかったが、吹き飛ばされてしまったので少し隙が出来ていた。

「どうしてそうだったのかは知らないが……そこまで落ちちまったなら私がリュドシエルのもとへ送ってやるよ」

モンピートは隙をさらしたマエルの背中を蹴り飛ばした。覇気を流すのが間に合わなかったマエルは大きなダメーじを負い近くの建物へと吹き飛んで行った。

「だいぶ強くなったな。けどよ……成長率ならおれの方が上だ」

砂煙が晴れ、崩れた建物から出て来たマエルの姿は大きく変わっていた。両腕は黒い大きな翼、両脚は鋭い鉤爪、腰の辺りからは黒い尾が生えていた。

「能力者になってるのか」

「ケツから言つて面倒」

「その姿になる能力者は動物系だから異常なタフさと回復力があるから時間が掛かって

面倒だ——」

「ん」

マエルの体はさらに変化していった。全体的に二回り程大きくなった。その巨体が翼を動かし空へと羽ばたいた。その翼から周りへと放たれる風圧は周りの建物を全壊させた。

そして空中に居るマエルの口からは高温のエネルギーが溜められているのが感じられた。

「……周りへの影響は多少は仕方ないかもしれないな」

「周りばかり気にして防げるのか!!——」<sup>ヘルブレイズ</sup>「獄炎!!」

マエルの口から放たれた高温のエネルギーはモンピートとデルエリに直撃した。

直撃と言つてもダメージを受けたのはデリエリを庇つて「獄炎」を受けたモンピートだけだった。そのモンピートも覇気を流した拳をぶつけることでほぼ威力を消すことが出来ていた。

獄炎に対処する必要がなくなつたデルエリは動いていた。デルエリは上空に居るマエルの背中へと跳び乗った。

「落ちやがれ!!」

「——ッあ?!」

デルエリはマエルの事を地面へと叩きつけた。そこへすかさずモンピートは懐から短刀を取り出し脊髄へと突き刺そうとした。

しかし刺される寸前にマエルは能力を解除したことにより、マエルの首は細くなったのでモンピートは短刀を空振った。マエルはその腕を掴みモンピートのことを投げ飛ばした。

「相変わらず連携が上手いな」

「会わなくなってからそんなに時間経ってないのに『悪魔の実』の力を使いこなしてやがるな」

「……獣まで落ちたおれは生き延びるために……本能のままこの数年間は生きて来たからな……」

俯きながら言葉を洩らすマエルを見て、この数年間に何かあったことは二人の目から見ても明らかなので攻撃するのを少し躊躇ってしまった。

その瞬間モンピートとデルエリの目の前に「ソル」を使って一瞬で移動したマエルが現れた。

「敵に隙を晒しちや駄目だろ!」



マエルは二人の頭を掴み地面へと叩き付けた。叩き付けた二人を投げ飛ばした。

マエルは飛んでいくモンピートを追いかけて首を掴みもう一度地面に叩き付けた。マエルはそのまま首を絞めてモンピートのことを殺そうとした。

「何か言い残すことはあるか」

「ぐっ……私は……今まで能力を使ってこなかったが……お前と一緒に能力者なんだ……  
《コンジュラー・ジョーク》  
……手品師の悪戯!!」

「——っ!？」

モンピートとマエルの場所が入れ替わった。今度は逆にモンピートがマエルの首を掴み絞め殺そうとしている体制になっていた。

「私の能力は『マジマジの実』のマジシャン人間。私の手の内にある物体もしくは私自身とほぼ同等の大ききか質量の物の位置を交換する」

「ウ………秘密はお前にもあったのか」

「長い間戦ってきた相手にこんな終わり方をするのは申し訳ないが……仕方ないよな」

モンピートはこのまま首を絞めてマエルとの戦いに終止符を打とうとしたが最後まで絞めることが出来なかった。

遠くから吹き飛んで来た瓦礫と人物によってモンピートはマエルのことを離さざるを得なかったのだ。

「痛ったあ〜。やっぱり難しいなあ」

——ドレスローザ王宮

「貴様は何者だ!!」

「フフフ!! タダの情報屋だ。お前が知りたがってるこの騒ぎの情報を教えるために来てやったんだ」

「貴様みたいな奴の言うことを聞くと思っているのか!!」

「信じなくてもいいさ!! 情報屋だからな。この国で起こっている暴動はこの国を根城にする創造海賊団を邪魔に思った海賊たちが誰かの手によって襲撃を起こしたんだ!! この国を攻めてきた者たちは創造海賊団達によって撃退されるだろうな。だが!! これは何度も続くとしたら……この国の経済や自然はどうなるだろうな……フフフフ。それだけだ」

「何者ですか!!」

知らない者の声がりく王の居る部屋から聴こえたことを怪しんだ侍女が王国軍の騎士を連れて入ってきた。

しかし謎の男は侍女たちが入ってくる前に窓から飛び降りたのでその姿を見ることが叶わなかった。しかし飛び降りた時に舞ったピンク色のファーコートだけが侍女たちの目に入った。

「ヴィオラの侍女だろ。何故ここにおるのだ」

「いえ。ヴィオラ様に夜食をお願いされましたので調理室に向かうところこちらの部屋から聞いたことの無い男の声が聞こえたもので……」

「そうか。兵を連れてきたこと感謝する」

その左手の薬指に嵌めたシルバーリングが光る侍女はその部屋を去って行った。

## 三人の英雄

また違う爆心地ではドレスローザに珍しい魚人が二人も居た。片方は創造海賊団で頭角を現し六傑まで上り詰めたシーラカンスの魚人カントイ。それに対して襲撃者である魚人は金色の髪を三つ編みで2つにまとめた身長は5m程ある筋骨隆々の男。その男は魚人にはあるはずのない二本の角を生やしているジャック。

「いやー、外に来て魚人と会うのは久しぶりだなあ!!タイガーさんと会った以来か?」  
「同じ魚人だからって容赦はしねエぞ!!」

「私も容赦なんてして欲しくないさ。だって……そんなことしたら……つまらないじゃないか!!」

カントイはギリギリの戦闘になればなるほど興奮する戦闘<sup>へんたい</sup>狂だった。それが理由で王国軍の兵士では出世は出来なかつたが、彼女にとっては前線で戦うことが至高だったので出世出来たとしても蹴っていたのだが……。

一方ジャックは戦いを楽しむということは尊敬するカイドウも同じなので理解出来ない訳では無いが、楽しむ戦いをするつもりは一切なく一方的に蹂躪するつもりだった。

「つまらないと思う暇もなく死ぬ！」

ジャックは魚人には珍しい能力者である。魚人は海を主戦場とするのでカナヅチになる悪魔の実とは相性が悪いのである。しかしそのデメリットを上回る力をジャックは手に入れていた。その姿はさらに巨体と化し巨大な鼻と牙が伸びた。その姿はまるではるか昔大地を踏み鳴らしたマンモスのようだった。

その伸びた鼻をカンツイへと振り下ろした。その巨体から振り下ろされた鼻は岩は破壊され、鉄は凹むだろう。そんな攻撃がカンツイに直撃したらタダでは済まないだろう。

「ふふふ!!……いい攻撃じゃないか!!でも私は魚人柔術使いだ!!」引潮一本背負い!!

——しかしカンツイは魚人柔術の師範クラスである。カンツイはジャックの攻撃を覇気を流した腕で受け止め、その勢いを利用してジャックのことを背負い投げした。投げ飛ばされたジャックは建物を数軒壊して止まった。

「ふむ……建物を壊しすぎたか?……まあ団長さんなら許してくれるだろう」

「……舐めすぎてたみたいだな……だがなア!!柔術なんてもんは効かねェんだよオ!!」

「ふむ……どうしたものか……だがまあそつちの方が燃えるな!」雨溜かいらゆ一本背負い!!

!!

前日に降った雨によって出来た水溜まりを魚人柔術の一つである“水心”を使って掴みジャックへと叩き付けた。

いくら魚人とはいえ彼は能力者である。水を勢いよくぶつけられたジャックは一瞬だが隙が出来た。カンツイはその隙を見逃さず攻撃を仕掛けた。

「“魚人空手『奥義』……武頼貫”!!!」

カンツイが使ったのは魚人空手の中でも奥義と呼ばれる一つだ。彼女は大気中の水を塊として腕に纏い相手の身体を貫く技をジャックへとぶつけた。その衝撃はジャックの強靱な肉体をも貫いた。

「ぐ……だがこれで逃げられねエだろ!!」

しかしジャックが攻撃を受けたのは罠だった。自分の腹にぶつけられた腕を掴みあげると容赦なく顔を殴りつけた。

カンツイは腕を掴まれて持ち上げられているのでその衝撃を逃がすことを出来ずにダメージをくらっていた。

「カンツイさん!大丈夫ですか!!」

「……大丈夫、大丈夫。私は大丈夫だから手を出しちゃダメだよ。手出したら死んじやうからさ」

「タダの魚人のくせして頑丈じゃねエか!!」

カントイのその言葉に思うことがあったのかジャックは思いつきり殴りつけてしま  
い吹き飛ばしてしまった。

カントイはジャックの拘束から逃れることは出来たものの大きなダメージをくらっ  
ているので、圧倒的不利な状況となってしまうた。

「ハアハア……だいぶダメージをくらってしまったが……そっちの方が燃えるってもん  
だ!!」

「燃え尽きて死ね!」かんぞう「早象!!」

ジャックが放った攻撃はシンプルだった。マンモスの姿となった状態で思いつきり  
脚を踏み込むことで人工的に地震を起こした。地震によって踏み込みが甘くなったカ  
ントイへと覇気を流した鼻を振り下ろした。

カントイは揺れによって足に力が思ったように入らない。そんな状態で思いつきり  
振り下ろされた攻撃を受けたので地面にめり込んでしまった。

一応覇気は流していたので致命傷にはならなかったが、これまでに積み重ねたダメ  
ジは彼女の覇気を大きく削っていた。

「そろそろ覇気にも限界が来てるだろ。……一応聞いといてやるが……百獣に入れ」

「……それはそれで楽しめそうだけど……一応団長さんには拾ってもらった恩つても  
のがあるんでね……最後まで戦わさせてもらおうさ」

「……なら死ね!!」

ジャックは動くこともままならないカンツイへと無慈悲な一撃を振り下ろそうとした。

しかしその攻撃がカンツイに当たることにはなかった。なぜならその攻撃を邪魔するかのように二人の間にある人物が降り立った。その者はジャックの強力な覇気が流れる鼻を片手で受け止めるとそのまま投げ飛ばした。

「……やはり六傑では荷が重い相手が出てきたか……誰の手によつて手引きされたのやら。君はカンツイだったか? 済まないな。オルビアを安全な場所に移動させていたら時間が掛かったんだ」

「お前は創造海賊団三英のマーリンだな」

「私も有名になったものだな」

『創造海賊団三英 “女傑マーリン”』

二人の間に立ったのは創造海賊団のなかでも五本の指に入る実力者 “女傑マーリン”。彼女はジャックと同じく動物系ゾオンの能力者であるため能力の相性は互角。ただマーリンは幻獣種なので変則的な能力で言えばマーリンの方が上である。

そして膂力はその体格と古代種ということによってジャックの方が上である。よつて勝者となるのはより悪魔の実を使いこなせていた方であるだろう。



カンツイとジャックが戦闘を始めた頃、時を同じくして別の戦闘が始まろうとしていた。

一方は元海軍中佐の「鬼竹のヴェルゴ」。彼は元海軍将校という創造海賊団のなかでは珍しい経歴を持っている。しかし元海軍将校ということでのその実力は六傑のなかでも上位である。

それに対して襲撃者は「西の海<sup>ウエストブルー</sup>」にある「花の国」を拠点とするギャング「八宝水軍」だった。その中でも棟梁のサイ、副棟梁のブー、そして前棟梁で隠居人のチンジャオは創造海賊団の下っ端では全く歯が立たなかったためヴェルゴが来るまでに大きく戦力が削られてしまった。

「お前はそこそこ強そうだな。お前んとこの下っ端たちはだいぶ質が悪かったが……お前はどうかじゃ？」

チンジャオはヴェルゴへと殴りかかった。チンジャオの拳に流れる覇気は隠居したことによって全盛期からは多少衰えてはいるものの強力な覇気の使い手であるヴェルゴと同レベルの覇気は持っていた。

二人の強力な覇気のぶつかり合いは周りへと衝撃をもたらし、近くの建物はほぼ崩壊した。

「ふむ……筋はいいようじゃが。まだ足りぬぞ!!」

「ウ……《西の海》のギャングが何故ここまで出向いて来た」

「この創造海賊団が全世界に影響力を伸ばし、銃火器売買のパイプになっておるから……戦争が勃発しておるんだろうが!!」

「……そうだなウチが全世界の繋がりを持つパイプになることでその仲介料を貰っているから辞めることは出来ないな」

何故か言われたことに反論もせず素直に答えたヴェルゴは殴りかかって来たチンジャオの拳を覇気を流した竹竿で受け止めた。二人の武装色の覇気のレベルは同じなのに何故か竹竿は折れてしまった。

チンジャオの拳は竹竿によつて多少勢いが削れたため致命傷となる威力ではなかったが、ヴェルゴは立つのがギリギリになる程のダメージを受けてしまった。

「サイ、ブー後は頼むぞ……っ?」

もう立つこともままならないヴェルゴならサイとブーでも大丈夫だろうと思ひ二人に任せようと振り返つたチンジャオの目に入ったのは謎の植物に捕らえられ気絶している二人の姿だった。

「こんな相手にも勝てないなんて六傑失格れす!!」

「師団長! 相手はあの八宝水軍の中でも最強と名高いチンジャオれす。負けても仕方な

いれすよ」

「なら取り消すれす。お前は六傑れす」

とんちんかんな事を言いながら現れたのはマーリンと同じ三英であり、ドレスローザに住まう一族「トンタツタ族」の元戦士長「創植のレオグロウ」だった。

彼は基本的に戦闘はせずに新たにナワバリになった島の植物を調査し育てるのが仕事だった。

しかし今回の襲撃者たちは三英が全員出るレベルの人数や強さなので仕方がなく出てきた。しかし戦闘はしていないだけなのでその実力は他の三英と変わらないものを持っていた。

「お前は……三英とやらか」

「そうれす!!三英のレオちゃんれす!!」

『創造海賊団三英「創植のレオグロウ」(レオちゃん)』

「(レオちゃん?) なら本気で掛からないといけなそうじやな。ドイサ「武頭」!!」

「モサモサれす!!」

チンジャオは自身の頭部へと覇気を流してレオグロウへと頭突きをしようとした。その頭突きは空中へと飛びそのまま落ちることで重力も相まってただの頭突きとは威力が比べ物にならないものとなっていた。

しかしレオグロウは地面にある種を蒔くと『モサモサ』と言った。地面へと蒔かれた種はみるみると成長していき、やがてレオグロウを守るように成長した。

「この植物は『鷹の目』の斬撃でも生き残った植物の子孫れす!!」

「私が『鷹の目』の小僧に劣るとでも言いたいのか!!」

この植物の種は創造海賊団がドレスローザに来て少しの頃に起こったキャンドライとミホークによる戦闘が行われた島に生成されていた植物に少し手を加えて強度が増した種だった。

この植物は昔のミホークによる斬撃に耐える強度を持っていたので、衰えたチンジャオの攻撃一発程度なら耐えていた。

「『鷹の目』のことは知らないれすが……きつと劣っているれす」

「師団長。そんなこと言っちゃ悪いれすよ。チンジャオはガープの攻撃で自慢の頭の錐が凹んじやって、老人化が進んじやったんれす。彼が悪いんじやないれす。悪いのはガープれす」

「てめえの言葉が一番悪いだろ!!」

レオグロウの言葉を注意してははずの師団長補佐は段々とチンジャオを貶す言葉を言っていたので気絶していた筈の八宝水軍の二人はツツコミを入れていた。ただツツコミを入れたらまた気絶してしまつたが……。

そして補佐の言葉を聞いたチンジャオは怒りが爆発していた。しかしそれが功を奏した。怒りが爆発したチンジャオは頭へと一気に血が昇ったことによつて凹んでいた筈の錐が以前のような鋭さを持つて復活したのだ。

「——っ!?!この頭を治して頂きありがとう!!!この島で起こっている鎮圧を手伝おうでないか」

「なんか手伝つてくれるらしいですよ」

「ならばバレた分も手伝ってもらうれすよ!!」

「分かった」

人を疑うということを知らないトンタツタ族が相手だったのもありチンジャオ率いる八宝水軍はドレスローザで起こっている襲撃の鎮圧を手伝うこととなった。

ちなみに立つことがやつとのヴェルゴは忘れ去られその場に放置されていた。それは植物に捕らえられたサイとブーも同じであった。

また別の場所では六傑であるステューシーが今回の襲撃の主犯格の一人でもあるペロスペローと対峙していた。

「歓楽街の女王が傘下に居たとは想定外だ。ペロリン♪」

「久しぶりね。ビッグ・ママが開いたお茶会以来かしら?」

「そうだな。あん時も味方って訳ではなかったが……今じゃあ敵だ。死んでもらうぞ」  
「これでも裏社会をそこそこ長い間生きてきた私をそう簡単に倒せると思わないこと  
ね」

「本当『長い間』ですね」

「うるさいわね!!」

そばに居る黒服の洩らした言葉にイラツときたステューシーは脛を軽く蹴飛ばした。  
手加減はしているので骨が折れるようなことは無かったが痛いことには変わりなかつた。

「——痛いです」

「痛いなら黙ってなさい!」

「仲間割れか?こつちにとつてはいい事だけだな。ペロリン♪」

「『飛ぶ指銃』」

「不意打ちで通ると思ってるのか?『キャンディウォール』」

ステューシーが不意打ちで放った『飛ぶ指銃』だったが、ペロスペローは反射神経のみで反応して飴で出来た壁を創り出し飛んでくる指銃を防いだ。

「あら、やっぱり相性が悪いわね」

「お前は昔から気味が悪かったが……やっぱりせい——」

「それ以上のことは Secret よ。それ以上のことを詮索するのなら本気で消さなければならぬから」

「ならお前は本気を出さないのか?」

「そんなことは言つてないじゃない。私は今出せる力を出して勝てなければそこまでつて話よ」

ステューシーは一瞬は殺気を漏らしたがそれ以降は友人と喋るかのようは一切警戒していなかった。それに対してペロスペローはステューシーのその態度を不気味に思ひ警戒を解くどころか更に警戒を強めた。

「出せる力か……なら本気を出すとも言つてねエ訳だな。まあ容赦はしないがな!」  
キャンディガン!!」

「あら私の真似かしら?でも使い慣れない技は強い相手に使うものじゃないわよ」

ペロスペローは指に生み出した飴を纏うとそのままステューシー目掛けて飛ばした。まるでそれは先程ステューシーが使った「飛ぶ指銃」のようだった。ただ使い慣れない技なのでステューシーの「飛ぶ指銃」に比べたら遅く避ける暇を与えてしまった。

「引つかかったな!」キャンディアロー!!」

ペロスペローは空中に居るステューシーへと飴で出来た弓と矢で射ろうとした。しかしステューシーは六式の全てをマスターしているので「月歩<sup>げつぽう</sup>」を使って簡単に避け

た。

しかしそれもまたペロスペローによって作られた罠だった。ペロスペローの本命はキャンデイガンとキャンディアローの間に放った終末の雨だった。上空から降り注ぐ飴で出来た矢はステューシーでも避けることは出来ず多少のダメージを負ってしまった。

「ちよつと油断しちゃったわね。まあこの程度の怪我なら生命帰還でどうにかなるけど……まあ必要はないわね」

「何ボツボツ言つてやがる！まあ動けないなら『キャンデイマン』をしてやる。ペロリント」

「何してるんだ？私はペロスペロー程度なら倒せると思つていたのだが……まあそれは後で確認させてもらう。ペロスペロー君にはこの襲撃の責任を取ってもらうぞ」

ステューシーの前に現れたのは最後の三英。創造海賊団の資金管理を一手に行う財務師団の師団長であり、自身のポケットマネーが創造海賊団の資金に迫る大富豪『黄金帝ギルド・テゾーロ』だった。

『創造海賊団三英『黄金帝ギルド・テゾーロ』』

「嫌に決まつてんだろ。それにこの襲撃はおれが考えた訳じゃないぞ」

「そんなのどうでもいいんだよ。私が求めているのは襲撃に参加したペロスペローを捕



まあたという事実だけだ」

その言葉を後に彼は攻撃を仕掛けた。彼の耳に着けられた黄金で出来たイヤリング、手首に着けられた黄金で出来たブレスレットがウネウネと動き出した。

二種類のアクセサリーはテゾーロの腕を纏い隠すように変化した。

「君を捕まえたら……そうだな公開処刑をエンタテインメントショーとして出すのも一興だな」

「逆に殺してやるさ。ペロリン♪」

## 大災害

創造海賊団が襲撃の制圧に向かって無地のはずのコーリダコロシムではある人影があつた。

その人影があつた場所は六傑杯の優勝賞品であつた悪魔の実が保管されている金庫前だつた。

高価な悪魔の実を保管している金庫は全てが黄金によって作られているため破壊した場合にはテゾーロの意思に関係なく反撃が来るようになっていた。

「やっぱり黄金で出来てやがるか……まあバレても逃げればいいだけだ」  
波動<sup>ハニ</sup>プレ——  
〃

「何やっているんですか」

「——幹部も含め全員出払っているんじゃないやねエのかよ」

「ええ。ですが私はまだ構成員じゃないので」

「まだつててめエ子供じゃねエか」

侵入者が振り返つた先に居たのはまだ幼い顔立ちの少女が立っていた。その背中にはその背に見合わない名刀とも言える刀を背負っていた。

「間違つてはいませんが……一応修行を始めて六年程が経っていますのである程度は戦えますよ」

「ガキが何言つてやがる。波動ハニプ——”!!”

「”ヘッドクラッシュ”!!”

「やつぱりいるじゃねエかよ!!”

侵入者の攻撃が放たれることはなかった。侵入者の攻撃を邪魔するように頭突きを放った男が居た。その男は六傑杯で予選敗北の結果に終わったがテゾーロにその実力を評価されて「グラン・テゾーロ」への就職が決まった男「ダイス」だった。

その攻撃を侵入者は避けたが、金庫からは離されてしまった。

「避けんなよ。気持ちよくなれねエじゃねエかア!!”

「気持ち悪いな!!バレねエように生身で来たのに鎧作らねエと痛いじゃねエか……一つ叩くと二つに増えて……もう一つ叩くと三つに増える」

「——っ!その能力は!!ダイスさんこれは想定外の相手です。下がった方がいいです」  
「あア!?ならこの欲求を誰が満たしてくれる!!お前じゃあ気持ちよくなれねエよ!!”」  
「……はあ。ならテゾーロさんに金庫を動かしてもらいますね」

侵入者が手を叩くとその身体から巨大なビスケットが生成されていった。そのビスケットは人の体に組み立てられていき本体を隠す鎧となった。その姿は手配書に載る

ビッグママ海賊団「スイーツ四将星」が一人「千手のクラツカー」その人だった。

「おれの本当の姿を見たんだ。死んでもらうぞ」

「なら気持ちよくしてくれエ!!」

『プルルルル……プルルガチャ。どうしたんだね小紫。こちらも少々忙しいのだが』

ダイスとクラツカーが戦っているなか小紫は電伝虫を使ってテゾーロに連絡をとっていた。

「金庫に襲撃です」

『そちらにはダイスが居ると思うのだが?』

「相手は将星です」

『……ならしょうがないか。見えないから正確なことは出来ないが……』  
『ゴールド・スライス』

黄金で出来た金庫が鋭い刃となってダイスとクラツカーへと襲いかかった。この場にテゾーロは居ないので正確な攻撃は放てないので無差別攻撃となってしまった。

しかしこの攻撃をテゾーロが放つことをダイスは知っていたので避けることは出来た。だがクラツカーは避けることが出来ずビスケットで出来た鎧を切り裂かれ、本体にも傷を負ってしまった。

「ウ……クソが……引くしかねエか」

『こちらはペロスペローを逃がしてしまった……そちらはきちんと捕らえてくれよ』

「なっ?! ペロス兄がやられたのか」

「そうみたいですわね」

不意の攻撃で傷を負ったクラツカーはダイスと小紫によって捕えられるかと思われた。しかしとある何か巨大な物が落ちる音によって二人の攻撃は中断されてクラツカーが捕えられることは無かった。

『これはだいたい劣勢になりそうだ……』

残りの六傑であるアーサーとミックが向かった先には襲撃に参加した海賊団の下っ端しか居なかつたためあまり苦戦せず鎮圧することに成功していた。

仕事を終えた二人は他の場所の援護へと向かおうとしていたが海から向かってくる巨大な龍に気を取られ高熱の炎によって吹き飛ばされてしまった。致命傷になるほどに強力な攻撃ではなかつたため直ぐに動くことは出来るがドレスローザの建物に引火してしまったため建物の消火に動くこととなつてしまった。

「あの龍は……何故四皇直々に襲撃しに来たのだ……」

「あの姿は……確かカイドウとか言つとたニヤ」

「痛ったあ〜。やっぱり難しいなあ」

「何故団長が……」

「いやあく、相手がね。ちよつと厳しいんだよね。ねえカイドウ」

「ディアヌが見た先に居たのは青い鱗に包まれた巨大な龍。ウオウオの実、幻獣種“モデル”“青龍”の力をその身に宿した四皇の一人カイドウの姿だった。」

「カイドウは吹き飛ばしたディアヌを追いかけている途中で高熱の炎を吹き散らしていた。高熱の炎は建物へと引火してドレスローザは火の海と化してしまった。その姿はまるで大災害。二人の災害を纏める総督に相応しい姿だった。」

「ウオロロロ!! そうだなお前じゃあおれは倒せねエ!!!」ボロレス「熱息!!!」

「周りに被害が出る攻撃はやめて欲しいんだけど……まあ防げればいいんだけどね。」  
金剛の盾!!!

「カイドウが放った高熱の炎はディアヌが能力で地面から生み出した超強固な巨大な建物によつて掻き消された。」

「この技は守りに関しては強力な技となるが一つ弱点があった。それは巨大過ぎるの  
でディアヌの視界が塞がれてしまう事だった。ある程度は見聞色の覇気で相手の動  
きは分かるが自分と同等もしくは格上だった場合は動かし難かった。」

「“降三世”!!!」

「前回みたく一撃で気絶する訳にはいかないよ！」

「ラグならく引奈落”!!!”」

カイドウは人型に戻り、前回と同じように覇気を纏った金棒をディアンヌへと振り下ろした。ディアンヌは腕に覇気を纏い交差して受け止める体制を取った。

しかし金棒と腕がぶつかることは無かった。何かに遮られるようにカイドウの金棒は止まり周りへと強力な霸王色の覇気が走った。近くに居た創造海賊団の船員は気絶して、天は二人の覇気によって裂かれた。

「お前も出来るようになったのか!!……だがまだ足りねエぞ!!!」

「ウ……やっぱり練度は実践じゃないと成長しないか」

覇気の練度でカイドウには勝てないディアンヌは金棒を止めることは出来ずに振り下ろされてしまった。しかし前回と違う点は覇気で勝てないのが分かっていたので、頭に覇気を流して辛うじて受け止めることが出来た。

しかし「霸王色の覇気」を纏った攻撃は武装色の覇気による護りでは受け止めるのがやつとでありダメージは大きかった。

「ココロ硬化攻羅”!!!”」

「ウ……邪魔すんじゃないエ!!「壊風”!!ハッ!!!”」

不意打ちで上から殴りつけたキャンドラードだった。しかし武装色の覇気を纏った攻

撃では大きなダメージにはならず、カイドウの反撃によって吹き飛ばされてしまった。

「……てめエはキャンドライか!!」

「無視しないでよ!」

キャンドライへと意識が向いたカイドウをディアンヌは覇王色の覇気を纏った拳で殴りつけた。

ノーガードだったカイドウは表向きの港がある場所まで吹き飛ばされた。その場所には百獣海賊団の船が停まっていた。船からで出来た来ていた百獣海賊団の船員達はカイドウが飛んできた衝撃で海へと落ちていった。

「そのまま海に落ちて!!」

「海に落ちろカイドウ!!」

「ウオロロロそんなのつまらねエじゃねエか!! “雷鳴八卦”!!!」

港ギリギリまで飛ばされたカイドウを海に落として無力化しようとディアンヌとキャンドライは力を合わせて殴り飛ばそうとした。

しかしこれまでのカイドウは本気を出してはいなかった。カイドウは一番力を発揮出来る人獣型に変化した。龍と人の中間の姿になったカイドウは自身の金棒 “八斎戒” を雷の如く二人の拳にぶつけた。

覇気の練度で劣っている二人は力負けして逆に吹き飛ばされてしまった。二人に勝



利したことを確信したカイドウはドレスローザを荒らそうと動こうとした。

『勝者カイドウ』

「カイドウ！お前カタギに手を出すつもりじゃねエよなア!!」

「——つ!?てめエがどうしてここに居やがる……ニューゲート!!!」

「……」

カイドウの視線の先に居たのはカイドウと同じ四皇であり、ロジャーなき今最も海賊王に近い海賊王「白ひげ」エドワード・ニューゲートが愛刀のむら雲切を構えて立っていた。

「金獅子」の側近ザイスと海軍本部「大将」青キジの戦いは青キジの有利で進んでいた。ザイスがいくら泡を生み出そうと青キジが即凍らせるためザイスが攻撃出来ずにいたからだ。

「今のお前じゃあおれには勝てねエよ。大人しく捕まってくれ」

「海賊が自分から捕まるわけないだろ。泡雲」

泡に変化したドレスローザの建物たちは二人から太陽を隠すように空を覆った。その空模様はまるで曇天であり、今にも雨が降りそうだった。

「海軍が海賊の味方をするなんて……今日は槍が降りそうだな」

「何言ってるんだ?」

「ソウウ槍雨」

二人の上空を覆う泡で出来た雲から石鹼で出来た槍が降り出した。空から降る槍はザイスの能力によって生み出される物なので武装色の覇気を纏っている。青キジでもダメージを受ける攻撃だった。

二人の上空を覆う雲からの攻撃だがザイスに降るのは泡の雨なのでダメージを受けないどころか泡によってその姿が隠されていた。

「青キジが負けたのか!」

「NO!!バカ言っちゃいけないエよ」

青キジは自身に突き刺さろうとする武装色を纏った石鹼の槍を氷の体を流動させて避けることによって武装色の攻撃を回避していた。こんなことが出来るのは青キジが見聞色の覇気によって数秒先の未来を視ているからだ。

「バブリユウ泡龍」

「無駄だと言ってるでしょうが」

ザイスの身体から生み出される泡で出来た龍を青キジは動き出す前に手を振りかざして凍らせた。

青キジはそのまま攻撃を仕掛けようと地面に手を付けると……

「そろそろ潮時だ。 アイス・エイジ 氷河時代”」

青キジを中心に広範囲が凍って行った。その攻撃は遠くに居た百獣の兵たちを凍らして、そこらの雑魚とは比べ物にならない実力を持つザイスも凍ってしまった。

「……」

「あゝ、センゴクさん呼び戻さなきゃいけないエじゃん……めんどくさいな」

『勝者クザン』

## 過去と空想

魚人族同士の肉弾戦によって建物が倒壊している居住区では百獣海賊団の兵士たちが干からびて倒れていた。ただ干からびるだけではなく百獣海賊団の兵士が漏れなく老いていた。

「どのくらい兵士を連れてきたのか知らないが、私相手には雑魚は居ないも同然……いや回復出来るから得ですらあるな」

「てめえら!!こんな女に殺られて百獣海賊団の看板に泥を塗るつもりか!!!」

獣型になってしているジャックは老いて干からびている百獣海賊団の兵士たちの死体を踏み潰していた。

それは誰よりも百獣海賊団は力が全てという心情を持ちカイドウや大看板の二人に任された仕事を自分の部下が失敗した苛立ちを抑えきれなかったからだ。

死体を踏み潰した時の振動は周りに被害を与えてただでさえ崩れ気味であった建物は完全に跡形もなく崩れ落ちていた。

「あまり暴れないでくれ……再興が大変になるんだ」

「勝つ前から再興のことを考えてるなんてめでたい頭をしてやがる!!このまま生きてら

れると思ってるのか!!？」

百獣海賊団相手に言葉を通用しないことは知っているマーリンは「嵐脚」をジャックへと放った。マーリンが放った「嵐脚」は悪魔の実の能力によって強化された攻撃だ。ジャックの硬い皮膚と流れる武装色の覇気を突破してダメージを与えられる攻撃だ。

それはジャックも分かっているので悪魔の実の能力で伸びた鼻にだけ武装色の覇気を集中させて「嵐脚」を相殺した。

しかしマーリンの飛び道具にジャックは物理で受けたので一瞬の隙がジャックに生まれた。

「けっせう血爪」

「——踏み潰してやる!!」

ジャックの隙を突くようにマーリンは獣型になることで伸びた爪に武装色の覇気を流し、更に自身の血を纏ってマンモスの姿をしたジャックの脇腹を切り裂いた。

しかし古代種の力を持つジャックはその程度では痛みを感じることは無かった。

攻撃は相手にダメージを与える行為だが、相手に隙を晒す行為でもある。その隙をジャックは上から踏み潰そうと脚を振り上げてマーリンへと振り落とした。

「ウ………だけどクイーンより軽いな。」「刺傘」

マーリンは差していた傘を閉じると覇気を流して振り下ろされる脚へと突き刺した。

ジャックの全体重が掛かった脚は普通の人間だったら一瞬で潰される程の重さを持つているのだが、マーリンには通じなかった。マーリンはジャックよりも重量も上回っているクイーンの全体重を掛けた攻撃を弾き返した実績がある。そんなマーリンがジャックの攻撃に耐えられない訳ないのだ。

「……やっぱクイーンの兄御みたく出来ねエか。おれは自分の戦い方でやらせてもらうぞ!!」

「……そんな事情私には関係ないな。ここで死んでもらうぞ。『飛ぶ指銃・赫弾』」  
六式の一つである指銃を応用した『飛ぶ指銃』。『飛ぶ指銃』自体ではジャックの覇気どころか皮膚すら突破出来ない攻撃だが、マーリンの武装色の覇気と能力によって操った血を載せることでジャックの皮膚と覇気を突破する攻撃となる。

ジャックは獣型と人型の良いとこ取りを出来る人獣型に姿を変えた。その姿となったジャックは自分が持つ武器である二刀のショートルを抜いて『飛ぶ指銃』を打ち消した。このショートルは名工によって造られた物ではなくワノ国の武器工場で造られた刀なので普通はマーリンの飛ぶ指銃を受けたら折れるのだがジャックが覇気を纏わせることによってショートルが折れることは無かった。

「飛び道具如きでおれを止められる訳ねエだろオ!!」

「本当に獣なんだな。突っ込むしか能がない獣なんて敵ではないな」

マーリンが放った「飛ぶ指銃」をショートルで掻き消したジャックはマーリンへと突っ込んだ。流石のマーリンでも巨漢の男であるジャックがスピードに乗った状態の突進はかなりのダメージになることが予想出来るので空へと飛び立った。

地上では最強クラスのを力を発揮するマンモスの力を持つジャックでも空を自由に飛び回れるマーリン相手には関係がなかった。

「最初からこうしておけば良かったな……まあ日差しが強いのが難点だが」

「……マンモスってのはなァ！こうやって狩りもするんだよ!!!」

渾身の突進を避けられたジャックは空に居るマーリンを見上げていた。マーリンに攻撃を与える手段がないと思われたジャックだったが少し口角を上げると、

「『蝶象』!!」

マンモスと魚人の中間の姿になっているジャックはその巨漢には合わない大きさの一对の耳を上下に羽ばたかせた。その大きくはない耳でも勢いよく動かすことによってジャックの巨体を持ち上げていた。

そのまま勢いに乗ると自分の遙か上に居るマーリンへと追撃を仕掛けた。

「ふむ……耳で飛ぶマンモスなど、どの文献にも載ってはいなかったが……」

「それならためエが持つ情報力は敵じゃねエな!!」

「文献は私が趣味で読んでるだけだ。考古学は私の専門ではないのでな……他のことなら色々知ってるぞ。君は『早魃かんぼつのジャック』。『飛び六胞』最強と名高い実力の持ち主で大看板に一番近いって言われてる。そんなお前の過去は魚人として生まれながら、泳ぎが下手だったため虐められていた過去を持つ。虐めの一環で海流へと放り込まれてカイドウの船に拾われた。だから魚人でありながら悪魔の実を喰った……だろ?」

「……おれはカイドウさんに拾われた時に魚人としての過去は捨てた。それに虐められたのはおれが弱かったから仕方ねエことだ。……そしてこの国が滅ぼされるのは……弱い奴しか居ないからだ!!」

ジャックは二本のショーテルでマーリンに斬りかかった。その刃は武装色の覇気が纏われており、この攻撃は固い鱗と膨大な覇気に守られているカイドウだろうとダメージを受けるものだ。

そんな攻撃を察知したマーリンは日差しを防ぐ傘を閉じて覇気を流した。それだけでは勝てないので自身の血を使って傘の周りを覆ってドリルのように回転させた。

「『刺傘・血錐ちぎり』」

「覇気のレベルが足りてねエんだよ!!もう一段階上の覇気じゃねエとカイドウさんや大看板の兄御たちどころかおれすら突破出来ねエんだよ」

覇気と悪魔の実の力で強化された傘を軽く突破した二本のショーテルはマーリンの



体をXの形で斬り裂いた。

体を大きく斬り裂かれたマーリンは能力が解除されてしまい地面へと落ちていった。体を勢いよく打ち付けたマーリンは完全に意識を失ってしまった。

「こいつは幻獣種だから一応回収していくか」

『勝者ジャック』

「マーリンさんのことは……連れていかせる訳には……いかない」

「てめエなんぞアツプ相手がお似合いだ」

「きりゆうきりくぎ 錐龍錐釘!!」

「ウ……てめエはこっち側じゃねエのか!?」  
「八宝水軍」  
「ドン 首領・チンジャオ!!……裏切つたなら踏み潰してやる」

倒れたマーリンを連れ去ろうとしたジャックを止めようとカンツイがジャックの前に立ち塞がった。しかし創造海賊団の六傑まで登り詰めた実力者のカンツイをアツプ相手と一蹴し、人獣型によって伸びた鼻で叩き潰そうとした。

その鼻を止めたのは鋭く伸びたチンジャオの頭部だった。全盛期のように伸びた頭は全盛期からは劣るもののジャックと同レベルの覇気が纏われていた。

不意打ちの攻撃に対応しきれなかったジャックは後ろに退いてしまった。不意打ちの攻撃だったため退いたジャックは直ぐに体制を整えて前脚を振り上げチンジャオの

頭を踏みつけた。

「百獸んとこの小僧程度に私の牙は折れぬわア!!」

チンジャオはガープにギャングとしての牙を折られて数年の時間が経ち膂力や覇気は全盛期の半分程度まで下がっていた。しかし四皇の最高幹部ですらないジャックに負けることは八宝水軍の元棟梁としてのプライドが許さなかった。その「意志」は力として現れた。

チンジャオの「意志」は彼の武装色の覇気を底上げし、全盛期の時に近いものを手に入れた。それが一瞬だったとしても同レベル同士の戦いだったのならその一瞬が勝利をもたらすこととなるだろう。

ジャックはその一瞬によって吹き飛ばされてしまい、抱えていたマーリンを離してしまった。

「ひやホホホ……この老骨には厳しい戦いじゃった」

「ハアハア……なに勝手に勝負を終えたつもりでいやがる……おれはその女みたく……この程度で倒れるつもりはねエぞ!!」

「……老骨に鞭打つてでも戦うしかないのか」

ジャックはチンジャオの頭によって足の裏を「八衝拳」特有の内部への衝撃に貫かれて、全身に相当なダメージを喰らっていた。しかしそれをものともしないジャックの

胆力と「動物系」<sup>ゾオン</sup>悪魔の実特有の回復力とタフさによって直ぐに立ち上がりチンジャオの目の前に立った。

「ここからはおれが貰い受ける!!」

「下がっておれサイ!!こやつは今のお前には手に余る相手だ!!」

チンジャオがガープに頭を折られ、八宝水軍「棟梁」の地位をサイが受け取ったがその実力は衰えたチンジャオにさえ勝てない未熟者であった。

そんなサイが四皇の最高幹部候補のジャック相手に挑めば一瞬で勝負は決まり、それどころかサイが生きていられる保証は何処にも無かった。

「てめエら雑魚が束になったところだなア……おれは倒せねエんだよ!!」

「——っ！小僧が舐めおって」

「舐められたままで黙ってられるかア!!」

まだ若いサイは安い挑発と分かっていながら乗ってしまった。「八衝拳」すら完璧ではないサイの攻撃はジャックの分厚い皮膚と覇気を突破することはもちろん不可能であり、簡単に受け止められてしまった。

サイの「八衝拳」は未熟であるためチンジャオのように全身への衝撃を与えるどころか分厚い皮膚と覇気によって内部へ届きすらしなかった。

自身が得意とする足技を構えもせず受け止められたサイは驚き、隙を晒してしまっ

た。サイの攻撃を構えずに受け止めたジャックは自由に動かせる伸びた鼻を使い横に薙ぎ払った。

「ウ…………!!」

しかしサイに攻撃が当たるとは無かった。サイに攻撃が当たる瞬間にチンジャオが攻撃を受け止めたのだ。…………受け止めたと言っても脇腹でジャックの重たい攻撃をモロに喰らって閉まっているので骨は折れ、覇気も限界が来てしまった。

もしここでチンジャオが倒れてしまったら、この場からジャックを解き放つてしまう事となる。

六傑は総じて限界に達して、三英もマーリンは気絶、レオグロウは国民を守るために環境師団の指揮を採っている。そしてテゾーロは逃がしたペロスペローとクラツカーを捕らえるために港へ向かっているためジャックへの対応は難しいだろう。最高戦力であるディアンヌとキャンドラーもカイドウから受けた攻撃によって満身創痍だった。

チンジャオがその事実を知っているはずがないのだが、長年ギャングとして培ってきた勘で今倒れては行けないと分かっていたのだった。

「…………私は…………ガープに敗北したジジイだ…………じゃが！こんなことで倒れておつたら

…………八宝水軍「元棟梁」として歴代の棟梁達に顔向け出来ぬ!!!」

「…………つ!？」

満身創痕のチンジャオだったが残っている力を込めてジャックの鼻を掴み、空へと投げ飛ばした。そして頭に残った覇気を全て込めてジャックの巨体へと突き刺した。

急なことだったので耳を動かして飛ぶことは出来ず身動きの出来ないまま角のように伸びた頭による攻撃を喰らってしまった。

「何度も言ってるんだろ!!その程度の攻撃じゃあおれ達百獣は突破出来ねんだよ!!——  
!？」

「……で退いたら男じゃねエ!!」  
「武脚跟」<sup>フジヤオケン</sup>!!」

今までサイはチンジャオが隠居したため譲り受けた「棟梁」という肩書きにあまり自覚を持てなかつた。八宝水軍が花ノ国の戦争に参戦した時もチンジャオが横に居たため「棟梁」としての仕事はあまりしてこなかつた。

そんなことからジャックの攻撃を守りもせず脇腹に喰らつたのに攻撃によって骨が折れていたのにも関わらず攻撃に転じたチンジャオを見てサイは動けなかつた。

しかしチンジャオの言葉を聴き自分が「棟梁」であるということを自覚した。そんなサイはジャックの額へと蹴りを叩き込んだ。その攻撃は今までの蹴りとは一線を画す威力となった。

「ウ!!!」

二人の衝撃を喰らつたジャックは少し離れた場所へ落ちていった。チンジャオはこ

れまでに溜まった疲労から倒れてしまった。サイも限界を超えた威力を持った武脚眼を放った副作用から脚に力が入らず倒れてしまった。

「棟梁に戻るか？」

「ひやホホホ……一度受け取ったもんを返したら失礼じゃぞ」

「……楽しそうなところ悪いが四皇幹部はこの程度では倒れてはくれぬぞ」

「そうだ……おれはこの程度の攻撃で……倒れるほどヤワじゃねエ」

声の主は気絶していた筈のマーリンと落ちた方からゆっくりと歩いてくるジャックだった。

四皇幹部となってくれば新世界の船長クラスが気絶する程の攻撃だったとしても一撃で倒れてくれるほど壁は低くないのだ。

昼間からカンツイ、マーリン、チンジャオ、サイとの連戦で半日近く戦闘を続けていてもジャックは動物系ソオン……それも古代種ともなってくれば3日程度は余裕で戦闘を続けていられる程のタフさを持っている。

「こつから先は私も『獣』だ」

「……ハアハア情報通り……夜が主戦場か」

チンジャオによつて稼がれた時間はマーリンに夜をもたらしした。マーリンは夜が来たことにより戦闘能力がジャックと同等……いやそれ以上となった。

しかしジャックもこの事を知っていたのである程度の対策を持っていた。……それは何としても夜明けまで耐える、根性論だった。

「〃血子達チルドレン〃!!」

マーリンが指先から地面へと血を数滴垂らすとその場からマーリンを小さくした分身体が五体産まれた。

分身体たちはマーリンと同じスピードでジャックへと襲いかかった。分身体たちは阿吽の呼吸で動きジャックのことを翻弄した。

「鬱陶しいハエ共が……!! 〃早象〃!!」

ジャックは地面を踏みつけた。地面にはジャックの足跡が付き、ジャックを中心とした巨大なクレーターが出来上がった。その衝撃は自身となって周りに影響を与えた。

ジャックによって起こされた人工地震は白ひげのものには劣るもののジャックの周辺だけなら同レベルの揺れが起きた。その揺れによってマーリンの分身体たちは攻撃を中断せざるを得なかった。そこにジャックは鼻を横に薙ぎ払って分身体たちを完全に消滅させた。

「やはり小手先の技では傷一つ付けられないのか」

「……別に効かない訳じゃねエ……覇気は削られるからな」

「君も知ってると思うが時間が無いんでね。出来るだけ早く終わらせるさ。〃刺傘・血

錐“!!”

夜になったことで昼間に放った同じ技とは思えないほどに威力が上がっていた。ジャックの覇気を打ち破り、硬い皮膚も突き破って内部へと突き刺さった。

ジャックは傷から血を流した。その血を傘の周りに纏われているマーリンの血に吸われていった。

「ウ……!!? (体が重くなりやがったか?)」

「老いっでもんは思っている以上に辛いものだ」

(これがクイーンの兄御が言ってた攻撃か!)

ジャックは血を吸われるのと同時に若さを吸われて若干だが老いが進んでいた。老いが進むことにより体の感覚にズレが生まれた。そのズレ自体は小さなものだったとしても一進一退の戦闘だった場合は大きなズレとなってしまう。

「体が追いついて居ないぞ。『刺傘・血錐』!!」

創造海賊団のナワバリで戦ったクイーンの時と同じようにジャックの眉間へと傘を突き刺した。武装色の覇気を流しているのは同じだが、前回と違うところは血を纏わせてドリルのように回転させていることによって威力が上がっている。そのため前回より海が遠いのだが、海まで吹き飛ばすことに成功した。

『勝者マーリン』



「前回みたいなギリギリの勝負ではなかったな。……向こうにはカイドウがいるからな……捕らえに行くのは難しいか……」

「……老いは厳しいのう」

「……首領・チンジャオと八宝水軍の現棟梁だな。お前らも主犯格の一人だからな捕らえさせてもらうぞ」

## 三大機関

## 世界の変化

——新世界、ドレスローザ

ドレスローザは新世界の入口の近くに位置し、リク王が統治する国家である。この国は創造海賊団の本拠地が置かれ、ディアンヌとマーリンの手によって大きく発展した。そんなドレスローザだが創造海賊団が四皇カイドウとその配下と二人の四皇の配下による襲撃を受けた通称「ドレスローザ包囲網」によって大きな傷を負った。

居住区の建物の半数以上が倒壊したが、この程度の傷なら創造海賊団の財力を持ってすれば簡単に修復可能だっただろう。しかしこれを世界政府は良しとせず、重大な責任問題として創造海賊団に責任追及をし、七武海の席から除名したのだ。

七武海の席から除名された創造海賊団は、自分たちを捕らえに海軍の大將がドレスローザに来ることを察知してドレスローザからの撤退を決めた。本拠地を失った創造海賊団は新世界に広くあるナワバリへの影響力を失ってしまいその過半数を他の四皇に奪われてしまった。

創造海賊団の庇護下から外れたドレスローザは原作通りドンキホーテ海賊団による

策略によりリク王は犯罪者として投獄されてしまい同じく操られた国軍も皆指名手配者として追われる身となってしまった。

「どうしたそんなに睨んで」

「貴様が！誘導したのだろう!!あの時ドレスローザで襲撃が起こった時、貴様が創造海賊団がこの襲撃の原因と言ってる!!」

「フッフッフ!!おれは情報屋と言った筈だ。そんな何処の馬の骨とも知らない奴の忠告を真に受けて、世界政府に創造海賊団の除籍を要請したのはお前だろう。……そして創造海賊団の配下であるマーリンがこの島を去ったことで金回りが悪くなりリク・ドルド3世が乱心。……それを本物の王家であるおれが救ってやったんだ。何処に疑問を持つ?」

「——!?貴様が私の体を操ったからだろ!!」

「そんな証拠はどこにもない。国民を見てみる。おれを英雄のように称え、王と認める!!今じゃあてめエや国軍は全て反逆者として指名手配者だ!!」

ドレスローザにはドフラミンゴによってもたらされる発展とその裏にある誰にも気づかれない闇が産まれるのだった。

——グラン・テゾーロ

「ドレスローザ包囲網」で減つたと言っても大量の船員を抱える創造海賊団。そんな人数を抱え込めるほど大きな島は奪われてしまったので巨大な都市を持つ船「グラ・ン・テゾーロ」が仮の本拠地となっていた。

「あの事件から一年が経つたね」

「あの事件の黒幕である忌々しいドンキホーテ海賊団を捕らえるために海軍が動いたから、こつちも手伝つてやろうと六傑を一人向かわせたが失敗に終わってしまった」

「あいつは真面目だが……機転が効かねエ」

「最初に会つたのが海軍だったため戦闘を起こしてドフラミンゴに気付かれて逃げられた……バカなのかなあ？」

海軍の情報が間違つていたため予定時刻より遅れて向かうこととなり、隠れていたところを見つかり戦闘が起こってしまった。その戦闘音を聞いたドフラミンゴに勘づかれ逃げられてしまった。

そんな失態を犯したヴェルゴだったが、六傑杯で六傑の席をもぎ取るほどの実力者のため処罰はなかった。

「ヴェルゴの事はもういいだろう。次の議題だが、新世界で暴れていた「赤髪海賊団」が何故か最弱の海「東の海<sup>イーストブル</sup>」へと向かったとのことだ」

「……!?へえ、シャンクスがねえ。なんか理由があるのかな？」

「……特に理由らしきものが見つからなかったので、休養として向かったのだと思われる  
ます」

「……休養ねえ。それ以外の理由もありそうだけど……会いに行くのは難しいから  
なあ。……まあ事後情報でいいか」

元見習い仲間であるシャンクスが率いる赤髪海賊団は創造海賊団と同期で個々の実  
力も創造海賊団に迫るものを持っている。そんな海賊団が最弱の海とも呼ばれる「東  
の海」に行ったともなれば疑いたくもなるだろう。

しかし今は本拠地すら見つかってないのでフットワークの軽いディアンヌでも赤髪  
海賊団が「東の海」へ向かったことの本意を聴きに「東の海」に向かうことは出来な  
かった。

「……他に何かないかな？」

「……」

「よしーじゃあ解散!!」

会議が終わったディアンヌはホテルTHE REORORO内に併設されているカジノ  
へと向かった。

カジノには一攫千金を狙う海賊や海軍、娯楽を求める貴族などが数多く挑んでいた。  
グラン・テゾーロはオーナーのテゾーロがこの船は中立だと多額の賄賂を世界政府に

送って認めさせた特別中立区と呼ばれる独立国家となっている。特別中立区では海賊は略奪が禁止され、海軍は賊の捕縛が禁止、貴族の権力は無効というルールが定められている。

「何をしようかな〜」

「こりやあ大物がおつたなア」

「……海軍中将の“茶豚”が何の用かな？」

「まあまあそんなカツカツするな。世間話でもしようや」

「トキカケ中将!! 相手は“ドレスローザ包囲網”を起こした張本人なんですよ!! 海軍なら賞金首は捕まえなければ!!」

『創造海賊団 “团长” 創造のディアンヌ ヒトヒトの実(幻獣種) モデル “サーベント・シン嫉妬の巨人”

“懸賞金15億4100万ベリー”

「私はあのことから世界政府が嫌いなもの知ってるよね」

「でもこの船の元締めがルールを破ったりせんやろ？」

ディアンヌの前に現れたのは茶色のハットに黄色の腹巻、背中に正義の文字が掲げられた服を羽織ってタバコを加えた男、海軍本部“茶豚”ことトキカケ中将だった。

彼は大将候補になるほどの実力者だが頑固者であるため天竜人の直属の部下になるのは嫌だと拒否した。そんな茶豚自体はディアンヌは嫌ってはいなかった。

“ドレスローザ包囲網”で七武海の席を一方的に除名してドレスローザから追いやったこと、そしてこれまで発展させたドレスローザの国民たちからも石を投げられたりしたこと、から、ディアンヌは世界政府とその加盟国が嫌いになつてしまった。

「……時と場合に寄るんじゃない？知らないけど」

「こりやあ怖いなア、姉ちゃん。だが今はその時じゃねエだろ」

「今は、まだね」

「それが聞けただけで、いい収穫だ」

そう言つて「茶豚」はディアンヌの前から去つていった。そのまま近くにあつたルーレットに参加した茶豚は少しの時を待つてルーレットから背中を丸めて去つて行つた。

そんな後ろ姿を見てディアンヌは年齢を重ねたおじさんの哀愁が漂つていた。

「あく、うんあの人には優しくしてあげよう」

「道の真ん中に突つ立つてどうしましたか？」

「何でもないよバカラちゃん」

道の真ん中で突つ立つていたディアンヌを見つけて小走りで近付いてきたのは、背中が大きく空いた黒のドレスを身にまとつた赤色の髪、太ももには蛇を星で囲つたようなタトゥーが掘られた小柄な女性。

バカラと呼ばれた女性は「ドレスローザ包囲網」後に減った船員を集めるために新世界に残っているナワバリで人を集めた時にテゾーロの直属の部下として魅入られた子供だった。

グラン・テゾーロではコンシエルジュ見習いとしてVIP待遇が必要な人に着き案内等などの仕事の補佐を表向きではしている。

「どこに行かれますか？」

「どうしようかな。……VIPルームの丁半でも行こうかな」

「……分かりました。VIPルームまでお連れします」

VIPルームには世界各国の重鎮や海軍の将校など有名な人物が多く居た。その中でも有名なディアンヌが入ってきて誰も反応しなかった。

それはここにいる殆どがこの船のオーナー、ギルド・テゾーロはディアンヌの部下であることを知っているからだ。

「さっきの会議ぶりですね。ここは一つ勝負でもしますか？」

「望むところだよテゾーロ！」

二人はテゾーロの直属の部下であるダイスがディラーをしているVIPルームの丁半へと向かった。

そしてディアンヌは半に、テゾーロは丁に持っているチップの全額を掛けた。



「勝負ウ!!」

ダイスはサイコロを上へとぶん投げて鉄のツボに入れた。そしてダイスは巨大な斧を持ち上へと跳んだ。

そして回転しながら勢いを付けて鉄のツボへと頭突きした。

「ン〜キモテイイ〜!!」

「あゝ、……あれは治らなかつたんだね」

「無理でしたね。彼は体の隅々までDMなので。……今回も私の勝ちですね」

ダイアン又はツボに頭をぶつける痛みに快感を感じているダイスを可哀想な人を見る目で見ていた。

ダイスの頭突きによってツボが砕けてサイコロの目が見えた。二つのサイコロの目は3と1で結果は丁となりテゾーロの勝利となった。

「やっぱりテゾーロには勝てないかあゝ。テゾーロはいい貰い物したよね」

「ええそうですね。バカラはだいぶ優秀な子ですよ」

「そんな、優秀だなんて」

テゾーロに褒められたバカラは頬を赤く染めて体をくねくねしていた。それを見たダイアン又は苦笑いしながらスルーしてあげた。

なぜならテゾーロから見えないところにステラが立っていることに気づいたからだ。

ステラはテゾーロの婚約者なのだが、テゾーロはイケメンで、グラン・テゾーロのオーナーである金持ちという好条件の男性なので虫が引つ付かないように見張っていた。

「そう言えば海軍の『茶豚』と会ったけど、他に有名人は来てる?」

「ふむ『茶豚』 クラスの有名人ですか……」  
サイファーボール C P | イー A I G I S S O スゼロ「なら来てますよ」

「CPが何の用?」

「天竜人の護衛ですね」

「権力を極力使わせないように注意しといて」

ディアンヌは天竜人が自分の島に来るのは構わないが好き勝手されるのは嫌だった。

天竜人が嫌いなディアンヌは直ぐにでも殴り込みに行きたかったのだが、テゾーロが作り上げたコネを無駄にしては行けないと思い、踏みとどまっていた。

——  
トットランド 〃 万国 〃

「あんの小娘がアア!!!」

「ママ!これ以上城を壊さないでくれ!!倒壊しちゃう」

ビッグ・ママことシャーロット・リンリンが治める トットランド 〃 万国 〃 ではビッグ・ママがと

ある記事が載った新聞を見て暴れていた。

城の中で暴れているため壁は崩れ落ち、止めようとしたホーミーズ達は壁にぶつかり動かなくなっていた。暴れ回るビッグ・ママを止めるのは難しいと分かっているので子供たちは押し付け合いをして最終的に長兄のペロスペローが貧乏くじを引いてしまった。

「ペロスペロー！お前は許せるのかい!？」

「おれだつて許せねエさ!! だけど城で暴れて、もし崩れたら、弟や妹たちの半数は死んじまう」

「……そりゃあそうだね。済まなかつたね。だけどそろそろお灸を据えてやる必要がありそうだよね」

「そうだ!!」

「ハーハハママママ!! お前ならそう言ってくれると思つてたよ。じゃあ女傑の所へ行つてお灸を据えてきな」

(要らないことを言つちまつた!!)

ペロスペローはせっつかくママの機嫌が治つたのにまた悪くされたら困るのでイエスマンとなつていたのだが、それが仇となりビッグママ海賊団のナワバリと裏稼業の稼ぎを荒らし回っている「女傑マーリン」の討伐を命令されてしまったのだ。

ペロスペローは以前の「ドレスローザ包囲網」で同じ三英であるテゾーロに完敗し

ているので、今回も負けると戦う前から思っているで負けた時の言い訳を今のうちから考えているのだった。

（クソっ……あいつには勝てねエから……部下に責任を押し付けるか?……いやおれも一緒に処罰を喰らうだけだ!!）

「どうしたんだい?早く行つてきな。……もしかして嫌だとか言うんじゃないよねエ!!お前は前回の襲撃でミスしてるんだから……分かつてるよなア」

（もう無理だア!!おれが生き残るには勝つしか道はねエ!!）

「そんなことないさママ。どうやって拷問してやろうかと考えてたところだ」

ペロスペローはその長い舌を回しに回して口から出任せを言っていた。流石のビツグ・ママも相手の考えていることは分からないのでそれっぽいことを言っておけば嘘だとバレないのだが、そんな中でもペロスペローは長い間長兄として貧乏くじを引き続けていたので嘘を言うのが兄弟の中では一番上手かった。

しかし口から出任せを言うのは得意なのだが顔色は変わってしまっていた。元々顔色の悪いペロスペローの顔は更に青白く染まり、冷や汗をダラダラと流していた。

「どうしたんだペロス兄」

「クラッカーか……よしお前も『女傑』の討伐に着いてこい」

「あー、おれはビスケット工場の手伝いが……」

「わざわざお前が手伝わなくてもウチの工場は回るだろうが!!」  
「じゃあおれは行ってくる!!」

クラッカーは面倒くさいことはしたくない末っ子気質なので適当に理由を付けてペロスペローの叫びの最後を聞く前にペロスペローの前から去っていた。

ペロスペローは他の兄弟たちにも声をかけようとしたが、皆適当に理由を作ったり、本当に用事があつたりと結局一人で「女傑マーリン」の討伐に向かうこととなつてしまった。

——ワノ国、鬼ヶ島

「ウオロロロロ!! ジャックはこれまで真面目に頑張ってきたよな。ヒック」

「ズッコケジャックにしてはよくやっていたな」

「ムハハハ!! あの女に負けた以外は上手くやってたな」

「誰が言つてやがる。お前も負けていただろクイーン」

「てめエも拷問で侍が口を割る前に殺してるじゃねエか」

ワノ国にある百獣海賊団の本拠地である鬼ヶ島ではカイドウが酒を飲みながら大看板であるキングとクイーンと話していた。話の内容は飛び六胞の中で頭一つ飛び抜けた実力を持ち、真面目に仕事をこなしているジャックについてだった。

大看板の二人もジャックを認めていた。上から目線でジャックのことを褒めて、キングはクイーンをクイーンはキングを貶していた。

「そろそろジャックを大看板に昇格させてやってもいいんじゃないやねエカア」

「あいつのことは認めているがまだ早いんじゃないですか？カイドウさん」

「それはキングに同意だぜ。あいつは真面目だが海賊としての経験が少ないんじゃないですか？」

「ウオロロロロ!!お前らア!!おれに逆らおうつてのかア!!!」

カイドウは酔っているため沸点がとにかく低かった。いつもだったら許している部下の反論に切れてしまった。

切れたカイドウには百獣海賊団屈指の実力者である大看板の二人でも止めることは不可能なので部下たちが逃げるように声を荒らげた。

『てめエら!!カイドウさんの “怒り上戸” だ!!鬼ヶ島から即刻退避しやがれ!!』

クイーンはスマシを使って鬼ヶ島内にいる船員達に逃げるように伝達した。

そしてキングはカイドウの足止めをするために “人型” の自前の翼を使って飛び立った。そんな近付いてくるキングへとカイドウは口から “熱息”<sup>ホプロレス</sup> を吹き放った。そしてキングは自分へと飛んでくる高熱の炎を自前の炎を使って相殺した。

「……損な役割だな」

これが鬼ヶ島の日常だった。

## 同盟と襲撃

——グラン・テゾーロ

創造海賊団の仮本拠地であるグラン・テゾーロに「金獅子」のシキが訪れていた。その理由としては、ディアンヌが金獅子にとある提案を持ち込んだからだ。

その内容としては七武海の席を降ろされた創造海賊団が奪われたナワバリを奪い返すために四皇との繋がりを強めておく必要があった。勢力が四皇に近い創造海賊団でも三人の四皇を相手取っては完全に負けてしまうので、白ひげを除いて唯一繋がりがあ  
る金獅子海賊団との同盟だった。

ただそれだけでは金獅子海賊団に利がないので、金獅子海賊団が研究している植物の研究を環境師団が手伝うのを見返りとしていた。

「ジハハハ!!そろそろおれの下に付くつもりになったか!!」

「バカ言わないでよね。ナワバリは減ったけど新しい資金源は少しずつ確保してるし、  
そもそもここだけで事足りてるしね」

「しぶてえこつた。……だからこの話は受けてやってもいいんだが……少々旨みが少  
ねエな」



「じゃあ襲撃のことを忘れてあげるよ」

「随分と上から目線じゃねエかア!!おめエはせいぜい七武海止まりの海賊だろうが!!」

グラン・テゾーロで密談を行っていた金獅子がディアンヌの上から目線にキレて能力を使おうと地面を触ろうとした。しかし――

「私の船で好き勝手されては困るな」

「――っ!？」

密談が行われている部屋の床が触手のように変化して、金獅子の動きを止めた。そしてその部屋の外から歩いて入ってきたのはこの船のオーナーであり、三英が一人ギルド・テゾーロだった。

「やっぱりさあ……時間の流れってのは厳しいよね」

「どういうつもりだア!」

「それはこつちのセリフだって。……シキはさ、まだ僕に勝てるのか思っているんだらうけどさあ……テゾーロに止められてる時点で僕の敵じゃないから」

テゾーロの実力は相当なものだが、他の四皇相手には軽く捻られる程の実力差が存在する。しかし金獅子は予め未来を見て攻撃避ける見聞色の覇気や覇気によって更に強固となった黄金の拘束を打ち破れる膂力と武装色の覇気……そしてロジャーを筆頭に数多のライバルや海軍のガープ、センゴクと争っていた頃に磨かれた霸王色の覇気をシ

キは老化と頭に刺さった舵輪と脚を切り落としたことによる衰弱により失っていたのだった。

「覇気や膂力が残つてねエかもしれないねエがおめエみたいな小娘一人捻り潰すなんてのはこの力があれば十分なんだよ!!」

シキは力だけで黄金の拘束から逃げるのを諦めて能力を使い空へと飛び立った。

「同盟なら結んでやつてもいいと思つていたが、やめだ!やめ!!おめエらをこの船ごと海に落としてやる」

窓の外へと飛び出したシキは能力を使って船をひっくり返そうとこの島で一番の高さを誇るホテル “THE REORO” に触れようとした。

「覚醒した能力でこのホテルは掌握している」

黄金で出来たホテルが触手のようにうねり、空中に浮かぶシキを捕らえるために動き出した。しかしシキを主戦場である空中ではそう簡単には捕まえることが出来ないのだとある策をテゾーロは立てていた。

空中に浮かぶシキを囲いように追う触手たちによってシキはテゾーロの策にハマろうとしていた。

「能力が覚醒してようとなア!戦闘つてのは経験が物を言うんだよ!!」

「経験ならウチの船員たちもそこそこしてるけどね」

だいぶ離れたところから叫んでいるシキに「ディアンヌは小さな声でツッコんだ。

黄金の触手たちによってシキはテゾーロによってシヨーが行われる広場の中央まで追い込まれていた。

「ゴールドスプラッターシュ!!」

船を着艦出来るように黄金の液体で満たされていた広場は噴火したかのように吹き上がった。真上にいたシキはもちろん黄金の液体を全身に被ってしまいテゾーロの支配下に置かれてしまった。

そしてテゾーロは黄金の液体を個体に変化させてシキの動きを完全に封じた。自分たちの足場を持ち上げてディアンヌと共に完全に動きを封じ込まれたシキの目の前へ移動した。

「これで分かったかな? 君はさ老いているんだよ。大海賊時代の前身を作り出した」伝説の海賊「君」

「……おれが牢獄にいる間に有望な奴らが育ったんだな」

「もう死ぬみたいなの霧囲気を出してるけど、まだ死んでもらう訳にはいかないよ。今の私たちがあ金獅子のナワバリ全土を支配しきれないからね。……一応負けたんだからこつちの条件を飲んでもらうよ。まあ代わりと言つちやなんだけど新しい旨味を用意してあげるから」

「旨味だど?」

ディアンヌが用意した条件はこうだ。

創造海賊団と金獅子海賊団は海賊同盟を結ぶ。

金獅子海賊団はこれまで研究してきたデータを創造海賊団に提供する。

創造海賊団は研究に使用する植物を創造海賊団「環境師団」が担当する。

改めてディアンヌが提案した条件は研究に使用する植物を環境師団が完全に管理することとなった。そしてこの二つにプラスして創造海賊団が新たに入手した悪魔の力の力をシキに使うことだ。

「結構暴れちまったし条件が悪くなるのは分かるが……この最後のはおれにだいぶ力を与えることになるがいいのか? おめエラの喉元を食い破るかもしれないぞ」

「そもそも能力者はウチの子だからいつでも解除出来るし、そもそも気絶したら解除されちゃうからね」

「じゃあこの条件で同盟を結んでやるよ」

そして同盟はグラン・テゾーロ上空、臨時VIP室にて「世界経済新聞社」社長を保証人として締結された。その情報は「世界経済新聞社」によって全世界へと運ばれた。

——マリルフォード

「よりもよって創造海賊団と手を組みやがった!!」

「そうカツカツするなセンゴク」

元帥室にはセンゴク元帥とガープ中将が金獅子海賊団と創造海賊団による海賊同盟の締結についての記事を読んでいた。

海を統べる四人の皇帝と名高い四皇の一人が、あまりにも勢力を拡大させ過ぎたため七武海から理由をつけて辞めさせた創造海賊団と手を組んだのは他の四皇を出し抜くには持つてこいの出来事だった。

「ただでさえ奴らの七武海脱退は世界政府の戦力に大打撃と言うのに……四皇と手を組んだら政府の力では止められなくなる」

「脱退って何言ってるんだセンゴク。奴らは政府の命令で除名させられたんだろ?」

「……私はあいつらが海賊として本格的に動くために脱退したと聞いておるぞ」

「……政府の隠蔽工作か。お前は態々敵を増やして下の海兵の仕事を増やす必要が無いと考えておるからな。反対されることは目に見えてる」

王下七武海の席を決めるのは海軍元帥であるセンゴクに一任されている。しかし世界政府に反抗的な動きを見せていた創造海賊団を“五老星”を筆頭に政府の人間達は疎ましく思っていた。

そんななか起こったドレスローザ包囲網だ。この事件を口実に世界政府の“全軍総

帥”であるコングがセンゴクに隠すように手を回して創造海賊団を追い出したのだ。その時に丁度、政府と繋がりがある海賊が七武海の席を求めていた所だったため、コングは創造海賊団を追い出すことに躊躇いはなかった。

「……私は奴らが七武海入りするのは反対じゃった。しかし創造海賊団が脱退して戦力差が広がったため渋々許可をしたものの……創造海賊団を追い出してまで入れる程の実力もなければ……奴らには個人的な恨みもあつた」

「それはあれか？ 潜入捜査をしていた海兵の潜入先だったからか？」

「……なぜ知っているかは問わぬが……そうだ。そもそもドレスローザ包囲網は奴らの策略によって起こされた可能性があると報告を受けていた」

“ドレスローザ包囲網”後にドンキホーテ海賊団に潜入していたセンゴクの部下であるロシナンテはスパイをしていたのがバレたのか、殺害されてしまった。

その後の政府上層部からのドンキホーテ海賊団の七武海入りの要請だった。センゴクとしては是が非でも七武海入りを防ぎたかったが、創造海賊団が七武海から居なくなつた今、そこそこの戦力を持つドンキホーテ海賊団を拒否することは出来なかつた。

「……もう七武海になつてしまったのだ。これ以上の詮索と手出しは無用だ。お前もじゃガープ。勝手に動いたらお前でも処罰を与えなければならぬ」

「分かつておる」

『プルルルル……プルルルル……ガチャ』  
「どうした」

元帥室においてある電伝虫に一通の連絡が入った。それはマリolfordの湾内を監視する監視塔からの連絡だった。

その連絡はセンゴクやガープを驚かせる内容となっていた。

『“金獅子”のシキです!! “金獅子”のシキが複数の戦艦を連れてマリolford上空に現れました!!』

「なんだと!?!」

『プルルルル……プルルルル……ガチャ』

「こちらガープだ。どうした?」

今度の連絡は海底監獄 “インペルダウン” からだった。センゴクはマリolfordからの連絡が忙しかったので仕方なくガープが電伝虫を取った。

『こちら “インペルダウン” !!……インペルダウンに創造海賊団が現れました!!』

「つ!?分かった。そちらに海軍大将を向かわせる。……どうするセンゴク」

「サカズキとクザンをインペルダウンへと向かわせて、シキはあの時と同じように我々が受け持つぞ!」

「ボルサリーノはどうするんだ?」

「……念の為だが『エニエス・ロビー』に向かわせる」

今のところ『司法の島』エニエス・ロビーが襲撃されたという報告を受けてはいないが、創造海賊団と金獅子海賊団の計画された襲撃事件だとしたら三大機関の全てを襲撃する可能性も考えられたので最低限の戦力を送っておく必要があった。

金獅子海賊団相手にわざわざ元帥のセンゴクとガープが対応する理由としては以前の『金獅子』のシキによる襲撃は海軍側が勝利している。以前とは違い金獅子は部下も連れているがザイスが居ない今マリルフォードに居合わせた海軍将校数人で事足りるとセンゴクは考えていた。

「ジハハハ……居るんだろセンゴク!!ガープ!!あん時のリベンジだ!!!」

「おいおいワシは幻でも見ておるんか?」

「安心しろ私もだ」

二人の目の前に居たのは空に浮く複数の戦艦を率いるように先頭に立つ十数年前に戦ったシキの姿だった。

「こりゃあ骨が折れそうじゃわい」

「……すまんガープ。私の判断ミスだ」



「前回と違つておれは冷静だア!!今回は半壊で済むと思うなよ」

シキのその言葉を皮切りにシキが率いる『金獅子海賊団』の大船団がマリンプォードの中央を目指して進み始めた。

マリンプォードの中央で待つ最強の海兵とも言えるガープとセンゴク。背中に羽織つた正義の名が刻まれたコートを脱いで、久しく見せていなかった本気を見せた。二人の後ろに立つ数名の中将達も迫り来る強敵を前にして気を引き締めた。

——『司法の島』 エニエス・ロビー

「センゴクさんの予想どうり来ちゃいやしたか……それも副団長自ら来るなんて腹括らないといけないねエ〜」

「黄猿か……お前の能力は面倒だからなここで死んでもらうぞ」

センゴクの命令によつてエニエス・ロビーの護衛として派遣された黄猿だったが、来ても精々三英か六傑だと思つていた。そのためエニエス・ロビーに向かつてくる創造海賊団の海賊船の船首に立つ『副団長』キャンドラーを見て溜め息を吐いて、気を引き締めた。

「あつしも『大将』としてここを落とされる訳にはいかないんでねエ〜。船ごと沈んでくれよ〜。『八尺瓊勾玉』」

「レオグロウ頼むぞ」

「分かったれす!! モーサモサれす!!」

黄猿の体から放たれた無数の光の弾丸がキャンドライが乗る船を貫こうと向かっていった。キャンドライは一撃一撃の威力は高いが弾幕への対処は難しい。そのため念の為に乗り合わせたレオグロウが甲板に敷かれた芝生へとある種をまいて、能力を使い強制的に成長させた。

成長した植物は斜め上から放たれた光の弾丸から船を遮るように成長して光の弾丸を受け止めた。海軍大将の攻撃を防ぎきれたのは環境師団による品種改良のおかげだろう。

「三英まで来てるなんてほんとに想定外だねエ〜。遠距離がダメとなると詰めないといけないねえ〜」

「来いよ黄猿。正面から潰してやる」

「熱いのはサカズキ一人で十分なんだよオ〜。天叢雲劍あまのむらくも」

黄猿はその手に自分の半身を越す巨大な光の剣を生み出した。その巨大な剣を片手に光の速さでキャンドライへと襲いかかった。しかしキャンドライは見聞色の覇氣によつてその素早さに反応し、光の剣を武装色の覇氣を纏った三節棍で受け止めた。

それに加えて三節棍の独特の軌道により黄猿の体にもぶつかった。武装色を纏った

攻撃は「自然系」の能力者である黄猿にも当たりエニエス・ロビーへと送り返した。

「効くねエ〜」

「何冗談言つてやがる。『羅天』」

キャンドラーはエニエス・ロビーの上空へと「月歩」を使って飛び立った。そして手に持つ三節棍を一直線になるように固定するとそのまま黄猿目掛けて放り投げた。武装色を纏った三節棍はキャンドラーの手から離れてから数秒は残っているので「自然系」の黄猿にも少くないダメージを与えることとなる。

「『八咫鏡』」

黄猿は手を円を作るように構えて光を照射した。黄猿はその先に一瞬で移動していた。

しかしそんな移動をキャンドラーが許す訳もなく光の先に先回りをして武装色を纏った拳で黄猿のことを殴りつけた。

移動を読まれていることなど黄猿にも分かっていた。そのため移動した先で予め「天叢雲劍」構えておきキャンドラーの拳を受け止めた。

「そんな攻撃分かつてるに決まつてるでしょ〜」

「チツ……海まで落ちろ」

「それはちよつと無理な相談だねエ〜」

拳を受け止められたキャンドライだったが、今度は前蹴りで黄猿のことを海に落とそうとした。黄猿も脚を振り上げて応戦したが、空中でのことだったので可動域が少ない。そして光の速度で動くようにすると一瞬隙が生まれてしまうため普通の蹴りでの応戦となつたのでキャンドライの前蹴りの威力には勝てずに海まで蹴り飛ばされてしまった。

「やつちまつたねエ〜〜」

その言葉を最後に黄猿は海へと落ちて行ってしまった。黄猿とともに護衛に来ていた海兵たちは黄猿を引き上げるために海へと急いだためエニエス・ロビーの守りがガラ空きとなった。

「エニエス・ロビーを砲撃で攻撃しろ!!」

沖で待機していたキャンドライの船たちは一斉にエニエス・ロビーへと向かい始めた。そして大砲の射程圏内に入ると一斉に砲撃を始めた。数名の海兵しか残っていないエニエス・ロビーには無数の砲撃から守るすべはない。そのため一瞬でエニエス・ロビーは火の海に包まれた。

「お前ら!! 帰還するぞ」

「っ?! 何故です!! このまま続ければ全壊させるのは簡単ですよ」

「お前ら黄猿を甘く見るな。あと数分程度で奴は戦線に復帰するはずだ。あいつほどの

者が同じ手を食らうはずがねエからな。次はこの船を破壊されるかもしれないねエ。この船が破壊されちまったら敵地に取り残されちまう。そうなったらこつちの敗北が決まる。だから帰還すんだよ」

「……っ！了解です!!」

火の海に包まれ、多くの建物が倒壊しているエニエス・ロビーから創造海賊団は撤退した。その数分後に海から引き上げられた黄猿が悲惨な現場に現れた。

「……こりゃあ滅給もんだねエ。じゃああつし達もマリノンフォードに向かいやすか」

「いいんでしょうか？我々の任務はここの防衛ですが」

「防衛するもんは無くなっちまったでしょ……。それにこんなゴミみたいなところをもう一度攻めてくる程のバカなら『新世界』で生きていないでしょオ〜〜」

『た、た、大将が司法の島をゴミって言ったアー!!?』

「あく、今のはセンゴクさんには内緒で頼むよオ〜〜」

『エニエス・ロビー半壊』

## インペルダウン

——三大機関、インペルダウンLEVEL6

創造海賊団の襲撃による騒ぎは表向きには存在しないものとして扱われている  
LEVEL6にも届いていた。

そんな騒ぎはLEVEL6を担当しているシリユウの耳にも当然届いている。戦闘  
狂であるシリユウは上の階で創造海賊団と戦うために上へと登ろうとしたが、監獄所長  
であるマゼランによって止められてしまった。

『お前の任務はLEVEL6の監視だ。創造海賊団はおれが直々に始末する』

「……なにが監視だ！ 退屈な仕事を押し付けやがって……」

「ムルンフツフあたしたちが相手をしてあげてもいいのよ」

「……一応おれも看守長なんだ。理由がなきや開けない」

「かたいわね」

シリユウとしても一応は看守長としての立場を貰っているので訳もなく囚人を逃が  
すことは自身のプライドは許さなかった。そう、何か理由がない限りは……。

「あれ〜？ てつきりシリユウも上に登っていると思っただけだな」

「……お前はディアンヌだな。15億の賞金首お前なら楽しめそうだ」

「僕としては楽しむつもりなんてないんだけどなあ……まあ邪魔するって言うのなら戦うしかないよね!!」

ディアンヌは楽しむつもりは無いと言っているが口角を上げていた。ディアンヌは覇気を纏った攻撃でシリユウ目掛けて殴りかかった。

そして何故最下層であるLEVEL6の監獄にディアンヌがこんなにも早く現れたのかは十分程前に遡る必要がある。

——十分前、インペルダウンLEVEL1

「入口に居た看守は弱かったから簡単に入れたけど……LEVEL6まで行くにはマゼランとシリユウが居るんだよね」

「ディアンヌ様なら倒せるのでは?」

「無理言わないでよタナカさん。僕でも大将クラスの二人を相手には勝てるか分からないよ」

監獄署長であるマゼランはもちろんのこと看守長である雨のシリユウも現大将達とほぼ同じ実力を持っている。

そんな二人を相手に善戦までは出来るもののその後の海軍本部から派遣される将校

に対抗する体力を残すことは出来ないので戦うとしても一人までだ。

「お前はおれ一人で倒させてもらう。創造のディアンヌ」

「ここは任せるよマーリン。タナカさん僕を下に送って!!」

「了解です」

「逃がすと思ってるのかア!!」ヒドラー「毒竜」

タナカさんによってインペルダウンにLEVEL1からLEVEL6までの穴が開けられた。

だがマゼランは誰一人と逃がすつもりはない。そんなマゼランは自分の体から少量でも死に至らしめる麻痺性の神経毒の塊で出来た三つ首の竜を生み出した。そしてその竜をディアンヌが降りようとしている穴へと操った。

「僕はそこそこ能力を鍛えてるから人工物でもある程度なら操れるんだよね。」  
クリエーション  
 創造”」

ディアンヌによって創られた壁はマゼランと創造海賊団を遮っていた。マゼランは壁を壊すような能力は持つておらず、為す術なかった。

しかしディアンヌが穴へと降りるとその壁は元の地面へと戻っていった。マゼランの前に立つのはマーリンを筆頭とした創造海賊団の幹部数名とタナカさんだった。

「貴方の血は毒があつてピリツとしてそうだ。……でも毒は嫌いだから吸いに行くのは



難しそうだな……血を流して私に味わわせてくれ。『嵐脚・血染』

「嵐脚程度でおれにダメージを与えられると思うな！ 『毒フグ』!!」

マーリンは血によつて赤黒く染まった嵐脚を放った。それに対してマゼランは大きく息を吸い込んだ後に毒の塊を吐き出した。二人の技がぶつかるのとマゼランの『毒フグ』は大きく弾けインペルダウンL E V E L I 広範囲へと神経毒が降り注いだ。二人の戦いを遠くから見ているL E V E L I に収容されている囚人達にも毒液は降りかかり囚人達からは阿鼻叫喚の声が聴こえていた。

しかしマーリンの嵐脚も勢いが衰えることはなく、マゼランの体に大きな傷をつけることとなった。マーリンの嵐脚は元々の脅力に加えて鍛えてきた武装色の覇気、そして自身の能力によつて操った血を纏わせることによつて普通のC P が使う嵐脚とは一線を画す威力となつていた。

「この程度の攻撃痛くも痒くもないわ!!」

「あら、だいぶ大きな傷だけど痛くも痒くもないなんて凄いわね。なら今度は突き刺してあげる。突き刺され『大血弓』……『血月』」

マーリンは自身の血によつて作り出した長弓に血によつて作り出した矢を番えた。そして矢に武装色を流した。血と覇気によつて赤黒く染まった矢はマゼランへと放たれた。

鎌の捻れによって段々と回転していく矢はマゼランとて当たれば少なくともダメー  
ジを負うこととなる。それを分かっているマゼランは避けるという選択をとった。

「ここは私の仕事だ」

——LEVEL 6

「案外弱つちいのかな？」

「はあはあ……この程度で舐められつちまつたら困るな」

シリユウはディアンヌの攻撃によって壁まで吹き飛ばされた。シリユウは立ち上  
り自身の刀へと覇気を流し直して立ち上がった。

それに伴いディアンヌも拳に壁から鉄を奪い、グローブのように装着して更にその上  
から覇気を纏い戦闘態勢を採った。

「飛ぶ斬撃・霧雨」

「そんな弱つちい斬撃が幾つ飛んで来ても効きはしないよ」

シリユウが刀を振り下ろすと無数の小さな斬撃がディアンヌへと降り注いだ。ディ  
アンヌは自分へと向かってくる斬撃達を鉄と覇気を纏った拳をぶつけることで全て相  
殺した。

そして自分の両手に纏った鉄を大槌に変化させた。その長さをもともせず巧み

に操りシリユウの横っ腹へと振りかぶった。シリユウも覇気を流した刀で防御をしたが勢いを殺しきけることは出来ずに吹き飛ばされてしまった。

しかしそのロンググリーチから放たれる攻撃を避けるのは難しく、もし避けようとして直撃を食らってしまったら肋骨が折れることは確実だった。そのため防御するのが最善の策であつたのは間違いがなかった。

「ウっ……だいぶ痛てエじゃねエか。……だがこんな滾る戦いは……久しぶりだ」

「僕は君相手じゃあ滾りそうにないよ。滾る相手つてのはもつと四皇とかの殺気で肌がピリつくような負ける可能性の方が高い相手じゃないとね」

「……滾らせてやる！奥義『極雨』!!」

「いくらやつても無駄だつて言うのに強情なんだから……でもまあそっちの方が面白いからいいけどね」

シリユウは愛刀『雷雨』に今までで一番の覇気を流してディアンヌへと刀を振り下ろした。

ディアンヌは大槌から小回りの効く刀に変形させてシリユウの刀を受け止めた。その衝撃は周りへと斬撃となつて飛んでいき囚人達のいる牢屋に傷を付けた。

「やつぱりインペルダウンの二枚看板は伊達じゃないね。残虐性のある性格じゃなかつたら勧誘していたよ」

「……おれ自身は残虐性があると思っではない。ただ戦闘が好きなのだ」

「なに？ 僕に勧誘して欲しいの？」

「……少しは考えたが、お前に着いて行ってもおれが楽しめるようなことは起こらなそうだからな。そして説明したのはおれの性格を勘違いされて認識されるのは仕事をしていく上で邪魔になるからだ」

こう話している間もシリユウは一切気を抜くことはしていなかった。そのためジワジワと体力を削っていた。それは自分とデイアンヌの実力に差があることを分かっているからだ。シリユウは自分より弱いことがわかってるのでデイアンヌはリラックスしていた。

しかし不意打ち攻撃が効くような隙は一切見せておらず、そこからも彼女の實力の高さが見受けられた。

「……聞いてなかったがどういう目的でインペルダウンを襲撃した？」

「同盟締結の条件だね。ドレスローザを襲撃したザイスを助けなきゃいけないんだよね」

「なんだと？ それだけの為にここを襲撃したのか」

「まあそれだけじゃないんだけどね。三大機関を全て襲撃して政府の良いように首を切られた復讐でもしよっかなって思ったんだよね。丁度シキもマリンフォードに因縁が

あつたみたいだからさ」

ディアンヌの言葉にシリユウだけではなくLEVEL6の囚人達も絶句していた。それは七武海の席から降ろされたというだけで政府の主要施設である三大機関に襲撃を仕掛けるなど普通の海賊では有り得ない行動だった。それをやってのけるディアンヌもまた四皇たちと同じような頭のおかしな海賊の一人なのだろう。

「私もそろそろ飽きて来たから終わらせてあげるよ」

「なんだと?」

ディアンヌは巨人の姿へと変化していった。「嫉妬の巨人」という名前ながらもその姿は誰もが羨む圧倒的な力を持ち、巨体でも可愛らしく見える顔、そしてスラツとしたスタイルをしていた。誰かを嫉妬するどころか誰からも嫉妬される巨人がそこには居た。

「やっぱりの姿になったら狭いね。まあすぐ終わらせるから少しの辛抱かな?」

ディアンヌはその巨体からは考えられない速さでシリユウの事を殴った。その重さと速さから放たれる拳はシリユウのことを吹き飛ばした。その威力はインペルダウンLEVEL6の囚人達を捕らえるために頑丈に造られた壁を凹ませる程だった。

そのまま追い打ちをかけるために一瞬でシリユウの目の前へと移動した。そして殴るために腕を振りかぶったが……。

『ブルルル……ブルルル……ブル、ガチャ。こちらキャンドライーだ。こっちはエニエス・ロビーを半壊にしたぞ』

「報告ありがと。こっちももうすぐ終わるからあそこに戻っておいて」

『ああ、開発を進めておく。ちなみに黄猿はこっちに来ていたから、そっちには少なくとも大將が一人以上は向かっている筈だ早めに終わらせておけ』

「忠告ありがと。でもまあ大將が来るのは想定していたから一応策は練つてあるから大丈夫だと思うけど……」

「おれのこととは放置か」

デイアンヌがエニエス・ロビー襲撃を終えたキャンドライーとの会話に夢中になっていた隙を着いてデイアンヌの腕を斬りつけた。覇気を纏っていたのでダメージは少なかつたが不意打ちを食らつてしまいシリユウを拘束していた左腕を離してしまった。

「女の子の体を斬りつけるなんて酷いね。まあ戦闘中の怪我は仕方ないと思うけど不意打ちで食らつた傷はちよつと悲しいよ。これはお仕置が必要かな」

デイアンヌは今まで本気を出していなかった。彼女はとあるラインで自分の出す力を変えている。それは覇王色を纏えるかどうかである。

相手がカイドウや白ひげ、ビッグ・マムなどの覇王色を纏える猛者たち相手にはデイアンヌも本気を出す。しかし覇王色を纏えない、そもそも覇王色を持つていない者に対

してはディアンヌが本気を出すことは無い。それは何故か、相手を基本的に見下しているからである。自分が本気を出したら可哀想、一瞬で勝負がついて面白くないと思つてゐるため本気を出さない。しかしそんな格下相手にも本気を出すことがある。それは仲間の危機である時、そしてキレた時である。

ディアンヌはキレても表情に出したり、冷静さを欠いたりすることは無い。しかしその怒りは彼女の覇気に現れる。感情の昂りによつて通常時に武装色を纏う感覚で覇王色を纏つてしまう。彼女も戦士であり女性なのだ。戦闘中での傷でキレることはないが、不意打ちで傷をつけられたのならキレても仕方の無いことだった。

「お仕置だから逃げないでよね」

「逃がすつもりなどないのは分かりきつてゐる」

「私は速いよ」

シリユウは避けるのを諦めて見切つて受け流すことに集中した。しかしディアンヌの攻撃はシリユウの動体視力を遥かに超えていた。シリユウの目の前へと一瞬で移動したディアンヌは力を受け流そうと刀を上げようとするシリユウへと無慈悲な一撃を顔へと叩き込んだ。叩き込んだと言つても顔に当たつた訳では無い。霸王色の覇気を纏つた攻撃は相手に触れることなくダメージを与えることを可能とする。もちろん当たつていないからと言つてダメージが減るなどということは起こらない。それどころ

か武装色の覇気では歯が立たない程の威力を誇る。

武装色の覇気で防御したシリユウだったが圧倒的威力を誇る霸王色の覇気を纏ったデイアンヌの攻撃によって一撃で気絶してしまった。

「ふう、久しぶりにキレちゃった。まあキレル前はいい勝負が出来たし少しは楽しめたよ」

「いい試合だったわ」

「君は確か…… // 史上最悪の女囚」 若月狩りみかづきがりのカタリーナ・デボンだったよね。まだ若いのに凄いね」

「貴女のような大海賊に言われたくないけど……ちなみに私を連れて行かない？」

「まあ戦力は欲しいけど君の『若月狩り』って異名は美女たちの首を集めてるからなんでしょ？ 私には部下から首を狙われる続ける胆力はないかな」

カタリーナ・デボンが22歳という若さでLEVEL6の囚人となったのは彼女が連続殺人犯だからである。美への執着が人一倍あり、自分より美しい女性を殺害しその首をコレクションしているという点で残虐性の高さが伺える。

また実力も他のLEVEL6の囚人たちにも負けないものを持っている。動物系ゾオンの幻獣種という珍しい力に色々な武器を使いこなせる器用さ、しっかりと極めた覇気。これらを加味して彼女は22歳という若さでLEVEL6に収監されることとなった。



「……でも貴女は美人じゃないわよ」

「……どういふことかな？」

デボンの美人じゃない発言にキレてはいないもののその額には青筋を浮かべていた。しかし返答次第では地面を操りデボンを牢屋ごと潰す準備は出来ていた。

「だって貴女は可愛い系だもの」

「あら、ありがと。……おだてても連れていく訳にはいかないよ。私の目的はザイスだけだもの」

「あら残念」

ディアンヌはデボンの牢獄の前から去り、ザイスの牢獄を目指した。ザイスは新入りなので入口から離れた所にいると予想したディアンヌだったが、その予想は見事の中のし、ザイスは入口から一番遠い牢獄の中に収監されていた。

「騒がしいと思っていたが何の用だ。創造のディアンヌ」

「君を助けに来たと言ったら？」

「笑わせるな。おれはてめエのドレスローザでの権力を全て奪った男だ。そんな男を助ける奴がどこに居やがる」

「僕たち創造海賊団と金獅子海賊団が海賊同盟を結んだと言ったら？」

「なに？」

証拠を見せるために世界経済新聞の一面に載ったディアンヌとシキが写った写真と海賊同盟の文字をザイスに見せて自分に着いてくることを納得させた。

タナカさんによって開けられた穴はもう閉じてしまっている。そのため二人全てのLEVELの階層を通って上層階に行かなければならないのだが二人の実力を持ってすれば簡単に突破することが出来る。しかし地形を突破したとしても厄介な相手が居る。それは動物系の覚醒者である獄卒獣たちだ。獄卒獣たちが厄介なのは強いからだけでは無い。獄卒獣たちを倒すには時間がかかるからだ。動物系の覚醒者特有の異常なタフさと回復力を持っているため持久戦にもつれ込んでしまう。これが普通の人が相手の場合は……。

「僕が牛とコアラを倒すから残りはザイスが頼むね」

「おれに命令するな」

「牛ちゃんとコアラちゃんかかっておいで」

人としての理性がほぼ残っていない獄卒獣二体はディアンヌの挑発に簡単に乗った。牛の獄卒獣であるミノタウロスはその巨体からは想像できないスピードでディアンヌの前へと現れた。そのまま右手に持つ金棒を振り下ろした。コアラの獄卒獣であるミノコアラはミノタウロスとほぼ同じスピードでディアンヌの横に移動した。そしてメリケンサックを付けた拳でディアンヌの体を叩きつけた。

「やっぱり手応えないね」

——創造海賊団ナワバリのとある島

この島はディアンヌとキャンドラがドレスローザに入国してまもなくの頃にナワバリとして占領した。

そこそこに大きいこの島だが、島の面積に対して人が暮らす範囲は島の入口にある小さな港を中心に10数軒の建物が建つ位しか居住区が造られていないので創造海賊団は放置して来た。

この場所にも使い道はあった。この島の殆どは人の手が加わってない広大な森林が広がっている。そのためこの場所は若手たちの訓練場として使われている。

今この場所にやって来ているのは三大機関襲撃に加わっていないマーリンの専属執事から六傑となった今でも執事服を着ているアーサーと着物とディアンヌに似た服を身に付ける二人の子供だった。二人の子供はまだ幼いながらも才能の片鱗を見せる創造海賊団の有力株である。

「ディアンヌ様に修行を頼まれたのでまずは実力を見せてください」

「私から行きます!!」

アーサーの言葉に最初に反応したのは着物を来た青緑色の髪を持つ少女だった。そ

の身に不相応なサイズの刀を二本鞘から抜きアーサーへと斬りかかった。

彼女はアーサーとの実力差を理解しているので一切の手加減をせずに刀を振り下ろした。アーサーは腰にある剣を抜くことも無く腕に覇気を流して刀を受け止めた。

「ふむ……そこそこに重いですが、それだけです。そんな攻撃ではカイドウに傷を付けるどころか飛び六胞にすら傷は付きませんよ」

「はあはあ……私まだ子供ですよ」

「ダイアンヌ様は子供の時にC Pサイファーポールを殺してますよ」

ダイアンヌの過去についてはマーリンを通してある程度のことなら知らされていた。しかし殺している事実を知っているだけで何故殺すに至ったなどは聞かされていない。そのためCPが複数の巨人相手に戦闘を行いたいぶ疲労が溜まっていたことは知らなかった。

「それにマロナ様を見てください。貴女より小さいのに剣を振り回して降ってきた木の葉を切り刻んでますよ」

「……マロナとは才能が違うから」

「……才能ですか……聞きたいのですが、貴女の言う才能とはなんのことですか？ 血統、覇気……他にないかありますか？」

「……」

「何も言えませんがね。だって貴女はマロナ様と同等の血統を持ち、マロナ様と同じように三種類の覇気を持ち合わせている。そんな才能を持ちながら何が才能ですか」

アーサーに説教された日和だったが子供特有の不貞腐れるなどはしなかった。日和が大人びているのもあるが、一番は説教の内容が確かにそうだったからだ。日和には光月おでんという偉大な侍の血が流れ、まだ10と少ししか歳を重ねていないのに三種類の覇気を持ち合わせていることが確認されていた。そんな才能を持ちながらマロナ才能のことを憚むなど侍の娘としてあつてはならない事だった。

「そろそろ体力も戻ってきた頃でしょう。修行を再開しますよ」

アーサーが言い切る前に日和は走り出した。おでんから引き継がれた天羽々斬とディアンヌから渡された刀を強く握った。日和の顔からは影が消えていた。彼女の顔は打倒カイドウを目指して強さを目指す侍の顔をしていた。

### ——聖地マリージョア

「赤い土の大陸」に存在するマリージョアは天竜人たちが住まう聖地である。そんなマリージョアの入口である赤い港の先にあるパンゲア城。ここは四年に1度行われる「世界会議」の会場である。

そんな政府要人を集めるパンゲア城に住まう者たちが居る。それは世界政府最高権

力「五老星」である。

「……政府三大機関を襲撃など想像もしていなかった」

「スパイは何をしていたのだ!!」

「彼女曰く今回の襲撃は六傑にも伝えられて居なかったそうさ。こんな重大事件を實力だけで幹部になった者に伝える程、奴も馬鹿ではないということだろう」

創造海賊団が何か事件を起こすと考えた五老星はスパイを創造海賊団が勢力を拡大し始めた頃に送った。やがて幹部の席を取るまでに創造海賊団内の地位を上げた。しかしディアンヌは古参メンバーである三英までにしか情報を漏らしていなかった。そのためスパイとしての仕事は失敗に終わっていた。

「七武海に着任した時秘密裏に消していればここまで悩まされることもなかった筈だ」

「それ以前にあの悪魔の実は名前を変えたあの実と同じで異質だ。何故名前を変えなかったのか……」

五老星は三大機関襲撃という重大事件を引き起こした主犯ディアンヌの悪魔の実について語っていた。彼女の悪魔の実は「動物系」幻獣種でありながら他のものに干渉している。有名な幻獣種と言えば不死鳥フエニックスが挙げられるが、自然系ロギアのような不死性を持ち合わせているが、あれは「動物系」特有の体の変化の範疇である。

しかしディアンヌの「嫉妬の巨人」サベント・シンはまるで「超人系」ハラミニアのように自分以外にも影響

を与えるている点が異様なのだ。

「能力からして、〃ツチツチの実〃とでも名付けておけば……」

「〃ツチツチの実〃は他に存在している。それも海軍将校にだ。名前を変えていたら悪魔の法の則に矛盾が生まれてしまう」

「我々に出来ることは……」  
C P A I G I S O に命令することだが……彼らには

荷が重過ぎる相手だ」

「来る時まで放置するしかないだろう……」

## “海軍大将”

——マリソフオード

「ジハハハ！腕は落ちてねえよな海軍！ “斬波”!!」

「私が受けよう」

シキは刀を振るいセンゴクとガープへと斬撃を放った。その斬撃は刀に纏ったシキの強力な覇気によって人の体を容易に切り裂くものとなった。

もしガープが得意とする砲弾を投げつける攻撃をしたとしても斬撃によって簡単に切り裂かれてしまう。そして覇気を纏った拳で相殺しようとしても今のガープでは力負けしてしまい傷を負うこととなる。そのため動物系ゾオンの能力者であるセンゴクがガープの前に立った。

センゴクは獣型である巨大な金色に輝く大仏の姿に変化した。その腕に覇気を纏わせると向かってくる斬撃にぶつけた。その掌からは衝撃波が発生して斬撃を打ち消した。

「腕は落ちてないようだな!!だが老化は辛いよなア!!」

「くっ……舐めおって」



センゴクは分かっていた。今の斬撃は本気の攻撃ではないと。そして大将としてマリンフォードでシキを迎え撃つた時には感じなかった力の差を感じていた。それは老いにより覇気が全盛期に比べて衰えていることにあつた。衰えたと言つても微々たるものだが元々拮抗していた実力だったとしたらその衰えは大きな差となる……。

「数を増やしても止められるかセンゴク!!? 獅子・千切谷!!!」

シキは先程出した斬撃と同じ威力のものを複数飛ばした。大量の斬撃をセンゴク一人で受け止めるのは不可能に近い。そのためガープも動いた。ガープは拳に覇気を纏い斬撃にぶつめた。最初のうちはガープもセンゴクも対処出来ていた。しかし段々と打ち漏らしが増え始めて傷を負っていた。

「ガープ! ダメージを負うことを覚悟してシキに攻撃する」

「……ああ、分かった」

ガープとセンゴクは自分へと向かって来る斬撃を打ち消すのを止めた。二人はダメージ覚悟で空に浮かぶシキへと攻撃を仕掛けた。シキも斬撃を飛ばすのを止めて二人の拳を二本の刀で受け止めた。

やはり空中戦ではシキが有利だった。フワフワの実の力による圧倒的機動力で二人の拳を外側に受け流して地面へと蹴り飛ばした。

地面へと叩き付けられた二人を見てシキの配下と戦っている海軍将校たちは動揺し

ていた。海軍は上に行くほど実力が高いという組織だ。そんな海軍のトップである「元帥」センゴクと「英雄」と呼ばれる最強の「中将」ガープが二人がかりで相手しているのにシキ相手に防戦一方だった。そんな状況を見て動揺しない海兵は居ないだろう。

『プルルル……プルルル……ガチャ。エニエス・ロビーを半壊させた。だが黄猿はほぼ無傷だ。早めに終わらせねエとそつちに現れるぞ』

「ジハハハ!!そろそろ終わらせるから心配するな。そういうことで、あの日の因縁はここで終わりにしてやる。〃獅子威し・地巻き〃!!」

キャンドラーからの連絡を聴いたシキはロジャー達としのぎを削って来た時から続く海軍との因縁を終わらせるために地面に触れた。シキが地面に触れた瞬間に地面が浮かび上がり、複数の巨大な獅子に変形した。

複数の獅子はセンゴクとガープへと襲いかかった。センゴクは巨大な獅子に呑まれないためにもう一度獣型に変化した。掌からの衝撃波で獅子を破壊しようとするが、能力によって獅子の形をしているが所詮土や岩で出来ているので直ぐに元の形に戻ってしまった。

「……長い因縁もこれで終わりか」

「その二人を殺されちゃあ困るねエ〜!!」

背中に正義の文字が刻まれたコートを羽織った男がシキの背後に現れた。シキは空を浮く自分の背後に人が現れると思つてもいなかったので見聞色の覇気では反応出来なかつた。

背後に現れた男はシキの背中を蹴り飛ばした。その蹴りは協力で湾外まで蹴り飛ばされてしまつたが、シキは能力によつて空中で留まり海水に浸かることは無かつた。

蹴り飛ばされたことによりセンゴクとガープを捕らえている獅子は解除されて二人は自由となり、シキは圧倒的に不利となつてしまつた。

「クソが！連絡からまだ少ししか経つてねエぞ!!」

「そりゃあわつしが一人で来たからね〜」

「悪魔の力の力か！……分が悪いか……仕方ねエ撤退だ。てめエらア!! さつさと船に乗らねエと置いてくぞ!!」

「逃がす訳ないでしょうが。〃八尺瓊勾玉〃!!」

自身の兵士たちを海軍将校と戦わせるために地面に落としていた船をゆつくりと持ち上げ始めた。大多数の兵士たちは船に乗り込めていたが何人かは乗り遅れて将校たちに殺されてしまつた。

シキはそのまま船たちを湾外へと逃がそうとしたが、黄猿はそれを良しとしなかつた。黄猿は両手で円を作りそこから無数の光の弾丸を放ち金獅子海賊団の船に浴びせ

た。その攻撃により船に逃げ込んだ兵士の半分が傷を負い四分の一程度が殺された。

その攻撃にシキが反応することは無かった。やがて黄猿の攻撃の射程範囲外まで逃げると船を海に降ろした。その際に黄猿の攻撃によつて船底に穴を空けられた船が数隻あつたため沈没してしまつた。

「結果としては前回より悪いが……あいつらの実力が落ちてきていることは確かだな。次の機会には完膚無きまでに潰してやる」

——インペルダウン

「これはこれは海軍大将が二人も!!どういった御用で?」

「舐めちよるんか!!その巨大な船ごと海の藻屑にしちよる!!」

「おい止めとけサカズキ!あの船には天竜人が乗つてる。もし船を破壊なんてしたら晴れておれらも犯罪者の仲間入りだ」

インペルダウンの入口付近にはギルド・テゾーロがオーナーを務める独立国家グラン・テゾーロがインペルダウンへと入るのを邪魔するように泊まっていた。

そしてその前に居たのは赤犬と青キジを乗せた戦艦の艦隊だった。赤犬は相手が海賊の配下ということで問答無用で攻撃しようとしたが青キジが止めた。それはグラン・テゾーロが特別中立区として世界政府に認められているのもあるが、一番の理由はグラ

ン・テゾーロに天竜人が乗っているからだ。

「そうですとも!!この船には天竜人たちがお楽しみにならている。それに天竜人へ送る大量の上納金も乗っている!!そんなものを大将と言えど破壊したら犯罪者ですね」

「おれたちも退いてくれさえすれば攻撃はせずに済むんだが……まあ退いてはくれねえよな」

「すみませんね。この船の命とも言えるギガントタートルが休憩に入ってしまったあと一時間は動けそうにないですね」

「お前を殺して無理矢理動かせば済むことだ!!」犬囓紅蓮“!!!”

「私は攻撃するつもりはありませんが防御は仕方ないですよねクザンさん」

言い訳にしか聞こえないテゾーロの言葉に痺れを切らした赤犬はテゾーロだけを狙って攻撃を仕掛けた。右腕を「マグマグの実」の力によって流れ出る溶岩に変化させた。その溶岩を犬の形に変形させてテゾーロへと突撃させた。溶岩で出来た犬はテゾーロの喉笛を噛み切ろうと迫った。

テゾーロは迫り来る犬に焦ることは無く黄金に光る地面に触れた。その瞬間地面が盛り上がり赤犬が生み出した犬の数倍大きい黄金で出来た犬に変形した。

二種類の犬はぶつかり合った。最初の方は黄金が溶け始めてテゾーロの方が不利に見えたが溶岩で出来た犬を黄金の犬が口を開き喰らうと一気に溶岩の温度は冷え固

まっっていった。

「貴方の攻撃では私には届かなそうだ。諦めてもらおう」

「海賊を前に諦める海軍が居る訳ないじゃろ!! 流星火山!!!」

「おい! サカズキやり過ぎだ!」

赤犬は空に両腕を向けると溶岩に両腕を変化させて、巨大な拳をいくつも空に飛ばした。腕から飛ばされた際の勢いがやがて無くなると重力に従ってグラン・テゾーロ全土の広範囲に溶岩で出来た巨大な拳が大量に落ちていた。

「まだ理解してないようだ。教えてあげよう。私の覚醒した力を!!」

テゾーロは本気を出して力を込めた。テゾーロの能力によつてグラン・テゾーロ全土という広範囲に影響力が広がり、落ちてくる拳に対応するように地面から巨大な拳を生やした。

二つの拳がぶつかり合うと流石のグラン・テゾーロも揺れた。転覆するようなことはないが中に居る天竜人は揺れに驚き腰を抜かしていたが赤犬の知ることはない。

先程の犬と同じように最初は黄金が溶けて押されているように見えた。しかし黄金が溶岩を包むように広がり包み込むと溶岩を冷やしてただの岩にして終わった。

テゾーロが持つゴルゴルの実はディアンヌが手に入れてテゾーロに贈与された物だ。そこから10年程の年月が経ち覚醒に至るまで鍛錬した。覚醒したゴルゴルの実はグ

ラン・テゾーロ全土に影響を与え操ることを可能とした。そんなテゾーロの体とも言えるグラン・テゾーロの上ではいくら海軍大将と言えどテゾーロを倒すのは至難を極めるだろう。

「だから言つたはずだ。貴方の攻撃は私には届かないと！」

「サカズキ！テゾーロの相手は分が悪い。インペルダウンにいる奴らだけを捕まえるぞ。〃<sup>アイスエイジ</sup>氷河時代〃！氷を溶かさないために溶岩はもう撃つなよ」

青キジの言葉に反論しなかったが、確かに二度も攻撃を完封されているので諦めた。デイアン又たちが撤退する道を氷によつて完全に塞がれているのにテゾーロが焦る素振りを見せないことに青キジは逃げる事が出来る手段をデイアン又たちが持っているのかと思ひ気を弛めることは無かった。それどころか出てきた瞬間に仕留められるように気を引き締め直した。

——LEVELEE〃紅蓮地獄〃

「ここは私の仕事だ」

マゼランがマーリンの弓の攻撃を避けた元の場所にモンピートが飛び込んで行つた。逃げた先のマゼランに弓を向けるポーズを採つた。

その後は自身の能力であるマジマジの実の力を使いマーリンと居場所を入れ替えた。

そんな能力を想定していなかったマゼランにマーリンの血で出来た弓矢が突き刺さった。見聞色によって弓矢が飛んでくるのを感知して致命傷を避けるのは成功したが、肩に刺さってしまった片腕が上がらなくなってしまった。

「ウっ……だがおれの攻撃に腕はいらねエ！ 毒・雲<sup>ドククモ</sup>！」

「みな息を吸うな！ 吸ったら身動きが取れなくなるぞ！！」

マゼランは利き腕の肩が上がらなくなったため攻撃の手段を変えた。相手の自由を奪うために口から息を吐いた。その息は段々と相手の体の自由を奪い、やがて全身の力を奪い倒れてしまうものだった。

いち早くこの攻撃に気付いたマーリンは創造海賊団のメンバーにこの内容を伝えマゼランへと走った。マーリンのバットバットの実モデル「バンパイア」の力で自身の血を操り、血を巡る毒を身体の中から抜くことが出来るのでマゼランの攻撃で倒れることはないと思っていた。

「おれの能力は中身に来るものだけじゃねエ……！！」

「っ……指銃<sup>シツ</sup>！！」

マゼランの全身から毒が溢れた。その毒が垂れた地面は溶けていた。これを見て喰らえば自分も危ないと分かっていたマーリンだが、この機を逃せば味方は全滅してしまうのは確実。それを分かっていたマーリンは避けることをせずに突撃した。



マゼランの猛毒によりマーリンの体は焼け爛れ、激痛に苛まれた。しかし力と覇気を込めた指はマゼランの体を突き刺した。マーリンの能力が発動した。バンパイアのためによりマゼランから若さを奪った。老いたことによりマゼランの毒の力は弱くなりマーリンがこれ以上ダメージを負うことは無かった。

しかし動物系ゾンを持つとしてもこれまでに受けた毒が皮膚を溶かし筋肉を毒に蝕むことを防げなかった。毒により筋肉が震え、力が入らず立っていることがやっとだった。

「降参……したらどうだ……マゼラン」

「こっちは老いただけだ。だがお前は完全に毒に蝕まれている。もって一時間程度だ」

二人は体にガタが来ているが一切引こうとしなかった。それは完全に1体1の状況となっているからだ。創造海賊団のメンバー、囚人、獄卒や毒蜘蛛たちはマゼランの毒によって倒れてしまっている。今この階層で立っているのは監獄側のマゼランと襲撃者側のマーリンのたった二人だった。

ここでマーリンが気絶すればマゼランがディアンヌの元へと行き、シリユウとマゼランの二人をディアンヌ一人で相手しなければならぬと思ひ、マゼランもここでマーリンに負ければシリユウがディアンヌとマーリンの相手をしなければならぬと思っている。実際はシリユウはもう負けて、ディアンヌとザイスが合流して上に登って来ているので時間を稼げば創造海賊団の勝利は確定しているのだが、隔離されたこの空間でそ

の事実を知る者はいない。

「……………飛ぶ指銃……………赫弾!!」

「……………ベノムデーモン毒の巨兵……………地獄の審判!!」

数少ない部位である腕を動かして飛ぶ指銃を撃った。ただの飛ぶ指銃と違う点は血を使い圧倒的に強化されている。それに対してマゼランは自身の最強最悪の技を使った。全身から紫色ではなく真紅色の毒を溢れさせて、自身の背後に毒液で出来たドクロの巨人を生み出した。その巨人はマゼランの動きと連動して飛んでくる指銃を叩き潰した。毒の拳がぶつかった地面は溶けていた。

もう一度拳を振り上げてマーリンを殴ろうとしたがマゼランに変化が起こった。

「ウっ……………こんな時に……………こいつの寿命も尽きる、か……………仕方あるまい」

マゼランはトイレへと走った。この日はトイレに籠もり終わっていたのだが、一気に歳をとったことにより体が弱くなった。そのため内蔵も弱くなり腹を下してしまった。

マーリンの命ももう少して尽きるところにいるマゼランはマーリンの死に様を見ることをせずにトイレへと走って行ってしまった。マーリンを殺せば老いた歳は戻り腹が下っているのも戻るのだが強烈な腹痛に苛まれていたマゼランには思いもつかなかった。

「……………もう限界だ……………」

マゼランが目の前から消えたことにより気が抜けたマーリンは倒れてしまった。そして大監獄「インペルダウン」LEVEL1「紅蓮地獄」に立つ者は誰も居なくなつた。

——LEVEL3「飢餓地獄」

飢餓地獄ではディアンヌが巨大な金棒を振り回しているミノタウロスとメリケンサックを嵌めた拳を叩き付けているミノコアラと戦い、ザイスが二本の棍棒を振り回すミノリノケロスとモーニングスターを振り回すミノゼブラと戦っていた。

「人のこと言えないけど動物系のタフさは本当に厄介だね」

「モ、オオオ……!!」

見た目からは想像のつかない素早さで金棒をディアンヌへと叩き付けたミノタウロスだったが、ディアンヌはそれ以上の速さで避けて頭に武装色を纏った拳を殴り付けた。

壁へと吹き飛んで行ったミノタウロスはぶつかつた衝撃で倒れてしまったがすぐに起き上がった。空中にディアンヌが居たので隙があると思つたミノコアラがメリケンサックを嵌めた拳で殴り付けた。

「だ〜か〜ら〜!!軽いんだって!!」

ディアンヌは一切守ろうとせず、拳を身体で受けた。空中に居たため吹き飛びはしたが、一切ダメージは受けていなかった。それどころか攻撃をしたミノコアラの指が血だらけになっていた。

メリケンサックを嵌めているので当たり前かと思うかもしれないが、ミノコアラの身体は頑丈なのだ。そこら辺の岩をメリケンサックを嵌めて殴ろうと一切傷が付くことはない。

「服が汚れちゃったじゃん!!お返しだよ」

ディアンヌは地面に触れて金属を指に纏わせてメリケンサックを自作した。その拳の上から覇気を纏いミノコアラの腹を殴り付けた。

ディアンヌの強力な覇気によってミノコアラは吹き飛ばされて壁に激突した。そのエネルギーは強力で鉄で出来たメリケンサックが一発殴っただけでボロボロに砕け散っていた。

「やつぱり強度はないなあ。コアラちゃんはこれで起きないかな?……つて後ろから叩き付けても僕の頭はかち割れないよ」

回復していたミノタウロスがディアンヌの背後に移動してその手に持つ金棒をディアンヌの頭へと振り下ろした。しかしディアンヌの宣言通り頭が勝ち割られることはなく、それどころか金棒が砕け散っていた。

「ディアンヌは一切覇気を纏うどころか流してすらいないので、この強度はディアンヌ本来の硬さだ。こんな強固な身体を持つディアンヌ相手に獄卒獣ごときがダメージを入れられるとは思えないがミノタウロスは拳で攻撃しようとした。」

「拳はコアラちゃんの攻撃でしょ！君は金棒を持たなきゃ!!」クリエイション「創造」

「ディアンヌは地面から鉄だけを操り金棒を創りあげた。今までミノタウロスが使っていた金棒とは比べ物にならない密度の金棒はディアンヌの強固な身体にぶつけたとしても砕けることは無いだろう。」

「そんな金棒をミノタウロスに投げつけた。流石のミノタウロスでもディアンヌの行動を怪しみ金棒をすぐに掴みはしなかった。しかし危険がないと分かるとすぐに広いディアンヌへと殴りかかった。」

「本当に使うんだね!!やっぱり頭悪いんだね!」

「モ、オオオオ!!!」

「最後になりそうだから私の本気を見せてあげるよ!」

「ディアンヌは動物系の本来の力である獣型に変化した。巨人族のような巨体になったディアンヌは拳に武装色を纏い振りかぶっている金棒にぶつけた。」

「その衝撃波は遠くから覗いていた囚人たちを壁へと吹き飛ばした。近くで戦っていたザイスはこの程度の衝撃は慣れているので吹き飛びはしなかったがそちらに気を取

られてしまった。その隙を獄卒獣のもつモーニングスターで殴られてしまった。

「舐められたら困るな。その程度じゃあおれでも効かねエぞ。『泡龍』！」

パラミンシア

超人系悪魔の実「アワアワの実」の能力者であるザイスは動物系の能力者であるディアンヌに比べて劣るが新世界を生きてきた猛者であるザイスもある程度は頑丈なので獄卒獣の攻撃一発ノーガードで受けた程度でよろける程ザイスもヤワではない。しかしノーガードで攻撃されたので頭に血が上っていた。不意打ちの攻撃でキレるところはディアンヌと一緒にであった。

ザイスは身体から泡を生み出した。生み出した大量の泡をカイドウの獣型のような龍の姿に変化させた。

「絡みつけ」

ドレスローザ包囲網で使った「石鹼息」ソープブレスは動物系の能力者相手にはダメージがあまり入らないので使わなかった。代わりに動きを封じるために二体の獄卒獣に絡み付いた。

その際にザイスはとある発見をした。頭が弱く体が重い獄卒獣たちは泡によって地面がよく滑るようになることと立っていることが出来なかった。それを好機と思ったザイスは獄卒獣たちを押し倒すと石鹼で創った槍に覇気を流して突き刺した。

「ディアンヌの戦いが終わるまでに何本刺せるか数えてやる」

ザイスは獄卒獸をいたぶるように回しながら槍を刺した。刺し終えたら次の槍を創り刺すをディアンヌの戦闘が終わるまで続けていた。

——グラン・テゾーロ

「ここで何をしていますのですか」

「——?!? あら少し調べ物を」

「知らないんですかこの部屋は三英以上の方しか入室禁止なんですよ」

「貴女だつて入っているじゃないステラ」

「私は最低でも六傑以上の席は貰つてますので」

“THE REORO”の最上階にある創造海賊団の中でも三英以上の席に座る者しか入室することが許されていない創造海賊団創設時から集められた宝や情報が集められた特別金庫にステラとステューシーの姿があつた。

ステラはディアンヌの秘書という肩書きがある。それは書類上では三英と同等の権力を持つ席である。ただステラは表に立つことが少ないステラを知る船員はテゾーロの配下にも少ないが、この部屋に入ることは許されている。

それに対してステューシーは六傑ではあるがこの部屋に入室することは許されておらず更に“歓楽街の女王”と呼ばれる裏社会の大物であるステューシーは裏社会の住

人に情報売る可能性があったのでグラン・テゾーロにいる間は監視されていた。

「分かったのなら出て行ってもらいましょうかステューシーさん」

「そうだったのね。じゃあ失礼するわ」

「帰るのはその手に持っているものは離してもらってからです」

「ごめんなさいね」

ステューシーは手に持っていた日誌を元にあつた場所へ戻すと特別金庫から去って行った。

その日誌はディアンヌがロジャー海賊団の見習いをやっている時から書いていた航海日誌だった。

「すいません。幹部に見つかりあまり情報を調べられませんでした」

『分かったことでもいい話せ』

「はい、ディアンヌはロジャー海賊団の見習いとなり解散の時まで過ごしていました。そしてその解散の際に悪魔の実を貰ったみたいです。そこからはキャンドラと会い今に至るみたいです」

『……やはりあれはロジャーの遺産か……これからも情報収集に励め』

「はっ！」



ステューシーはステラの見聞色の覇気に反応されたら困る連絡をするためにホテルから出て電伝虫を出した。

下調べはしてあったので映像電伝虫の死角となる場所で五老星へと連絡を取っていた。

## “正義”

ザイスを解放するために襲撃したインペルダウンでの戦いも大詰めを迎えていた。看守長最強のシリユウ、監獄署長のマゼランが無力化された今インペルダウンに残された戦力は獄卒獣たちしか残っていなかった。

残っている獄卒獣たちも二体はザイスによって無力化されている。残った二体もディアンヌによって倒されるだろう。

「そこその力で殴ったつもりなのに立つんだ……流石 “動物系”<sup>ゾオン</sup>の覚醒者だね。まあそっちの方が面白いし、倒しがいがあるしね」

ディアンヌの覇気を纏った拳によって壁まで吹き飛ばされてしまった獄卒獣たちだったが、持ち前のタフさと回復力で直ぐに立ち直した。それでもディアンヌから受けたダメージは大きく少しふらつきが見えていた。

「少しづつ覇気を強くしていくからどこまで耐えられるかな？」

「モ、オオオ!!」

ディアンヌが煽るように手招きすると挑発に乗った二体の獄卒獣が襲いかかった。ディアンヌが創った金棒を持った“獄卒獣”ミノタウロスはディアンヌへと金棒を振

り下ろした。

ディアンヌは獣型になっているためミノタウロス以上の背丈なのでガラ空きとなった鳩尾へとさつきより強めた覇気を纏った拳で殴り飛ばした。殴った隙を突こうとミノコアラが動こうとしたが先にディアンヌがその巨体からは考えられない速度で回し蹴りを放った。回し蹴りを喰らったミノコアラは吹き飛びはしなかったがその場に崩れ落ち気絶していた。

「蹴りは弱くなっちゃうかあゝ。脚に覇気を纏うのは苦手だし仕方ないか。……それで牛はまだ立つのかあゝ。思ってた以上に頑丈だね」

「モ、オオオ!!!」

ミノタウロスは金棒を握り締めディアンヌの頭を狙って殴りかかった。

「ちよつと攻撃に捻りがないなあゝ。……本当につまらない」

(……)ここまで霸王色の覇気が磨かれているのか……ここで不意打ちでも倒しておく方が利になりそうだが……同盟をこちらから破棄しては金獅子海賊団の看板に泥を塗ってしまうか)

強い相手は好ましく思っているディアンヌだったが、ただ頑丈で異常なタフさを持っているだけの強さは持ち合わせていない獄卒獣たちにイラつき始めていた。

ディアンヌのつまらないというイラつく感情に合わせて霸王色の覇気が漏れ始めた。

ディアンヌの強力な霸王色の覇気にザイスでさえ少し萎縮していた。そんな霸王色の覇気を直接当てられたミノタウロスは金棒をその手から離してしまった。

「おっと覇気が漏れちゃった。でも戦意喪失してくれたのなら別にいいか。拷問は止めにして上に行くよ」

「……ああ」

インペルダウン入口付近では創造海賊団と海軍大将率いる艦隊が睨み合いを続けていた。しかし目の前に海賊が居ても捕まえることが出来ない今の状況に赤犬はイラつき始めていた。

その様子を確認した青キジは仕方なく攻撃を仕掛けると赤犬に提案しようとした声を遮るかのようにインペルダウンの入口から大きな声が聞こえた。

「大将が二人も居るなんて！こっちの方が楽しそうじゃん!!」

インペルダウンの入口から出て来たのはディアンヌを先頭にザイス、身体の表面を蝕む毒によって立つこともままならないマーリンに肩を貸すモンピートと創造海賊団の船員たちだった。

ミノタウロスとミノコアラというディアンヌからしたら格下の相手に時間をかけていたのが馬鹿みたいと思う程に強い相手が目の前に居たのでディアンヌは喜び霸王色の

覇気を飛ばした。霸王色の覇気をまともに喰らった海兵たちは上位の将校たちと二人の大将を残して気絶してしまった。

「あれが『創造』かア」

「久しぶりだが……だいぶ変わってやがるな」

「行くよお!!」

ディアンヌは地面を思いっきり蹴り遠く離れた海軍の戦艦へと跳んだ。やがて地面蹴った際に生まれた推進力が無くなつて重力に従って落ちていく。その勢いを使って海軍の戦艦を思いっきり殴り付けた。

戦艦は大きく揺れ気絶していた海兵たちは船の外へと放り出されてしまった。

「強くなつても同じ戦法を使ってくるなんてどういふ神経してやがる『氷河時代』」

「わしの前で隙を晒してタダで済むと思うな『冥狗』!!」

「『重金属』」

ディアンヌがやったのは創設して間もない頃に中将だった青キジが率いていた海軍船と接敵した際に逃げるために使った戦法だった。

海へと落ちそうな海兵たちを救うために青キジは前回と同じように海を凍らした。

赤犬の右腕は1000度を超える溶岩に変化させた。そんなマグマは人を簡単に溶かし、炎をも焼き尽くすだろう。

マグマとなった右腕は戦艦を殴ったことによつて生まれた隙を突くようにディアンヌの顔を狙つて振り下ろされた。

ディアンヌは一秒もない時間で考えた。覇気を纏えばダメージを喰らうことは無いだろう。しかしそんな分かりきつたことをしても面白くないと。ディアンヌはもう一つの能力の限界を調べることにした。

そのもう一つの能力とは自身の体を重くて硬い金属に変化させることだった。この金属は何か特定の金属ではなく彼女の能力の練度によつて重さと硬さが増すものとなる。

重さや硬さは自分でもある程度は分かるが融点は調べようがない。そのため海軍で一番の火力を誇る赤犬を実験相手とした。

「うーん、やっぱり溶けないね。実験はこれでおしまい！」

「実験だ?!?なら本気を出させちよる!!」

「言われなくても本気で戦つてあげるよ」

——マリルフォード

金獅子海賊団の襲撃によつて多くの建物が倒壊したマリルフォードではインペルダウンに向かわせた艦隊からの連絡を受け取っていた。

「やはりマゼランでは荷が重いか……」

「わっしが行きやしようか？」

「……ボルサリーノは通常任務に戻れ。ただでさえ三大機関襲撃は海軍の汚点だ。それに最高戦力の三大将全員を向かわせて、もし誰一人も捕まえることが出来なかった日には海賊が調子に乗る」

三大機関襲撃という事件は世に蔓延る海賊たちに夢を持たせ、ロジャー程ではないが新しい海賊たちを増やすこととなる。もう起こってしまったことは仕方ない。

しかし三大将が全員一つの海賊に敗北したとなれば最悪の事態となりうるのを危惧してセンゴクは黄猿を向かわせなかった。

「いいのか？ 奴の成長速度はロジャーをも上回るぞ」

「……仕方あるまい。我々はメンツよりも秩序を守らねばならぬ。今回の襲撃で海軍のメンツは……いや指揮を採った私のメンツは丸つぶれだが海軍としてはそこまで影響を与えるとは思わぬ。だが最高戦力全員を向かわせても敗北したとなると海軍の実力を疑われる。そうなれば加盟国の信頼を失い天竜人の絶対性は無くなるかもしれない」

「センゴク！ お前もクソどもの心配か!!」

「最後まで話を聞けガープ!! 私としても天竜人の行いは良いものでは無いと思っっている。だが彼らが居ること世界に一定の秩序がもたらされているのも事実だ。彼らが

居なくなれば数多の国家によって形成される世界政府は簡単に崩壊し、国家間での争いも増えるだろう。だから絶対的な権力者である天竜人は必要なのだ」

人は絶対的な存在が居れば人の下に付くのは当たり前だ。そんな絶対的な存在が居なくなつた先には自分がその席に座ろうと戦争が起こるのは必然的なことである。そんなことを知っているセンゴクは世界政府の秩序を護る海軍の最高戦力と呼ばれる大将の敗北は許されないと考えていた。

「創造海賊団が力をつけているのも分かつておる。だから創造海賊団に対抗するためにゼファアを復帰させる」

「じゃが大将の席に空きはないだろ。……まさか中将に戻すのか？」

「新たに作る『海軍特殊司令部』の総司令に就任させる」

「なんだそれは？」

海軍特殊司令部とは四皇や準四皇クラスの赤髪海賊団、創造海賊団などの海賊の中でも上澄みの実力者たちだけに対応する。少数精鋭で組織されている。

海軍大将たちは四皇幹部以上の実力は持っているが仕事も多い。四皇が動きを見せた際にすぐに動けるとは限らないため、四皇たち専用の海兵を用意しておく必要があつた。

「……それでゼファアか」



「ゼファー以上の適任者は居ないだろう」

「失礼します!! インペルダウンの襲撃は——」

「それが獣型か」

「赤犬は私を楽しませてくれるかな？」

一旦距離を離れたディアンヌは獣型に変型した。船の上ではディアンヌは能力の大半が使えないため普通の動物系ゾオンの力だけで戦う必要がある。

しかしそれだけだとしても脅威的な存在であるのには変わりない。ディアンヌ本来の圧倒的臂力が身体が大きくなることによつてさらに増した。そこに三種の覇気が合わされば大将相手にも戦うことが出来る。

「悪はわしが滅する!! “大噴火”!!」

「その能力船の上では向いてないよね。だって船が燃え始めているし、味方への被害も尋常じゃないでしょ？」

「悪を消すためには必要な犠牲だア!!」

赤犬のマグマに変化した右腕は巨人となつたディアンヌに見劣りしない程まで巨大になっていた。そんな巨大となつた右腕は甲板にマグマを垂らし穴を空けた。

その右腕でディアンヌのことを殴り付けた。実験を終えたディアンヌは本気で戦う

ために霸王色の覇気を纏い赤犬の拳を受け止めた。その衝撃で赤犬のマグマは飛び散り甲板に残っていた海軍将校へと降り注いだ。残っているのが実力者揃いだったのでダメージを負うことはなかったが普通の海兵だったら亡くなってしまいう可能性もあった。

しかしサカズキは自身の掲げる正義の「徹底的な正義」に基づき悪を根絶やしにするためには多少の犠牲は構わないと考えている。その思想と実力から世界政府上層部からの人気は三大将の中で一番だった。

「そんな思想を持つのが秩序を守るはずの海軍に居るから弱い人から死んでいくんじゃない？」

「……海賊が存在する限りそうなる!!じゃからわしが根絶やしにしなければならぬのだ!!」

「……まあ価値観は人によって違うのは当たり前だけどさあ……天竜人が存在するから海賊になる人も居る……やっぱりその考えは自分勝手じゃない？」

「人になんと思われようと関係ない……わしは自分の正義を執行するだけじゃあ……!!!」

——どんな状況に置かれても正しく生きるのが正しいと思う赤犬と天竜人によって搾取され続ける世界を変えるために悪に手を染めたディアンヌの正反対とも言える正

義がぶつかりあった。

「トップ一人に任せてちやあいい組織とは言えねエぞ」

「ここで戦闘するつもりですか」

「あいつ程行き過ぎた正義感はおれにはねエよ。ただ聞きたいことがあつただけだ」

「ディアンヌと赤犬の戦闘が続いている中、青キジは海へと落ちそうな海兵たちを救つたあとにグラン・テゾーロへと乗り込んでいた。テゾーロも覇気で青キジが来ていることは分かっていたが、あまり殺気を感じられなかつたので無視していた。」

「グラン・テゾーロは世界政府から独立国家として認められ、特別中立区である。そんな場所で海兵として自発的に攻撃することは許されていない。……赤犬なら海賊が居ると分かつたら攻撃するかもしれないが、青キジは自身の掲げる正義である『ダラけきつた正義』に基づき過剰に犯罪者を捕まえようとはしない。」

「お前らはこれから何をするつもりだ」

「私は団長に従うだけです。……ただ一つ言うことがあるとすれば団長が持つ政府への恨みは深いですよ」

「……恨みか……政府が恨まれるのは仕方ねエことだ。……だがこれから先世界政府を潰そうとか思っているのなら止めておけ。海賊が思っている以上に世界政府の層は厚

いざい」

「団長に伝えておきましょう」

政府には元帥、三大将を筆頭に実力者揃いの海軍本部に所属する海軍将校が多数。他にも0から9までのCサイファーPポール所属の者たちや「神の騎士団」と呼ばれる者たちなど表舞台には立たないものの海軍将校たちにも負けず劣らない実力者たちが居るのだ。

「……団長さんによろしく言つといてくれ」

「まだ帰す訳にはいきませぬね」

「気にしなくていいぞ。おれの仕事はインペルダウンの防衛だ。落ちちまつた物を護る必要はねエし、それ以上の仕事もするつもりはねエよ」

青キジもデイアン又たちが七武海を辞めさせられたことを知っている。その出来事で青キジは政府に疑念を抱いていた。彼自身仁義がどうか言うような性格ではないが今回の政府のやり方は認められるものではないと思つていた。

今回だけは海軍側が勝つたとしても青キジは見逃すつもりだった。それは政府の対応が招いた事件だと考えているからだ。

『プルルル……プルルル……プルガチャ。テゾーロ、あの件について話が』

「今忙しいのだが……団長には伝えておく。他に要件は？」

『そこに青キジが居るんでしょ。援軍はいる？』

「青キジ次第だが……まあ要らないだろう」

『じゃあ例の件よろしく』

テゾーロの元へと掛かつてきた電伝虫はグラン・テゾーロの中でも幹部しか持っていない物だ。

電伝虫の相手は入口に入ってきた青キジを遠く離れたホテル内から感じ取れる程強力な見聞色の覇気を持つている者だ。

「……そつちも層が厚そうだな」

「六傑以下の者たちも育っている。それにあと数年でお嬢も成長する筈だ」

「(三英クラスの奴がお嬢と呼ぶ程の者か)……それは注意しておこう」

——創造海賊団のマーリンが率いている経済師団がとある島で運営している孤児院では基本的に戦争孤児を集めて未来の幹部候補を集めている。

マーリン自体は商会の運営で忙しいため元部下のアーサーが戦闘の教師をやっている。

「先生、今日も実践稽古お願いします」

「貴女は真面目ですね。……やっぱり生き別れた妹が居るからですか？」

「……私は団長に救われました……この命捧げるつもりです。……でももう一度逢えた

らとも思ってしまうんです。……だから力をつけて任務に余裕を作っておけば妹のことを探せると……ダメですか？」

「私も団長に忠誠は捧げていますが、私にとって一番大切なのはマーリン様です。貴女も団長を一番に考える必要はありません。彼女は人に守られる程弱くはないですから」  
そんな孤児院には団長や副団長に救われた子供たちが多くいるため卒業後に創造海賊団に入団するのに疑問を持つ子供はほぼ居ない。

孤児たちは戦争で家族を失っているため力を得るために貪欲だった。そんな孤児たちは1度はアーサーに挑むのだが、六傑であるアーサーに攻撃が当たるはずもなく一方的に勝たれて終わってしまう。そのため2度以上挑んでいるのは戦争で家族と生き別れた少女だけだった。

少女はアーサーに何度も挑んだが、攻撃は1度も当たることなく防戦一方だった。攻撃が当たらないことは分かっている少女は、避けることだけに集中した。何度も挑んだ結果、彼女の努力は実を結び「見聞色の覇氣」の才能が開花した。

「そろそろ始めましょうか。今のまま成長していけば貴女の見聞色は強力な武器となります。……ですが避けるだけの見聞色では意味が無いです。今日からは私に攻撃を当てる訓練をしましょう」

「分かりました。いきます!!」

「……言い忘れてましたが、私も攻撃はしますよ」

そう言つてアーサーは無防備な鳩尾に発勁を叩き込んだ。発勁と言つても掌を押し付けるだけだったので身体が壊れるようなことはない。

しかし避けることに専念して長らくまともな攻撃を喰らつていなかった少女には激痛に感じられた。

「攻撃するということは相手に隙を晒すことになりますよ。そこを考えなければ一人前にはなれません」

「すいません。もう一度お願いしますよ！」

「満足のいくまで付き合いますよ」

少女は忠告通り考えて攻撃を仕掛けようとした。しかしアーサーに隙があるはずもなく少女は動くことが出来ない。しかしこのままでは埒が明かないので仕方なく身体を守るように剣を横に薙ぎ払おうとした。

これをアーサーは剣で軽くないなした。少女もいなされることは分かっていたため小さい体を利用して足元を潜りアーサーの背後に回り込んだ。

「取つた!!」

「甘いですー!」

右足を軸として回転しながら振り下ろされる剣を薙ぎ払った。少女の手に握られて

いた剣は遠くの木に突き刺さり少女は攻撃の手段を失ってしまった。

「えい」

「不意打ちは辞めてくださいマロナ様。身体が反応して本気で反撃してしまいます」

林のなかから小さな影がアーサーへと襲いかかった。背中を取られていたアーサーは振り返り剣を思いつき振り払おうとしたが相手の姿を見て寸止めで踏みとどまった。

その姿とは薄紫色の瞳に茶髪をツインテールにしたマロナが自分の体より大きな剣を握り締めてアーサーへと振り下ろしていた。アーサーは剣を寸止めで踏み止めていたので仕方なく覇気を使って自分の体を守っていた。

「はあはあ……マロナ走るの速すぎるでしょ……」

「小紫ちゃんが遅いだけです！」

「……子供だけで森の中を歩くのはやめてください。最近誘拐事件が増えているので……子供の中では強い貴女たちは奴隷目的で狙われやすいです……まあここは創造海賊団のナワバリなので不埒なことを働くような輩は居ないと思いますが……」

「何か気になる事でもあるんですか？」

アーサーの言葉が歯切れが悪かったことに疑問を持ったマロナが質問した。わざわざ心配させるようなことを言うかどうか迷ったような素振りを見せたアーサーだった。



が、念の為伝えることにした。

「噂程度なのですが……誘拐犯のケツ持ちが百獣海賊団の可能性があるそうです」

「それはマーリンさんからの情報ですか？」

「ええ、奴隷は大体〃人<sup>ヒューマン</sup>間屋〃に送られるのですが……その大半が直接ワノ国に送られていのです」

「奴隷……ワノ国……うつ!!？」

「大丈夫!!小紫ちゃん!!!」

小紫は『奴隷』と『ワノ国』という言葉によってあの日のトラウマを思い出してしまった。トラウマを思い出した小紫は頭を押さえながら倒れてしまった。事情を知っているアーサーは冷静に小紫をおぶって帰ろうとしたが、事情を知らない二人はパニックになりかけていた。

「マロナ様、モネさん、この子にはこの子なりの事情があるのです。二人にも二人なりの事情があるように。だからこの子が自分から話すまで詮索するようなマネはやめてくださいね」

## 二人の大將

インペルダウン入口近海では、創造海賊団の“団長”ディアンヌと海軍本部の“大將”サカズキの戦いが続いていた。

その姿を“三英”のテゾーロと“大將”クザンが静観していた。テゾーロとしてはクザンを二人の戦いに乱入させないために気を引き締め続けていたが、クザンはそんなつもりは一切なくただ昔戦った相手が何処まで成長しているか知るために静観していた。

「まだ警戒してんのか?……仕方ねエ少し手合わせでもするか」  
「——っ!この島では私が支配者だ」

青キジがそう言うのと、地面に触れている脚を中心に地面が凍って行った。

テゾーロは船の動きを止められた際に青キジの能力の強さを知ったので逃げる選択を採った。ゴルゴルの実の能力によって完全に掌握した黄金で殆どが出来ている“グラン・テゾーロ”はテゾーロが直接触れなくとも操ることが出来る。近くにある人が居ない建物から黄金を引っ張って自分の足場を上へと持ち上げた。

「大將を舐めてもらっちゃ困るな」

テゾーロの足場を持ち上げている黄金の柱も凍り始めていた。今も足場を上げ続けているので追い付きはしないがテゾーロの操る黄金には限界がある。それに対して青キジが生み出している氷はほとんど体力を消耗しないためいつかは追い付かれてしまう。

これは自然系特有のものであり身体を自然現象そのものに変化させる力の副産物ではない。赤犬であれば身体をマグマに変化させたら周りの気温を上げ、可燃物の物が近くになれば自然発火する。黄猿であれば周りを光で照らし、周りに居る者たちの目が眩ませる。同じように青キジが足場を凍らしているのは、氷に変化した身体から発せられる冷気により周りが氷結しているに過ぎない。

そんな生理現象とやっていることに変わりはない攻撃相手に消耗戦で勝てるはずも無いため、テゾーロは攻撃に転じた。

「『黄金爆』！」

「近付いて来れなきや攻撃は喰らわねエぞ」

テゾーロは右腕に黄金を纏って攻撃しようとした。しかし二人の間には巨大な氷の壁が青キジによって生み出されて、攻撃が防がれてしまった。テゾーロの攻撃には爆発が伴い氷の壁を破壊することは出来たが、足場を動かしていた勢いはかき消されてしまった。

青キジは海賊が目の前で隙を晒しているので攻撃をしようとした。しかし元から捕まえる気はなかったためテゾーロの身体を氷結させるだけになった。

「じゃあな」

「……言葉を借りるようになって悪いと思うが……三英を舐めるな」

「手加減しちまったか……これ以上戦うって言うのなら手加減出来ねエぞ……仕方ねエ死んでもらう」

青キジが殺さないために手加減を無意識にしてしまった。そのためテゾーロの芯まで凍ることはなく覇氣の力によって破られた。

これ以上手加減をすると負ける可能性も出てくるので仕方なく青キジは本気で戦うことにした。本気で潰すつもりとなった青キジは自身の周りに氷で出来た槍を十本生み出した。

「//アイス塊ブロック // …… // 両棘矛バルチザン //」

「黄金の力は氷程度では止まらない」

自分に向かって飛んでくる槍に地面から生やした黄金で出来た触手をぶつけて破壊した。その触手たちは両棘矛を破壊した勢いのまま青キジの身体を貫いた。

もちろん黄金の触手一つ一つに覇氣を流している。どんな力を持つ者でも覇氣の力によって身体を貫かれれば大きなダメージを受けることとなる。覇氣は覇氣によって

防ぐことは可能だ。しかしいくつもの触手を防ぐには全身に覇気を流す必要がある。だが青キジは武装色をそこまで極めていかなかったため全身を貫かれていた。

「……手応えを感じなかった。……だいたい見聞色を極めているようだ」

「これでも大将なんでねエ。そつちこそ、この量の触手全部に覇気を流すなんて相当な覇気じゃねエか——っ！」

「<sup>ヘッド</sup>頭……<sup>クラッシュ</sup>破壊！！」

「どういうつもりだダイス！」

巨大な戦斧を持った巨漢の男が突然地面から現れた。地面から人が現れるなど思ってもいなかった青キジは不意を突かれ覇気を使った攻撃を受けてしまった。

テゾーロの直属の部下である巨漢の男ダイスは武装色の覇気によって黒く染った頭で青キジに頭突きをお見舞した。

「それは私から。『ボトムレス・ヘル』！」

「あらく、こりゃあ一本取られちゃった」

ダイスによる不意打ちの攻撃に青キジが怯んでいる隙に地面に海まで落ちる巨大な穴が開けられた。テゾーロでも黄金で出来たこの船なら穴を開けることは可能だが、これはグラン・テゾーロの警備主任であるタナカさんのヌケヌケの実の力によるものだった。

海まで直結している穴に落ちた青キジ。彼は能力によつて海に直接落ちることは無いが、塞がってしまった穴をこじ開ける火力は青キジにはないため、テゾーロの前に舞い戻ることは不可能に等しかった。

ダイスやタナカさんがテゾーロの命令なく行動することは無いが、今回は特殊な事情があつた。

「キャンドラー様から大至急戻るように連絡がありました」

「……団長をどうするか聞いているか？」

「ダイアン様は置いていっても構わないそうです」

「……ステューシーを呼んでこい。あいつに連絡係を任せる」

「かしこまりました。するるる」

タナカさんはステューシーを呼びに行くため能力を使い地面に消えていった。目の前からタナカさんが消えたテゾーロはダイスを引き連れてホテルへと帰って行った。

ダイアンヌと赤犬の戦いは、ダイアンヌ優勢で進んでいた。能力は巨人になることしか使えないダイアンヌだが霸王色の覇氣の力によつてその差は埋められていた。それどころか武装色の覇氣を使っている赤犬では、霸王色の覇氣を纏った攻撃をしてくるダイアンヌの攻撃を止めることが出来なかつた。

本来だったらディアンヌの霸王色の覇気から生き残った将校たちも加勢してディアンヌが多勢に無勢になるはずだったが、赤犬の悪魔の実の力によって飛び散るマグマはそこそこの力しか持たない将校たちには致命傷にもなりうるため、加勢することが難しかった。

「冥狗めいろう!!」

「マグマだろうと当たらなきゃ意味ないよ。でも優しいから受け止めてあげる」

マグマに変化した手のひらでディアンヌの首に掴みかかった。常人では捉えきれない速度で動かされた腕はディアンヌなら簡単に避けることが出来たが、霸王色の覇気を纏った拳をぶつけることによって逆に赤犬ことを吹き飛ばした。

「大将が吹き飛ばされた!!?」

「……我々がやるしかないのか」

「……おどれらが来たところで……邪魔になるだけじゃあ!!あの趣味の悪い船を制圧しろ!!」

「し、しかしあの船には天竜人が」

「別に気にしなくて大丈夫だよ。君たち程度の実力じゃあテゾーロは突破出来ないから!!」

赤犬が飛ばされたことによりディアンヌの正面に立つこととなった将校たちはディ

アンヌの覇氣に足が竦んでなかなか動くことが出来なかった。それもそうだろう。目の前で海軍の最高戦力の一角である「海軍本部」大將が力負けしたのだ。そんな場面を目の前にして動ける海兵などそうはいない。

赤犬は吹き飛ばされただけでなので直ぐに戦線に復帰した。下半身をマグマに変化させて空を飛んでディアンヌの目の前に現れた。

赤犬はディアンヌとの戦いでは足でまといにしかならない海兵たちをグラン・テゾー口の制圧へと向かわせた。

「これで本気で戦いを楽しめようだよ！」

「海賊と楽しむことなどありやあせん!!!」

「まあ私も君みたいな正義命みたいな人は好きじゃないけどね」

「人間は正しくなけりやあ生きる価値はない!!」

「……天竜人をトップに置いてる時点で正しくないでしょ」

赤犬の言葉にイラついたディアンヌは右腕に覇氣を集中させて、赤犬の頭部を思いっきり殴りつけた。霸王色の覇氣を纏った拳によって殴られた赤犬は戦艦の甲板を突き破って一番下の階まで落とされた。

赤犬の様子を見るために前のめりになって空いた穴を覗いた。ディアンヌが覗いていると赤犬の声と共に物凄いスピードで巨大な拳による正拳突きが飛んできた。その



正拳突きは赤犬が右腕をマグマに変化させて巨大化させた物だ。

「……………これじゃあ先に船が壊れちゃうか……………いつその事全部破壊しちゃうのかな？」

「…………… “大噴火” !!」

「——っ!!痛ったア!!」

赤犬と戦うために巨人の姿に変化したのが裏目に出た。見聞色の覇気によって攻撃が来ることは分かって顔を逸らしたが、赤犬との距離が短かったため右眼を掠り、右眼の周りに一生残るであろう火傷の傷を負ってしまった。

顔に火傷の傷が出来てしまったことを知ったディアンヌは怒り、自身の悪魔の実である “ヒトヒトの実” モデル “サーベント・シン嫉妬の巨人” の本領発揮した。

「……………乙女の顔に傷を付けた代償を大きいよ」

ディアンヌの覚醒した力は一度掌握したインペルダウンに触れなくとも影響力を及ぼした。インペルダウンの入口の全てが巨大な数本の触手となってグラン・テゾーロに向かう海軍船に攻撃を始めた。

海兵たちは船を壊されまいと迎撃したがインペルダウンの金属は凶悪な犯罪者たちに壊されないように丈夫だ。そんな金属の触手を大将ですらない海兵たちに破壊出来るはずもなく、船を破壊されてしまった。

金属の触手は二人の乗る船も襲った。だが海軍の最高戦力には通用せず、赤犬はマグ

マに変化させた拳による正拳突きによって船にぶつかる前に金属を溶かしきった。しかし溶けた金属が高温の液体となり、船へと降り注いだ。相当な質量を持つ液体となった金属たちは甲板を溶かし、船の要である竜骨までも溶かしてしまった。竜骨を失った船はやがて沈没する。ディアンヌは狙い通り全ての船を破壊することに成功した。

「あとは君を殺すだけだね」

「ディアンヌ様!!」

「………何今忙しいんだけど?」

ディアンヌはテゾーロの命令によって目の前に現れたステューシーに機嫌をさらに悪くした。

「キャンドラー様からの帰還命令です」

「帰還の理由とここで赤犬を殺すのだったらどっちの方が重要?」

「………帰還です」

「………そう………なら帰ろうか」

「海賊を………逃がすわけじゃないじゃろうが!!」

ディアンヌはステューシーの判断を信用して帰還することにした。しかし赤犬は目の前にいる海賊をみすみす逃がすような男では無い。赤犬は両腕をマグマに変化させ、巨大化させた。

「『流星火山』!!」

「船ごと焼き尽くすつもり!?」

「テゾーロがいる限り、あの船はそう簡単に破壊されないよ。まあ今回は私が仕留める  
んだけどね。『ギガントマキア 鋼の巨人』」

赤犬は巨大になった両腕を空へと放とうとした。しかしその攻撃は巨大な手のひら  
によって受け止められた。

ディアンヌはインペルダウンの触手を右腕に集め、巨大な右腕を創りあげた。そのま  
ま手のひらを広げ赤犬の攻撃をガードした。金属だったら軽く突破出来ると考えてい  
た赤犬だったが、その予想は大きく外れ、金属で出来た右腕全体が武装色の覇気によっ  
て包まれていた。覇気によって護られた金属は溶けることなく赤犬の拳を受け止め、そ  
のまま赤犬を叩き潰した。

「運が良かったら海に落ちても生きてるよ……あく、青キジじゃん。絶対に生きてるの  
確定したじゃん」

「……だいたい痛手を喰らっちゃった。上は黙ってねエぞ」

「こつちも痛手を喰らったんだよ?……まあここからは海賊同士の抗争になるだろうか  
ら海軍には迷惑掛けないから心配しないで」

今まで大きな傷を負ったことのなかったディアンヌが一生の傷を負ったのは、ディア

ンヌにとって大きな痛手となる。

しかし世界政府のダメージに比べたら微量なものだ。世界政府はエニエス・ロビー半壊、マリンフォードは前回ほどではないにしても建物の多くが倒壊し、インペルダウンの傷が最も多く、インペルダウン内のシステムの多くがディアンヌによつて破壊されら入口に至つては原型を留めていなかった。

マリンフォードに向かった海軍将校数名が殺され、青キジと赤犬に着いてきた将校たちの大半がディアンヌの触手攻撃によつて死亡した。海軍本部最高戦力の黄猿、青キジは策に負け、赤犬は正面からディアンヌと戦つた結果敗北した。

事実上世界政府の敗北となつた三大機関襲撃事件は世界経済新聞社によつて世界に新聞としてばら撒かれ、世界の海賊たちを助長させるだろう。

「お前らみたいな大海賊が動くだけで、こつちは調査等の仕事が沢山来るんだよ。……面倒だからやめてくれねエか？」

「仕事はしつかりやらなきや駄目だよ〜」

「言われなくとも必要最低限はやるさ……面倒事はこれつきりにしてもらいたいが……無理だろうな」

「よく分かつてるじゃん。次会つた時は……革命でも起こすかもね」

「厄介なこつた」

デイアンヌとステューシーは少し先に進んだグラン・テゾーロに戻って行った。

二人の後ろ姿に青キジは見向きもせず赤犬を含め息のある海兵たちを海を凍らせることによつて救出した。その後は船に常備してある電伝虫を使つてセンゴクに連絡して、船を1隻要請した。

『インペルダウン入口崩壊、内部半壊』

## 西の海

## 大海賊

大海賊時代が始まってから10数年の時が経った。その時代はロジャールが生きていた時代から新世界で名を上げていた大海賊たちによって制されようとしていた。彼らは四皇呼ばれ、新世界に君臨していた。

しかしそんな大海賊たちに挑み、新世界を暴れ回る二名の海賊がいた。

——実力者揃いの幹部たちを築き上げた信頼と実力でまとめ上げ、新世界を暴れ回る大海賊、〃赤髪のシャンクス〃

——自身のカリスマ性と実力で個性的で多種多様な部下たちをまとめ上げ、四皇との同盟を盾に他の四皇に奪われたナワバリを奪い返し、四皇に近い勢力まで拮据した手腕の持ち主、〃創造のディアンヌ〃

そんな彼女が率いる創造海賊団が本拠点としてるのは海賊たちが溢れる通称〃海賊達の楽園〃と呼ばれる海賊の島〃ハチノス〃。

そんな海賊の島には未だに勢力を拡大し続ける創造海賊団に入って甘い蜜をすすろうとする海賊たちが集まっていた。しかし集まった海賊は創造海賊団に好意的な者た

ちだけではなかった。

「お、おい本気でやるつもりなのか」

「ここまで来たんだ……どっちにしろやらなきや消されるだけだ」

「ふむ、何をやるんだ？」

「なんだこのアマ」

「こ、こいつは!？」

人気がない路地裏で創造海賊団の転覆を狙う若い海賊達がいた。彼らは周りに人の気配がないのを確認して話していたが、気付かぬうちに背後を取られていた。

「まあ言わなくても分かっていると思うが……ケジメを付けてもらおうか……そうだな……ここで全財産渡したら考えてやってもいい」

「こ、こ、これがおれたちの全財産です!!」

「何やってんだてめエ!!」

「し、知らないのか!?!こいつ……この人は創造海賊団の三英が一人“女傑”マーリンだぞ!!?」

『創造海賊団三英 経済師団師団長 “女傑”マーリン “懸賞金9億8000万ベ  
リー”』

セミロングの綺麗な黒髪に、黒を基調とした露出度の高いドレスを身に着け、赤の傘

を雨も降っていないのに差す女性。

彼女のことを知る男は無知な船長に声を荒らげた。

「あのインペルダウンの監獄署長マゼランと引き分けた女だぞ?!?!……それに裏社会にも顔が効く!!」

「だいぶ物知りみたいだが……どこからの情報か聞いておきたいな……タダとは言わない。……そうだな話してくれたらこの金は返してやつても構わない」

「——っ! 本当ですか?!?! さっき創造海賊団の幹部を名乗る綺麗な女性に教えてもらいました!!」

「ふむ……ステューシーか……お礼は言っておこう。ありがとう」

マーリンは話を聞き終わると、男たちから受け取った金を二人に向かって放り投げるとその場から去って行った。彼女の指からは血が垂れていたが、指摘出来る者はいなかった。

「見逃すんじゃない」

「全財産を渡してくれたら考えてやると言った。そして私はお前らに金を返した。これで取引は無効になったはずだが?」

「そ、そんな……」

路地裏から抜けたマーリンは自身の情報をチンピラに話したステューシーを探すべ



く見聞色の覇気を集中させた。

案外近くに居たので直ぐに見つけることが出来て、何故マーリンの情報を流したのかを問いかけた。

「あら？ 貴女のような強い方の情報は知ってもらった方がいいでしょ？」

「ふむ……それもそうだな。私も一つ情報を開示しておこう。 ” C P サイファーホール

—A I G I S O” 諜報部長、 “歓楽街の女王” ステューシーのことは調べがついてい  
る」

「——っ！ なんの事かしら？ 私は裏社会を渡り歩いて来たからある程度はC Pとも取引をしたことがあるけど……私自身はただのブローカーよ」

「まあいい。六傑に流す情報はそこまで大事じゃないからな。役に立つ限り首を切る事は無い」

「な、何を言っているか分からないわね」

マーリンはステューシーに忠告した後、島の中央にそびえるドクロの形をした大きな岩で出来た創造海賊団拠点に向かった。

ステューシーはマーリンによってもたらされた情報にポーカーフェイスを崩してしまい逃げるかのようにマーリンの前から去って行った。

だが、デイアンヌやマーリンは味方にスパイが居ようと気にしていなかった。二人の

考えは実力があれば誰だろうと味方に招き入れ、使えなくなったり、完全に裏切ったりしたら消すことになるだろうが、役に立つ間は特に手を出すようなことはしない。

「何やってんだマーリン。ケツから言って遅刻だぞ」

「……その路地に死体が転がっているから処分しておいてくれ」

「……ケツから言ってやるしかないか」

今日は半月に一度行われる幹部会だった。しかし予定時刻から5分過ぎていたので、探しに来たデルエリに先程殺した二人の死体を任せて、中央の岩へと向かって行つた。

デルエリは独特な言い回しで死体を片付けるみたいなの面倒なことはやりたくないが、上司の命令なので仕方ないからやるしかないかという意味で独り言を漏らした。

ハチノス中央に位置するドクロの形をした大岩の中は綺麗に整えられており、そこには大きな椅子があり、まだ若いように見える女性が座っていた。彼女の隣には巨漢の男と三英の二人、そして彼女らの前に六傑が集まっていた。

遅れて来たマーリンには批判の声と擁護の聲が半々くらいだった。

「少し遅れた。済まないな」

「全然大丈夫だよ。ステューシーだつてきつき来たばかりだし」

「あまり甘やかすなディアンヌ。下の者に示しがつかないだろ」

「……私は間に合ってますから。ギリギリなのと遅刻では天と地ほど違うわ」

歓楽街の女王と呼ばれているステューシーは自分のスタイルに自信を持っていたが、創造海賊団に入ってから以来その自信を無くしかけていた。それは自分以上の実力、同等のスタイル、裏社会へのコネ、そしてすべての女性が羨む老いを止めることが可能な悪魔の实。自分の上位互換とも呼べるマーリンが居たからだ。そのためステューシーは一方的にマーリンを敵対視していた。

二人の険悪な雰囲気を感じ取ったのか、たまたまなのかは定かではないが、普通の間よりかなり小さな男が話に割って入った。

「植物の世話をしたいので、早く話を進めるれす!!」

「レオグロウの言う通りだ。私は今の短い時間でも莫大な金かねを生み出せる。他の奴らもそうだろうか?ならこの無駄な時間は我々全体の損失になるはずだ」

小さな男、レオグロウは自分のシノギの一つである植物の育成を早くやりたいがためにピリピリしていた空気を断ち切り話を無理矢理進めた。

それに賛同するかのように見せかけて、ピンクの派手なスーツを着込んだ高身長の方は自身の手腕を自慢した。

『創造海賊団三英 財務師団師団長 // 黄金帝ギルド・テゾーロ』 懸賞金10億5000万ベリ』

「テゾーロの言う通り過ぎたことを考えても時間の無駄だね。各々のアガリを回収するよ」

「まずぼくからは各種フルーツ、野菜の盛り合わせれす!!」

初めにアガリを渡したのは創造海賊団の最高幹部に位置する三英の一人であるレオちゃんことレオグロウだった。彼は環境師団の師団長であり、主なシノギは植物の育成の研究だ。そのため彼が提出したアガリはレオグロウが能力を使い品種改良を行い、丹精込めて育て上げたフルーツと野菜だ。

『創造海賊団三英 環境師団師団長 “樹精のレオグロウ” 懸賞金8億3300万ベリー』

「うくん♡!! やつぱりレオちゃんのフルーツは美味しいね!!……野菜は……後で食べるね。……きつと」

「おれが料理してやるから野菜もしつかり食べるよ」

「えく……検討するよ。あはは……よし!! 次は誰の番かな?」

「話を変えやがって、今日の晩飯に出してやる」

「そ、それだけはくく!!……って!?! なんてキャンドラーに私の晩御飯決められてるの!?! 僕の方がえらいんだよ!! 僕団長だよ!?! 君は副団長、分かる!!?」

「それとこれとは別だ」

漫才みたいな掛け合いをしている二人。彼女らは一見可愛らしい女性さんとイケオジのミスマツチの組み合わせだが、彼女らは創造海賊団のNo.2とTOPだ。

イケオジ……多種多様な海賊団が所属する創造海賊団を纏めるディアンヌの最初の仲間であり、ディアンヌに負けず劣らずのカリスマ性を持ち合わせる男。

『創造海賊団副団長 破天のキャンドラ』 懸賞金22億4760万ベリー』

「酷いよ!!料理を作ってくれることはありがたいけどさあ……はあ、仕方ないから食べてあげるよ」

「偉そうだな。……まあ偉いんだが……なんか気に食わねエ。だが時間もねエ。次のやつは誰だ?」

「私が出そう。仕事のメインがカジノだからメインは金になるが……構わないだろう?」

「お金なんていくらあっても足りないくらいだからね。順番だとマーリンになるかな?」

レオグロウと違いテゾーロのシノギはカジノを中心としたグラン・テゾーロの経営なので、特産物などはないが、国を経営しているため他の幹部とは比べ物にならないほどのアガリを納めることが出来る。その莫大な量の資金の一部は他の幹部たちの活動資金にもなっているため、創造海賊団の屋台骨と言っても過言ではない。

次にディアンヌに指名されたのはマーリン。彼女は元々ドレスローザ商会の会長を勤めていた経歴を持っていた。商会長として信頼を勝ち取り、手に入れたコネを海賊になつてからも存分に使い裏社会との繋がりを手に入れていた。そのため彼女のアガリはお金ではなく裏社会の繋がりを利用して手に入れた商品が主だった。

「今回はこれだ」

彼女が懐から取り出したのは一つの宝箱だった。それを受け取ったディアンヌが開けると中に入っていたのは変な模様の果物……悪魔の実だった。

「へえ、悪魔の実かあ。ちなみに種類は分かつてる？」

「今回はドフラミンゴも手を出して来たからな。少々お金は掛かつてしまったが、自然系だから損ではないだろう」

「自然系かあ……キャンドラーは要らないよね？」

「前に言ったかもしれないねエがおれは悪魔の実は食うつもりはねエ。食べたとしても自身の膂力が重要な動物系だ」

キャンドラーは悪魔の実の力を信用していなかった。悪魔の実の力自体はディアンヌを傍で見えて来たため知っているが、最終的に勝敗を決めるのは覇氣と膂力だと思つているため、変則的な攻撃を得意とする超人系は自分には向いていないと思つており、自然系は覇氣を持たない相手からのダメージを受けなくなる。そのため油断を生んで

しまうと考えているため、悪魔の実を食べるつもりはなかった。

「与えるとしたら六傑なんだろうけど……なんか自然系がしつくりくる人が居ないんだよね。ちなみに欲しい人居る？」

彼女の問いかけに既に悪魔の実を食べた者を除いて思案顔をした。彼らの実力は四皇の幹部たちにもある程度戦えるほど強くなっている。しかし自然系を食べたとして、四皇幹部たち相手に有利になるかと言ったら、NOだ。四皇幹部たちは基本的に武装色の覇気を使いこなし、自然系の体に攻撃を当ててくる。そのため自然系の優位性は全くない。その実に応じた攻撃手段を手に入れることが出来るが、今から食べたとして完全に使いこなせるまでに時間が掛かる。その間に強力な動物系が手に入ったとしたら、簡単に追い付かれてしまう。動物系は実力者が食せば、他の実に比べたら簡単に使いこなすことが出来る。この場に居る幹部たちはそう考えていたため誰も手を挙げなかった。

「やっぱり？……どうしよつかなあ。幹部候補に与えてもいいんだけど……賭けに出で見習いにあげようかな？ どう思うキャンドラー」

「おれは団長に従う」

「こういう時だけ団長って言うのはせこいと思うよ!!……もう、僕一人で考えるかあ。よし！悪魔の実は次の幹部会までに決めておくから六傑のみんなのアガリを受け取っていくよ！」

「誰も行かないのならおれが行こう」

周りを見渡して誰も前に出ないのを見て先頭に立ったのはオールバックにした黒紫色の髪に整えられた髭を生やした男。

「モンピートはどのくらいかな？」

「……三英に比べたら少ないが他の六傑よりは豊作だ」

「そらアは聞き捨てならないにやあ。わしのアガリはそのジジイよりは多いぜよ！！」

「……低レベルな争いだ。それより団長にはおれの牛肉を食べてもらおう」  
「ねえヴェルゴ？流石にアガリの摘み食いはいただけないよ？」

モンピートが他の六傑より自分が上だと思わせるような発言にチーターのミンク族が食ってかかった。

二人の言い合いを低レベルだと言い放ったのは元海軍将校のヴェルゴだ。彼は口元に食べかけのハンバーガーを付け、アガリを提出した。その姿にディアンヌは直ぐにツツコミを入れたが、ヴェルゴは口元に食べ物を付けているのが日常だったので、特に反応を見せずに無視をした。ヴェルゴもヴェルゴで口元にハンバーガーがくっついてることに気付いていないので、何故摘み食いがバレたのか分かっておらず、頑張ってポーカーフェイスを貫き通そうとしていた。



「……今回もハンバーガー向けの牛肉だ。キメ細やかな霜降り牛になっている」

「別にいいんだけどさあ、ステーキ向けの牛肉を作れない？」

「牛肉はハンバーガーになってこそ……そこにレオちゃんが作ったポテトを添える……完璧だ」

「牛肉なんかよりわしの作ったワイン“ミーク”の方が美味しいぜ!!」

「自分の名前をワインに付けるなんてイタすぎるぞ」

ハンバーガーが好物であるヴェルゴがハンバーガーとそのセットを完璧と言ったことにミンク族のミークは、張り合うように自分の作ったワインを掲げた。

ミークは自分の名前をワインに付けているのだが、イタすぎるとモンピートにツッコまれてしまった。しかしミークは自身の何処がイタいのが分かっていないため首を傾げるだけだ。

モンピートのその言葉に青筋を浮かべる者がいた。

「自分が作った物に自分の名を付けて何が悪いんだ？なあ答えてくれモンピート」

「——っ!!すまない。そんなつもりはなかった」

「違う私は謝って欲しいのではなく、何が悪いのかを聞いている」

「ダメだよテゾーロ。弱い者イジメは良くないよ」

テゾーロはミークを問い詰めた。彼の凄みに当てられたモンピートだけでなく近く

に居た他の六傑たちも無意識に一方後ろに下がっていた。

ディアンヌが六傑たちを擁護するために発した言葉は逆に六傑たちを馬鹿にしているようにも取れる。そのため六傑たちの空気はピリつき始めた。

「あれ？なんか悪いこと言っちゃった？でもさあ君たちが弱いのは一目瞭然だよね？ドレスローザ包囲網の時だって四皇の幹部たちに勝てなくて三英に助けて貰ってたでしよ？」

「……あれから私たちも成長しています。団長には及ばなくても……マーリンには負けない筈だよ」

「ふっ、笑わせるな。私に勝とうなど百年早い」

「なら私の前で戦ってみる？もしステューシーが勝ったら三英の席を譲ってもいいよ？」

ステューシーはドレスローザ包囲網の頃でも完成された戦闘技術を持ち合わせていたが、そこにプラスして武装色の覇気を鍛え上げることによって、今では三英であるマーリンにも負けないと自負する程の自信をつけていた。それは他の六傑たちも同じである。ドレスローザ包囲網では過半数が四皇の幹部たちに敗北を喫していた。その敗北を胸に今日まで戦闘技術だったり、覇気や悪魔の実を鍛え上げてきた。

しかしマーリンは自分の実力が三英に追いついたと言うステューシーを鼻で笑った。

ステューシーたちが鍛錬を積んでいたのと同じように三英たちも鍛錬を怠らずに続けていた。それは実力に圧倒的な差があるディアンヌが居るからだ。巷ではディアンヌの実力は四皇に迫るものがあると言われている。そのため最高幹部である三英たちも四皇幹部に負ける訳には行かないという心情を皆持っていた。

「タダで受けるって言うのは我々には旨味がないな」

「マーリンの言う通りです団長。もしやるって言うのなら赤字分を補填してからでないと」

「そうれす。わざわざ戦う必要なんかないれす!!六傑が我々三英に勝てるわけないれす」

三英たちが言うことも一理ある。三大機関襲撃によって停止されていた業務による赤字はテゾーロのポケットマネーによって補填された訳なのだが、無駄だと分かっている赤字を続ける程テゾーロは優しくなかった。それはマーリンとレオグロウも同じだ。マーリンは七武海から追い出された際に商会長としては表舞台から消えざるを得なかったため、今のシノギの基本は裏社会との取引なためぼったくられないためにも自らが取引に向かう必要がある。レオグロウが管理する植物たちはレオグロウの能力によって成長させた物なため本人が必要なのは誰の目を見ても明らかだ。

そんな彼らの時間を補填する程のお金は六傑たちに集められるわけなく三英に挑む

のを諦めてしまった。

「……思いついた!!」

「いきなり大声出すなよ。二日酔いなんだから頭に響くじゃねエか」

「あ、やつぱり? 機嫌悪かったもんね……てか、大事な会合の前日に二日酔いになるまで飲むのはやめようね」

「仕方ねエだろ。昨日はいい酒が手に入ったんだから」

「ねえ、そのお酒僕知らないんだけど!」

「わしの程ではないが美味かつたぜよ!!」

「あれは美味かつたな。なあアーサー」

「ええ、良品があまり出回らない<sup>ウエストブル</sup>“西の海”のお酒の良品でしたから」

「あれ? 幹部全員飲んでたりする?」

「ディアンヌの質問に幹部たち全員が頷いた。お酒を飲まなそうなのレオグロウですら頷いているのにディアンヌは驚愕していた。」

トップであるディアンヌに襲った海賊から手に入れたお酒を報告していないのには理由があった。創造海賊団の裏ルールとして“ディアンヌにお酒を提供してはいけない”というものがある。これはドレスローザで行った宴会にて酔ったディアンヌは酷い絡み酒となり、酔いが深くなるとディアンヌは能力を使って絡んだ。絡んだ相手が

キャンドライだったため、怪我するようなことはなかったが、末端の船員が絡まれたら怪我ではすまない。そんな理由からキャンドライによつて発案された裏ルールによつてお酒がディアンヌまで流れることはなくなった。

ちなみにミークがアガリとして持つてきたお酒はキャンドライと二人だけで居る時に開けられるので、例外だ。

「私も飲みたかったのに……まあいいや。……キャンドライのせいで話が逸れちゃったけど、僕が出すお題に答えられた人は僕のポケットマネーで肩代わりしてあげてもいいよ」

「肩代わりってなんのですか？」

「そりゃあ三英に挑む際に発生する赤字の補填だけど？」

「——っ！……そのお題つてのはどんなのでしょうか？」

「僕が飲めなかった『西の海』のお酒で一番美味しいのを持つてきた人の肩代わりしてあげるよ。あ、条件として孤児院の戦闘能力上位六名から各々一人ずつ連れて行つてね」

「足でまといを連れて行けと？」

孤児院の子供たちはそこらの子供とは比べ物にならないほどの実力を持ち合わせているが、六傑からしたらそこらの子供と変わりなかった。

「そうしないと君たちには簡単すぎるでしょ？そのくらいのハンデがないと五大ファミリーが可哀想だもん。……ちなみに子供を死なせたら……僕がそいつを殺すから」

「あまり脅してやるなディアンヌ。これも修行だと思つてやればいい。足でまといを抱えた状態での戦闘つてのはだいたいぶ敵しいもんだ。ドレスローザ包囲網がいい例だ。ディアンヌが本気で能力を使えば、攻めてきた敵はカイドウを残して殲滅出来た」

ディアンヌは自分の部下である六傑を完全に下に見た発言をした。彼女が条件をつけたのに失敗したら殺すなどと言うのは理不尽だと誰もが思った。しかし彼女の顔から見るに冗談とは思えないので、気を引き締め直した。キャンドラーは今回のお題に正当性を持たせるためにディアンヌを例に出した。

そんなキャンドラーの発言に六傑たちは息を呑んだ。普通は妄言に聞こえるような発言も実力者であり、この中で一番ディアンヌと付き合いが長いキャンドラーが言うからこそ説得力があつた。

「お供に連れていく子供は早い者勝ちだよ。じゃあよーい……スタート!!」

「コンジュラー・ジョーク手品師の悪戯」

「ニヤ?!出遅れたぜよ?!」

唐突に開始を宣言したディアンヌの声にいち早く反応したのはモンピートだ。彼は某外科医の如く島の港に意図的に置いてある大きな岩と自身の場所を入れ替えた。

他の六傑はそのような便利な能力を持ち合わせていないので自分の足で港へと向かって行った。

部屋に残った三英と団長、副団長は誰が一位を取るのか、予想し合っていた。

「やっぱり古参のアーサーに勝って欲しいな〜。でもモンピートの悪魔の実は便利だよね〜」

「アーサーは難しいだろう。団長と会った時ならまだしも、今じゃ、隠居人みたくナワバリの外に出てないからな。それに対してヴェルゴは海軍の頃の名残か知らないが、外の海賊を潰し回ってるらしいからな」

「ぼくはカンツイに勝って欲しいいれす。彼は植物に水を掛けてくれるから勝って欲しいいれす」

「賭けるか」

「賭けをするのなら私が取り仕切りましょう。そうですね……掛け金の三倍を支払いましょう」

キャンドラーの提案を皆が承認する前にテゾーロが取り仕切りを請け負った。わざわざ止めるようなことでもないのです、自分の賭ける人を誰にしようかと考えていた。

デイアンヌはいち早く賭けようとしたが、デイアンヌの声をかき消すように三英とキャンドラーが賭ける相手を叫んでいた。

「ぼくはカンツイれす!!」

「私はアーサーとヴェルゴに賭けよう」

「おれはミックとステューシーだな」

「なんで僕が最後なのかな!? まあモンピートが確率高そうだし別にいいんだけどさあ……最近団長としての威厳でもものがない気がする」

「元々威厳などないんだから心配するなディアンヌ」

「余計に酷いよ!!」

各々自分が勝つと思う人にお金を賭け始めた。そして最後に残ったディアンヌは最近自分に威厳がなくなってきたかと思いがちだったが、キャンドラーによって元々威厳なんてものは無いと分からされてしまった。

「もう、みんな酷いんだからあゝゝゝ、でも、でもゝゝそんな君たちも本当は僕のこと尊敬してるんですよ」

「実力とカリスマ性は尊敬していますが……人としては……」

「はつきり言ってやれ、お前は性格ブスだつてな」

「性格はブスだけど顔は可愛いってこと? ありがとゝゝゝ♡!!」

「頭痛くなるポジティブさだな」

「その頭痛は二日酔いのだろ」



## ——海軍本部

ハチノスで明るく六傑を見送ったディアンヌたちは知らなかった。今まで六傑全員がまとまって同じ目的地に向かうことは無かった。それは六傑間の仲が悪かったこともあるが、一番の理由は大抵のことは六傑が一人向かえば事足りていたからだ。

そんな六傑がまとまって「西の海」に向かったとなれば、海軍は警戒せざるを得ないだろう。ディアンヌが想像していた以上に海軍は事を重く捉え、大将の派遣も考えていた。

「何故だ！赤髪が『東の海』<sup>イーストブルー</sup>から『偉大なる航路』<sup>グランドドライン</sup>に戻ってきたと思えば、今度は創造の所の六傑が『西の海』で勢揃いだ?!」

「そうカツカするなセンゴク。赤髪もそうじゃが、穩健派なんじゃから気にせんでもいいじゃろ」

「創造が穩健派だ?!?!あいつらは三大機関襲撃を皮切りにハチノスで起こった事件!!……そして四皇のナワバリにちよつかい出した。結果、四皇のナワバリ近くの治安が急降下しておる!!」

「ハチノスでの事件は海賊の抗争じゃし、四皇の件もナワバリを放置し続ける政府の怠慢が招いた結果じゃあ。わっはっは……!!本当にクザンに言った通りになったわい」

「失礼します」

キレながらもこれからの方針をどうするか考えているセンゴクと何も考えてなさそうで、何も考えていないガープが話している部屋を巨大なノックの音と共に体の色が濃緑の巨大な男が覗き込んでいた。

「どうしたんじやドロール？」

「お久しぶりですねガープ中将。要件ですが……私に任せて頂けないでしょうか」

「……なぜ知っている？この件はまだ下には話してないぞ」

「私は個人的に創造に興味があり、独自に調査をしています」

「前にも言っておったな……六傑全員の相手になるかもしれないが、大丈夫か？……言いたくないが、奴らは強いぞ」

部屋を覗いていたのは海軍本部“中将”ドロールだった。彼はジョン・ジャイアントが海軍に入隊してから、少しして入隊したのだが、その悪魔の実の能力と巨人族の膂力、彼の掲げる正義を評価され異例の昇進を重ねた結果、ジョン・ジャイアントを超えて中将までのし上がった男だ。

「知っています。しかし報告書を読んで、彼女が海賊になった理由を知りましたが……私の同胞である巨人族が死を恐れず……政府のエージェントに挑んだ結果……同胞は死に……彼女に過激な思想を植え付けてしまった。……それは我らの巨人族としての

血がそうさせた……その責任はこの手で取らなければならぬはずだと思っております」  
「彼女のような海賊が産まれたのは政府の責任じゃ、お前が気にするようなことではない！それでも納得出来ないって言うのなら行けばいい」

「ガープ!!勝手に決めるでない!!!創造海賊団は四皇に並び、海軍特殊司令部の管轄だ!」

「……では、異動願いを出します」

「——っ!相当な覚悟を決めているのか……分かった。今回の件はドロールに任せる」  
「了解しました!」

部屋を覗いている状態で指令を出された。傍から見たら異様な光景だったが、彼らは至って真面目だった。

ドロールの覚悟を見せられたセンゴクは仕方なくドロールに西の海に向かうように指令を出した。

「……創造か……子供のような感じに思えたが……彼女の闇はどこまで深いんだ……」

センゴクはガープが部屋から居なくなると、壁に貼られたとある紙を見て、独り言を呟いていた。

『創造海賊団団長 “創造のディアンヌ” 懸賞金25億ベリ!』

## 仲間割れ

——五つのマフィアによって裏から支配されている海、ウエストプルー“西の海”に位置する花ノ国。

この国は昔から八宝水軍というギャングを随伴戦力として扱って来たため、他のギャンググループに対して優位に立っていた。しかし八宝水軍の中でも最強であった首領・ドクチンジャオの隠居により、花ノ国は衰退の一步を歩んでいた。

そこに助けとして入ったのが、創造海賊団だ。創造海賊団は八宝水軍に勝利し、傘下に置いた。首領・チンジャオは棟梁に舞い戻り、以前の五大ファミリーの座に舞い戻っていた。

「創造の部下がこの海に来ているのか……ひやホホこの連絡は我々で試練を出せつてこのかのう」

「いいのか？モレルファミリーがきなクセエ動きを見せてるぞ」

「あんな連絡を貰ってしまったら我らは動かなければ不義理というものじゃ」

ガープに敗れてから隠居人として生きてきたチンジャオは雰囲気だけは好々爺のようだったが、判断力等の基礎能力は衰えてはおらず、チンジャオの後任として棟梁に

なっていたサイはチンジャオの判断を信じ、六傑に試練を出すことに決めた。

六傑と八宝水軍とは実力に格差があるように感じられるが、チンジャオとサイだけで言えば六傑クラスの實力があることは確かだ。更に六傑は皆足でまといである子供を連れているため、六傑に試練を出すことは難しくなかった。

「それにモレルの方はまだ武器を集め始めてる段階じゃ。動きがあるとしてもまだ先だろう」

「ならいいんだ……じゃあ向かうか」

「西の海に入ったか……酒の流通を支配しているマフィアはどこだ？」

「確か……モレルファミリーです！」

「……なら早いところ酒を盗んで帰ろうか」

いち早く西の海に到着したのはモンピートだ。そして彼は西の海生まれの部下を連れていたため、事前準備も完璧だった。

他の六傑と違う点はもう一つある。それは六傑クラスの実力者であるデルエリを部下に連れてくる事だ。六傑が二人居ると変わらないモンピートは西の海には過剰戦力とも言える。

しかしそんなモンピートでも警戒する相手がいる。それが西の五大ファミリーだ。西の海を支配するファミリーたちはトップの実力は四皇に比べれば足元にも及ばないが、その勢力だけなら四皇に近いものを持っているからだ。

「盗むですか？」

「ケツから言つて四皇と変わらないからな」

「あいつらはトップの実力こそ四皇の足元にも及ばないが、その勢力だけは四皇と変わらないってことだ」

そう言うモンピートだったが、攻撃したのがバレたら面倒だ程度にしか思つていなかった。モンピートとデルエリは対面性能は高いのだが、雑魚たちを一掃するような攻撃手段を持ち合わせていない。四皇と変わらぬ勢力を持つマフィアを相手取るのは時間がかかってしまう。

「なら戦いたい!!」

「マロナ嬢、我々は競っているので……つて言つても聞かなそうだ……どうしたものかね」

「ケツから言つて気絶させて連れていけばいい」

「デルエリ、そんなことは出来るわけないだろう。我々は団長の下に付いたんだ。それなのに団長の娘を気絶なんてさせたら、我々の処分されてしまうよ」

モンピートたちが孤児院から連れて来たのは、ディアンヌの娘、マロナだ。マロナを連れて来た理由は二つ。まず一つ目は才能の塊だったからだ。マロナは霸王色と見聞色の覇気の片鱗を見せつけていた。そして幼いながらも剣に興味を持ち、子供とは思えぬ膂力を持ち合わせている。

そして二つ目は顔を覚えてもらうためだ。マロナの才能を感じ取ったモンピートは将来マロナは団長、副団長クラスまで成長すると考えて、重役に就いた際に自分たちを重宝してもらえようにマロナを選んだ。

しかしマロナには欠点があった。まだ幼い少女であるマロナは好奇心旺盛で、面倒事に首を突っ込みたくなる病気であるかのように面倒事に巻き込まれる。三大機関襲撃と同時に起こった事件もマロナが原因で起こったことだ。

「きやははは!!向こうに海賊だあ!!」

「ちよっ!マロナ嬢!!コンジュラー・ジョーク手品師の悪戯!!」

そんなマロナは遠くに居る海賊の気配を見聞色の覇気によって感知し、誰が教えたのか、月歩を使い空を駆けて行ってしまった。

しかしこの船の船長がモンピートだったのが幸いした。モンピートは能力を使い、船内から持ってきた酒樽とマロナの位置を交換した。

「あれ?モンピート……?双子?」

「全く、とんだお転婆娘だ。そして私は双子ではないよ。ここは創造海賊団の船だからね」

「ん？……海賊の船に向かって歩いた筈……まあいいや」

「随分アツサリしてんな」

デルエリはアツサリしているマロナにツツコミを入れたが、他の者はスルーしていた。下つ端たちはマロナにツツコミを入れる勇氣はなく、モンピートはマロナが過ぎたことを一切気にしない現実主義者リアリスストなのを知っているからだ。

空を駆けていたマロナに気付いた海賊船はモンピートの船へと向かって来ていた。やがて大砲の射程範囲内に入るとモンピートの船へと砲撃が開始された。

「気付かれたなら仕方ないか……デルエリ任せていいかい？」

「ケツから言つて10秒で終わらせてやる！」

「流石に10秒は無理だと思ふけどね……つてもういないし」

デルエリは宣言と同時に敵船へと跳んだ。月歩によつて船の上空に向かったデルエリは覇氣によつて黒く染まった拳を甲板へと叩き込んだ。デルエリの拳によつて甲板は真つ二つに割れ、船は沈没することとなった。

デルエリは強い海賊、海軍が蔓延る新世界で航海出来る海賊を率いていた。そんなデルエリに西の海に残留している海賊が束になったところで、勝てるわけないだろう。



デルエリアは宣言通り10秒で船を沈没させたので、モンピートは多少驚き、マロナは声を上げて喜んでいた。

「……ふむ、10秒で終わったのならそこまでタイムロスではないか。……だが、急いで向かうぞ」

「はい!!」

——ハチノス

「港に侵入者です!!あ——」

「言わなくても大丈夫だよ。誰が来たかは、分かっているから」

デイアンヌは侵入者が居ることを伝えるに来た男の声を遮った。デイアンヌの見聞色の範囲は創造海賊団の中でもトップであるため、誰が侵入してきたのかは分かっていた。

「久しぶりに会えるね。……シャンクス」

ハチノスの港を占拠している赤髪海賊団を迎えに行った。ロジャー海賊団解散後に初めて会ったシャンクスは以前の子供っぽさは消え、大人の男性になっていた。

デイアンヌとそう変わらなかった体は、デイアンヌの倍近く筋肉はつき、身長も能力使用前のデイアンヌを遥かに超えていた。仲間に関連している男たちも皆デイアンヌを

超える体躯の持ち主だった。……一人？猿が居たが気にしないことにした。

「久しぶりだねシャンクス」

「ああ、そうだなディアンヌ。十数年ぶりか？」

「久しぶりの再会を喜びたいところだけど……アポもなしに人の本拠地に来るのはどうなのかと思うんだけど？」

「——?!?お頭と同じ霸王色か!!」

いくら旧知の仲であるシャンクスが礼儀もなくアポ無しで島に来たことに少しイラついていたディアンヌは、霸王色の覇気を発した。

それを打ち消すようにシャンクスも霸王色の覇気をぶつけた。二人の強力な覇気は近くの者たちを気絶させた。それに耐えるのは赤髪海賊団の幹部たちのみであり、戦力差が大きく出来てしまった。

「やはり持っていたかディアンヌ」

「まあね。でもシャンクスには劣ると思うよ。試してみる？」

「……以前のままなら試したかもしれないが、今では海賊団を率いる船長、おれらが一戦交えればそれは戦争になるはずだ」

「でも、君たちがここにアポ無し出来た時点で戦争が起こってもおかしくないでしょ？」

……まあシャンクスとは短いけど濃い時間を過ごしたから戦争はあまりしたくない

けど、そっちがその気なら仕方ないよね。

でも今戦争をするとしたら圧倒的に僕が不利だよ。六傑はみんな僕の命令で西の海に行ってるし、三英はマーリンがドレスローザでドフラミンゴと交渉してて、レオちゃんもそれに着いて行って里帰り中だし、テゾーロは新世界中の客を集めるために新世界を放浪中だし、キャンドラーに至っては何処にいるか知らないし……あれ？僕はなんでここに居るの？これじゃあ僕がニートみたいじゃん!!

「その件は謝る、済まなかったな。だが、おれとしては一つ忠告しに来たんだ。……ディアンヌはどこを指しているんだ。もし政府を潰す為に動いているとしたら……船長の言葉は何も響かなかったのか」

「あはは……聴かれてたんだ……僕は聞かないようにしてたのに……酷いもんだね。まあ船長の言葉は響いたよ。あの時は船長の夢を叶えようと思ってたもん……でもさ、やっぱり世界つてのは残酷だよ。一人前の海賊になつてさ、旅してて思ったけど……人つてのは醜いもんだよね。自分の力で手に入れてもない権力を振りかざして弱者を潰す……権力と実力どっちが上だと思う？……権力だよ！実力を持つ強者ですら権力には跪く。でも唯一実力を持ち、権力には従わない者たちが居る……そう!!海賊だよ!!!……だから僕は権力なんかには強者が跪くことの無い世界を創る!!!これは実力を持ちながら権力に跪いた強者によって殺された家族みたいなのが生まれないようにするん

だ!!!」

「——っ!!おいおい、それって」

「ディアンヌ!それはカイドウと同じ思想になるぞ!!もしそうだとしたら……おれは親友を殺さなければならぬ!!!」

「きやは……僕に勝てると思ってるの?海の上ならまだしも……陸上でさ!!」

ディアンヌは港を崩した。能力によって港は隆起と沈降を繰り返す凸凹の地面になった。足元を崩された赤髪海賊団は、能力を知っていたシャンクスとベン・ベックマンを除いて皆、倒れてしまった。

倒れた者たちは皆うねる地面に吞まれ、身動きを封じられてしまっていた。シャンクスが旅をして来た仲間がやわでは無いことを知っていたため仲間を放置しようとしたが、霸王色によって気絶した船員たちも地面に吞み込まれてしまったため、助けるために動いた。

「別に殺すつもりは無いんだから僕から目を離さないでよ!」

「お頭の邪魔はさせねエ」

シャンクスに気を取られていたディアンヌの真横に移動し、ベックマンは、ディアンヌの側頭部へと銃を突きつけた。

流石のディアンヌでも突きつけられた銃から放たれる弾丸を避けられる程、動きが速

い訳では無いので、仕方なく両腕を上げようとした。

両腕を上げた瞬間ディアンヌの居る部分のみ地面が持ち上がった。ディアンヌのいる場所が上がったことによりベックマンの銃の射線からは外れていた。ディアンヌが射線から外れたことよってベックマンは主だった攻撃手段を失ってしまった。覇気を纏った打撃攻撃をやるうと思えば出来ないこともないが、警戒されてしまった今、近付くことすら難しい。そのためベックマンは少し後ろに下がり、シャンクスと交代することとした。

「あいつらは任せるぞベック」

「ああ……：気を付けろ。奴は強いぞ」

「それはおれが一番知っている。ディアンヌ、お前がこの十数年で何を経験してきたか知らないが……：目を覚まさせてやる!!」

「片腕になった今、私に勝てるのかな!!」

シャンクスは地面がせり上がった場所に立つディアンヌ目掛けて跳んだ。ディアンヌより高い位置に行くと空中を蹴り、愛刀「グリフォン」を振り下ろした。

ディアンヌも対抗するように拳に覇気を纏ってぶつけた。しかし二人の攻撃が物理的にぶつかることは無かった。ディアンヌは勿論だが、シャンクスも霸王色の覇気を纏う技術を身に付けていた。霸王色の覇気のぶつかり合いによって生まれた衝撃波は天

をも割った。

「能力者の搦手は案外強力だよ」

ディアンヌが逆の手の拳を握り締めると大地が触手となり、シャンクスを襲った。シャンクスは触手を破壊するために空中で体を捻り、グリフォンを横に薙ぎ払い触手たちを破壊した。グリフォンを振った際に生まれた飛ぶ斬撃は割れた天へと吸い込まれて行った。

「このまま本気で戦争するつもりなのか!!」

「戦争するつもりはないよ。ただ……シャンクスとの戦いが楽しいだけだよ!!」

ディアンヌは動物系ゾオンのメインの能力である獣型に変化した。その姿は巨人族のような巨体に、地面から生み出した1メートル程ある巨大な大槌を持っていて、太腿には特徴的な蛇の刺青が浮き出していた。

「私は……能力者だからね。何日楽しめるかな!!」

そこからディアンヌとシャンクスは一週間戦い続けた。最初のうちはシャンクスは嫌々やっている感が滲み出していたが、最後の二日はシャンクスも口角を上げて戦闘を楽しんでいた。

シャンクスの部下はベックマンによって解放されていたが、二人の圧倒的な戦いに手を出すことが出来ず、二人の戦闘を眺めているだけだった。

戦闘が終わると二人は和解して話をしていた。ここまでどんな旅をしていたとか……自分の子供の話だとか……若い海賊候補の話だとか……二人の話は弾んでいたが、長居していると海軍に急に勤練られる可能性が出てくるため、赤髪海賊団はハチノスを去って行った。

「団長！副団長がお帰りです!!」

「げっ！グチャグチャの港どうしよう……よし!!君!!キャンドラーに僕は旅に出たと、伝えて置いてくれよ」

僕は動かすのは得意だけど、綺麗に整えるのは苦手なんだよね。だから僕が能力使った後の島は自分たちの手で直さなきゃいけないから、キャンドラーに本拠地で能力を使うは最後の手段だって言われてたんだった。

まあ僕が団長だから気にしなくていいよね。きっと六傑がやってくれるはず………つて僕の命令で居ないんだ!!きっきの下っ端君が叫んでる気がするけど気の所為だよ。何処の島に逃げようかな……シヤンクスが言つてた娘に会いに行こうかな?それとも海賊候補の居る「東の海」にでも行こうかな……

「ディアンヌ！逃げるな!!」

やっばー!だいぶ早いよ!!?着いたの反対側の港じゃなかったの……変な勘が働いたんだらうなあ。でもまあ船を出したし、追い掛けて来ないでしょ………つて空歩いて来てる

!!?!速度は船と変わらないから追い付かないけど……まさか最後まで着いてこないよね。

「能力使ったなら自分で直せ!!」

ディアンヌの読みは外れ、キャンドラーは沖まで行っても追いかけて来ていた。キャンドラーを撒くのは難しいと思ったディアンヌは一度船を停め、キャンドラーを乗せることにした。

「はあ……赤髪が来て、戦闘を起こしたと……アホなんか!!赤髪なんかと戦争が起こったら四皇に介入されて、またナワバリを持つていかれるぞ!!学習してないのかよ!!」

「学習してない訳じゃないよ!!ただ戦闘のことになると忘れちゃうだけだよ!!」

「それが学習してねエって言ってるんだよ!!」

キャンドラーは酷いこと言うなあ。まるで僕が直ぐに忘れるお馬鹿さんみたいに言うんだから……お馬鹿さんなのはキャンドラーの方なのに……

「おれは馬鹿じゃねエ」

「しれつと心の声を読むのに見聞色使わないでよ!!」

「使つてねエよ!!ディアンヌが顔に出やすいだけだ!」

「あ、あの団長、何処に向かわれるのですか?」

「目的地を伝えてなかったね。僕が向かうのは音楽の都と呼ばれていた島、エレジアだ



よ!!」

エレジアとは音楽の都として世界中の音楽家たちが集まり、栄えていた島。そんな島も今では誰も居ない廃虚と化していた。栄えていたエレジアはある事件によって、一夜にして長年積み重ねて来た歴史と共に消滅してしまったのだ。

その事件の首謀者が赤髪海賊団だと世界経済新聞で発表されていたため、ディアンヌもある程度の知識を持っていた。しかしシャンクスと直接会い、事件の真実を知ったことで、ディアンヌはエレジアに行ってみたい思った。

「赤髪が滅ぼしたとか言う島だったか？」

「そう! その事件で生き残ったのが二人居るらしいんだけど……そのうちの一人がシャンクスの娘らしいんだよね」

「自分で滅ぼした島に娘を置いてくるとかどんな神経してんだ赤髪は!」

「まあ、いろいろあるんだよ。……その子はどんな闇を抱えているのか……楽しみだな」  
♡

「……変わったちまったな」

——西の海、ヴェルゴ船

「子供を連れて行けと言われたが……お前は子供だったのか？」

「……私も思っていたけど……院長が卒業させてくれないのよ。自分の娘と生き別れたからか、子供を大事にし過ぎてるのよね」

「こちらとしては別に構わないんだが……自衛程度はしてくれよモネ」

海軍船に似た船に乗るのは、正義を掲げていない軍服を身に付けて、サングラスを付けた、2 m越えの巨漢の男。元海軍で現六傑という異例の経歴を持つヴェルゴ。

ヴェルゴが選んだ孤児は孤児院の中で最年長で、孤児たちのリーダー的存在であるモネだった。モネは戦闘センスはマロナだったり、小紫だったりと強力な遺伝子を持つ子供には勝てないが、他に比べたら光るものがあり、事務仕事だけを言えば、彼女の右に出る者はいない。現役の秘書であるステラにも迫る技術を持っている。

「あの先にいるのは……モンピートの船か……迎撃する。沈没させろ」

「ち、沈没ですか？一応味方の船なんですけど……」

「……我々は西の海の酒の争奪戦をしている……敵同士だ。敵に容赦などは要らない。それは海軍だろうと海賊だろうと変わらないはずだ」

「厳しいこと言うのね。まあ敵に容赦なんか要らないのは賛成だけど……一応味方でもあるから半壊程度で済ませてあげて」

ヴェルゴは海軍の頃、部下思いの海兵で部下たちには良き上司として慕われていた

が、海賊相手には容赦せず、呼ばれた異名は「鬼竹ヴェルゴ」。その性格は海賊になっても変わっておらず、部下たちには厳しくも優しい性格から慕われているが、敵対するものには容赦しなかった。それが仲間だったとしても、敵対すれば容赦はしない。

そのブレーキとなるのがモネであった。一応仲間であるモンピートの船を破壊するのは、創造海賊団としての損失になるため、半壊までに収めるように指示した。ヴェルゴの部下たちは年下の女に命令されたのに難色を示したが、ヴェルゴが何も言わなかったため、仕方なく了承した。

「あん時のお礼だ!!」

「お前が向かって来るのは性格から見るに分かっていた。準備は万全だ」

空を蹴って、ヴェルゴに拳をぶつけようとしたのはモンピートの元船長であり、今では部下のデルエリだ。デルエリは拳に武装色の覇気を流して、ヴェルゴの顔を殴ろうとした。

ヴェルゴはデルエリと六傑杯で戦っているためデルエリの性格は把握していた。そのためデルエリが先行して攻撃してくるのは覇気を使う必要も無い程確実なので、デルエリが見えた瞬間に一步後ろに下がり、自身の武器である竹竿を横に振るった。

「お前より私の方がデルエリのは知っているんだ。デルエリが一度負けた相手を目の前にして待っていることが出来ないのは昔からのことなんだ。その相手は私なんだ

けどね」

「——っ！場所を入れ替える能力か……それだけなら驚異にはならない」

目の前に居たデルエリがモンピートになったのに一瞬は驚いたものの、覇気による攻撃は誰にでも効くので、そのまま竹竿を横に薙ぎ払った。

モンピートも腕に覇気を流して対抗した。武装色の練度で言えばヴェルゴの方が格上なのだが、彼の武装色は全身に行き渡らせるのに特化しているため一部分の強さで言うと拮抗していた。

「モンピート!!」

「コンジュラー・ジョーク 手品師の悪戯」

モンピートの後ろに現れたデルエリはヴェルゴの竹竿に耐えているため動けないモンピートのことを殴ろうとした。刹那、モンピートはデルエリの意図を理解して能力を行使した。モンピートとヴェルゴの位置は入れ替わり、ガラ空きの鳩尾へとデルエリの拳がめり込んだ。

念の為武装色を全身に流していたため、ダメージを軽減出来たが、ガラ空きになった鳩尾への攻撃は重く吹き飛ばされてしまった。

「ヴェルゴの部下たちは、消化の準備しておけ」

「じくえんちょう 獄炎鳥」

マジマジの実の能力の一部である生き物の形をした炎を生み出す力で、巨大な炎の鳥を生み出して吹き飛んだヴェルゴへと飛ばした。炎の鳥は木造の甲板に火の粉を落とすしながら飛んでいたため甲板は発火し始めた。

「舐めているのか。おれはこの程度の炎では火傷すらしない」

「お前がしなくても部下たちはするでしょう」

「……この程度の火で火傷になる部下はいらない」

「厳しいこと言うわね。まあ私もそう思うけど……熱いお茶くらいかしら？」

船の中から現れたモネは、燃えている甲板に触れて温度を測った。モネは熱いお茶だと言っているが、燃えている炎が100度以下のお茶と一緒に無味。そう感じる理由は彼女の皮膚が小さい頃から行われた修行によって分厚くなっているからだ。

ディアンヌから子供たちを死なせるなど命令されているので、モンピートたちは攻撃するのを止めた。しかし空気を読まないものが一人居た。それは船に置いて来たはずの幼女、マロナだった。マロナは空を走って来て、その体躯に見合わない剣をモネへと振り下ろした。

「——っ!! やっぱり貴女の攻撃は重いわね……少しおいたが過ぎるわよー!」

「あはは……!! やっぱり強いねモネちゃん!!」

モネはマロナがやってくることを見聞色の覇気によって事前に感知していたため、振

り下ろされる剣を受け止めることが出来た。そのまま受け止めた剣ごとマロナのことを投げ飛ばした。

投げ飛ばされたマロナはモンピートの能力によって彼の腕の中に連れ戻された。ディアンヌの娘であるマロナを危険な目に合わす訳にもいかず、モンピートは自身の船へと戻って行った。逃げるモンピートにヴェルゴは追撃を仕掛けようとしたが、デルエリによって邪魔をされてしまった。

「モンピートの邪魔はさせねえよ」

「一度負けたヤツが……止められるか?」  
〃オニ 鬼〃………  
〃タケ 竹〃!!」

邪魔してきたデルエリを吹き飛ばすために武装色によって黒く染まった竹竿を振り抜いた。振り回すことにより遠心力の力も加わり、生まれた衝撃波は空を駆けるモンピートにまで届いた。

しかしモンピートは体を捻ることにより、飛んでくる衝撃波を避けて、船に到着した。「ケツから言って試合終了だ」

そう言ってデルエリはモンピートの能力によって大きな樽と入れ替わった。

「他の六傑たちは今も探してるんだから早く向かいましょ」

「……ああ、そうだな」